

ES/1 NEO

CSシリーズ

Flatfile Maintenance

使用者の手引き

第32版 2022年2月

©著作権所有者 株式会社 アイ・アイ・エム 2022年

© COPYRIGHT IIM CORPORATION, 2022

**ALL RIGHT RESERVED. NO PART OF THIS PUBLICATION MAY
REPRODUCED OR TRANSMITTED IN ANY FORM BY ANY MEANS,
ELECTRONIC OR MECHANICAL, INCLUDING PHOTOCOPY RECORDING,
OR ANY INFORMATION STORAGE AND RETRIEVAL SYSTEM WITHOUT
PERMISSION IN WRITING FROM THE PUBLISHER.**

“RESTRICTED MATERIAL OF IIM “LICENSED MATERIALS – PROPERTY OF IIM

目次

第1章 機能概要	1
1.1. データ検査機能概要	1
1.1.1. 更新状態チェック	1
1.1.2. 欠損データチェック	1
1.1.3. 重複データチェック	1
1.1.4. 限界値チェック	1
1.2. データ集約機能概要	2
1.3. データ管理機能概要	2
1.4. 制限事項	3
第2章 起動と終了	4
2.1. 起動方法	4
2.2. 終了方法	6
第3章 初期設定	7
3.1. 初回起動時	7
3.2. 初期画面	9
3.3. ES/1 NEO CS シリーズ情報設定	13
3.4. 動作環境設定	15
3.4.1. 一般設定	16
3.4.2. 電子メール/SNMP 警告メッセージ/メッセンジャ	17
3.4.3. 認証機能付きメール	19
3.4.4. Windows イベントログ	21
3.5. Active/Standby 構成設定	22
3.5.1. 冗長化システム構成	22
3.5.2. Active/Standby 構成設定	23
3.5.3. Active/Standby 構成情報の一覧	24
3.5.4. Active/Standby 構成情報の編集	25
3.5.5. Active/Standby 構成要素の編集	27
第4章 データ検査－状態チェック	29
4.1. 機能概要	29
4.2. 起動方法	29
4.3. 条件グループ作成	30
4.4. 条件グループの編集	51
4.5. 条件グループのコピー	52
4.6. 条件グループの削除	53
4.7. データ検査実行	54
4.8. 結果閲覧	56

4.9. 終了.....	58
4.10. 状態チェック対象項目一覧	59
第 5 章 データ検査 – 限界値チェック.....	67
5.1. 機能概要	67
5.2. 起動方法	68
5.3. 動作環境設定	70
5.4. 条件グループ、条件式の作成	72
5.4.1. データ検査 – 限界値チェック	72
5.4.2. データ検査 – 限界値チェック条件グループウィザード(1/4)	74
5.4.3. データ検査 – 限界値チェック – 条件グループウィザード(2/4)	77
5.4.4. データ検査 – 限界値チェック – 対象時間帯詳細指定	81
5.4.5. データ検査 – 限界値チェック – 条件グループウィザード(3/4)	83
5.4.6. データ検査 – 限界値チェック – 条件式指定	84
5.4.7. データ検査 – 限界値チェック – 条件グループウィザード(4/4)	100
5.5. 条件グループの編集	102
5.6. 条件グループのコピー	105
5.7. 条件グループの削除	106
5.8. 限界値チェック実行	107
5.8.1. データ検査	107
5.9. 限界値チェック結果	109
5.9.1. 結果閲覧	109
5.9.2. 出力結果	110
5.10. 終了	121
5.11. 限界値チェック設定項目一覧	122
第 6 章 データ集約 – 月毎集約	129
6.1. データ集約 – 月毎集約機能概要	129
6.2. 起動方法	130
6.3. 集約条件指定	131
6.4. 月毎集約条件編集	139
6.5. 月毎集約条件コピー	140
6.6. 月毎集約条件削除	141
6.7. データ集約 – 月毎集約実行	142
6.8. ES/1 NEO CS-CONNECT データの集約	149
6.8.1. 集約レコード／フィールドの定義	149
第 7 章 データ集約 – 日毎集約	164
7.1. データ集約 – 日毎集約機能概要	164
7.2. 起動方法	165
7.3. 日毎集約条件指定	167
7.4. 日毎集約条件編集	176
7.5. 日毎集約条件コピー	177
7.6. 日毎集約条件削除	177

7.7. データ集約 – 日毎集約の実行	178
第 8 章 データ管理	182
8.1. データ管理機能概要	182
8.2. 起動方法	183
8.3. バックアッププランの作成	185
8.4. バックアッププランの編集	190
8.5. バックアッププランのコピー	191
8.6. バックアッププランの削除	191
8.7. データ管理の実行	192
8.8. データ管理の終了	194
8.9. 初期配置されるバックアッププラン	195
第 9 章 ES/1 NEO Performance Web Service 連携	196
9.1. 設定	196
第 10 章 システム情報	197
10.1. 起動方法	197
10.2. システム情報	197
第 11 章 バッチ実行	199
11.1. 実行手順	199
11.1.1. Flatfile Maintenance データ検査 – 状態チェック	199
11.1.2. Flatfile Maintenance データ検査 – 限界値チェック	201
11.1.3. Flatfile Maintenance データ集約 – 月毎集約	203
11.1.4. Flatfile Maintenance データ集約 – 日毎集約	204
11.1.5. Flatfile Maintenance データ管理	207
11.1.6. 複数機能の同時実行	207
11.2. 実行確認	208
11.3. 実行中断	208
第 12 章 添付資料 A. 限界値チェック : ユーザ定義検査項目の 追加方法	209
12.1. 定義方法	209
12.1.1. DcItmUsr.ini ファイル	209
12.1.2. 限界値チェック機能の項目定義で利用可能なエリキーワード	209
12.1.3. [ITEMXX]セクション	210
12.1.4. [ResourceGroup]セクション	220
第 13 章 添付資料 B. 限界値チェック : 検査対象項目	221
13.1. プロセッサ	223
13.1.1. プロセッサ使用率	223
13.1.2. ユーザ・コマンドプロセッサ使用率	225
13.1.3. ユーザプロセッサ使用率	227
13.1.4. コマンドプロセッサ使用率	229
13.1.5. I/O ウェイト率	231

13.2. メモリ.....	232
13.2.1. スキャンされたページ数.....	232
13.2.2. フリーメモリ.....	233
13.2.3. ページイン.....	235
13.2.4. ページアウト.....	236
13.2.5. プールデータベース不在.....	238
13.2.6. プール非データベース不在.....	239
13.2.7. スワップイン(Linux).....	240
13.2.8. スワップアウト(Linux).....	241
13.2.9. フリーメモリ+バッファキャッシュ(Linux).....	242
13.2.10. フリースワップスペース(Linux).....	243
13.2.11. ページプール(MB)(Windows).....	244
13.2.12. 非ページプール(MB)(Windows).....	245
13.2.13. コマンドの合計 PrivateBytes(MB)(Windows).....	246
13.3. デバイス.....	247
13.3.1. デバイス使用率.....	247
13.3.2. レスポンス時間.....	249
13.3.3. デバイス待ち個数.....	251
13.4. ファイルスペース.....	252
13.4.1. スペース使用率(Unix).....	252
13.4.2. スペース使用率(Windows).....	253
13.4.3. スペース使用率.....	254
13.5. Oracle.....	255
13.5.1. 実リード回数.....	255
13.5.2. 実ライト回数.....	256
13.5.3. バッファキャッシュヒット率.....	257
13.5.4. バッファ非待機率.....	258
13.5.5. 共有プール空きメモリ.....	259
13.5.6. ライブラリキャッシュヒット率.....	260
13.5.7. ディクショナリキャッシュヒット率.....	261
13.5.8. Java プール空きメモリ.....	262
13.5.9. 共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数.....	263
13.5.10. 共有プール予約領域の領域要求失敗回数.....	264
13.5.11. 非解析実行割合.....	265
13.5.12. 解析 CPU 時間割合.....	266
13.5.13. ソフトパース率.....	267
13.5.14. 非解析処理時間割合.....	268
13.5.15. REDO ログバッファ待機回数.....	269
13.5.16. REDO ログスイッチ非待機率.....	270
13.5.17. ラージプール空きメモリ.....	271
13.5.18. ディスクソート回数.....	272
13.5.19. メモリソート率.....	273
13.5.20. フェッチ時の連鎖/移行行検出回数.....	274
13.5.21. ディスパッチャ平均待機時間.....	275
13.5.22. 共有サーバ平均待機時間.....	276
13.5.23. ディスパッチャビジー率.....	277
13.5.24. 共有サーバビジー率.....	278
13.5.25. ラッチ獲得率.....	279
13.5.26. グローバルキャッシュ変換時間.....	280
13.5.27. グローバルキャッシュ取得待機時間.....	281

13.5.28.ユーザーコール数	282
13.5.29.待機イベント待ち時間	283
13.5.30.表領域の使用率	284
13.6. SQL Server	285
13.6.1.ページ生存期間	285
13.6.2.物理ページ読込回数	286
13.6.3.物理ページ書込回数	287
13.6.4.空きページ待ち要求数	288
13.6.5.バッファキャッシュヒット率	289
13.6.6.キャッシュヒット率	290
13.6.7.アクティブトランザクション数	291
13.6.8.データファイル合計サイズ	292
13.6.9.トランザクションログファイル合計サイズ	293
13.6.10.ログファイル使用サイズ	294
13.6.11.ログ使用率	295
13.6.12.ログイン数	296
13.6.13.同時接続ユーザー数	297
13.6.14.平均ラッチ待ち時間	298
13.6.15.ラッチ待ち要求数	299
13.6.16.使用可能メモリサイズ	300
13.6.17.総使用メモリサイズ	301
13.6.18.バッチ要求数	302
13.6.19.リコンパイル率	303
13.6.20.ロック要求の平均待ち時間	304
13.6.21.デッドロック回数	305
13.6.22.デッドロック回数	306
13.6.23.tempdb の空き容量	307
13.7. SAP ERP 対話型トランザクション(T-CODE+プログラム別)	308
13.7.1.レスポンス時間(秒)	308
13.7.2.稼働時間(秒)	309
13.7.3.待ち時間(秒)	310
13.8. SAP ERP 対話型トランザクション(T-CODE 別)	311
13.8.1.レスポンス時間(秒)	311
13.8.2.稼働時間(秒)	312
13.8.3.待ち時間(秒)	313
13.9. SAP ERP 対話型トランザクション(ユーザー別)	314
13.9.1.レスポンス時間(秒)	314
13.9.2.稼働時間(秒)	315
13.9.3.待ち時間(秒)	316
13.10. SAP ERP バッチ型トランザクション(プログラム別)	317
13.10.1.レスポンス時間(秒)	317
13.10.2.稼働時間(秒)	318
13.10.3.待ち時間(秒)	319
13.11. SAP ERP バッチ型トランザクション(バッチ JOB 名別)	320
13.11.1.レスポンス時間(秒)	320
13.11.2.稼働時間(秒)	321
13.11.3.待ち時間(秒)	322
13.12. SAP ERP バッチ型トランザクション(ユーザー別)	323

13.12.1.レスポンス時間(秒)	323
13.12.2.稼働時間(秒)	324
13.12.3.待ち時間(秒)	325
13.13. SAP ERP その他のトランザクション(T-CODE+プログラム別)	326
13.13.1.レスポンス時間(秒)	326
13.13.2.稼働時間(秒)	327
13.13.3.待ち時間(秒)	328
13.14. SAP ERP その他のトランザクション(T-CODE 別)	329
13.14.1.レスポンス時間(秒)	329
13.14.2.稼働時間(秒)	330
13.14.3.待ち時間(秒)	331
13.15. SAP ERP その他のトランザクション(バッチ JOB 名別)	332
13.15.1.レスポンス時間(秒)	332
13.15.2.稼働時間(秒)	333
13.15.3.待ち時間(秒)	334
13.16. SAP ERP その他のトランザクション(ユーザ別)	335
13.16.1.レスポンス時間(秒)	335
13.16.2.稼働時間(秒)	336
13.16.3.待ち時間(秒)	337
13.17. ネットワーク回線	338
13.17.1.回線遅延時間(秒)	338
13.17.2.レスポンス時間(秒)	339
13.17.3.Window サイズゼロ送信回数	340
13.17.4.Window サイズゼロ受信回数	341
13.18. ネットワーク回線(ポート別)	342
13.18.1.回線遅延時間(秒)	342
13.18.2.レスポンス時間(秒)	343
13.19. MIB(ノード別)	344
13.19.1.受信エラー件数	344
13.19.2.送信エラー件数	345
13.19.3.受信破棄パケット数	346
13.19.4.受信ブロードキャスト数	347
13.19.5.送信ブロードキャスト数	348
13.19.6.送信破棄パケット数	349
13.20. MIB(ポート別)	350
13.20.1.受信帯域使用率	350
13.20.2.送信帯域使用率	351
13.20.3.受信破棄パケット数	352
13.20.4.送信破棄パケット数	353
13.21. WebSphere	354
13.21.1.SessionManager の LiveCount	354
13.21.2.Servlet の 1 回あたりの平均実行時間	355
13.21.3.EntityBean の 1 回あたりの平均実行時間	356
13.21.4.MessageDrivenBean の 1 回あたりの平均実行時間	357
13.21.5.StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間	358
13.21.6.StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間	359
13.21.7.JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間	360
13.21.8.JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間	361

13.21.9.JDBCDataSource の接続タイムアウト数	362
13.21.10. JVM ヒープ使用量	363
13.22. HTTP ログ	364
13.22.1.アクセス件数	364
13.22.2.Page/sec	365
13.22.3.クライアントエラー件数	366
13.22.4.サーバエラー件数	367
13.22.5.レスポンス時間(秒)	368
13.23. VMware	369
13.23.1.VMwareESX のプロセッサ使用率	369
13.23.2.VMwareESX のプロセッサ使用量	370
13.23.3.VMwareESX のメモリ使用率	371
13.23.4.VMwareESX の Balloon 発生量	372
13.23.5.VMwareESX の Swapin 発生量	373
13.23.6.VMwareESX の Swapout 発生量	374
13.23.7.VMwareESX の I/O アボート発生数	375
13.23.8.VMwareESX の I/O レイテンシ	376
13.23.9.VMwareESX の I/O コマンド量	377
13.23.10. VMwareESX の I/O 使用量	378
13.23.11. VMwareESX の受信パケットロス	379
13.23.12. VMwareESX の送信パケットロス	380
13.23.13. VMwareESX のネットワーク使用量	381
13.23.14. ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率	382
13.23.15. ゲスト OS のプロセッサ使用量	383
13.23.16. ゲスト OS のプロセッサ Ready 率	384
13.23.17. ゲスト OS の Balloon 発生量	385
13.23.18. ゲスト OS の Swapin 発生量	386
13.23.19. ゲスト OS の Swapout 発生量	387
13.23.20. ゲスト OS の I/O 使用量	388
13.23.21. ゲスト OS のネットワーク使用量	389
13.23.22. ゲスト OS の受信パケットロス	390
13.23.23. ゲスト OS の送信パケットロス	391
13.23.24. Datastore の領域使用率	392
13.23.25. ゲストストレージのファイルシステム使用率	393
13.24. z/VM	394
13.24.1.IFL プロセッサ使用率	394
13.24.2.プロセッサ使用率	395
13.24.3.主記憶使用率	396
13.24.4.拡張記憶使用率	397
13.24.5.ページイン数	398
13.24.6.ページアウト数	399
13.24.7.ページムーブ数	400
13.24.8.ページマイグレーション数	401
13.24.9.フリーサブプール領域使用率	402
13.24.10. 拡張チャネル使用率	403
13.24.11. 仮想スイッチの破棄送信パケット数	404
13.24.12. 仮想スイッチの破棄受信パケット数	405
13.24.13. ユーザー毎の待ち割合	406
13.25. WebLogic	407

13.25.1.SunJVM ヒープサイズ	407
13.25.2.SunJVM ヒープ使用量	408
13.25.3.JRockit ヒープサイズ	409
13.25.4.JRockit ヒープ使用量.....	410
13.25.5.JRockitGC の 1 回あたりの平均実行時間	411
13.25.6.JRockitGC 実行回数	412
13.25.7.JDBCProvider のプールサイズ.....	413
13.25.8.JDBCProvider の同時接続待ち数.....	414
13.25.9.JDBCProvider の再接続失敗数	415
13.25.10. JDBCDataSource のプールサイズ(V9 以降)	416
13.25.11. JDBCDataSource の接続待ち回数(V9 以降)	417
13.25.12. JDBCDataSource の同時接続待ち数(V9 以降)	418
13.25.13. JDBCDataSource の再接続失敗数(V9 以降)	419
13.25.14. JDBCDataSource の接続タイムアウト数(V9 以降)	420
13.25.15. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間	421
13.25.16. ThreadPool のプールサイズ(V9 以降).....	422
13.25.17. ThreadPool の待ちリクエスト数(V9 以降)	423
13.25.18. 実行キューのスレッド数	424
13.25.19. 実行キューの保留要求数	425
13.25.20. WorkManager の待ちリクエスト数(V9 以降).....	426
13.25.21. EntityEJB のトランザクションタイムアウト数.....	427
13.25.22. EntityEJB のキャッシュミス率	428
13.25.23. EntityEJB のアクティベーション回数	429
13.25.24. EntityEJB のプールミス率	430
13.25.25. EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数.....	431
13.25.26. EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数	432
13.25.27. EntityEJB のロック待ちスレッド数	433
13.25.28. EntityEJB のロック待機数	434
13.25.29. EntityEJB のロックタイムアウト数	435
13.25.30. StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数.....	436
13.25.31. StatefulEJB のキャッシュミス率	437
13.25.32. StatefulEJB のアクティベーション回数.....	438
13.25.33. StatefulEJB のロック待ちスレッド数	439
13.25.34. StatefulEJB のロック待機数.....	440
13.25.35. StatefulEJB のロックタイムアウト数.....	441
13.25.36. StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数	442
13.25.37. StatelessEJB のプールミス率.....	443
13.25.38. StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数	444
13.25.39. StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数	445
13.25.40. MessageDrivenEJB のプールミス率	446
13.25.41. MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数.....	447
13.25.42. MessageDrivenEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数	448
13.26. Interstage.....	449
13.26.1.JVM ヒープ使用量.....	449
13.26.2.JVM ヒープ設定に対する使用率	450
13.26.3.JVMPerm 使用量	451
13.26.4.JVMPerm 設定に対する使用率	452
13.26.5.GC の 1 回あたりの平均実行時間	453
13.26.6.GC 実行回数	454
13.26.7.JDBCDataSource のプールサイズ	455

13.26.8. JDBCDataSource の例外発生クローズ件数	456
13.26.9. JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間	457
13.26.10. JDBCDataSource の 1 回あたりの平均物理接続確立時間	458
13.26.11. JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間	459
13.26.12. JDBCDataSource の接続待ち回数	460
13.26.13. JDBCDataSource の接続タイムアウト数	461
13.26.14. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間	462
13.26.15. EntityEJB の 1 回あたりの平均実行時間	463
13.26.16. EntityEJB のプールサイズ	464
13.26.17. StatefulSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間	465
13.26.18. StatefulSessionEJB のアクティベーション回数	466
13.26.19. StatelessSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間	467
13.26.20. MessageDrivenEJB の 1 回あたりの平均実行時間	468
13.27. JBoss	469
13.27.1. JVM ヒープ使用量	469
13.27.2. JVM ヒープ設定に対する使用率	470
13.27.3. JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数	471
13.27.4. JDBCDataSource のプール設定に対する使用率	472
13.27.5. ThreadPool の使用中スレッド数	473
13.27.6. ThreadPool のプール設定に対する使用率	474
13.27.7. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間	475
13.27.8. StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間	476
13.27.9. StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間	477
13.28. Tomcat	478
13.28.1. JVM ヒープ使用量	478
13.28.2. JVM ヒープ設定に対する使用率	479
13.28.3. ThreadPool の使用中スレッド数	480
13.28.4. ThreadPool のプール設定に対する使用率	481
13.28.5. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間	482
13.29. MySQL	483
13.29.1. クエリキャッシュヒット率	483
13.29.2. クエリキャッシュ使用率	484
13.29.3. スレッドキャッシュヒット率	485
13.29.4. キーキャッシュヒット率	486
13.29.5. テーブルキャッシュ使用率	487
13.29.6. InnoDB バッファプールヒット率	488
13.29.7. MyISAM テーブルフラグメンテーション率	489
13.29.8. テンポラリテーブルメモリ処理率	490
13.29.9. スロークエリ数	491
13.29.10. 接続スレッド数	492
13.30. Hyper-V	493
13.30.1. ホストのプロセッサ使用率	493
13.30.2. ホストのメモリー使用率	494
13.30.3. 論理プロセッサのプロセッサ使用率	495
13.30.4. ベアレントパーティションのプロセッサ使用率	496
13.30.5. チャイルドパーティションのプロセッサ使用率	497
13.30.6. ページング回数	498
13.30.7. 物理ディスクの使用率	499
13.30.8. 物理ディスクの Read レイテンシ	500

13.30.9.物理ディスクの Write レイテンシ	501
13.30.10. ネットワークフレームのドロップ数	502
13.30.11. パケットオーバーフロー数	503
13.31. SAP ERP 対話型トランザクション	504
13.31.1.レスポンス時間(秒)	504
13.31.2.稼働時間(秒)	505
13.31.3.待ち時間(秒)	506
13.32. SAP ERP バッチ型トランザクション	507
13.32.1.レスポンス時間(秒)	507
13.32.2.稼働時間(秒)	508
13.32.3.待ち時間(秒)	509
13.33. SAP ERP その他のトランザクション	510
13.33.1.レスポンス時間(秒)	510
13.33.2.稼働時間(秒)	511
13.33.3.待ち時間(秒)	512
13.34. Oracle AWR	513
13.34.1.実リード回数	513
13.34.2.バッファキャッシュヒット率	514
13.34.3.バッファ非待機率	515
13.34.4.共有プール空きメモリ	516
13.34.5.ライブラリキャッシュヒット率	517
13.34.6.Java プール空きメモリ	518
13.34.7.非解析実行割合	519
13.34.8.ソフトパース率	520
13.34.9.REDO ログバッファ待機回数	521
13.34.10. メモリソート率	522
13.34.11. フェッチ時の連鎖/移行行検出回数	523
13.34.12. ラッチ獲得率	524
13.34.13. ユーザーコール数	525

第1章 機能概要

ES/1 NEO Flatfile Maintenance は、ES/1 NEO CS シリーズで使用しているフラットファイル(パフォーマンスデータ)を管理するためのプログラムです。

ES/1 NEO Flatfile Maintenance は、以下の 3 つの機能を提供します。

データ検査機能

データ集約機能(日毎集約/月毎集約)

データ管理機能

それぞれの概要について説明致します。

1.1. データ検査機能概要

データ検査機能は、以下の 4 つの検査方法を提供します。

1.1.1. 更新状態チェック

データ収集からフラットファイルのインポートまでをバッチ処理にて自動化している場合、従来は途中の過程で問題が発生しても、管理者が能動的にデータを確認しない限り、異常が検知できませんでした。更新状態チェックをスケジュールし、日々データの更新が正しく行われているかを監視することにより、データ収集の不具合を即座に検知することが可能です。

異常を検知すると、その内容をファイルへ出力します。また、チェック結果を電子メールや SNMP 警告メッセージ、Windows メッセンジャサービスにて任意の宛て先に発信することができます。

1.1.2. 欠損データチェック

インポートされたフラットファイルを走査し、欠損インターバルがないかをチェックします。チェックは資源毎に行いますので、「Oracle のデータだけ収集されていない」等の異常を検知できます。

フラットファイルの走査結果をテキスト形式のマップリストに出力するため、データの存在状況を即座に把握することが可能です。

また、チェック結果を電子メールや SNMP 警告メッセージ、Windows メッセンジャサービスにて、任意の宛て先に発信することもできます。

1.1.3. 重複データチェック

インポートされたフラットファイルを走査し、重複しているデータがないかをチェックします(通常、手動による二重インポートを行わない限り重複はしません)。フラットファイルの走査結果をテキスト形式のマップリストに出力するため、データの重複を即座に把握することが可能です(欠損データチェックと同一のファイルに出力されます)。

また、チェック結果を電子メールや SNMP 警告メッセージ、Windows メッセンジャサービスにて、任意の宛て先に発信することもできます。

1.1.4. 限界値チェック

インポートされたフラットファイルを走査し、予め指定した限界値を超えたデータがないかをチェックします。例えば「プロセッサ使用率が 90%を越えたら検知する」という設定を行うと、プロセッサ使用率が 90%を越えているインターバルを検知します。検知結果をファイルに出力します。また、チェック結果を電子メールや SNMP 警告メッセージにて、任意の宛て先に発信することができます。

1.2. データ集約機能概要

データ集約－月毎集約機能は、インポートされたフラットファイルを 1 ヶ月単位で集約し、集約された新たなフラットファイルを作成します。

このフラットファイルは、CS-MAGIC でのグラフ作成、CSV 形式ファイルの出力や CS-ADVISOR での評価に使用することができます。

1 ヶ月～1 年間の傾向を見るグラフや、それ以上の期間を対象としたグラフを作成するのに適しています。

データ集約－月毎集約機能は、1 ヶ月分のデータを 1 インターバルのデータに集約し、結果を YYYYMM00.txt(.gz)ファイルに出力します。

データ集約－日毎集約機能は、1 日分のデータを 1 インターバルのデータに集約し、結果をカテゴリごとに分けられた YYYYMMDD.txt(.gz)ファイルに出力します。

従来のように、詳細フラットファイルを用いて、月次もしくは年次などの長期グラフを作成する場合は、膨大なフラットファイルをサイト／システムフォルダに保存しておく必要がありました。

しかし集約されたフラットファイルを用いると、1 年分のデータをわずか 12 個のファイルで保存することができます。

またデータ集約を実行するにあたって、対象の資源を選択できますので、例えば「プロセッサとメモリ情報のみを集約する」など、長期的に保存したいデータのみを集約することができます。

これらの機能により、長期データの管理を容易にし、長期グラフの作成をスムーズに行えるようになります。

1.3. データ管理機能概要

データ管理機能は、フラットファイルを ZIP ファイルフォーマットで圧縮し、別のフォルダへバックアップする機能です。

また、一定期間を経過したフラットファイルを削除する事も可能です。

ES/1 NEO CS シリーズ運用時は、フラットファイル(YYYYMMDD.txt(.gz)ファイル)が各サイト／システムフォルダに蓄積されていきます。

データ管理機能を使用する事により、一定期間分のフラットファイルのみを常に保持する設定が可能です。

1.4. 制限事項

Flatfile Maintenance は、以下のプロダクトが実行中の場合は、動作しないように設計されています。

- CS-MAGIC
- CS-ADVISOR
- CS-Network ADVISOR
- CS-REPORT
- Performance Web Service Uploader

これは、フラットファイルや各プロダクト間の連携ファイルの保全の為です。

また、Flatfile Maintenance 自身も多重起動できないよう設計されています。

Flatfile Maintenance がバッチ実行している最中に、Flatfile Maintenance の GUI を起動する事ができないようになっています。

同じように、Flatfile Maintenance の GUI が起動している状態では、Flatfile Maintenance のバッチ実行ができません。

Flatfile Maintenance を多重起動した場合、以下のメッセージボックス、またはログが出力されます。

ES/1 NEO Flatfile Maintenance が実行中です。

ES/1 NEO Flatfile Maintenance を終了させてから実行してください。

他のプロダクトが実行中の場合は、以下のようなメッセージボックス、またはログが出力されます。

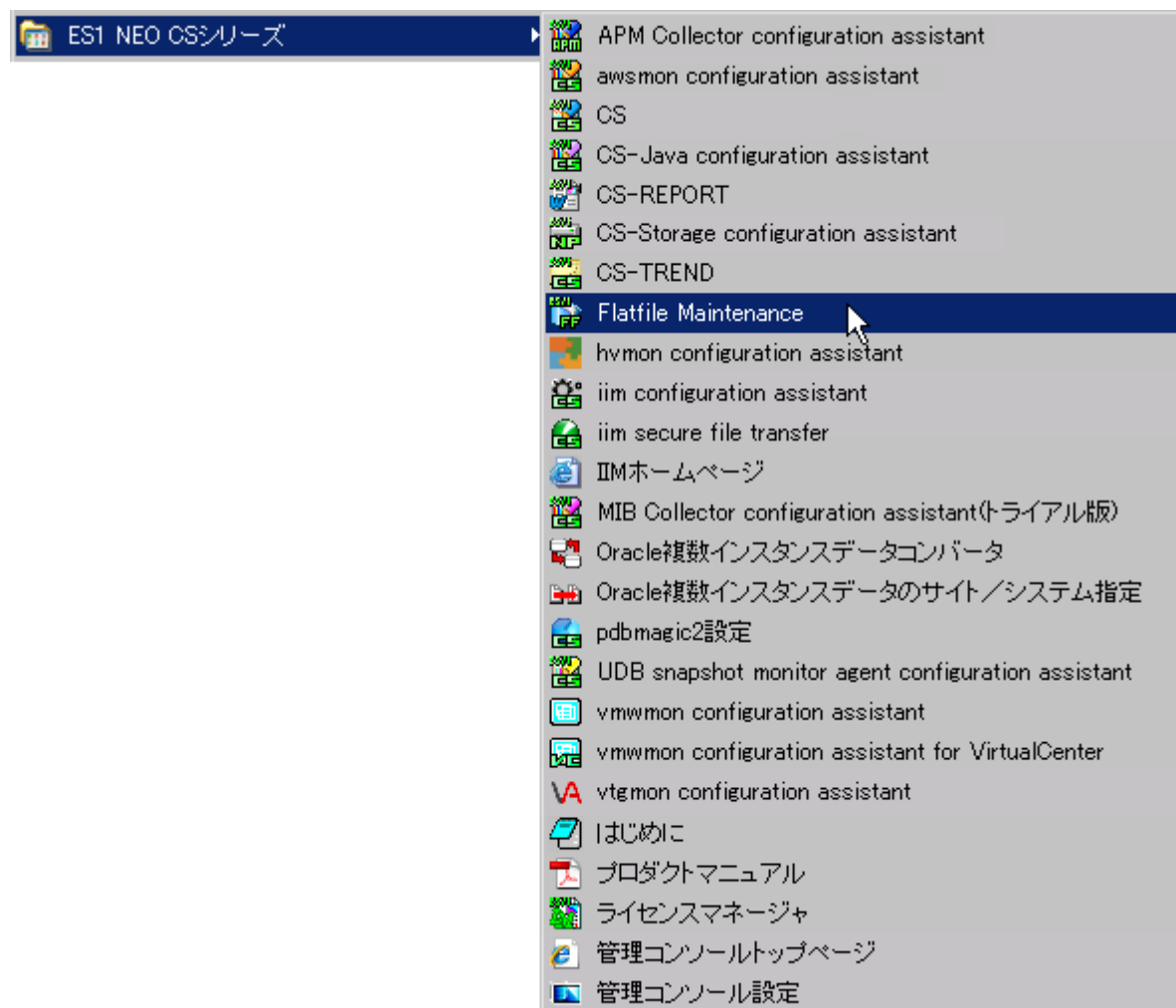
ES/1 NEO CS シリーズが実行中です。

ES/1 NEO CS シリーズを終了させてから実行してください。

第2章 起動と終了

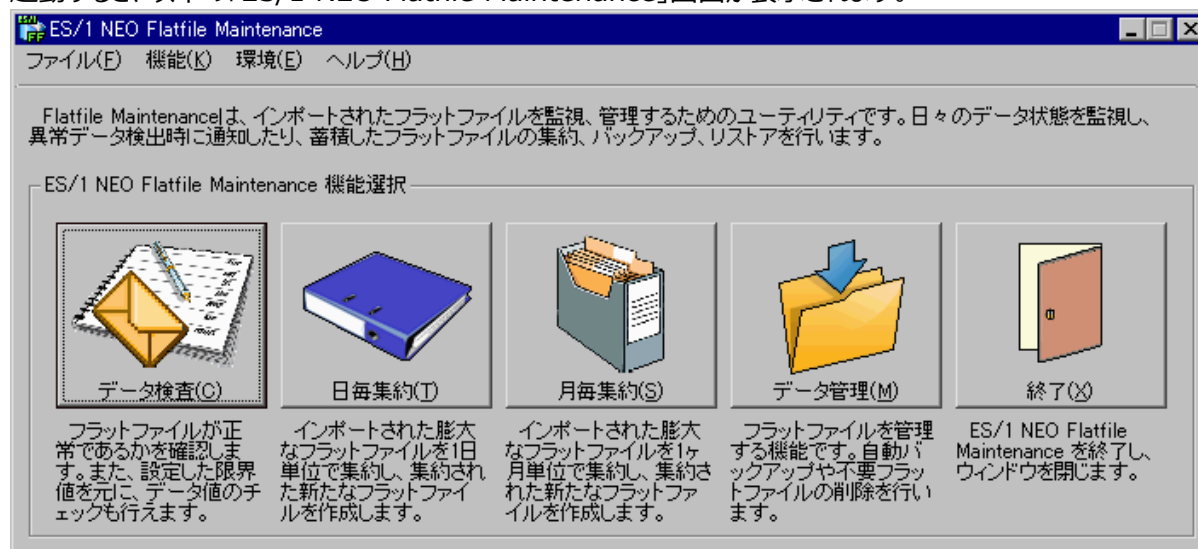
2.1. 起動方法

[スタート]メニュー→「プログラム」→「ES1 NEO CS シリーズ」から「Flatfile Maintenance」を選択します。



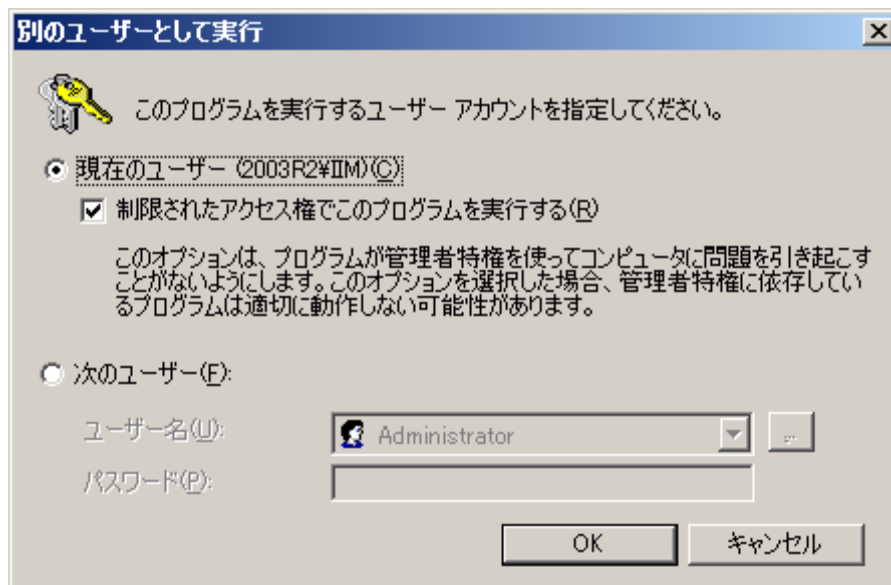
または Flatfile Maintenance インストールフォルダから「Ffmainte.exe」を起動します。

起動すると、以下の「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面が表示されます。



注意！

製品起動時に以下のようなダイアログボックスが表示される場合があります。

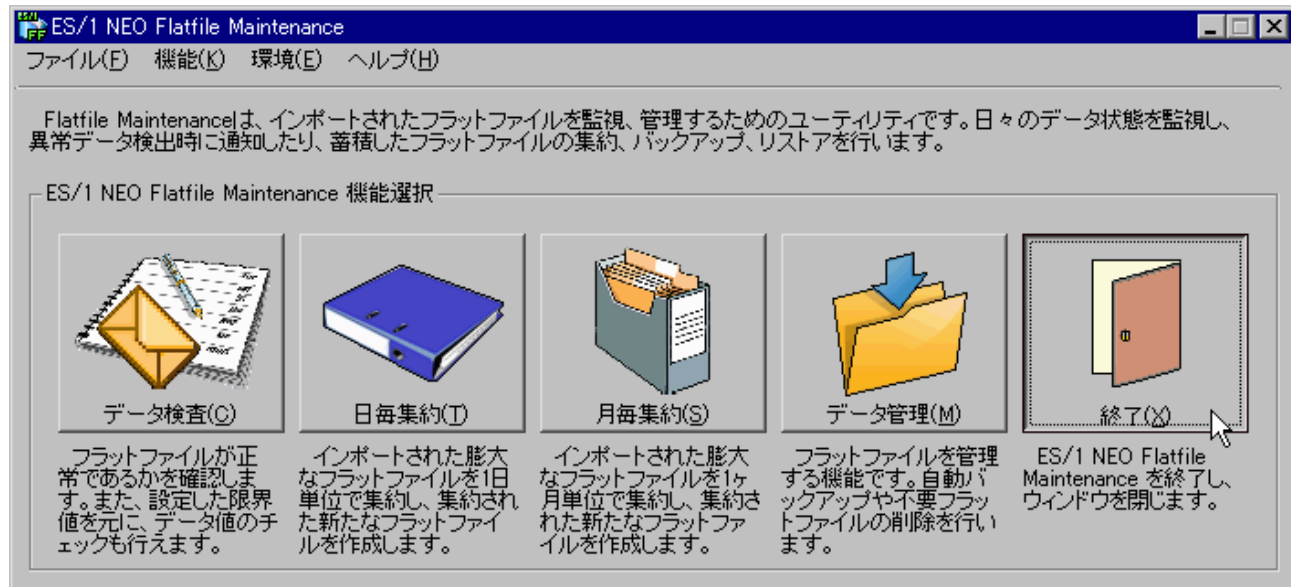


この場合、「制限されたアクセス権でこのプログラムを実行する(R)」のチェックを外して[OK]を押下してください。

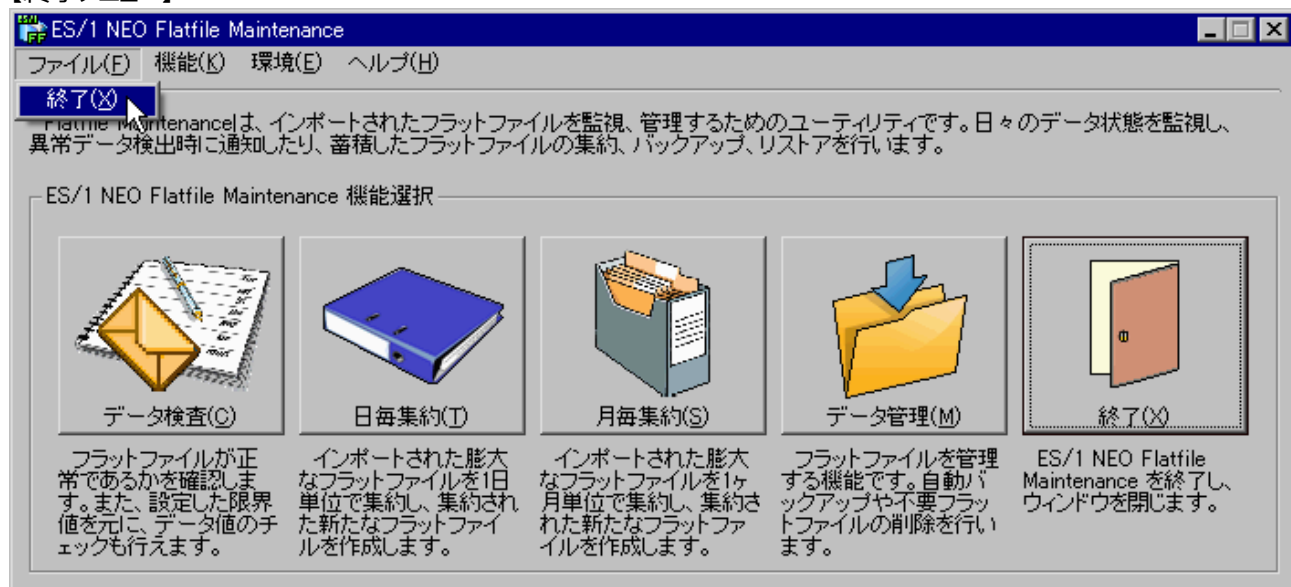
2.2. 終了方法

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の[終了(X)]ボタンを押下、または「ファイル(F)」メニューの「終了(X)」を選択します。

【終了ボタン】



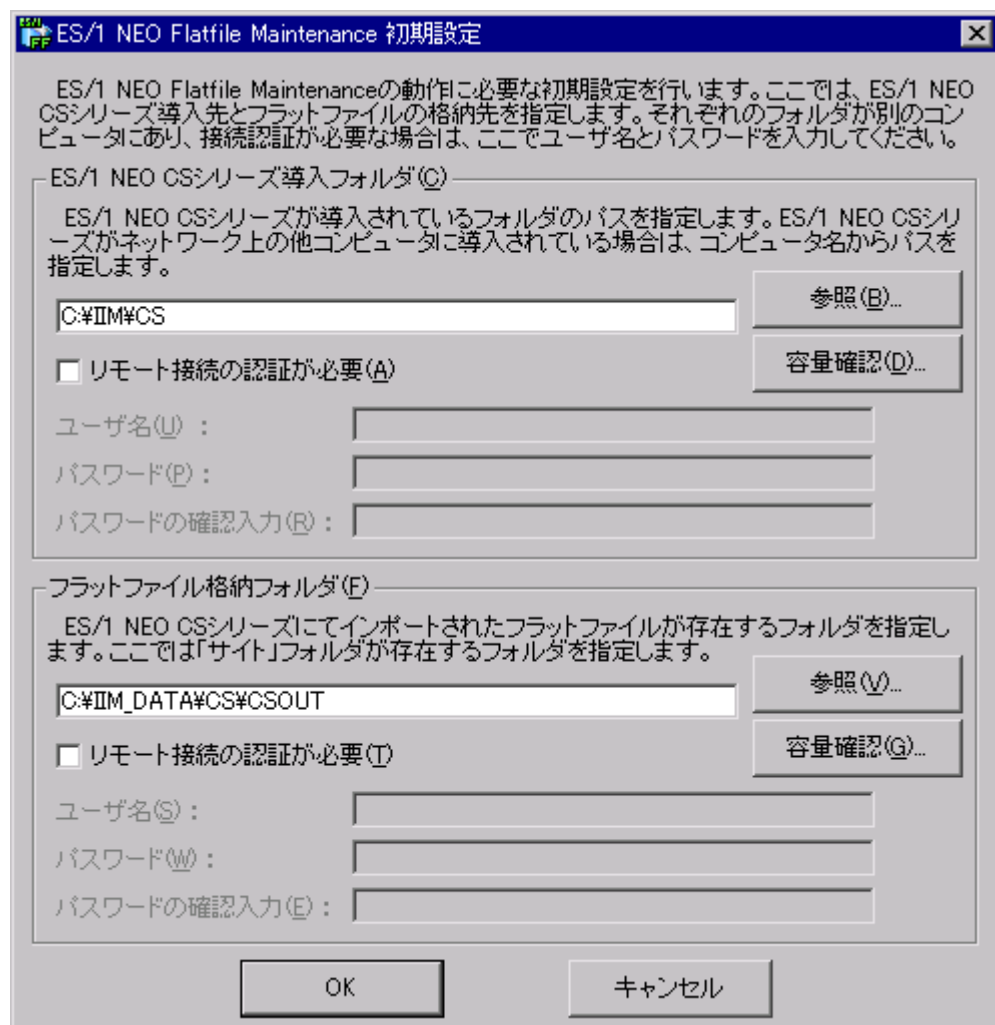
【終了メニュー】



第3章 初期設定

3.1. 初回起動時

ES/1 NEO CS シリーズがインストールされていないコンピュータに ES/1 NEO Flatfile Maintenance を導入した場合、初回起動時に「ES/1 NEO Flatfile Maintenance 初期設定」画面が表示されます。本画面より、ES/1 NEO CS シリーズの導入フォルダやフラットファイル格納フォルダの設定を行う必要があります。ES/1 NEO CS シリーズがインストールされているコンピュータに ES/1 NEO Flatfile Maintenance を導入した場合は、ここでの設定は必要ありません。



ES/1 NEO Flatfile Maintenance 初期設定

ES/1 NEO Flatfile Maintenanceの動作に必要な初期設定を行います。ここでは、ES/1 NEO CSシリーズ導入先とフラットファイルの格納先を指定します。それぞれのフォルダが別のコンピュータにあり、接続認証が必要な場合は、ここでユーザ名とパスワードを入力してください。

ES/1 NEO CSシリーズ導入フォルダ(C)

ES/1 NEO CSシリーズが導入されているフォルダのパスを指定します。ES/1 NEO CSシリーズがネットワーク上の他コンピュータに導入されている場合は、コンピュータ名からパスを指定します。

参照(B)...

☐ リモート接続の認証が必要(A) 容量確認(D)...

ユーザ名(U) :

パスワード(P) :

パスワードの確認入力(R) :

フラットファイル格納フォルダ(F)

ES/1 NEO CSシリーズにてインポートされたフラットファイルが存在するフォルダを指定します。ここでは「サイト」フォルダが存在するフォルダを指定します。

参照(V)...

☐ リモート接続の認証が必要(T) 容量確認(G)...

ユーザ名(S) :

パスワード(W) :

パスワードの確認入力(E) :

OK キャンセル

(1)ES/1 NEO CS シリーズ導入フォルダ(C)

ES/1 NEO CS シリーズが導入されているフォルダのパスを指定します。[参照(B)...]ボタンを押下してパスを参照することも可能です。

リモート接続の認証が必要になる場合、「リモート接続の認証が必要(A)」にチェックし、「ユーザ名(U)」、「パスワード(P)」を入力してください。

(2)フラットファイル格納フォルダ(F)

フラットファイルを格納しているフォルダ(サイトフォルダが存在するフォルダ)を指定します。[参照(V)...]ボタンを押下してパスを参照することも可能です。

リモート接続の認証が必要になる場合、「リモート接続の認証が必要(T)」にチェックし、「ユーザ名(S)」、「パスワード(W)」を入力してください。

フラットファイル格納フォルダの詳細は別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.3.8 インポートフォルダ設定」を参照してください。

(3)[容量確認]ボタン

[容量確認(D)...]ボタン、[容量確認(G)...]ボタンを押下すると、それぞれ入力されたフォルダパスの総容量や空き容量を確認することができます。

(4)[OK]ボタン

[OK]ボタンを押下すると設定が保存され、初期画面が表示されます。

(5)[キャンセル]ボタン

[キャンセル]ボタンを押下し設定を行わない場合、メッセージが表示されプログラムが終了します。

注意！

複数管理マシンから同一のフラットファイル格納フォルダにインポート処理を行う環境や、CS、Flatfile Maintenance と同時に csimport.exe によるインポート処理を実行するような環境で、フラットファイルに対する更新処理が競合し、インポート処理が失敗する場合があります。

この場合、同一システムに対するインポート処理が同時に実行されないように処理タイミングを調整していただくか、以下の設定ファイルを直接編集して競合時のタイムアウト時間を調整する必要があります。

ffmainte.ini

[Environ]

CsDataTimeout=<タイムアウト時間(ms)>

<タイムアウト時間(ms)>には想定される 1 ファイルあたりのインポート時間の最大時間以上のタイムアウト時間をミリ秒単位で指定してください(指定省略時は 30 分)。

例)タイムアウト時間を 60 分(60×60×1000=3600000(ms))に設定する

[Environ]

:

(省略)

:

CsDataTimeout=3600000

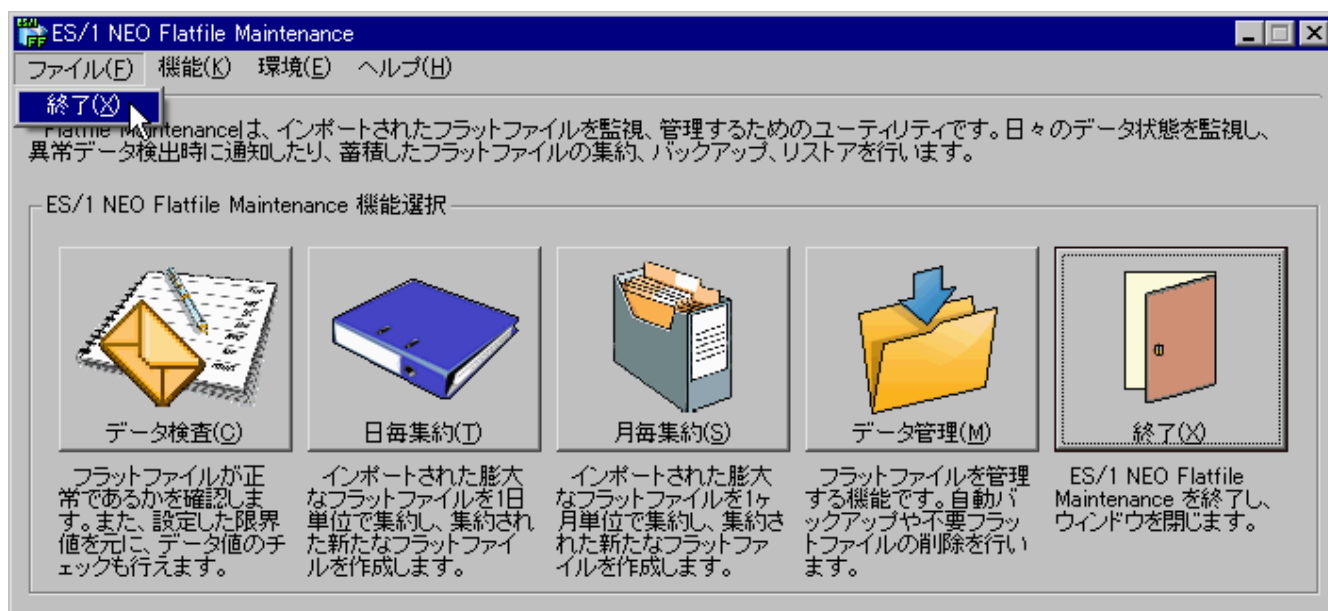
※[Environ]セクションに CsDataTimeout =キーがない場合、キーを追加してください。

※[Environ] CsDataTimeout =キー以外は編集しないでください。

※競合する可能性のある CS についても同様の設定が必要です。詳細は「CS-MAGIC 使用者の手引き」にある「インポートフォルダ設定」の注意事項を参照してください。

3.2. 初期画面

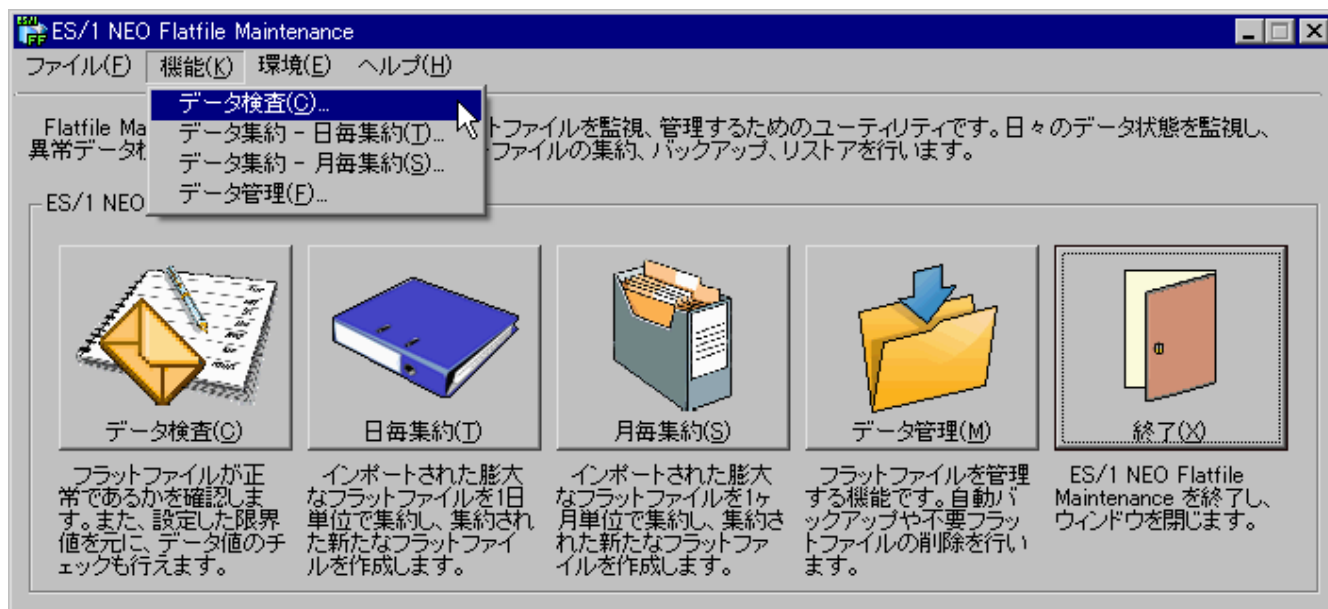
(1)ファイル(F)メニュー



①終了(X)

[終了(X)]ボタンと同様の機能です。

(2)機能(K)メニュー



①データ検査(C)...

後述の「第4章 データ検査 - 状態チェック」、「第5章 データ検査 - 限界値チェック」に記述されている「データ検査」画面が表示されます。[データ検査(C)]ボタンと同様の機能です。

詳細は「第4章 データ検査 - 状態チェック」および「第5章 データ検査 - 限界値チェック」を参照してください。

②データ集約－日毎集約(T)...

後述の「第 7 章 データ集約－日毎集約」に記述されている「データ集約」画面が表示されます。[日毎集約(T)]ボタンと同様の機能です。

詳細は本紙「第 7 章 データ集約－日毎集約」を参照してください。

③データ集約－月毎集約(S)...

後述の「第 6 章 データ集約－月毎集約」に記述されている「データ集約」画面が表示されます。[月毎集約(S)]ボタンと同様の機能です。

詳細は本紙「第 6 章 データ集約－月毎集約」を参照してください。

④データ管理(F)...

後述の「第 8 章 データ管理」に記述されている「データ管理」画面が表示されます。[データ管理(M)]ボタンと同様の機能です。

詳細は本紙「第 8 章 データ管理」を参照してください。

(3)環境(E)メニュー



①動作環境設定(E)...

後述の「3.4. 動作環境設定」に記述されている「動作環境設定」画面が表示されます。

自動インポート実行の有無や、データ検査の実行結果を送信する電子メールや SNMP 警告メッセージの設定を行います。

詳細は本紙「3.4. 動作環境設定」を参照してください。

②ES/1 NEO CS シリーズ情報設定(C)...

本紙「3.3. ES/1 NEO CS シリーズ情報設定」に記述されている「ES/1 NEO CS シリーズ情報設定」画面が表示されます。

ES/1 NEO CS シリーズの導入フォルダ、およびフラットファイル格納フォルダを指定します。

詳細は本紙「3.3. ES/1 NEO CS シリーズ情報設定」を参照してください。

③プロフィール設定

別紙マニュアル「プロフィール機能 使用者の手引き」に記述されている「システムフィルタープロフィール一覧」画面、「インスタンスプロフィール一覧」画面、及び「プロフィールフォルダ設定」画面が表示されます。

各種プロフィールの設定を行います。

詳細は別紙マニュアル「プロフィール機能 使用者の手引き」を参照してください。

④システム情報(B)...

管理対象サーバのシステム情報を一覧で見ることができます。
詳細については、「第 10 章 システム情報」を参照してください。

⑤Active/Standby 構成設定(A)...

Active/Standby 構成となっているサイト／システムの関連付けを行います。
Standby 機のフラットファイルが存在しない場合、状態チェック時にその情報が考慮されます。

⑥ES/1 NEO Performance Web Service 連携(P)...

データ検査(状態チェック、限界値チェック)の結果を、ES/1 NEO Performance Web Service にて使用する場合に設定します。

(4)ヘルプ(H)メニュー



①Flatfile Maintenance 使用者の手引き(M)

Flatfile Maintenance の操作手順が記載された PDF 形式ファイルを開きます。

②IIM ホームページ(I)

ブラウザを起動し、弊社ホームページ(<http://www.iim.co.jp/>)を表示します。

③バージョン情報(V)...

Flatfile Maintenance の「バージョン情報」画面を表示します。



・[OK]ボタン

「バージョン情報」画面を閉じます。

・[システム情報(S)...]ボタン

Microsoft システム情報を起動します。

・[プロダクト情報(P)...]ボタン

インストールされているファイル群の一覧が表示され、ファイルバージョンやタイムスタンプを確認する事が出来ます。

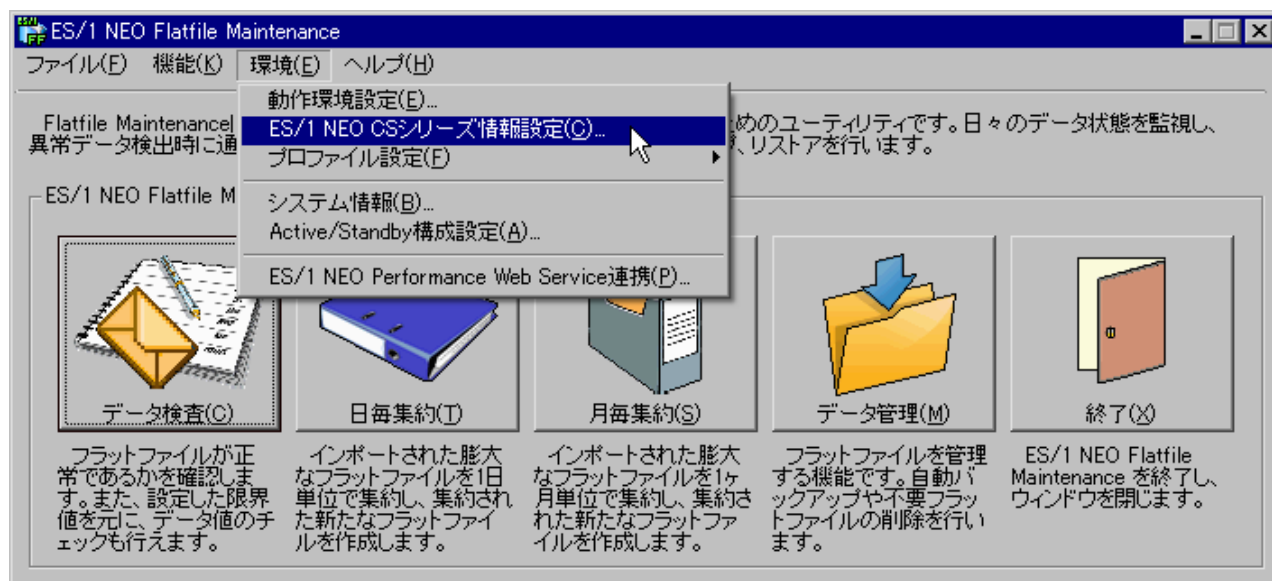
「URL」欄をクリックすると、ブラウザを起動し、弊社ホームページを表示します。

「MailTo」欄をクリックすると、メーラーを起動し、弊社サポート宛に電子メールを送信します。

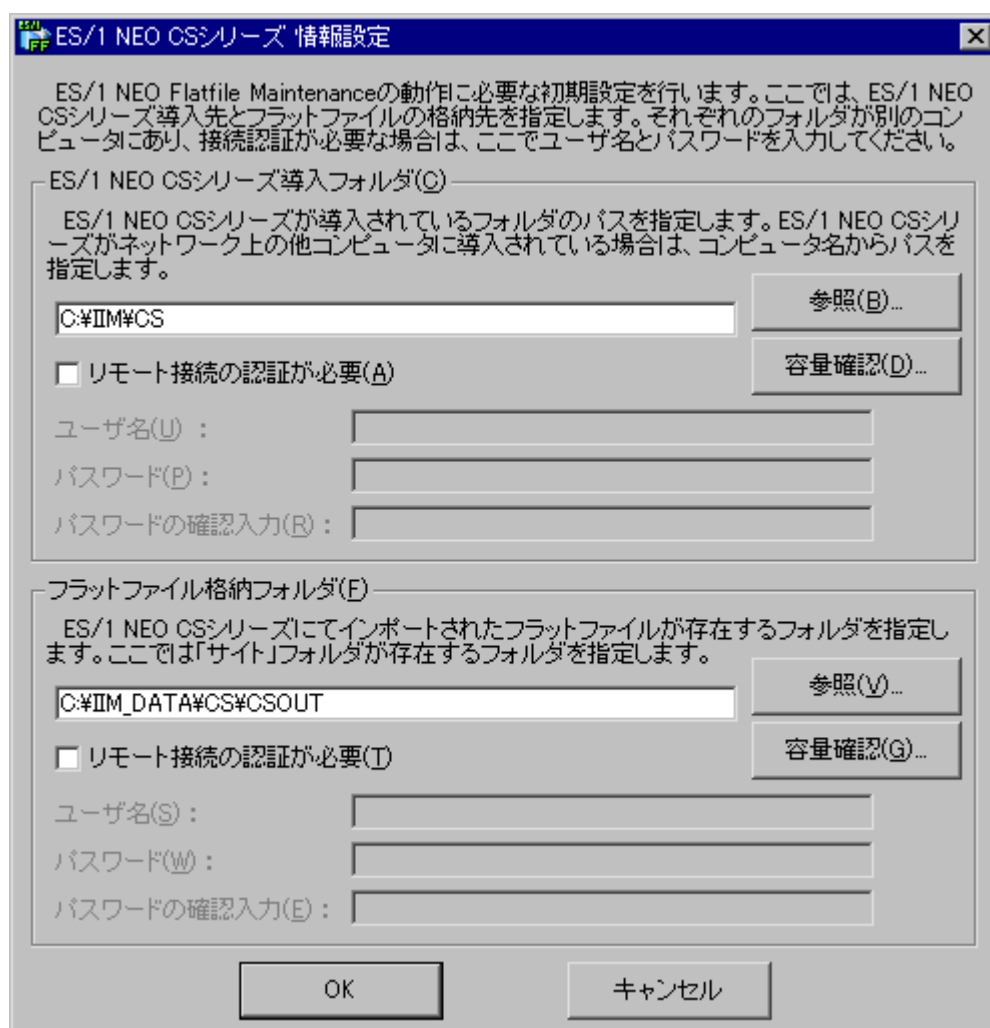
3.3. ES/1 NEO CS シリーズ情報設定

ES/1 NEO Flatfile Maintenance インストール後に、ES/1 NEO CS シリーズの設定を変更した際には、ES/1 NEO CS シリーズの導入フォルダやフラットファイル格納フォルダの設定を行う必要があります。

「環境(E)」メニューから「ES/1 NEO CS シリーズ情報設定(C)...」を選択します。



「ES/1 NEO CS シリーズ 情報設定」画面が表示されます。



(1)ES/1 NEO CS シリーズ導入フォルダ(C)

ES/1 NEO CS シリーズが導入されているフォルダのパスを指定します。[参照(B)...]ボタンを押下してパスを参照することも可能です。

ES/1 NEO CS シリーズが他のコンピュータにインストールされていて、リモート接続の認証が必要になる場合、「リモート接続の認証が必要(A)」にチェックし、「ユーザ名(U)」、「パスワード(P)」を入力してください。

(2)フラットファイル格納フォルダ(F)

フラットファイルを格納しているフォルダ(サイトフォルダが存在するフォルダ)を指定します。[参照(V)...]ボタンを押下してパスを参照することも可能です。

ES/1 NEO CS シリーズが他のコンピュータにインストールされていて、リモート接続の認証が必要になる場合、「リモート接続の認証が必要(T)」にチェックし、「ユーザ名(S)」、「パスワード(W)」を入力してください。

(別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.3.8. インポートフォルダ設定」を参照してください)

(3)[容量確認]ボタン

[容量確認(D)...]ボタン、[容量確認(G)...]ボタンを押下すると、それぞれ入力されたフォルダパスの総容量や空き容量を確認することができます。

(4)[OK]ボタン

[OK]ボタンを押下すると設定が保存されて初期画面に戻ります。

(5)[キャンセル]ボタン

[キャンセル]ボタンを押下すると設定を保存せずに初期画面に戻ります。

注意！

複数管理マシンから同一のフラットファイル格納フォルダにインポート処理を行う環境や、CS、Flatfile Maintenance と同時に csimport.exe によるインポート処理を実行するような環境で、フラットファイルに対する更新処理が競合し、インポート処理が失敗する場合があります。

この場合、同一システムに対するインポート処理が同時に実行されないように処理タイミングを調整していただくか、以下の設定ファイルを直接編集して競合時のタイムアウト時間を調整する必要があります。

ffmainte.ini

[Environ]

CsDataTimeout=<タイムアウト時間(ms)>

<タイムアウト時間(ms)>には想定される 1 ファイルあたりのインポート時間の最大時間以上のタイムアウト時間をミリ秒単位で指定してください(指定省略時は 30 分)。

例) タイムアウト時間を 60 分(60×60×1000=3600000(ms))に設定する

[Environ]

:

(省略)

:

CsDataTimeout=3600000

※[Environ]セクションに CsDataTimeout =キーがない場合、キーを追加してください。

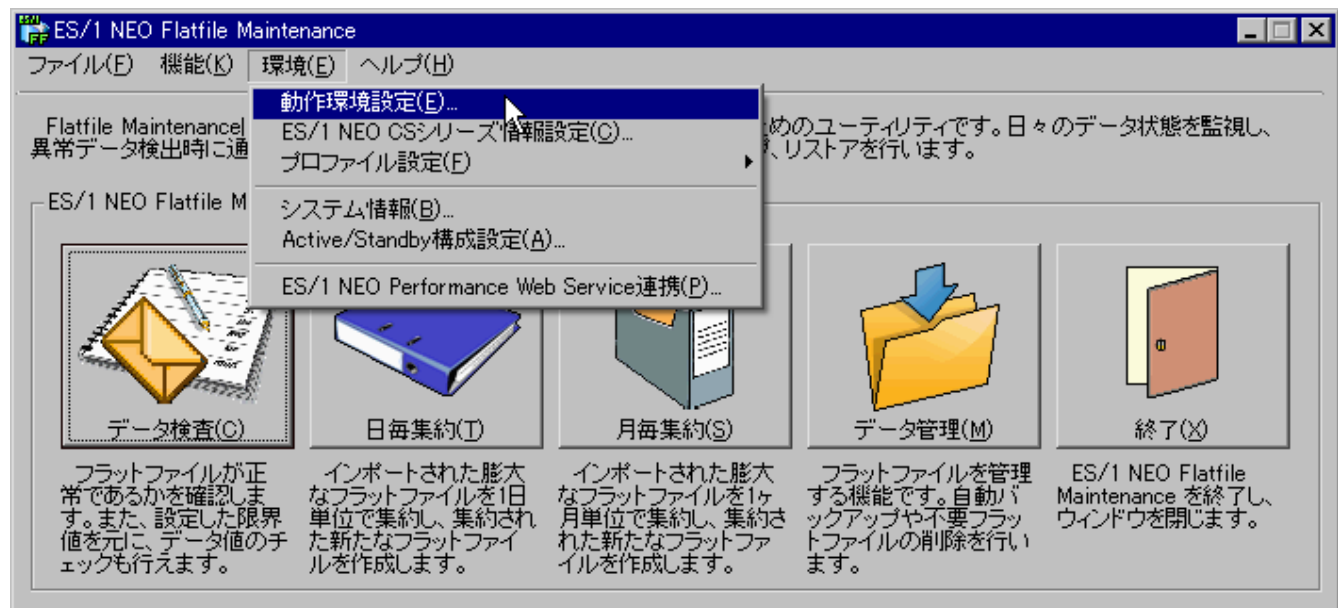
※[Environ] CsDataTimeout =キー以外は編集しないでください。

※競合する可能性のある CS についても同様の設定が必要です。詳細は「CS-MAGIC 使用者の手引き」にある「インポートフォルダ設定」の注意事項を参照してください。

3.4. 動作環境設定

動作環境設定では、自動インポート実行の有無や、データ検査の実行結果を送信する電子メールや SNMP 警告メッセージの設定を行います。

「環境(E)」メニューから「動作環境設定(E)...」を選択します。



「動作環境設定」画面が表示されます。

3.4.1. 一般設定

「動作環境設定(一般設定)」画面が表示されます。一般設定では、自動インポートの実行有無を設定します。



(1)「フラットファイルインポート(I)」

①自動インポートする

ES/1 NEO Flatfile Maintenance の起動時に自動インポートを実行します。「インポート後ファイルを削除する」をチェックすると、中間フラットファイル(fin.sum_YYYYMMDDHHMM.txt 等)を削除します。「フラットファイルを圧縮してインポート／データ集約する」をチェックすると、フラットファイルを圧縮しながらインポートを実行します。この場合、フラットファイルのファイル名が YYYYMMDD.txt(月毎集約は YYYYMM00.txt)だったのが、YYYYMMDD.txt.gz(月毎集約は YYYYMM00.txt.gz)となります。また、データ検査－状態チェックで重複データのリカバリが実施された場合、出力されるバックアップファイルが YYYYMMDD.bak(月毎集約は YYYYMM00.bak)から YYYYMMDD.bak.gz(月毎集約は YYYYMM00.bak.gz)となります。データ集約 - 日毎集約／月毎集約結果のフラットファイルも圧縮されます。

注意！

CS と Flatfile Maintenance の両方にある「フラットファイルを圧縮してインポートする」の設定を合わせるようにしてください。片方だけ圧縮する設定になっていると、インポートを行う製品によって圧縮する／しないが混在し、適切に圧縮が行われない可能性があります。

②自動インポートしない

自動インポートを行いません。

初期値は「自動インポートする」、「インポート後ファイルを削除する」、「フラットファイルを圧縮してインポートする」です。ES/1 NEO Flatfile Maintenance をバッチ実行した際などに、新規に追加されたフラットファイルをデータ検査などの対象とするために、自動インポートを実行することを推奨します。インポートについての詳細は別紙マニュアル「CS-MAGIC 使用者の手引き 7.5. インポート」を参照してください。

3.4.2. 電子メール/SNMP 警告メッセージ/メッセンジャ

「メール/SNMP/メッセンジャ」タブをクリックすると、電子メール・SNMP 警告メッセージ・Windows メッセンジャサービスの初期値設定を行う画面が表示されます。

(1) 電子メール

データ検査において、検査結果を電子メールで送信することができます。ここでの設定内容がデータ検査の電子メール設定に反映され、初期状態として表示されます(条件グループ作成時)。下記の設定が可能です。

- ・送信元電子メールアドレス(F)
- ・送信先電子メールアドレス(T)
 - [追加(A)...]ボタンで新しいメールアドレスを追加します。
 - [削除(R)]ボタンでメールアドレスを削除します。
- ・送信メールサーバ(SMTP)設定(S)
 - SMTPサーバのサーバ名、またはSMTPサーバのIPアドレス
 - 電子メール送信で使用するポートの番号
 - タイムアウト時間(秒)
 - 電子メールの件名
 - 電子メールの件名には以下の置換文字列が使用できます。

[置換文字列]

<code>\${GRPNAME}</code>	条件グループ名	
<code>\${DATE}</code>	チェック対象日付	ex. 20160101_20160131
		(ただし開始日と終了日が同一日ならば日付は1つ)	
<code>\${DATENOW}</code>	チェック実行日付	ex. 20160101
<code>\${SITESYSTEM}</code>	·	サイト/システム名	ex. Site_System

ーチェック結果に問題がない場合は送信しない

データ検査を実行して問題が発見されなかった場合、問題が無い旨の電子メールが発信されますが、このチェックを付けた場合、電子メールの発信は行われません。

注意！

電子メール送信機能は、メール送信時に認証が必要な環境（SMTP 認証）には対応しておりません。
メールの送信エラーを避けるため、送信元／送信先のメールアドレスを正しく設定してください。

(2)SNMP 警告メッセージ

データ検査において、検査結果を SNMP 警告メッセージとして送信することができます。ここでの設定内容がデータ検査の SNMP 警告メッセージの設定に反映され、初期状態として表示されます(条件グループ作成時)。下記の設定が可能です。

- ・ホスト名、または IP アドレス
- ・SNMP 警告メッセージの送信に使用するポートの番号
- ・コミュニティ文字列

(3)Windows メッセンジャサービス

データ検査において、検査結果を Windows メッセンジャサービス(NET SEND)による警告メッセージとして送信することができます。ここでの設定内容がデータ検査の Windows メッセンジャサービス設定に反映され、初期状態として表示されます(条件グループ作成時)。下記の設定が可能です。

- ・コンピュータ名、または IP アドレス

3.4.3. 認証機能付きメール

「認証機能付きメール」タブをクリックすると、SMTP 認証等が必要な電子メールの設定を行う画面が表示されます。
ここで指定した設定が条件グループの作成時に初期表示されます。

動作環境設定

一般設定 メール/SNMP/メッセージ **認証機能付きメール** Windowsイベントログ

送信先(M)

To

Cc

Bcc

件名

認証方式(A)

☐ APOP認証
受信メールサーバ認証時にパスワードを暗号化します。
チェックしない場合は、BASIC認証を行います。

☒ SMTP認証
送信メールサーバ認証時にメールアドレスとパスワードを送信します。チェックしない場合、認証を行いません。

☐ POP before SMTP認証
送信メールサーバ認証前に、受信メールサーバ認証を行います。

☐ チェック結果に問題がない場合は送信しない

差出人(N)

名前

メールアドレス

メールサーバ(P)

受信メールサーバ

送信メールサーバ

メールアドレス

パスワード

詳細設定(E)...

OK キャンセル

(1)送信先(M)

メールの宛て先関連情報を指定します。ここでは To、Cc、Bcc、件名を指定します。

(2)差出人(N)

差出人情報を指定します。名前、送信元メールアドレスを指定します。

(3)認証方式(A)

①APOP 認証

受信メールサーバ認証時にパスワードを暗号化します。
ここを選択しない場合は BASIC 認証を行います。

②SMTP 認証

送信メールサーバ認証時にメールアドレスとパスワードを送信します。
ここを選択しない場合は認証を行いません。

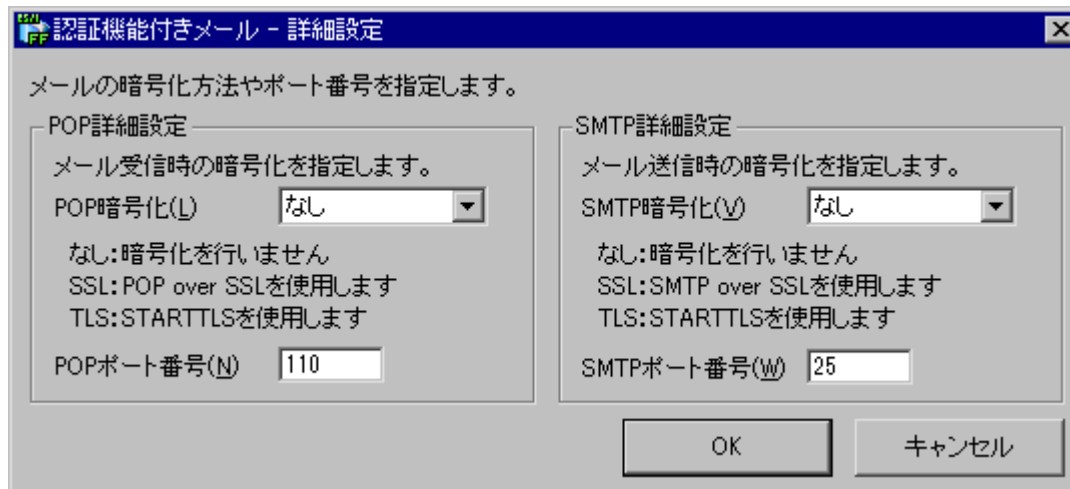
③POP before SMTP 認証

送信メールサーバ認証前に、受信メールサーバ認証を行います。

(4)メールサーバ(P)

選択した認証方式に合わせたメールサーバの指定を行います。

[詳細設定(E)...]ボタンを押下すると、「認証機能付きメール - 詳細設定」画面が表示されます。



ここでは POP、SMTPそれぞれのポート番号や暗号化の指定を行います。

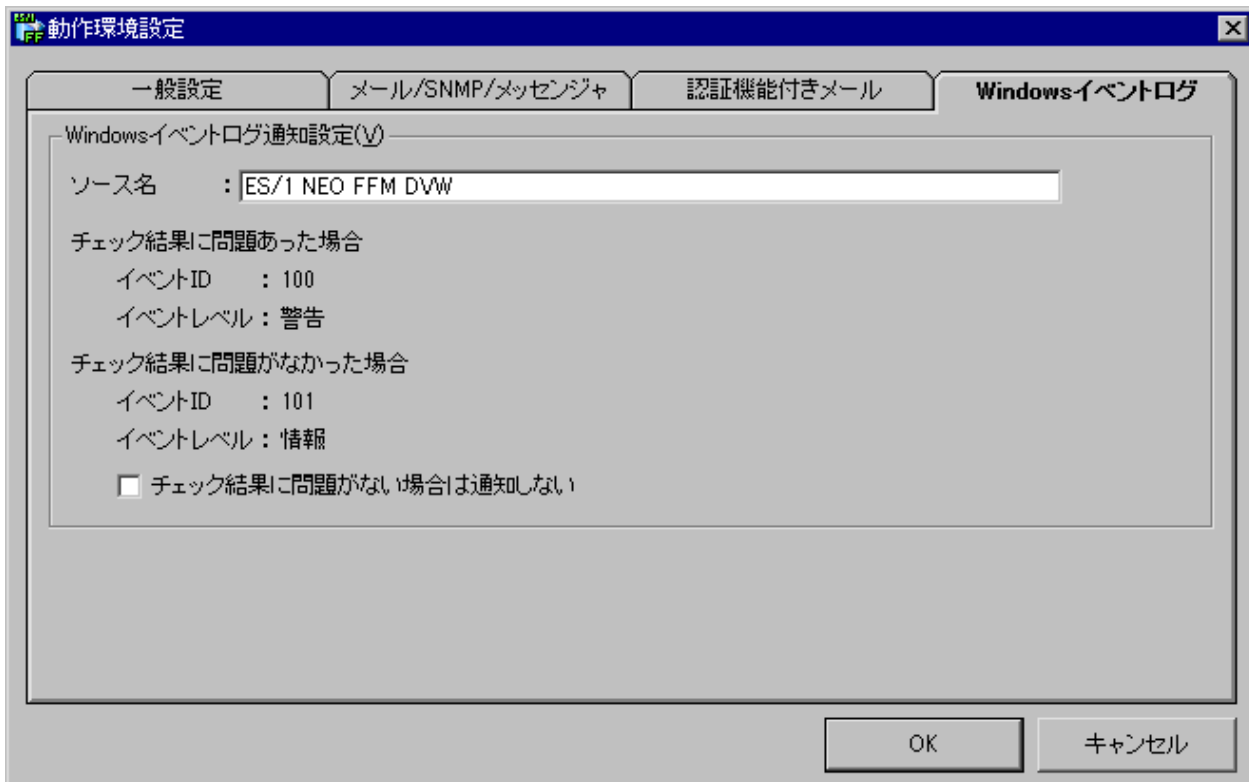
(5)チェック結果に問題がない場合は送信しない

状態チェックを実行した結果、問題がなかった場合はメールを送信しません。

ここを選択しない場合、問題が無かった旨のメールが発信されます。

3.4.4. Windows イベントログ

「Windows イベントログ」タブをクリックすると、Windows イベントログに通知するための設定を行う画面が表示されます。ここで指定した設定が条件グループの作成時に初期表示されます。



(1) ソース名

Windows イベントログに表示されるソース名を指定します。
初期状態では「ES/1 NEO FFM DVW」が設定されています。

(2) イベント ID

イベント ID は固定値が通知されます。
問題があった場合は 100 が、問題が無かった場合は 101 がそれぞれ通知されます。

(3) イベントレベル

イベントレベル固定で通知されます。
問題があった場合は警告レベル、問題が無かった場合は情報レベルでそれぞれ通知されます。

(4) チェック結果に問題がない場合は通知しない

状態チェックを実行した結果、問題がなかった場合は Windows イベントログの通知を行いません。
ここを選択しない場合、問題が無かった旨の Windows イベントログが通知されます。

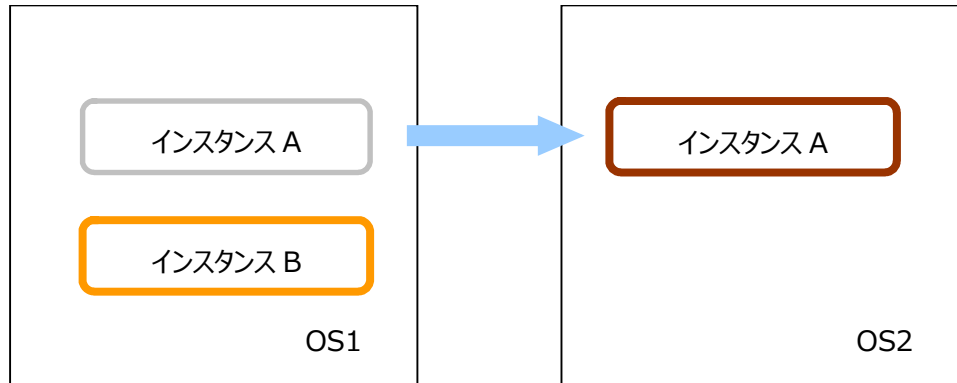
3.5. Active/Standby 構成設定

Active/Standby 構成設定では、データベースや CS-CONNECT データで冗長化システム構成を持たせている場合の Active/Standby 構成グループ（切り替え先インスタンスのグループ）の設定を行います。

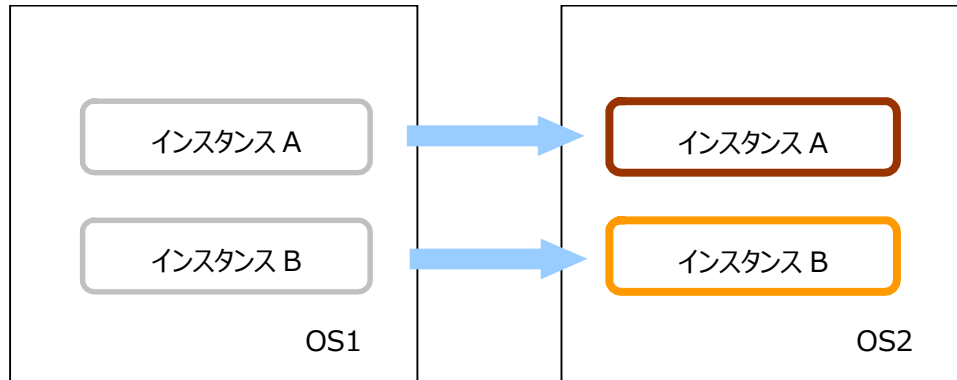
3.5.1. 冗長化システム構成

冗長化システム構成では複数の OS 上の常にどちらかでアプリケーションのインスタンスが稼働しています。なんらかのトリガーにより片方のインスタンスが停止すると、もう片方の OS 上にあるインスタンスに処理が切り替わります。

特定のインスタンスが切り替わる例

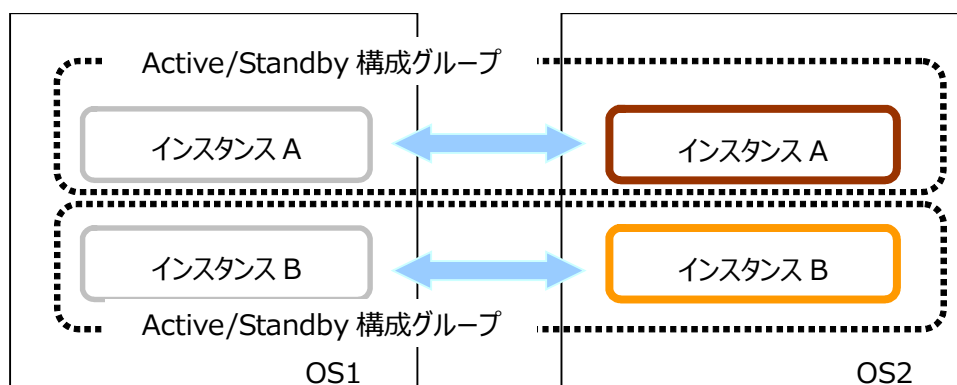


インスタンスが同時に切り替わる例



Flatfile Maintenance では、こうした冗長化システム構成をとるデータベースのインスタンス群を Active/Standby 構成グループという形で定義し、取り扱います。

Active/Standby 構成グループを構成すると、Flatfile Maintenance 状態チェック機能の欠損チェックや更新チェックで、同一 Active/Standby 構成グループの収集状況を加味したチェックが行われます。

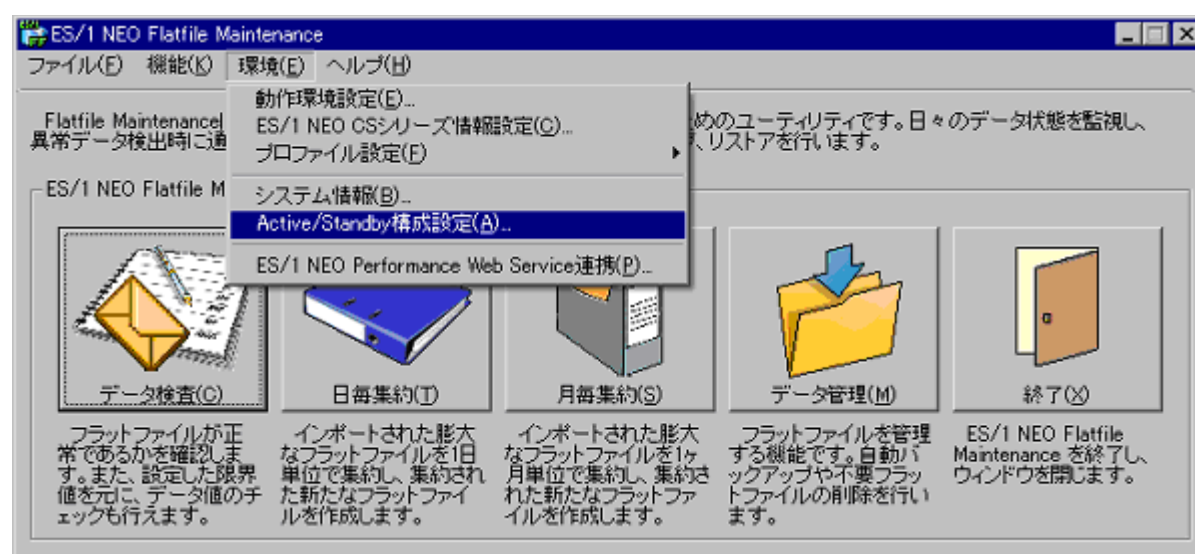


Oracle、Symfoware など、同一タイプのデータ同士で Active/Standby 構成グループを定義可能です。
対象となるデータタイプと構成の単位は以下の組み合わせになります。

データタイプ	Active/Standby 構成の単位
Oracle	サイト/システム、Oracle ドメイン名、Oracle データベース名
Symfoware	サイト/システム、Symfoware RDB 名
SQL Server	サイト/システム、SQL Server インスタンス名
DB2	サイト/システム、DB2 ノード名、DB2 データベース別名
CS-CONNECT	サイト/システム

3.5.2. Active/Standby 構成設定

「環境(E)」メニューから「Active/Standby 構成設定(A)...」を選択します。



Active/Standby 構成情報の一覧画面が表示されます。

3.5.3. Active/Standby 構成情報の一覧

Active/Standby 構成情報の一覧画面では、データタイプ毎の Active/Standby 構成グループを管理します。編集対象とするデータタイプのタブを選択すると、そのデータタイプに定義された構成情報の一覧が表示されます。一覧には、構成に与えられた構成名が表示されます。

構成されたインスタンスの一覧は、選択されたデータタイプの Active/Standby 構成グループに所属しているインスタンスの一覧を表示します。

初期状態では、どのデータタイプも Active/Standby 構成グループは定義されていません。

構成名	サイト名	システム名	Oracle ドメイン名	Oracle データベース名
顧客管理DBサーバ	東京	顧客管理DBサーバ #1	IIM	DB_I
顧客管理DBサーバ	東京	顧客管理DBサーバ #2	IIM	DB_I
顧客管理DBサーバ	東京	顧客管理DBサーバ #3	IIM	DB_I

(1)追加(A)...

Active/Standby 構成グループを追加します。

(2)編集(E)...

選択した Active/Standby 構成グループを編集します。

(3)削除(D)

選択した Active/Standby 構成グループを削除します。

(4)確定

Active/Standby 構成グループの編集を確定し、保存します。

(5)キャンセル

Active/Standby 構成グループの編集をキャンセルし、保存せずに戻ります。

3.5.4. Active/Standby 構成情報の編集

Active/Standby 構成情報の編集画面では、Active/Standby 構成グループの編集を行います。

1 つの Active/Standby 構成グループには、少なくとも 2 つのインスタンスが所属している必要があります。

構成情報を編集します。少なくとも2つのインスタンス情報を選択し、構成情報に追加してください。

構成情報名(K)

新しい構成情報

構成情報(I)

未構成インスタンスの一覧からインスタンスを選択して右側の構成に含めるインスタンスの一覧に追加してください。インスタンスは少なくとも2つ以上必要です。左側の未構成インスタンスの一覧に表示されていないインスタンスを追加したい場合、[作成]ボタンを押下してインスタンスを作成してください。

未構成インスタンスの一覧:

サイト名	システム名	Oracle ドメイン名	Oracle データベース名
大阪	サービス事業DBサーバ #1	WORLD	DB_A
大阪	サービス事業DBサーバ #2	WORLD	DB_A
東京	顧客管理DBサーバ #1	IIM	DB_I
東京	顧客管理DBサーバ #2	IIM	DB_I
東京	顧客管理DBサーバ #3	IIM	DB_I

構成に含めるインスタンスの一覧:

サイト名	システム名	Oracle ドメイン名	Oracle データベース名
------	-------	--------------	----------------

追加>>(A)

<<削除(D)

作成>>(N)

OK

キャンセル

(1) 構成情報名(K)

Active/Standby 構成グループの構成情報名を入力します。

構成情報名は全データタイプを通じて一意である必要があります。

(2) 構成情報(I)

Active/Standby 構成グループに含めるインスタンスを選択します。

左側の未構成インスタンスの一覧には、その時点でどの Active/Standby 構成にも所属していない未構成インスタンスが表示されます。データタイプに対応するデータがインポートされていない場合、この一覧には何も表示されません。

右側の構成に含めるインスタンスの一覧には、編集中の Active/Standby 構成グループに所属する構成済みインスタンスが表示されます。

(3)追加>>(A)

左側の未構成インスタンスの一覧にある未構成インスタンスを選択して[追加>>(A)]ボタンを押下すると、右側の構成に含めるインスタンスの一覧にインスタンスが追加されます。

[illegible]

(4) <<削除(D)

右側の構成に含めるインスタンスの一覧にある構成済みインスタンスを選択して[<<削除(D)]ボタンを押下すると、インスタンスが Active/Standby 構成グループから外れ、左側の未構成インスタンスの一覧に戻されます。

(5)作成>>(N)

左側の未構成インスタンスの一覧に表示されていないインスタンスを作成し、Active/Standby 構成グループに追加します。

3.5.5. Active/Standby 構成要素の編集

Active/Standby 構成要素の編集画面では、その時点はまだデータがインポートされていないが、将来的にデータがインポートされてくることが事前にわかっているようなインスタンスを定義します。

(1) 既存のサイト／システムから選択する(E)

すでに存在するサイト／システムに新しいインスタンスが将来的に追加されることがわかっている場合、こちらを選択します。

「既存のサイト／システム」ツリー上でサイト／システムを選択し、インスタンスの名称を入力してください。

※データタイプが CS-CONNECT の場合、サイト／システムの選択のみで設定が完了します。この場合、インスタンス名の入力はありません。

(2)まだ存在しないサイト／システムを指定する(N)

追加しようとするインスタンスを保持するサイト／システムがまだ存在しない（インポートされていない）場合、こちらを選択します。

サイト名、システム名と、インスタンスの名称を入力してください。

※データタイプが CS-CONNECT の場合、サイト／システムの入力のみで設定が完了します。この場合、インスタンス名の入力はありません。

第4章 データ検査－状態チェック

データ検査－状態チェックは、日々のフラットファイルの更新状況を監視し、フラットファイルのレコードの欠損や重複、インターバルの抜けをチェックする機能です。

4.1. 機能概要

更新チェックでは、日々のフラットファイル更新が正しく行われているかを監視し、データ収集の不具合を即座に検知することができます。

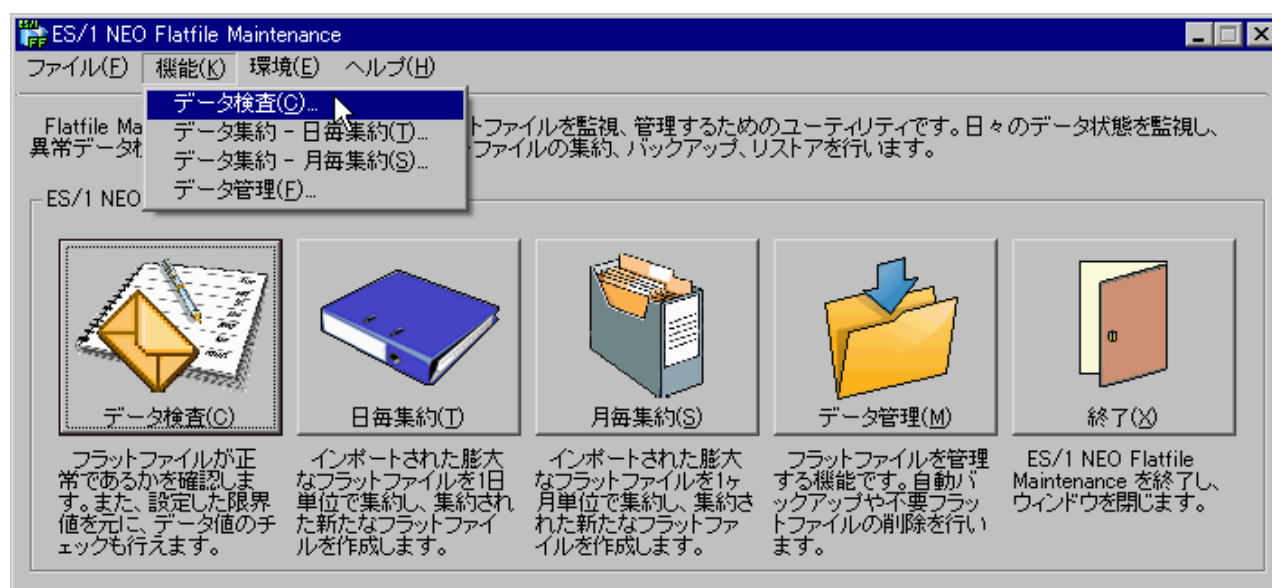
欠損チェックでは、インポートされたフラットファイルを走査し、資源毎に欠損インターバルがないかをチェックします。フラットファイルの走査結果はテキスト形式のマップリストに出力されるため、データの存在状況を即座に把握することが可能です。

重複チェックでは、インポートされたフラットファイルを走査し、重複しているデータがないかをチェックします。フラットファイルの走査結果はテキスト形式のマップリストに出力されるため、データの重複状況を即座に把握することが可能です(欠損データチェックと同一のファイルに出力されます)。

更新チェック・欠損チェックは、チェック結果を電子メールや SNMP 警告メッセージにて、任意の宛て先に発信することが可能です。

4.2. 起動方法

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の[データ検査(C)]ボタンを押下、または、「機能(K)」メニューの「データ検査(C)...」を選択することで、データ検査が起動します。



4.3. 条件グループ作成

データ検査－状態チェックを実行するためには、出力先フォルダやデータチェック種別を指定した条件グループを作成する必要があります。

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面からデータ検査を起動すると、「データ検査」画面が表示されます。

(1)機能選択(F)

「データの状態をチェックする(状態チェック)」を選択します。

(2)条件グループ一覧

登録された条件グループが、一覧で表示されます。

(3)[動作環境設定(E)...]ボタン

[動作環境設定(E)...]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－動作環境設定」画面が表示されます。

①チェック結果の出力先フォルダ(F)

条件グループ作成ウィザードにて、データ検査を実行した結果の出力先フォルダを指定しますが、この時の初期表示フォルダを指定します。条件グループを作成する時に出力先フォルダを指定する場合は設定の必要はありません。

②電子メール発信形態(M)

検査結果を電子メールで発信する場合に、その形態を選択します。

(a)すべてのチェック結果を1通の電子メールで一括送信する

検査を実行した全条件グループの全結果を1通の電子メールで送信します。

(b)チェック結果を細分化し、複数の電子メールで送信する

検査を実行した条件グループ、および対象資源毎に複数の電子メールを送信します。

③状態チェック結果の保持期限(L)

状態チェック結果ファイルの自動削除設定を行います。自動削除は、状態チェック実行時に行われます。

(a)過去の状態チェック結果を保持しない

状態チェック結果ファイルを保持しません。状態チェックを行う際に、過去の状態チェック結果ファイルを破棄します。

(b)状態チェック結果を保持する

状態チェック結果ファイルを保持します。本項目を選択した場合、状態チェック結果ファイルは破棄されず、選択後の実行以降の状態チェック結果ファイルが保持され続けます。

(c)状態チェック結果を期限付きで保持する

状態チェック結果ファイルを期限付きで保持します。本項目を選択した場合、実行日の何日前までの状態チェック結果ファイルを保持するか指定します。但し、本項目は状態チェック結果ファイルのファイル名形式選択において、日付が含まれる場合のみ有効です。

④データ欠損チェック許容設定

データ検査 - 状態チェック機能を使用するための動作環境を設定します。

動作環境設定 **データ欠損チェック許容設定**

状態チェック実行時にデータ欠損を検出した場合、報告せずに許容する条件をサイト/システムごとに指定します。同じサイト/システムに対し、複数の許容条件を指定した場合は、最初にマッチした条件が適用されます。ここで許容条件を指定をしない場合は、すべてのデータ欠損が報告されます。

サイト/システム	データ欠損の許容条件	設定値
----------	------------	-----

新規作成(A)...
編集(U)...
削除(D)

OK キャンセル

データ欠損チェックを実行した際、一定条件以下のデータ欠損は許容し、報告しないようにすることが可能です。毎日特定の時間帯にリポートを行う運用等では、リポート中のインターバルデータが欠損することになります。しかし、このデータ欠損は許容されるものです。これを報告ないように設定します。

[新規作成(A)...]ボタンを押下すると、「データ検査 - 状態チェック - 動作環境設定 - データ欠損チェック許容設定」画面が表示されます。

データ検査 - 状態チェック - 動作環境設定 - データ欠損チェック許容設定

状態チェック実行時にデータ欠損を検出した場合、報告せずに許容する条件をサイト/システムごとに指定します。

サイト/システム選択(S)

<対象サイト/システムを直接選択する>

設定(E)...
全選択(A)
全解除(B)

データ欠損報告条件(C)

☒ 1日のデータ欠損時間の合計が設定値以上の場合に報告する 合計 8 分以上
☐ 連続したデータ欠損が設定した上限時間以上の場合に報告する 連続 4 分以上
☐ 任意の特定時間帯をデータ欠損チェックの対象外とする 対象外時間帯(L)

開始時刻(E) 終了時刻(T) 登録>>(P) 削除<<(X)

00 : 00 ~ 23 : 59

登録 キャンセル

「データ検査－状態チェック－動作環境設定－データ欠損チェック許容設定」画面では対象サイト／システムの選択と、データ欠損を報告しないための設定を行います。
データ欠損チェック許容設定はサイト／システム毎に設定します。対象サイト／システムの直接選択以外に、システムフィルタープロフィールを対象とすることも可能です。

(a) 1 日のデータ欠損時間の合計が設定値以上の場合に報告する

この設定は、1 日分の全インターバルの中で、欠損していたインターバルの合計時間で判断する設定です。

データ欠損の合計時間が n 分以上ならデータ欠損の報告を行い、データ欠損の合計時間が n 分未満であれば許容範囲内であるため報告を行わず「問題なし」とします。

(b) 連続したデータ欠損が設定した上限時間以上の場合に報告する

データ欠損が連続したインターバルで起こる場合、連続欠損時間で許容設定をします。

連続したデータ欠損が n 分以上ならデータ欠損の報告を行い、連続したデータ欠損が n 分未満であればその連続部分については報告を行わず「問題なし」とします。1 日の中に複数の時間帯で欠損が発生している場合、一部が「問題なし」とされても、残りの一部の方で「欠損あり」と判断される場合があります。

(c) 任意の特定時間帯をデータ欠損チェックの対象外とする

特定時間帯を欠損チェックの対象外とすることができます。複数時間帯の指定が可能です。

パフォーマンスデータの収集を止めている時間帯がある場合、ここでその時間帯を設定しておく、あらかじめ判っているデータ欠損が報告されなくなります。

[登録]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－動作環境設定」画面の「データ欠損チェック許容設定」タブにある許容設定一覧に設定が追加されます。

同一サイト／システムに対し、異なる許容設定を行った場合、一覧の上位にある設定のみが実際の検査時に適用されます。優先順位は[▲]ボタン、[▼]ボタンで変更してください。

例えば、以下の設定では「東京／Web サーバ」のみを特定の許容条件とし、それ以外のサイト／システムは全体設定の許容条件とすることができます。

サイト／システム	データ欠損の許容条件	設定値
東京／Webサーバ	特定の時間帯をチェック対象外	01:00-01:59
<すべて>/<すべて>	1日のデータ欠損時間合計で許容	8

(4)[設定(S)...]ボタン

[設定(S)...]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック」画面が表示され、条件グループの作成、編集および削除を行います。

[illegible]

「処理選択(C)」で、「条件グループを新規作成する」を選択し[次へ (N)>]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(1/5)」画面が表示されます。

データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(1/5)

条件グループ名、チェックの種別、及びチェック対象とするサイト／システムを指定します。

条件グループ名(T)
条件グループ名を登録します。条件グループ名は全体で一意の名前を入力してください。

チェック種別(C)
実行するチェックの種別を選択します。「データの更新状態チェック」は、日々データが正しく収集されているかを確認します。「データの欠損チェック」は、データに異常がないかを確認します。

- ☒ データの更新状態チェック (データが日々更新されているかをチェックする)
- ☒ データの欠損チェック (データに欠損インターバルや欠損レコードがないかをチェックする)
- ☒ データの重複チェック (データに重複しているインターバルやレコードがないかをチェックする)
- ☒ データが重複していた場合、自動的にリカバリを行う
- ☒ リカバリを行う際、元のフラットファイルを拡張子「bak」として保存しておく

サイト/システム選択(S)
<対象サイト/システムを直接選択する>

- ☐ 京都
- ☒ 埼玉
 - ☒ テストプログラム実行サーバ
 - ☒ テスト用Webサーバ
- ☒ 大阪
- ☒ 愛知
- ☐ 東京
- ☐ 神奈川

設定(E)...

全選択(A)

全解除(B)

インスタンスプロファイル選択(I)
<インスタンスプロファイルを使用しない>

設定(K)...

戻る(B) 次へ (N)>

①条件グループ名(T)

全体で一意となる、条件グループ名を指定します。

②チェック種別(C)

実行するチェックの種別を指定します。

・データの更新状態チェック

日々のデータが正しく収集されているかをチェックします。チェック対象時間帯に対象資源のデータが全く存在しない場合に検知されます。1 インターバルでもデータが存在する場合、ここでは検知されません。なお、以下の資源項目において詳細データを出力していない場合は、「HTTP ログ情報(HTTP ログ詳細)のデータが存在しません。」などの警告が出力される場合があります。

ネットワーク情報

HTTP ログ情報

・データの欠損チェック

データの欠損状態についてチェックします。チェック対象時間帯に対象資源の一部のデータが欠損していた場合に検知されます。

チェックの対象となる項目については「4.10. 状態チェック対象項目一覧」を参照してください。

- ・データの重複チェック

指定期間、または前日のフラットファイルをチェックし、重複しているデータがないかをチェックします。

フラットファイルには、pdbmagic2 や udbmagic 等のプロダクトが生成する中間フラットファイルが、インポート処理によってひとかたまりのデータ(ブロック)として取り込まれます。

重複チェックはフラットファイル内のブロック単位に行われます。完全一致するブロックが複数存在する場合、重複データと判定されます。

- ・データが重複していた場合、自動的にリカバリを行う

データの重複チェックの指定を行った場合に選択可能となります。データの重複があった場合には、データの重複部分を切除します(上記データの重複チェックが選択されている場合のみ有効)。

- ・リカバリを行う際、元のフラットファイルを拡張子「.bak」として保存しておく

データ重複時で且つ、リカバリを行う指定の場合に選択可能となります。元のフラットファイルの拡張子を「.bak」に変更してバックアップします(YYYYMMDD.bak(.gz))。

③対象サイト／システム(S)

検査対象とするサイト／システムを選択します。ここには、インポートされているフラットファイルのサイト／システムがツリーで一覧表示されます。

また、利用可能なシステムフィルタープロファイルの一覧がコンボボックスに表示されます。

- ・＜対象サイト／システムを直接選択する＞

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで＜対象サイト／システムを直接選択する＞を選択した場合は、対象とするサイト／システムを直接ツリーから選択します。

- ・システムフィルタープロファイル選択

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで＜対象サイト／システムを直接選択する＞以外を選択した場合は、対象サイト／システムの指定にシステムフィルタープロファイルを使用します。

[設定(E)...]ボタンを押下すると、「システムフィルタープロファイル一覧」画面が表示され、システムフィルタープロファイルの追加や編集を行う事が出来ます。

また、システムフィルタープロファイルを選択した場合は、そのシステムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムがツリーにプレビュー選択表示されます。

ここでの設定変更は出来ませんので、システムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムを変更する場合は、[設定(E)...]ボタンを押下して変更を行ってください。

システムフィルタープロファイルについての詳細は、別紙マニュアル「プロファイル機能 使用者の手引き」を参照してください。

④インスタンスプロファイル選択(I)

Oracle 情報等を状態チェックの対象とする場合、Oracle ドメイン名/データベース名等を指定する必要があります。これらの情報の解決にはインスタンスプロファイルを使用します。

[設定(K)...]ボタンを押下すると、インスタンスプロファイルの設定画面が表示され、インスタンスプロファイルの追加や編集を行う事ができます。

インスタンスプロファイルの詳細については別紙マニュアル「プロファイル機能 使用者の手引き」を参照してください。

[次へ(N)>]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(2/5)」が表示されます。

データ検査 - 状態チェック - 条件グループウィザード(2/5)

チェック結果ファイルを出力するフォルダ、ファイル名の書式、及び対象期間を指定します。

チェック結果ファイル群の出力先フォルダ(O)

C:\IIM_DATA\CS\Fm\DataCheckLog 参照(V)...

チェック結果ファイル群のファイル名書式

ファイル名に日付やサイト/システム名を自動付加することができます。これらを付加する場合は、[書式]ボタンを押下し、ファイル名のパターンを選択してください。

チェック結果ファイル名：サイト/システム名_日付_Fc_xxx_条件グループ名.txt 書式(P)...

☐ チェック結果を1つのファイルで出力する

1日の区切り(L)

通常、1日の区切り(1日の始まり)は「00時」ですが、任意の時刻を区切りとすることができます。

区切り時刻 00 時

対象期間(D)

チェックの対象とするフラットファイルの期間を指定してください。

☐ 実行日の前日フラットファイルのみを対象とする

☒ 対象期間指定 開始日(E) 開始時刻(S) 終了日(E) 終了時刻(T)

2012/08/01 00 : 00 2012/08/01 23 : 59

☐ 実行時から24時間前までを対象とする

☐ 実行時から指定時間前までを対象とする 24 時間前までのフラットファイルをチェックする

☐ 指定時刻から指定時間後までを対象とする 00 : 00 から 24 時間後までをチェックする

< 戻る(B) 次へ (N) >

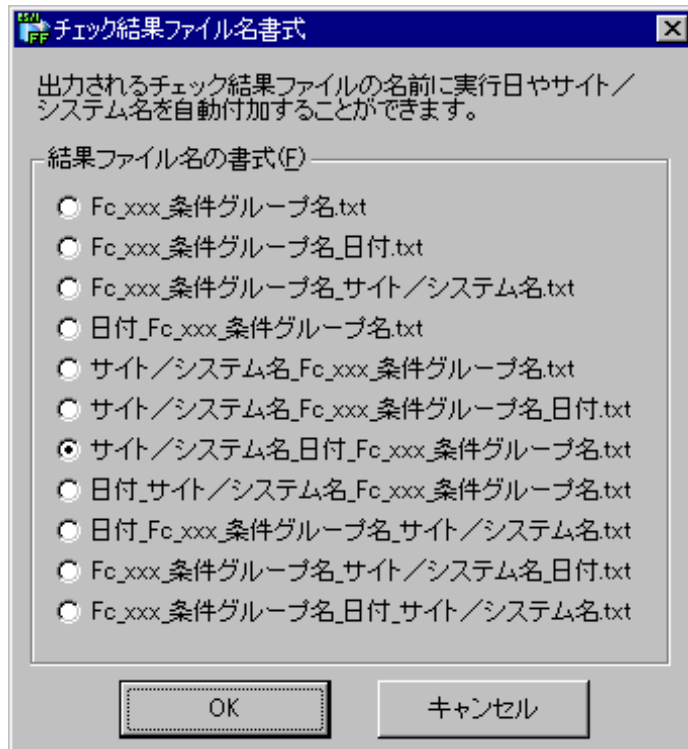
⑤チェック結果ファイル群の出力先フォルダ(O)

チェック結果ファイルを出力するフォルダを指定します。前記「(3)[動作環境設定(E)...]ボタン」でフォルダを指定している場合は、そのフォルダが初期表示されます。

⑥チェック結果ファイル群のファイル名書式

出力されるチェック結果のファイル名を選択することが出来ます。

[書式(P)...]ボタンを押下すると、「チェック結果ファイル名書式」画面が表示されます。ここで使用したい書式の選択が可能です。



「チェック結果を1つのファイルで出力する」を選択すると、すべての検査結果ファイルが対象資源項目毎にまとめられて出力されます。この場合、複数サイト／システムの検査結果が混在する場合があるため、サイト／システム名が含まれる書式は選択できません。

メモ！

ファイル名に日付を付加する際、データ検査対象開始日と終了日が同一の場合には日付は統一して表示されます。

ex.

・開始日と終了日が異なる場合

サイト名_システム名_20160101_20160124_Fc_xxx_条件グループ名.txt

・開始日と終了日が同一の場合

サイト名_システム名_20160124_Fc_xxx_条件グループ名.txt

⑦1 日の区切り(L)

1 日の始まりを 0 時ではなく、任意の時刻としたい場合、その区切り時間を指定します。
区切り時間前のデータは、前日のプラス 24 時間したデータとして扱われます。

収集インターバルが 15 分の場合の指定例

[例 1]

開始日時 2016 年 1 月 1 日 0:00
終了日時 2016 年 1 月 1 日 23:45
1 日の区切り 00 時

2016 年 1 月 1 日 0:00～23:45 の 24 時間となります。

[例 2]

開始日時 2016 年 1 月 1 日 8:00
終了日時 2016 年 1 月 2 日 7:45
1 日の区切り 00 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 2 日 7:45 の 24 時間となります。

[例 3]

開始日時 2016 年 1 月 1 日 8:00
終了日時 2016 年 1 月 2 日 7:45
1 日の区切り 08 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 1 日 31:45 の 24 時間となります。

[例 4]

開始日時 2016 年 1 月 1 日 8:00
終了日時 2016 年 1 月 1 日 31:45
1 日の区切り 08 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 1 日 31:45 の 24 時間となります。

この例は pdbmagic で TIMEBASE を 8 時としている場合です。

メモ！

pdbmagic で TIMEBASE を指定しており、その指定に従って対象データを指定したい場合は、ここで必ず TIMEBASE と同じ時間を指定してください。

⑧対象期間(D)

データの更新状態、欠損の有無をチェックする対象期間を指定します。

- ・実行日の前日フラットファイルのみを対象とする
データ検査実行日の前日フラットファイルのみを対象とします。
- ・対象期間指定
指定した開始日時と終了日時を対象とします。
時刻は 00 : 00 から 47 : 59 まで選択可能ですので、1 日の区切り時間に合わせて指定してください。
- ・実行時から 24 時間前までを対象とする
実行時点から、24 時間前までを対象とします。
- ・実行時から指定時間前までを対象とする
実行時点から、任意の時間前までを対象とします。
1 時間前から 24 時間前まで指定可能です。
- ・指定時刻から指定時間後までを対象とする
特定の時刻から n 時間後までを対象とします。
1 時間後から 24 時間後まで指定可能です。

(例)

4:00 から 24 時間後までをチェックする → 対象時間帯は 4:00～3:59 の 24 時間

ただし、実行時刻により処理対象期間が変わります。以下に例を記載します。

状態チェック実行時刻が 1:00 の場合 → 前々日 4:00～前日 3:59 が検査対象

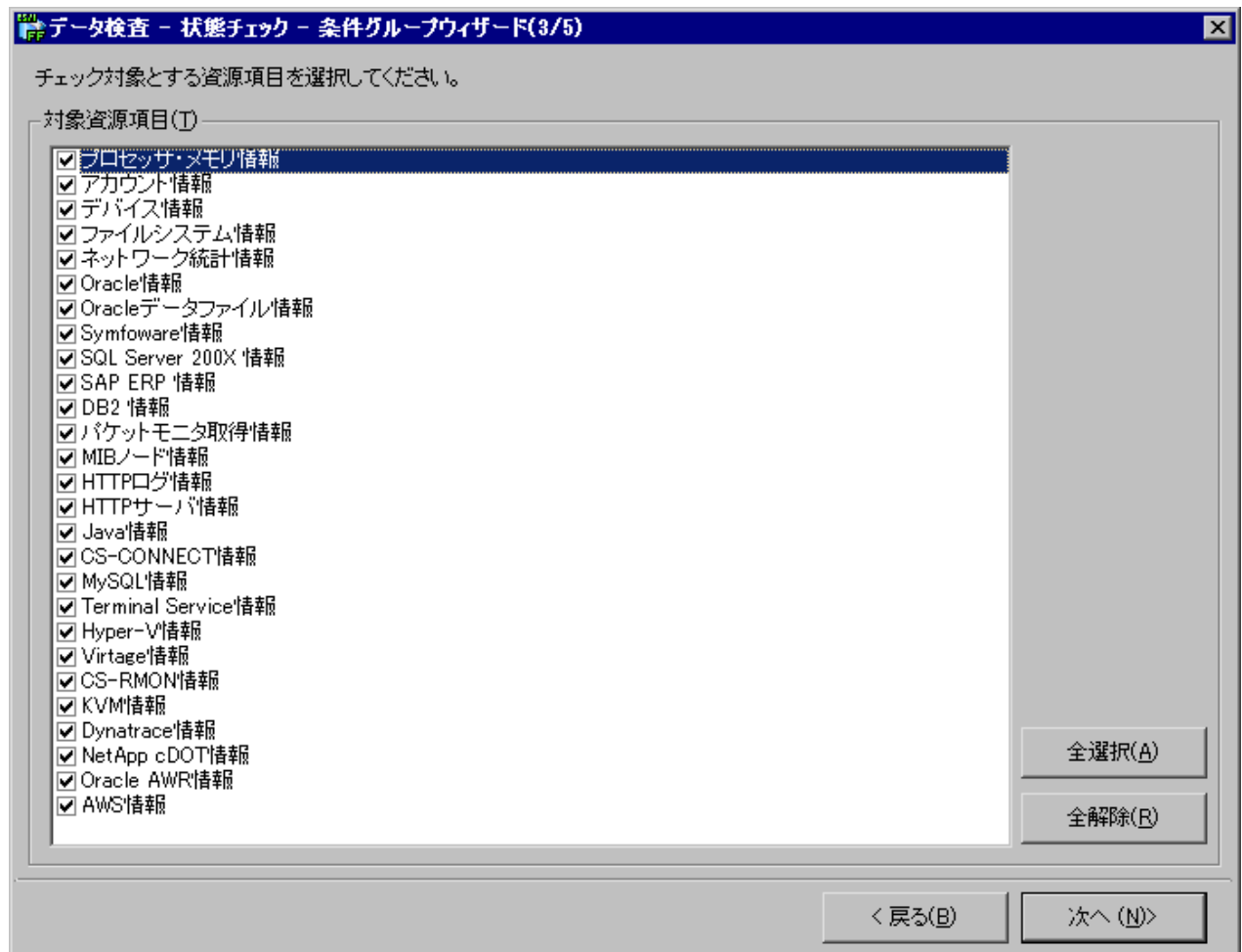
状態チェック実行時刻が 5:00 の場合 → 前日 4:00～今日 3:59 が検査対象

また、開始時刻にはフラットファイルに記載された時刻のみ指定可能です。

(例)8 時始まりのフラットファイルを対象にする場合

→開始時刻に指定可能な時間 : 08 : 00～31 : 59

[次へ(N)>]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(3/5)」が表示されます。



⑨対象資源項目(I)

チェック対象とする資源を選択します。

- ・[全選択(A)]ボタン

対象資源項目をすべて選択します。

- ・[全解除(R)]ボタン

選択されている対象資源項目をすべて非選択状態にします。

メモ！

資源項目によってはデータの特性上欠損チェックを行わない項目があります。

詳細は「4.10 状態チェック 対象項目一覧」を参照してください。

また、重複チェックはここでの選択項目に依存せずフラットファイルに含まれる資源項目すべてをチェック対象とします。

「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(1/5)」画面でインスタンスプロファイルを選択していない場合、[次へ(N)>]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(4/5)」が表示されます。

インスタンスプロファイルを指定している場合は、「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(5/5)」画面が表示されます。

[illegible]

対象サイト／システムを直接選択している場合の画面

⑩対象資源項目詳細情報－対象サイト／システム直接選択時

「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(1/5)」で選択したサイト／システムと「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(4/5)」で選択した対象資源項目の組み合わせの中で、CS-MAGIC にてデータベース名やインスタンス名が定義されている項目のみ、一覧で表示されます。ここで検査対象とする項目を絞り込みます。不要な項目を選択し、[削除(R)]ボタンを押下します。詳細情報を CS-MAGIC にて定義していない場合、詳細情報を手入力し、追加を行うことができます。[追加(A)...]ボタンを押下すると、「チェック対象資源項目追加」画面が表示されます。

メモ！

「5.5. 条件グループの編集」に記載されている設定の編集時、対象システムを変更すると上記画面で表示される詳細情報が更新されます。意図的に対象外としていた DB 名、インスタンス名等が再表示され状態チェックの対象となります。再度[削除(R)]ボタンで削除し、対象外としてください。

また、対象システムを追加した際はチェック対象資源項目を追加してください。詳細情報は自動で追加されないため、ここで設定されていない項目は検査対象外になります。

追加するサイト／システムと資源項目を選択し、各資源項目毎に詳細情報を入力します。

- Oracle…………… ドメイン名／データベース名
- Symfoware…………… RDB システム名
- SQL Server 20XX…… インスタンス名
- SAP ERP…………… インスタンス名
- DB2…………… ノード名／データベース別名
- WebLogic…………… ドメイン名／サーバ名
- Interstage…………… ワークユニット名
- WebSphere…………… セル名／ノード名／プロセス名
- OracleAS…………… Application Server インスタンス名／OC4J インスタンス名

⑪電子メール・SNMP 警告メッセージ・Windows メッセンジャサービス設定

データ検査 - 状態チェック - 条件グループウィザード(5/5)

チェック結果を、任意の宛て先へ電子メールやSNMP警告メッセージ等で通知することが可能です。イベントログへの出力も可能です。

電子メール/SNMP/メッセンジャ 認証機能付きメール Windowsイベントログ

電子メール(M)

☒ チェック結果を電子メールで送信する
☒ データマップファイルも送信する

送信元電子メールアドレス(E)
xxx@iim.co.jp

送信先電子メールアドレス(I)
yyy@iim.co.jp

送信メールサーバ(SMTP)設定(S)
☒ サーバ名 hostname
☐ IPアドレス . . .
ポート番号 25
タイムアウト 15 秒
件名
発信テスト(P)

☐ チェック結果に問題がない場合は送信しない

追加(A)... 削除(R)

SNMP警告メッセージ(E)

☒ チェック結果をSNMP警告メッセージで送信する

送信設定(W) ☒ ホスト名 hostname コミュニティ文字列(C) public
☐ IPアドレス . . . ポート番号 162

Windowsメッセンジャサービス(N)

☒ チェック結果をWindowsメッセンジャサービスを使用して送信する

☒ コンピュータ名 hostname ☐ IPアドレス . . .

< 戻る(B) 完了

・電子メール(M)

チェック結果を電子メールで送信する

データ検査の結果を任意の宛て先に送信する場合にチェックします。

ここをチェックすると、検査結果を、電子メールにて送信します。電子メールは、条件グループや対象資源毎に分けて送信することや、1 通の電子メールですべての情報を送信することができます。詳細は前記「4.3. 条件グループ作成」の「(3)[動作環境(E)...]ボタン」を参照してください。

データマップファイルも送信する

条件グループ全体のチェック結果を報告する電子メールに加え、条件グループに選択されている各資源につき 1 枚、データの状態をマップしたマトリクスを送信します。

データマップファイルは、時系列で資源別にデータの状態を表示します。

【データマップファイル イメージ】

対象システム： 東京/在庫管理 X
対象期間： 2016/01/08 00:00:00 - 2016/01/08 04:30:00

【System】

(プロセッサ・メモリ情報)

- 1 CPU : プロセッサ
- 2 MEM : メモリ
- 3 ATSY : システムコール

(アカウント情報)

- 4 C&U : アカウント (Command & User)

(デバイス情報)

- 5 DEV : デバイス

(ファイルシステム情報 (Unix))

- 6 FLSU : ファイルスペース (Unix)

('.' : データなし '*' : データあり '#' : 重複データ)

```
=====
DATE          TIME      1 2 3 4 5 6
-----
                        A    F
                        C M T C D L
                        P E S & E S
                        U M Y U V U
-----
2016/01/08 00:00:00 * * * * *
2016/01/08 00:15:00 * * * * *
2016/01/08 00:30:00 * * * * *
2016/01/08 00:45:00 * * * * *
2016/01/08 01:00:00 * * * * *
2016/01/08 01:15:00 * * * * *
2016/01/08 01:30:00 * * * * *
2016/01/08 01:45:00 * * * * *
2016/01/08 02:00:00 * * * * *
2016/01/08 02:15:00 * * * * *
2016/01/08 02:30:00 * * * * *
2016/01/08 02:45:00 * * * * *
2016/01/08 03:00:00 * * * * *
2016/01/08 03:15:00 * * * * *
2016/01/08 03:30:00 * * * * *
2016/01/08 03:45:00 * * * * *
2016/01/08 04:00:00 * * * * *
2016/01/08 04:15:00 * * * * *
2016/01/08 04:30:00 * * * * *
=====
```

「送信元電子メールアドレス(F)」 「送信先電子メールアドレス(T)」 「送信メールサーバ (SMTP) 設定(S)」は、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の「動作環境設定」で指定したものが初期表示されます。詳細については本紙「3.4. 動作環境設定」の「3.4.2. 電子メール/SNMP 警告メッセージ/メッセージ (1)電子メール」を参照してください。

注意！

メールの送信エラーを避けるため、送信元／送信先のメールアドレスを正しく設定してください。

チェック結果に問題がない場合は送信しない

検査の結果、問題が検出されなかった場合、メールの発信を行わないようにします。

- SNMP 警告メッセージ(E)

チェック結果を SNMP 警告メッセージで送信する

検査の結果、問題があった場合、SNMP 警告メッセージを送信する場合にチェックします。問題があった場合、以下のメッセージが送信されます。

- 更新状態チェックに問題があった場合

iim¥Common¥docs¥IIM.MIB に定義されている ffmCheckNotUpdated のトラップメッセージ。変数 ffmcheckConfigName には条件グループ名が設定されます。

- 欠損チェックに問題があった場合

iim¥Common¥docs¥IIM.MIB に定義されている ffmCheckMissing のトラップメッセージ。変数 ffmcheckConfigName には条件グループ名が設定されます。

- 重複チェックに問題があった場合

iim¥Common¥docs¥IIM.MIB に定義されている ffmCheckDuplicated のトラップメッセージ。変数 ffmcheckConfigName には条件グループ名が設定されます。

(*)上記 iim フォルダは CS インストールフォルダの一階層上のフォルダ(例:CS インストールフォルダが D:¥iim¥cs なら D:¥iim)になります。

「送信設定(W)」 「コミュニティ文字列(C)」は、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の「動作環境設定」で指定したものが初期表示されます。詳細については「3.4. 動作環境設定」の「3.4.2. 電子メール/SNMP 警告メッセージ/メッセージ (2)SNMP 警告メッセージ」を参照してください。

- Windows メッセンジャサービス(N)

チェック結果を Windows メッセンジャサービスを使用して送信する

検査の結果、問題があった場合、Windows メッセンジャサービスを使用してメッセージを送信する場合にチェックします。

送信されるメッセージは SNMP 警告メッセージと同様です。

「コンピュータ名」「IP アドレス」は、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の「動作環境設定」で指定したものが初期表示されます。

詳細については「3.4 動作環境設定」の「3.4.2 電子メール/SNMP警告メッセージ/メッセージ (3)Windows メッセンジャサービス」を参照してください。

⑫認証機能付きメール

データ検査 - 状態チェック - 条件グループウィザード(5/5)

チェック結果を、任意の宛て先へ電子メールやSNMP警告メッセージ等で通知することが可能です。イベントログへの出力も可能です。

電子メール/SNMP/メッセージ **認証機能付きメール** Windows-イベントログ

認証機能付きメール(G)

☒ チェック結果を認証機能付き電子メールで送信する
☒ データマップファイルも送信する
☒ チェック結果に問題がない場合は送信しない

送信先(O)

To: xxx@iim.co.jp
Cc:
Bcc:
件名:

差出人(H)

名前:
IM:
メールアドレス:
yyy@iim.co.jp

認証方式(K)

☐ APOP認証
受信メールサーバ認証時にパスワードを暗号化します。
チェックしない場合は、BASIC認証を行います。

☐ SMTP認証
送信メールサーバ認証時にメールアドレスとパスワードを送信します。チェックしない場合は、認証を行いません。

☐ POP before SMTP認証
送信メールサーバ認証前に、受信メールサーバ認証を行います。

メールサーバ(J)

受信メールサーバ: hostname
送信メールサーバ: hostname
メールアドレス: iim
パスワード: ***

詳細設定(D)...

< 戻る(B) 完了

・認証機能付きメール(G)

チェック結果を認証機能付き電子メールで送信する

データ検査の結果を任意の宛て先に送信する場合にチェックします。

ここをチェックすると、検査結果を、認証機能付き電子メールにて送信します。

認証機能付き電子メールは、条件グループや対象資源毎に分けて送信することや、1 通のメールですべての情報を送信することができます。

詳細は前記「4.3. 条件グループ作成」の「(3)[動作環境(E)...]ボタン」を参照してください。

データマップファイルも送信する

条件グループ全体のチェック結果を報告するメールに加え、条件グループに選択されている各資源につき 1 枚、データの状態をマップしたマトリクスを送信します。

データマップファイルは、時系列で資源別にデータの状態を表示します。

詳細は、「⑪電子メール・SNMP 警告メッセージ・Windows メッセージサービス設定」の「データマップファイルも送信する」を参照してください。

チェック結果に問題がない場合は送信しない

検査の結果、問題が検出されなかった場合、メールの発信を行わないようにします。

・送信先(Q)

メールの宛て先関連情報を指定します。

ここでは To、Cc、Bcc、件名を指定します。

「To」「Cc」「Bcc」「件名」は、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の「動作環境設定」で指定したものが初期表示されます。

詳細については本紙「3.4.動作環境設定」の「3.4.3.認証機能付きメール」を参照してください。

・差出人(H)

差出人情報を指定します。

名前、送信元メールアドレスを指定します。

・認証方式(K)

APOP 認証

受信メールサーバ認証時にパスワードを暗号化します。

ここを選択しない場合は BASIC 認証を行います。

SMTP 認証

送信メールサーバ認証時にメールアドレスとパスワードを送信します。

ここを選択しない場合は認証を行いません。

POP before SMTP 認証

送信メールサーバ認証前に、受信メールサーバ認証を行います。

・メールサーバ(J)

選択した認証方式に合わせたメールサーバの指定を行います。

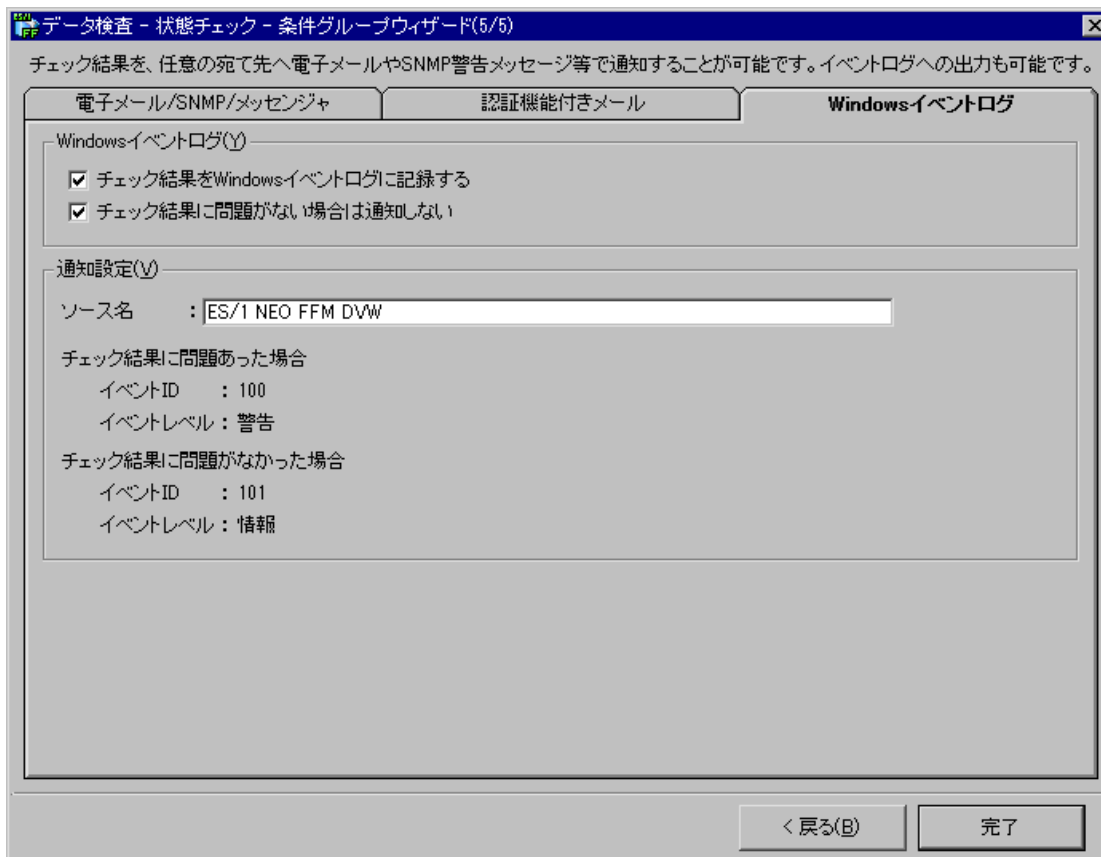
「受信メールサーバ」「送信メールサーバ」「メールアドレス」「パスワード」は、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の「動作環境設定」で指定したものが初期表示されます。

詳細については本紙「3.4.動作環境設定」の「3.4.3.認証機能付きメール」を参照してください。

[詳細設定(D)...]ボタンを押下すると、「認証機能付きメール - 詳細設定」画面が表示されます。

ここでは POP、SMTPそれぞれのポート番号や暗号化の指定を行います。

⑬ Windows イベントログ



チェック結果を Windows イベントログに記録する

データ検査の結果を Windows イベントログに記録します。

ここをチェックすると、検査結果を、Windows イベントログへ通知します。

Windows イベントログへの通知は、1 回の検査実行で 1 回だけ行われ、条件グループごとには通知されません。

チェック結果に問題がない場合は通知しない

ここをチェックすると、状態チェックを実行した結果、問題がなかった場合は Windows イベントログの通知を行いません。

・ソース名

Windows イベントログに表示されるソース名を指定します。

初期状態では「ES/1 NEO FFM DVW」が設定されています。

・イベント ID

イベント ID は固定値が通知されます。

問題があった場合は 100 が、問題が無かった場合は 101 がそれぞれ通知されます。

・イベントレベル

イベントレベルは固定で通知されます。

問題があった場合は警告レベル、問題が無かった場合は情報レベルでそれぞれ通知されます。

[完了]ボタンを押下すると、データ検査 - 状態チェック - 条件グループウィザードが完了し、条件グループが登録されます。



[OK]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック」画面に戻ります。

4.4. 条件グループの編集

「データ検査－状態チェック」画面の「処理選択(S)」から「既存の条件グループを編集する」を選択します。

(1) 条件グループ名一覧(L)

登録されている条件グループが、一覧で表示されます。
編集する条件グループ名を、ここで選択します。

(2) 条件グループ登録内容一覧

「条件グループ名一覧(L)」で選択している条件グループの内容を一覧表示します。

[次へ(N)>]ボタンを押下すると、条件グループウィザードが開始され、「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード(1/4)」画面が表示されます。

「データ検査－状態チェック－条件グループウィザード」の各画面は、選択した条件グループに設定されている内容を初期表示します。各画面の使用方法は、条件グループの新規作成時と同様です。

詳細は前記「4.3. 条件グループ作成」を参照してください。

4.5. 条件グループのコピー

「データ検査－状態チェック」画面の「処理選択(S)」から「既存の条件グループを編集する」を選択します。

データ検査 - 状態チェック

インポートされたフラットファイルが日々正常に更新されているか、欠損データがないか等をチェックします。チェックは、各種チェック条件を定義した「条件グループ」を基に実行されます。ここでは、この「条件グループ」の作成、編集、及び削除を行います。

処理選択(S)

☐ 条件グループを新規作成する
条件グループを新規作成します。作成した条件グループはチェック実行時にすべて使用されます。

☒ 既存の条件グループを編集する
以前作成した条件グループの編集(条件の更新・削除)を行います。

条件グループ名一覧(L)

条件_プロセッサ

コピー(C)... 削除(D)

条件グループ登録内容一覧

項目	設定値
サイト/システム	東京/在庫管理
対象日時	2009年08月01日 00時00分 ~ 2009年08月01日 23時59分
ファイル出力形態	条件グループ毎に出力
1日の区切り	0時
出力先フォルダ	C:\IIM_DATA\CS\Fm\DataCheckLog
更新状態チェック	行う
欠損チェック	行う
重複チェック	行わない
対象資源項目	プロセッサ・メモリ情報 アカウント情報 デバイス情報 ファイルシステム情報

< 戻る(B) 次へ (N)>

「条件グループ名一覧(L)」からコピーする条件グループ名を選択し、[コピー(C)...]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック 条件グループコピー」画面が表示されます。

データ検査 - 状態チェック 条件グループコピー

新しい条件グループの名前を入力してください。

条件グループコピー(C)

コピー元条件グループ名: 条件_プロセッサ

新しい条件グループ名: コピー ~ 条件_プロセッサ

OK キャンセル

「新しい条件グループ名:」欄に、コピー後の条件グループ名を指定し、[OK]ボタンを押下すると、条件グループが複製されます。

4.6. 条件グループの削除

「データ検査 - 状態チェック」画面の「処理選択(S)」から「既存の条件グループを編集する」を選択します。

データ検査 - 状態チェック

インポートされたフラットファイルが日々正常に更新されているか、欠損データがないか等チェックします。チェックは、各種チェック条件を定義した「条件グループ」を基に実行されます。ここでは、この「条件グループ」の作成、編集、及び削除を行います。

処理選択(S)

☐ 条件グループを新規作成する
条件グループを新規作成します。作成した条件グループはチェック実行時にすべて使用されます。

☒ 既存の条件グループを編集する
以前作成した条件グループの編集(条件の更新・削除)を行います。

条件グループ名一覧(L)

条件 プロセッサ

コピー(C)... 削除(D)

条件グループ登録内容一覧

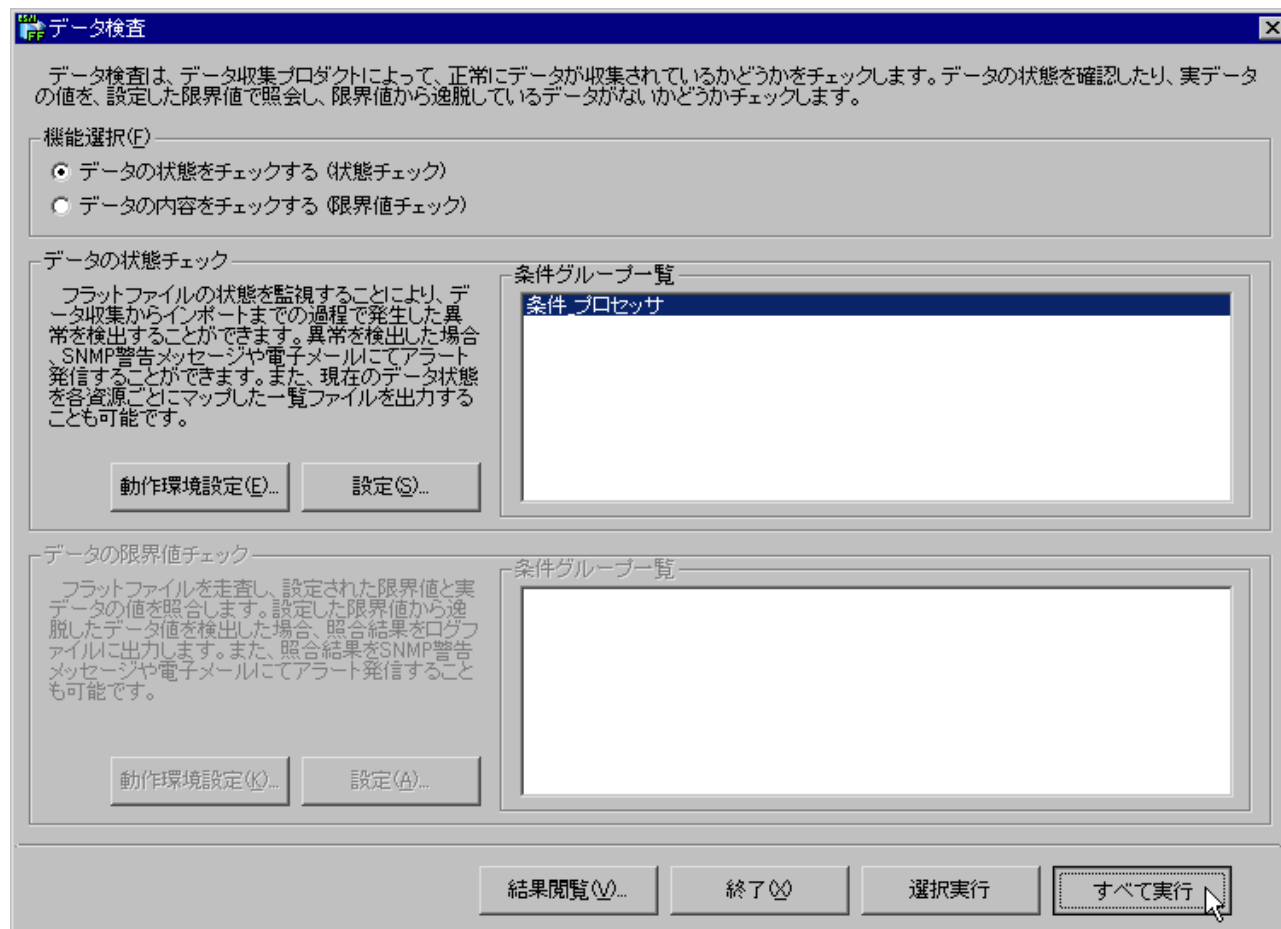
項目	設定値
サイト/システム	東京/在庫管理
対象日時	2009年08月01日 00時00分 ~ 2009年08月01日 23時59分
ファイル出力形態	条件グループ毎に出力
1日の区切り	08時
出力先フォルダ	C:\IIM_DATA\CS\Fm\DataCheckLog
更新状態チェック	行う
欠損チェック	行う
重複チェック	行わない
対象資源項目	プロセッサ・メモリ情報 アカウント情報 デバイス情報 ファイルシステム情報

< 戻る(B) 次へ (N)>

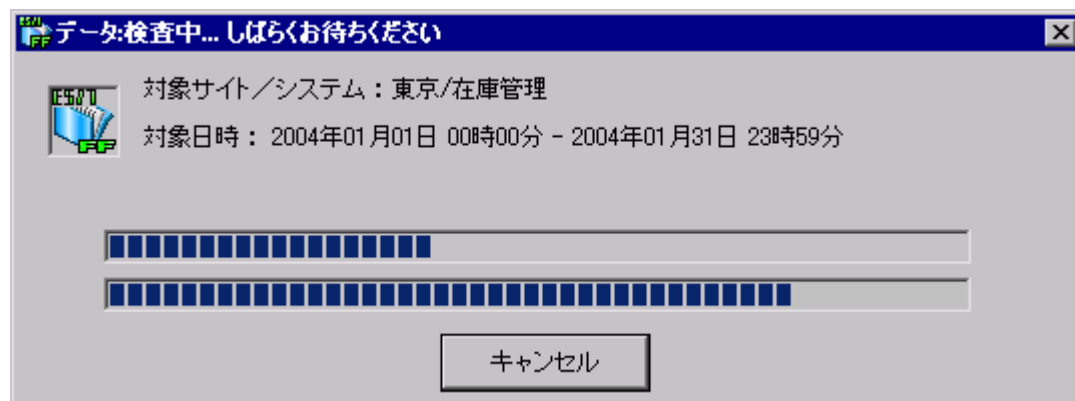
「条件グループ名一覧(L)」から削除する条件グループ名を選択し、[削除(D)]ボタンを押下すると、削除確認メッセージが表示されます。

4.7. データ検査実行

「データ検査」画面で「機能選択(F)」の「データの状態をチェックする(状態チェック)」を選択します。

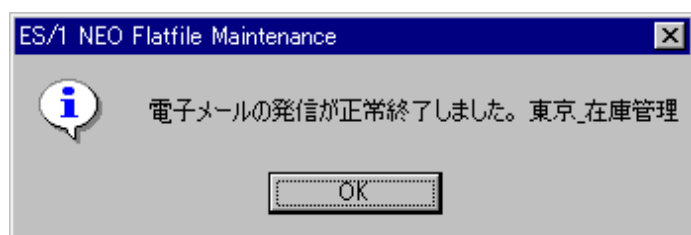


[すべて実行]ボタンを押下すると、「条件グループレビュー」に表示されている、すべての条件グループのデータ検査が開始されます。
[選択実行]ボタンを押下すると、「条件グループレビュー」で反転選択されている条件グループのみ、データ検査を行ないます。
進捗状況はプログレスバーで表示されます。



データの検査実行中に[キャンセル]ボタンを押下すると、データ検査を中断することができます。

データ検査の結果を電子メールで送信する場合、電子メールが正常に発信されると、正常終了のメッセージが表示されます。



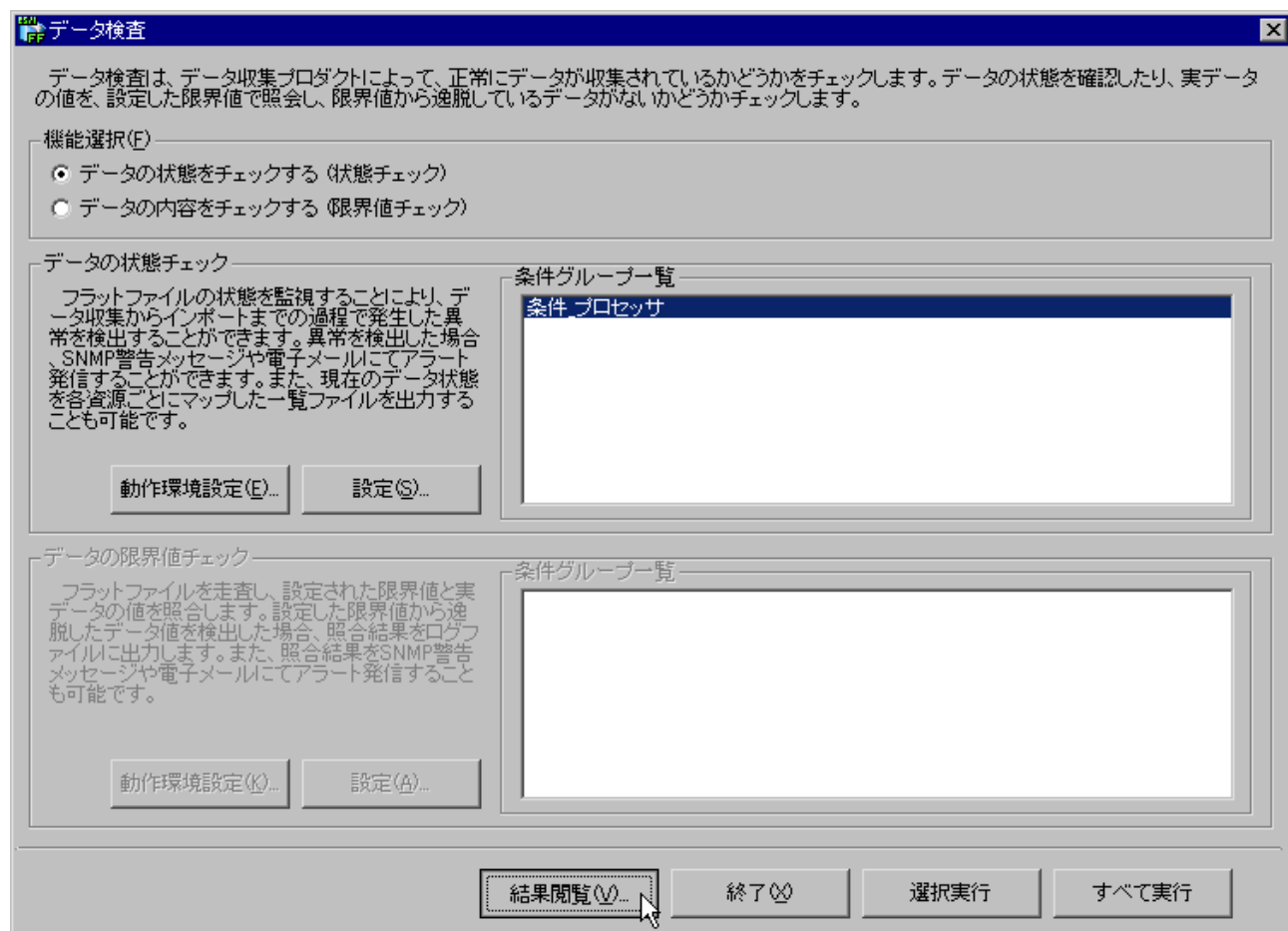
すべてのフラットファイルの検査が終了すると、検査完了のメッセージが表示されます。



4.8. 結果閲覧

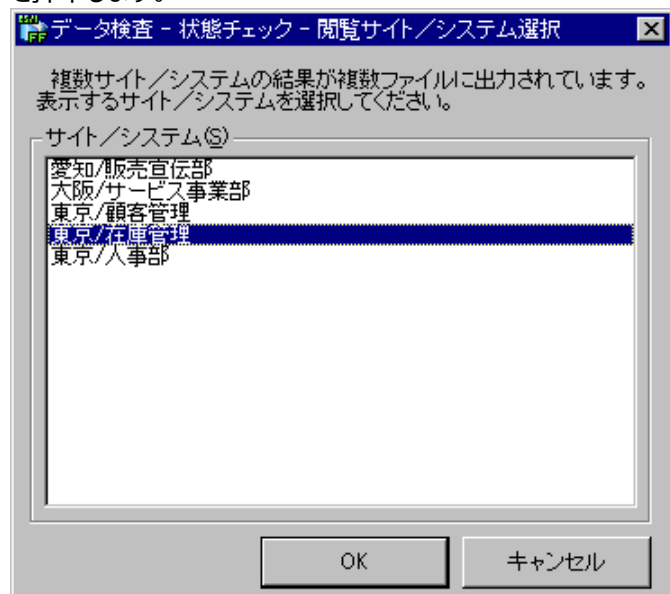
データ検査の結果はテキストファイルで出力されます。

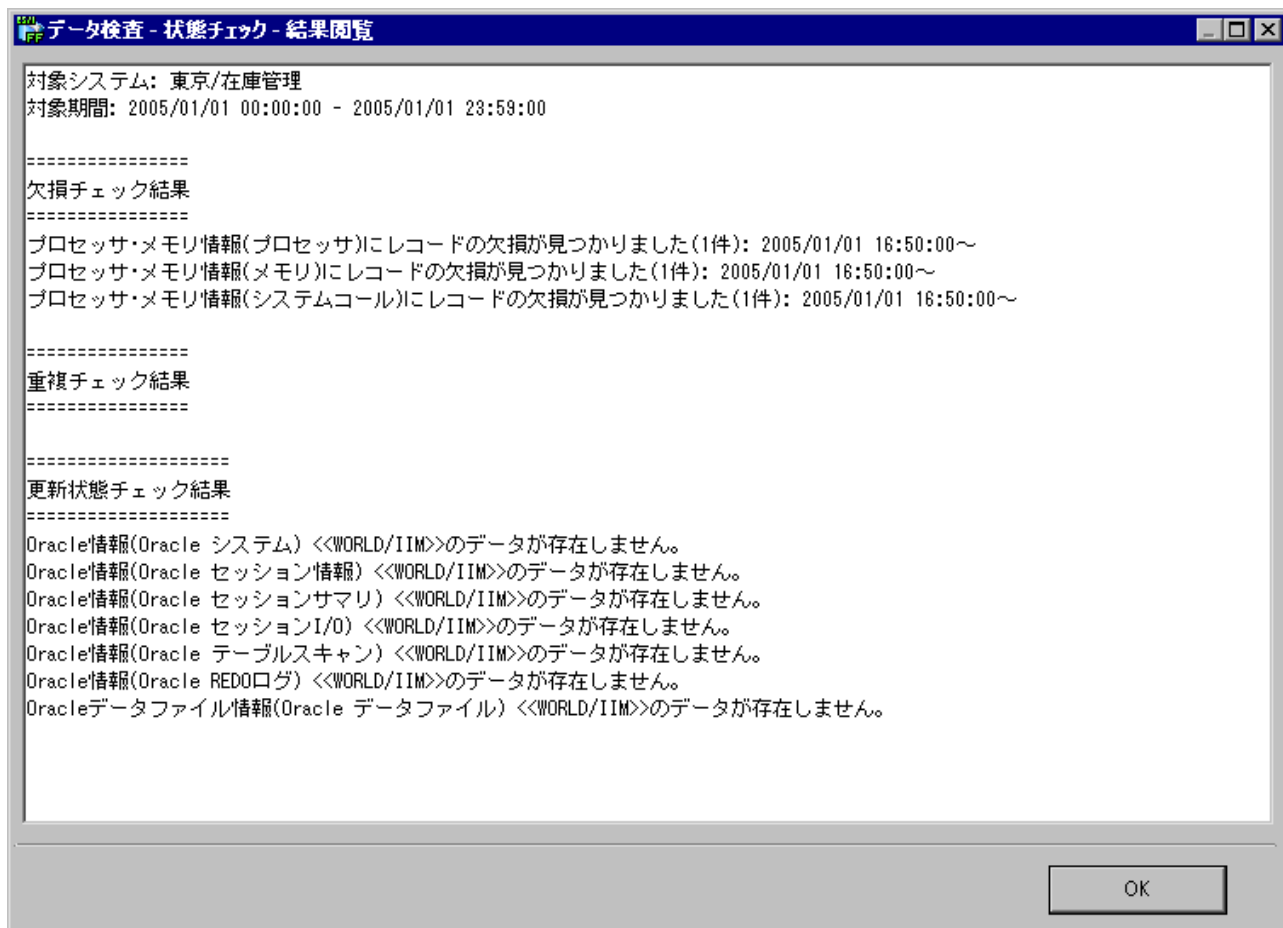
「データ検査」画面にて、「データの状態をチェックする(状態チェック)」を選択し、「データの状態チェック」の「条件グループ一覧」から、結果を閲覧したい条件グループを選択します。



[結果閲覧(V)...]ボタンを押下すると、「データ検査－状態チェック－結果閲覧」画面でチェック結果が出力されます。

複数のサイト／システムを検査対象にしている、かつ、チェック結果を1つのファイルに出力していない場合、「データ検査－状態チェック－閲覧サイト／システム選択」画面が表示されますので、チェック結果を表示させるサイト／システムを選択して[OK]ボタンを押下します。

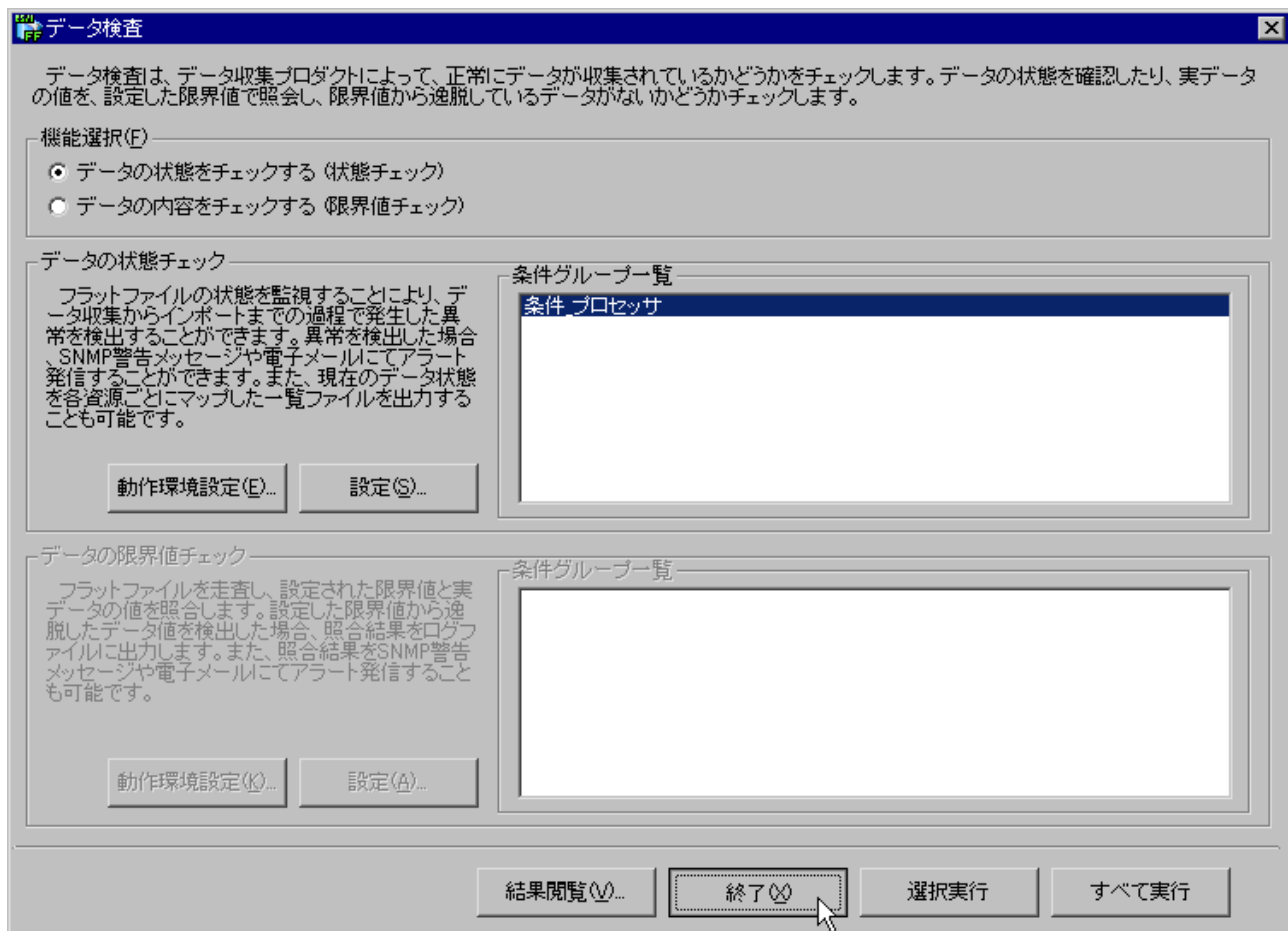




[OK]ボタンを押下すると、「データ検査」画面に戻ります。

4.9. 終了

データ検査を終了するには、「データ検査」画面の[終了(X)]ボタンを押下します。



4.10. 状態チェック対象項目一覧

対象資源項目	レコード番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
プロセッサ・メモリ情報	2100	プロセッサ		○	○	○
	2110	個別プロセッサ		○	○	○
	2120	システムテーブル		○	○	○
	2210	メモリ		○	○	○
	2211	Windows ページプール		○	○	○
	2220	バッファ		○	○	○
	2230	システムコール		○	○	○
	2240	個別メモリ		○	○	○
	2250	ファイル操作		○	○	○
	1210	z/Linux システム資源状況(LPAR)		○	○	○
	1215	z/Linux システム資源状況(CPU)		○	○	○
	1220	z/Linux ユーザ資源状況(CPU)		○	○	○
	1225	z/Linux ユーザ資源状況(CPU ワークフロー)		○	○	○
	1230	z/Linux システム資源状況(ストレージ)		○	○	○
	1235	z/Linux ユーザ資源状況(ストレージ)		○	○	○
	2300	ESX サーバプロセッサ		○	○	○
	2305	ESX サーバメモリ		○	○	○
	2350	ESX VM プロセッサ		—	○	○
	2355	ESX VM メモリ		—	○	○
	2310	ESX3 サーバプロセッサ		○	○	○
	2311	ESX3 サーバメモリ		○	○	○
	2320	ESX3 VM プロセッサ		—	○	○
	2321	ESX3 VM メモリ		—	○	○
	6500	iSeries システム構成		○	○	○
	6501	iSeries メモリ		○	○	○
	6502	iSeries プロセッサ		○	○	○
	6506	iSeries システム		○	○	○
	2360	VMware Datacenter		○	○	○
	2361	VMware リソースプール		—	—	○
	2362	VMware ホスト		○	○	○
	2363	VMware VM		○	○	○
	2364	VMware Datastore		○	○	○
	2365	VMware Datastore HostMount		○	○	○
	2366	VMware Datastore VMMount		○	○	○
	2367	VMware Datastore Extent		○	○	○
	2368	VMware Datastore File		—	○	○
	2369	VMware StoragePod		○	○	○
	2396	VMware GuestDisk		—	—	○
	2397	VMware Folder		—	—	○
	2370	VMware リソースプール CPU		—	—	○
	2371	VMware リソースプール Memory		—	—	○
	2374	VMware リソースプール Sys		—	—	○
	2375	VMware ホスト Cpu		○	○	○
	2376	VMware ホスト ICpu		○	○	○
	2377	VMware ホスト Memory		○	○	○
	2382	VMware ホスト System		○	○	○

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
プロセッサ・メモリ情報	2383	VMware ホスト ISystem		○	○	○
	2384	VMware ホスト ManagementAgent		—	—	—
	2385	VMware VM Cpu		○	○	○
	2386	VMware VM ICpu		○	○	○
	2387	VMware VM Memory		○	○	○
	2392	VMware VM System		○	○	○
	1111	z/VM システム構成		○	○	○
	1120	z/VM システム(0)		○	○	○
	1121	z/VM システム(1)		○	○	○
	1122	z/VM システム(2)		○	○	○
	1130	z/VM 論理プロセッサ		○	○	○
	2393	VMW_CLUSTER		—	—	○
	2394	VMW_CLUSTERCPU		—	—	○
	2395	VMW_CLUSTERMEM		—	—	○
アカウント情報	2500	アカウント(Command & User)		○	○	○
	2510	アカウント(User)		○	○	○
	2520	アカウント(Command)		○	○	○
	6503	iSeries MI ジョブ		○	○	○
	6504	iSeries ジョブサマリ		○	○	○
	1140	z/VM ユーザ資源		○	○	○
	1141	z/VM 全ユーザ資源		○	○	○
デバイス情報	2400	デバイス		○	○	○
	2312	ESX3 サーバディスク		○	○	○
	2314	ESX3 サーバストレージ		○	○	○
	2322	ESX3 VM ディスク		—	○	○
	6505	iSeries ディスク装置		○	○	○
	2372	VMware リソースプール Disk		—	—	○
	2378	VMware ホスト Disk		○	○	○
	2379	VMware ホスト IDisk		○	○	○
	2330	VMware ホスト IDatastore		○	○	○
	2331	VMware ホスト IStorageAdapter		○	○	○
	2332	VMware ホスト IStoragePath		○	○	○
	2388	VMware VM Disk		○	○	○
	2389	VMware VM IDisk		○	○	○
	2333	VMware VM IDatastore		○	○	○
	2334	VMware VM IVirtualDisk		○	○	○
	1131	z/VM 拡張チャネル		○	○	○
ファイルシステム情報	2480	ページファイル		○	○	○
	2490	ファイルスペース(Unix)		—	○	○
	2495	ファイルスペース(Windows)		○	○	○
ネットワーク統計情報	2620	ネットワーク状態(Unix)		○	○	○
	2600	Windows NetBEUI		○	○	○
	2610	Windows TCP/IP		○	○	○
	2212	Windows サーバ		○	○	○
	2313	ESX3 サーバネットワーク		○	○	○
	2323	ESX3 VM ネットワーク		—	○	○
	2373	VMware リソースプール Network		—	—	○
	2380	VMware ホスト Network		○	○	○
	2381	VMware ホスト INetwork		○	○	○

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
ネットワーク統計情報	2390	VMware VM Net		○	○	○
	2391	VMware VM INet		○	○	○
	1133	z/VM 仮想スイッチ		○	○	○
Oracle 情報	5001	Oracle システム	ドメイン名/DB 名	○	○	○
	5002	Oracle セッション情報		○	○	○
	5003	Oracle セッションサマリ		○	○	○
	5004	Oracle セッション I/O		○	○	○
	5005	Oracle テーブルスキャン		○	○	○
	5006	Oracle REDO ログ		○	○	○
	5007	Oracle セグメント情報		○	○	○
	5010	Oracle テーブル		○	○	○
	5011	Oracle ライブラリキャッシュ		○	○	○
	5012	Oracle ディクショナリキャッシュ		○	○	○
Oracle 情報	5013	Oracle 共有メモリ	ドメイン名/DB 名	○	○	○
	5014	Oracle 共有サーバメッセージキュー		○	○	○
	5015	Oracle ラッチ		○	○	○
	5016	Oracle 待機イベント		○	○	○
	5017	Oracle セッション待機イベント		○	○	○
	5018	Oracle ロック※		—	—	—
Oracle データファイル情報	5000	Oracle データファイル		○	○	○
	5009	Oracle テーブルスペース(csqlplus)		○	○	○
	5008	Oracle テーブルスペース		—	○	○
Symfoware 情報	5100	Symfoware テンポラリログ	RDB システム名	○	○	○
	5101	Symfoware バッファ		○	○	○
	5102	Symfoware データベーススペース		○	○	○
	5103	Symfoware 応用プログラム		—	○	○

※現バージョンでは、「Oracle ロック」のデータは取り扱えません。

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
SQL Server 200X 情報	5240	SQL Server 200X アクセスメソッド	インスタンス名	○	○	○
	5241	SQL Server 200X バッファ		○	○	○
	5242	SQL Server 200X キャッシュ		○	○	○
	5243	SQL Server 200X データベース		○	○	○
	5244	SQL Server 200X 一般		○	○	○
	5245	SQL Server 200X ラッチ		○	○	○
	5246	SQL Server 200X メモリ		○	○	○
	5247	SQL Server 200X SQL		○	○	○
	5252	SQL Server 200X トランザクション情報		○	○	○
	5253	SQL Server 200X 待機情報		○	○	○
SQL Server 200X 情報	5248	SQL Server 200X バッファパーティション		○	○	○
	5249	SQL Server 200X ロック		○	○	○
SAP ERP 情報	7300	SAP ERP トランザクション情報	インスタンス ID	-	-	○
	7301	SAP ERP Buffer NTAB		-	○	○
	7302	SAP ERP Buffer Prog./CUA/Scr./Cal.		-	○	○
	7303	SAP ERP Buffer Tables/Export/Import		-	○	○
	7304	SAP ERP Memory		-	○	○
	7305	SAP ERP Cursor Cache/Table Buffer		-	○	○
	7306	SAP ERP Oracle テーブルスペース情報		-	○	○
	7307	SAP ERP ショートダンプ情報		-	-	○
	7308	SAP ERP Oracle 危険オブジェクト情報		-	○	○
	7309	SAP ERP SM20 情報		-	○	○
DB2 情報	6000	DB2 データベース	ノード名/ データベース別名	○	○	○
	6001	DB2 データベース(Optional)		○	○	○
	6010	DB2 バッファプール		-	○	○
	6020	DB2 アプリケーション		-	○	○
	6021	DB2 アプリケーション(Optional)		-	○	○
	6030	DB2 テーブルスペース		-	○	○
	6031	DB2 テーブルスペース・ノード		-	○	○
	6040	DB2 テーブル		-	○	○
	6100	DB2 データベースマネージャ		○	○	○
パケットモニタ取得情報	4000	Capture		-	○	○
	4001	TCP Capture 情報		-	-	○
	4100	Network-I/O		-	○	○
	4400	TCP セッション		-	○	○
	4401	TCP レスポンス時間分布		-	○	○
	4402	TCP PtoP 情報		-	○	○
MIB ノード情報	3001	MIB2 インターフェイス		○	○	○
	3002	MIB2 IP		○	○	○
	3003	MIB2 ICMP		○	○	○
	3004	MIB2 TCP		○	○	○
	3005	MIB2 UDP		○	○	○
HTTP ログ情報	4500	Http ログ サマリ		-	○	○
	4505	Http ログ 詳細		-	○	○
	4510	Http ログ ページ 詳細		-	-	○

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
HTTP サーバ情報	5400	IIS - ASP		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	5401	IIS - FTP		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	5402	IIS - Global		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	5403	IIS - Web		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Java 情報	4600	WebLogic:EntityEJB 情報	ドメイン名/サーバ名	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4601	WebLogic:実行キュー情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4602	WebLogic:JDBC 接続プール情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4603	WebLogic:JRockit 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4604	WebLogic:JVM 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4605	WebLogic:Server 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4606	WebLogic:StatefulEJB 情報	ドメイン名/サーバ名	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4607	WebLogic:StatelessEJB 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4608	WebLogic:Web アプリケーションコンポーネント情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4609	WebLogic:サーブレット情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4610	WebLogic:MessageDrivenEJB 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4611	WebLogic:JDBCDataSource 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4612	WebLogic:ThreadPool 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4613	WebLogic:WorkManager 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4620	Interstage:EntityEJB 情報	ワークユニット名	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4621	Interstage:JDBCPool 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4622	Interstage:JVM 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4623	Interstage:MessageDrivenEJB 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4624	Interstage:Servlet 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4625	Interstage:StatefulSessionEJB 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4626	Interstage:StatelessSessionEJB 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4627	Interstage:EntityEJB メソッド情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4628	Interstage:MessageDrivenEJB メソッド情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4629	Interstage:StatefulSessionEJB メソッド情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4630	Interstage:StatelessSessionEJB メソッド情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4640	WebSphere:EntityBean 情報	セル名/ノード名 /プロセス名	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4641	WebSphere:JDBCProvider 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4642	WebSphere:JVM 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4643	WebSphere:MessageDrivenBean 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4644	WebSphere:Servlet 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4645	WebSphere:StatefulSessionBean 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4646	WebSphere:StatelessSessionBean 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4647	WebSphere:ThreadPool 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4648	WebSphere:JDBCDataSource 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4649	WebSphere:SessionManager 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4650	WebSphere:JSP 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Java 情報	4660	OracleAS:EntityBean 情報	Application Server インスタンス名/ OC4J インスタンス名	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4661	OracleAS:JDBCDataSource 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4662	OracleAS:JVM 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4663	OracleAS:MessageDrivenBean 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4664	OracleAS:Servlet 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4665	OracleAS:StatefulSessionBean 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4666	OracleAS:StatelessSessionBean 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	4667	OracleAS:ThreadPool 情報		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
	4668	OracleAS:EntityBean メソッド情報		○	○	○
	4669	OracleAS:MessageDrivenBean メソッド情報		○	○	○
	4670	OracleAS:StatefulSessionBean メソッド情報		○	○	○
	4671	OracleAS:StatelessSessionBean メソッド情報		○	○	○
	4700	JBoss:JVM 情報		○	○	○
	4701	JBoss:JDBCDataSource 情報		○	○	○
	4702	JBoss:Servlet 情報		○	○	○
	4703	JBoss:ThreadPool 情報		○	○	○
	4704	JBoss:StatefulSessionBean 情報		○	○	○
	4705	JBoss:StatefulSessionBean メソッド情報		○	○	○
	4706	JBoss:StatelessSessionBean 情報		○	○	○
	4707	JBoss:StatelessSessionBean メソッド情報		○	○	○
MySQL 情報	5500	MySQL 接続		○	○	○
	5501	MySQL I/O		○	○	○
	5502	MySQL メモリ		○	○	○
	5503	MySQL System		○	○	○
	5504	MySQL Innodb		○	○	○
	5505	MySQL Command		○	○	○
	5506	MySQL AdminCommand		○	○	○
	5510	MySQL Variables		○	○	○
	5511	MySQL Innodb Variables		○	○	○
	5515	MySQL テーブル情報		○	○	○
Terminal Service 情報	5300	Windows Terminal Service		○	○	○
Hyper-V 情報	2800	Hyper-V Host		○	○	○
	2801	Hyper-V ChildPartition		—	—	○
	2802	Hyper-V Virtual Hard Disk		—	—	○
	2803	Hyper-V Hypervisor		○	○	○
	2804	Hyper-V Hypervisor Root Partition		○	○	○
	2805	Hyper-V Hypervisor Partition		—	—	○
	2806	Hyper-V Hypervisor Logical Processor		○	○	○
	2807	Hyper-V Hypervisor Root Virtual Processor		○	○	○
	2808	Hyper-V Hypervisor Virtual Processor		—	—	○
	2809	Hyper-V ParentPartition Memory		○	○	○
	2810	Hyper-V Dynamic Memory Balancer		○	○	○
	2811	Hyper-V Dynamic Memory VM		—	—	○
	2812	Hyper-V VM Vid Numa Node		—	—	○
	2813	Hyper-V VM Vid Partition		—	—	○
	2814	Hyper-V ParentPartition PhysicalDisk		○	○	○
	2815	Hyper-V ParentPartition LogicalDisk		○	○	○
Hyper-V 情報	2816	Hyper-V Virtual IDE Controller		—	—	○
	2817	Hyper-V Virtual Storage Device		—	—	○
	2818	Hyper-V Virtual Machine Bus		○	○	○
	2819	Hyper-V ParentPartition Network Interface		○	○	○
	2820	Hyper-V Virtual Switch		—	—	○
	2821	Hyper-V Virtual Network Adapter		—	—	○
	2822	Hyper-V Legacy Network Adapter		—	—	○
	2823	Hyper-V Virtual Switch Port		—	—	○
	2824	Hyper-V Task Manager Detail		○	○	○

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
Virtage 情報	2900	モニター情報		○	○	○
	2901	HVM システム情報		○	○	○
	2902	LPAR 構成情報		—	—	○
	2903	HVM のリソース使用状況(CPU)		○	○	○
	2904	HVM のリソース使用状況(MEM)		○	○	○
	2905	HVM のリソース使用状況(NIC)		○	○	○
	2906	HVM のリソース使用状況(HBA)		○	○	○
	2910	HVM の CPU 使用状況(SYS1)		○	○	○
	2911	HVM の CPU 使用状況(SYS2)		○	○	○
	2912	HVM の CPU 使用状況(SHR_LPAR)		○	○	○
	2913	HVM の CPU 使用状況(DED_LPAR)		○	○	○
	2914	HVM のメモリ使用状況(SYS)		○	○	○
	2915	HVM のメモリ使用状況(LPAR)		○	○	○
	2920	LPAR の CPU 使用状況		—	—	○
	2921	物理層のリソース使用状況(CPU)		○	○	○
	2922	物理層のリソース使用状況(NIC)		○	○	○
	2923	物理層のリソース使用状況(HBA)		—	—	○
	2924	論理層のリソース使用状況(CPU)		—	—	○
	2925	論理層のリソース使用状況(NIC)		—	—	○
Virtage 情報	2926	論理層のリソース使用状況(HBA)		—	—	○
	2927	物理層の CPU 使用状況(詳細)		○	○	○
	2928	論理層の CPU 使用状況(詳細)		—	—	○
	2930	プロセッサグループの CPU 使用状況		—	—	○
	2931	プロセッサグループ毎の物理層の CPU 使用状況		—	—	○
	2932	プロセッサグループ毎の論理層の CPU 使用状況		—	—	○
KVM 情報	2700	KVM Host		○	○	○
	2701	KVM Host Interface		○	○	○
	2702	KVM Host Network		○	○	○
	2703	KVM Pool		○	○	○
	2704	KVM Pool Volume		○	○	○
	2705	KVM Domain		—	—	○
	2706	KVM Domain ICPU		—	—	○
	2707	KVM Domain IVCPU		—	—	○
	2708	KVM Domain Interface		—	—	○
	2709	KVM Domain Device		—	—	○
NetApp 情報	3700	NetApp cDOT クラスタ構成情報		○	○	○
	3701	NetApp cDOT ノード構成情報		○	○	○
	3702	NetApp cDOT Vserver 構成情報		○	○	○
	3703	NetApp cDOT アグリゲート構成情報		○	○	○
	3704	NetApp cDOT ボリューム構成情報		○	○	○
	3711	NetApp cDOT System 性能情報		○	○	○
	3712	NetApp cDOT アグリゲート性能情報		○	○	○
	3713	NetApp cDOT ボリューム性能情報		○	○	○
	3714	NetApp cDOT lun 性能情報		—	○	—
NetApp 情報	3715	NetApp cDOT Disk 性能情報		○	○	○
	3716	NetApp cDOT cifs 性能情報		—	○	—
	3717	NetApp cDOT nfsv3 性能情報		—	○	—
	3718	NetApp cDOT nvsv4 性能情報		—	○	—

対象資源項目	レコード 番号	レコードの説明	検査単位	欠損 チェック	更新 チェック	重複 チェック
	3719	NetApp cDOT nvsv41 性能情報		—	○	—
	3720	NetApp cDOT processor 性能情報		○	○	○
	3721	NetApp cDOT processor node 性能情報		○	○	○
	3722	NetApp cDOT waf1 性能情報		○	○	○
AWS 情報	7000	AWS Bill		—	○	○
	7001	AWS Bill Item		—	○	○
	7002	AWS Bill Detail		—	○	○
	7003	AWS Bill Detail Item		—	○	○
	7004	AWS FxRate 情報		—	○	○
	7005	AWS VPC 構成情報		—	○	○
	7006	AWS EC2 構成情報		—	○	○
	7007	AWS EBS 構成情報		—	○	○
	7008	AWS S3 構成情報		—	○	○
	7009	AWS RDS 構成情報		—	○	○
	7030	AWS EC2 Perf		—	○	○
	7031	AWS EC2 Linux Perf		—	○	○
	7032	AWS EC2 Windows Perf		—	○	○
	7033	AWS EBS Perf		—	○	○
	7034	AWS RDS Perf		—	○	○
	7035	AWS S3 Perf		—	○	○
CS-CONNECT 情報	※	※		—	○	○

※Recdef99.txt に書いたレコード番号とレコードの説明文がそのまま使用されます。

第5章 データ検査 – 限界値チェック

データ検査 – 限界値チェックは、ES/1 NEO CS シリーズにてインポートされたフラットファイルを元に、管理対象サーバが日々正常に稼働していることを確認します。

各資源毎に限界値を設定し、その設定値に基づいてチェックを行い、結果をログファイルに出力します。また、結果を電子メールやSNMP 警告メッセージで送信します。

5.1. 機能概要

データ検査 – 限界値チェックは ES/1 NEO CS シリーズに取り込まれたフラットファイルを、任意の限界値を元にチェックし、結果をログファイルや電子メール、SNMP 警告メッセージに出力します。

これにより、期待するパフォーマンスを実現していない資源を検出することができ、また資源毎の負荷の高い(低い)時間帯を検出することもできます。

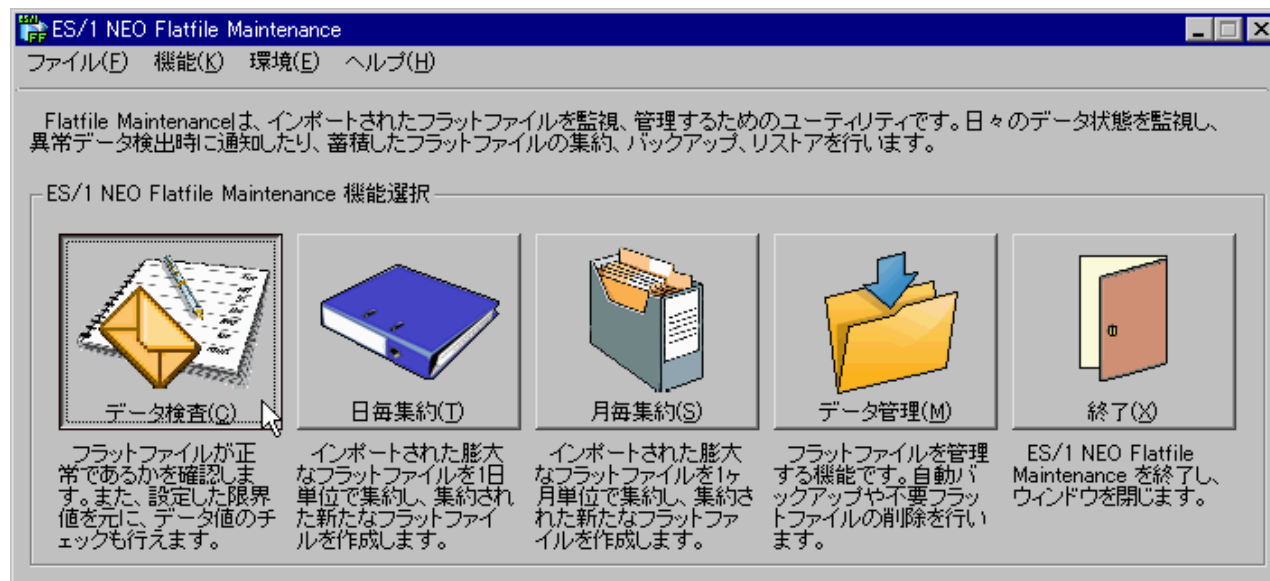
限界値チェックは、「条件グループ」を基に実行されます。「条件グループ」には、フラットファイルのチェック方法や条件式などの定義が含まれています。

検査に使用できる検査対象項目は、あらかじめ標準定義されているものか、必要に応じて追加定義したユーザ定義検査対象項目が使用できます(ユーザ定義検査対象項目の追加方法については、「第 12 章. 添付資料 A. 限界値チェック: ユーザ定義検査項目の追加方法」を参照してください)。

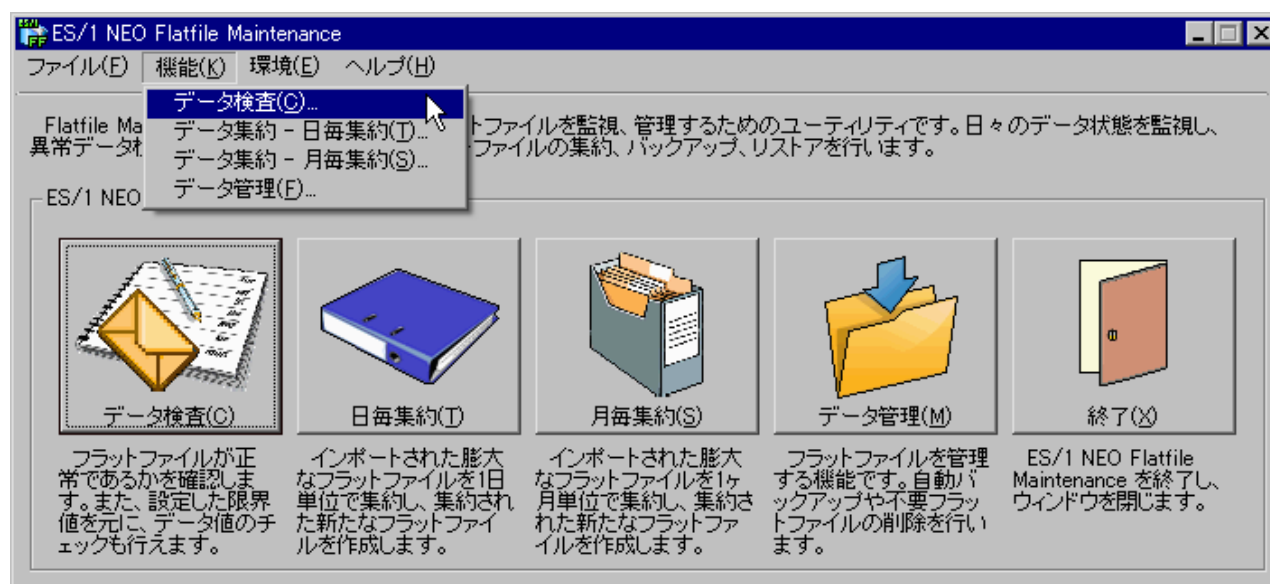
限界値チェックの対象となるフラットファイルは、ES/1 NEO CS シリーズ、または ES/1 NEO Flatfile Maintenance にてインポート処理が行われている必要があります。

5.2. 起動方法

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面を表示します。



ここで[データ検査(C)]ボタンを押下、または「機能(K)」メニューの「データ検査(C)...」を選択することにより、データ検査が起動します。



「データ検査」画面の「機能選択(F)」から、「データの内容をチェックする(限界値チェック)」を選択します。



(1)機能選択(F)

「データの状態をチェックする(状態チェック)」か、「データの内容をチェックする(限界値チェック)」を選択します。ここでは「データの内容をチェックする(限界値チェック)」を選択します。

(2)データの限界値チェック

「データの内容をチェックする(限界値チェック)」を選択した場合、アクティブに表示されます。

(3)[動作環境設定(K)...]ボタン

「Flatfile Maintenance データ管理－限界値チェック」を実行する際のチェックオプションや、条件グループ作成ウィザードの初期設定を行います。

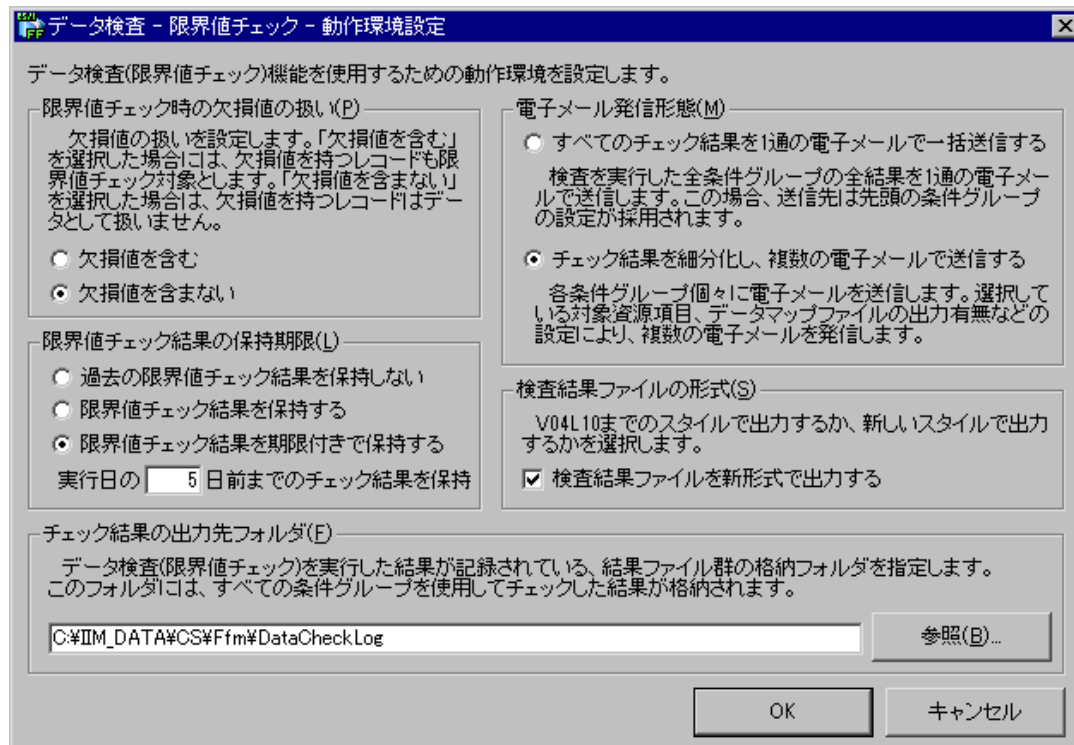
「データの限界値チェック」の中の[動作環境設定(K)...]ボタンを押下します。

(4)[設定(A)...]ボタン

限界値チェックを実行する際に使用する、条件グループの作成、編集、および削除を行います。

5.3. 動作環境設定

ここでは Flatfile Maintenance データ検査－限界値チェックの環境設定について記述します。
導入直後、各設定は初期設定となっています。



(1) 限界値チェック時の欠損値の扱い(P)

① 欠損値を含む

限界値チェックの際に、フラットファイルに存在する欠損値を持つデータをチェック対象とします。

② 欠損値を含まない

限界値チェックの際に、フラットファイルに存在する欠損値を持つデータを無視します。

初期値は「欠損値を含まない」です。

(2) 限界値チェックログの保持期限(L)

① 過去の限界値チェック結果を保持しない

限界値チェックログを保持しません。

限界値チェックを行う際に、過去の限界値チェックログを破棄します。

② 限界値チェック結果を保持する

限界値チェックログを保持します。本項目を選択した場合、限界値チェックログは破棄されず、選択後の実行以降のチェックログが保持され続けます。

③ 限界値チェック結果を期限付きで保持する

限界値チェックログを期限付きで保持します。本項目を選択した場合、実行日の何日前までのチェックログを保持するか指定する必要があります。

初期値は「限界値チェック結果を期限付きで保持する（実行日の 5 日前まで）」です。

(3)電子メール発信形態(M)

検査結果を電子メールで発信する場合に、その形態を選択します。

①すべてのチェック結果を 1 通の電子メールで一括送信する

検査を実行した全条件グループの全結果を 1 通の電子メールで送信します。

②チェック結果を細分化し、複数の電子メールで送信する

検査を実行した条件グループ、および対象資源毎に複数の電子メールを送信します。

初期値は「チェック結果を細分化し、複数の電子メールで送信する」です。

(4)検査結果ファイルの形式(S)

検査結果ファイルのスタイルを選択します。

「検査結果ファイルを新形式で出力する」をチェックすると、V04L11R1 からの新形式で出力されます。

新規インストール時の初期値は V04L11R1 からの新形式スタイルとなります。

バージョンアップ時の初期値は V04L10R1 までの旧形式スタイルとなります。

(5)チェック結果の出力先フォルダ(F)

限界値チェックの結果を出力するフォルダを指定します。

結果ファイルには、定義されている条件グループすべての検査結果が格納されます。例えば、条件グループが 3 つ定義されている場合は、1 つの結果ファイルに 3 条件グループ分の検査結果が記述されています。

「データ検査－限界値チェック－動作環境設定」画面にて[OK]ボタンを押下すると、設定が保存されます。

5.4. 条件グループ、条件式の作成

「限界値チェック機能」を実行するためには、条件グループを作成する必要があります。
「データ検査」画面で「データの内容をチェックする(限界値チェック)」を選択し、[設定(A)...]ボタンを押下します。

5.4.1. データ検査 – 限界値チェック

条件グループの新規作成、または既存の条件グループの編集を選択できます。

- (1)条件グループを新規作成する
条件グループを新規に作成します。
- (2)既存の条件グループを編集する
すでに作成済の条件グループに対し、変更を行います。
(詳細は、後述の「5.5. 条件グループの編集」を参照してください)
- (3)条件グループ名一覧(L)
登録された条件グループ名が一覧表示されます。
- (4)状態変化確認(E)...
「データ検査 – 限界値チェック – 状態変化確認」画面が表示されます。
- (5)コピー(C)...
選択中の条件グループをコピーします。
(詳しくは後述の「5.6. 条件グループのコピー」を参照してください)

(6)削除(D)

選択した条件グループを削除します。

(詳しくは後述の「5.7. 条件グループの削除」を参照してください)

(7)条件グループ登録内容一覧(R)

選択した条件グループに紐づく条件式を一覧表示します。

(8)[次へ (N)>]ボタン

「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(1/4)」を表示します。

(9)[< 戻る(B)]ボタン

「データ検査」画面に戻ります。

5.4.2. データ検査 – 限界値チェック条件グループウィザード(1/4)

条件グループに登録するサイト／システムを選択します。複数選択も可能です。
また、条件グループ毎に限界値チェックの対象とするデータの期間を設定します。

(1) 条件グループ名(G)

条件グループ名を入力します。
条件グループ名は全体で一意である必要があります。

(2) サイト／システム選択(S)

限界値チェックを行うサイト／システムを選択します。ここには、インポートされているフラットファイルのサイト／システムがツリーで一覧表示されます。
また、利用可能なシステムフィルタープロファイルの一覧がコンボボックスに表示されます。

① <対象サイト／システムを直接選択する>

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>を選択した場合は、対象とするサイト／システムを直接ツリーから選択します。

② システムフィルタープロファイル選択

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>以外を選択した場合は、対象サイト／システムの指定にシステムフィルタープロファイルを使用します。

[設定(E)...]ボタンを押下すると、「システムフィルタープロファイル一覧」画面が表示され、システムフィルタープロファイルの追加や編集を行う事が出来ます。

また、システムフィルタープロファイルを選択した場合は、そのシステムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムがツリーにプレビュー選択表示されます。

ここでの設定変更は出来ませんので、システムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムを変更する場合は、[設定(E)...]ボタンを押下して変更を行ってください。

システムフィルタープロファイルについての詳細は、別紙マニュアル「プロファイル機能 使用者の手引き」を参照してください。

③[全選択(A)]ボタン

サイト／システム選択ツリービューに表示されたすべてのサイト／システムを選択します。

④[全解除(R)]ボタン

サイト／システム選択ツリービューに表示されたすべてのサイト／システムの選択を解除します。

(3)対象期間(D)

限界値チェックを行う対象期間を選択します。

①実行日の前日データのみを対象とする

実行日の前日のデータを限界値チェックの対象とします。
バッチで運用を行う場合は、こちらを指定してください。

②対象期間指定

限界値チェックを行う対象期間を指定します。

開始日(F)

「対象期間指定」を選択した場合に入力可能となります。
限界値チェックの対象とするデータの開始日を指定します。

開始時刻(Y)

「対象期間指定」を選択した場合に入力可能となります。
限界値チェックの対象とするデータの開始時刻を指定します。

終了日(E)

「対象期間指定」を選択した場合に入力可能となります。
限界値チェックの対象とするデータの終了日を指定します。

終了時刻(T)

「対象期間指定」を選択した場合に入力可能となります。
限界値チェックの対象とするデータの終了時刻を指定します。

注意！

Flatfile Maintenance 限界値チェックは実行日や未来の日付は検査の対象外としています。GUI上で当日や未来日付を指定しても、当日以降のデータは読み込まれていないものとして扱われます。

(4)[< 戻る(B)]ボタン

画面を終了し、「データ検査－限界値チェック」に戻ります。

(5)[次へ(N)>]ボタン

「データ検査－限界値チェック条件グループウィザード(2/4)」を表示します。

ex.

「対象期間指定」を指定した場合の、対象となるデータの範囲を説明します。

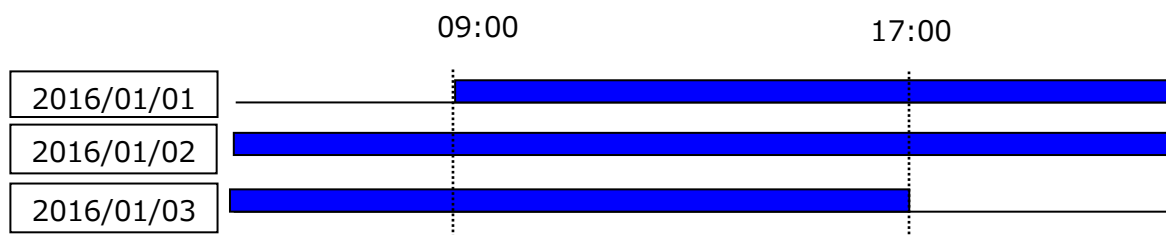
開始日 : 2016/01/01

開始時刻 : 09:00

終了日 : 2016/01/03

終了時刻 : 17:00

とした場合、対象データは以下の図のようになります。



5.4.3. データ検査 – 限界値チェック – 条件グループウィザード(2/4)

ここでは、対象期間内の任意の時間帯や曜日を除外したり、1 日の区切り時間を変更し、任意の時刻を始まりとすることができます。

また、チェック結果ファイルのファイル名書式を指定する事もできます。

データ検査 – 限界値チェック – 条件グループウィザード(2/4)

限界値チェック対象とする時間帯、及び曜日を指定します。[詳細指定]ボタンを押下すると、細かな時間帯設定を行うことができます。1日の始まりを0時以外とすることも可能です。

チェック結果ファイル群のファイル名書式——
ファイル名に日付やサイト/システム名を自動付加することができます。これらが付加する場合は、[書式]ボタンを押下し、ファイル名のパターンを選択してください。
1ファイル出力の場合 : DcChk日付.log
グループごとの場合 : DcChk日付_条件グループ名.log

書式(P)...

対象時間帯
任意の時刻のみを対象としたり、除外したりすることができます。

00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

☒ 対象
☐ 除外

全選択(A)
全解除(R)
詳細指定(D)...

1日の区切り(F)
通常、1日の区切り(1日の始まり)は「0時」ですが、任意の時刻を区切りとすることができます。
区切り時刻 00 時

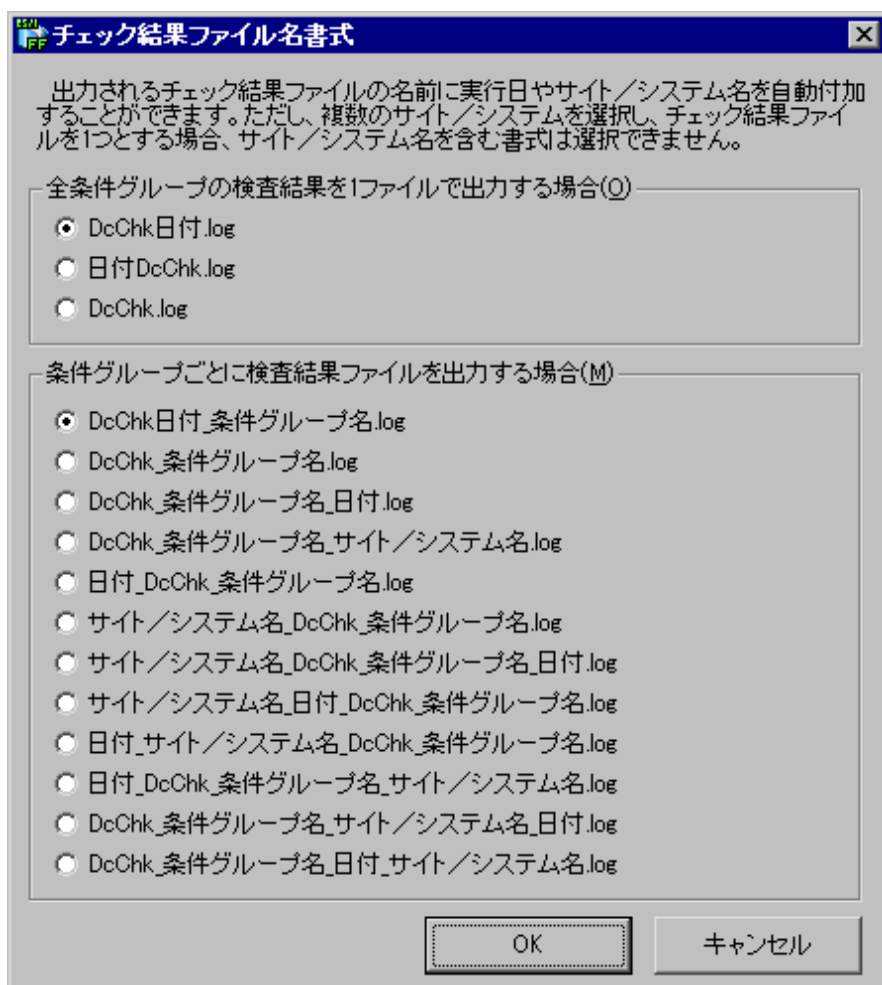
対象曜日指定(W)
限界値チェック対象とするデータの曜日を指定します。対象とする曜日をチェックし、除外する曜日のチェックをはずします。
☒ 日曜日 ☒ 月曜日 ☒ 火曜日 ☒ 水曜日 ☒ 木曜日 ☒ 金曜日 ☒ 土曜日

< 戻る(B) 次へ (N) >

(1) チェック結果ファイル群のファイル名書式

チェック結果を 1 ファイルで出力する場合、条件グループ毎にチェック結果を出力する場合、それぞれでファイル名の書式を指定する事ができます。

[書式(P)...]ボタンを押下すると、「チェック結果ファイル名」画面が表示されます。



「条件グループ毎に検査結果ファイルを出力する場合」欄の指定については、後続の「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(4/4)」画面にて、「条件グループ毎の限界値チェックログをファイル出力する」が選択されている場合に適用されます。

(2)対象時間帯

対象とする時間帯を 1 時間単位で指定することができます。マウスクリックにより、対象とする時刻を緑色とし、除外する時刻を白色にします。また、[Shift] キーを使用すると、特定範囲を一括反転することができます。

[全選択(A)]ボタンを押下すると、全時間帯を対象とします。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、全時間帯を除外します。

収集データのインターバルに合わせ、詳細指定をすることも可能です。[詳細指定(D)...]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック－対象時間帯詳細指定」が表示されます。

(3)1 日の区切り(F)

1 日の始まりを 0 時ではなく、任意の時刻としたい場合、その区切り時刻を指定します。
区切り時間前のデータは、前日のプラス 24 時間したデータとして扱われます。

収集インターバルが 15 分の場合の指定例

[例 1]

開始日時	2016 年 1 月 1 日 0:00
終了日時	2016 年 1 月 1 日 23:45
1 日の区切り	00 時

2016 年 1 月 1 日 0:00～23:45 の 24 時間となります。

[例 2]

開始日時	2016 年 1 月 1 日 8:00
終了日時	2016 年 1 月 2 日 7:45
1 日の区切り	00 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 2 日 7:45 の 24 時間となります。

[例 3]

開始日時	2016 年 1 月 1 日 8:00
終了日時	2016 年 1 月 2 日 7:45
1 日の区切り	08 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 1 日 31:45 の 24 時間となります。

[例 4]

開始日時	2016 年 1 月 1 日 8:00
終了日時	2016 年 1 月 1 日 31:45
1 日の区切り	08 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 1 日 31:45 の 24 時間となります。

この例は pdbmagic で TIMEBASE を 8 時としている場合です。

メモ！

pdbmagic で TIMEBASE を指定しており、その指定に従って対象データを指定したい場合は、ここで必ず TIMEBASE と同じ時間を指定してください。

(4)対象曜日指定(W)

対象とする曜日を指定します。この指定を使用することにより、平日のみのフラットファイルをチェックしたり、休日のみのフラットファイルをチェックしたりすることが可能です。

(5)[< 戻る(B)]ボタン

画面を終了し、「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(1/4)」に戻ります。

(6)[次へ (N)>]ボタン

「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(3/4)」を表示します。

5.4.4. データ検査 - 限界値チェック - 対象時間帯詳細指定

ここでは、インターバル単位の選択および、対象期間内の任意の時間帯や詳細時間帯の選択、除外をすることが可能です。

データ検査 - 限界値チェック - 対象時間帯詳細指定

限界値チェック対象とする時間帯を任意のインターバル単位で指定します。任意の時刻のみを対象としたり、除外したりすることができます。

対象時間帯(H)

インターバル単位: 2 分

分	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
時	00	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58
01	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
02	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
03	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
04	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
05	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
06	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
07	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
08	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
09	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
10	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
11	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
12	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
13	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
14	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
15	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
16	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
17	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
18	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
19	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
20	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
21	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
22	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
23	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	

☒ 対象 ☐ 除外 ☐ 一部対象

全選択(A) 全解除(R)

詳細指定解除(D) キャンセル 設定

選択可能なインターバルは以下の通りです。

2 分、3 分、5 分、10 分、15 分、20 分、30 分

「インターバル単位」を選択し、マウスクリックにより、対象とする時刻を緑色に、除外する時刻を白色にします。[Shift] キーを使用すると、特定範囲を一括反転することができます。「時」のフィールドをクリックすると、その時間台のすべての分を一括して指定することができます。「分」のフィールドをクリックすると、すべての時刻の分を一括して指定することができます。黄色で表示されている部分は、対象と除外が混在していることを示します。

[全選択(A)]ボタンを押下すると、すべての時刻を対象とします。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、すべての時刻を除外します。

〔詳細指定解除(D)〕 ボタンを押下すると、設定していた詳細設定をすべて破棄し、1 時間インターバルの指定となります。詳細指定にて「対象」と「除外」が混在していた時間帯（黄色表示の時間）は「対象」に変更されます。
〔設定〕ボタンを押下することにより、内容を有効にして、画面を終了します。
また、〔キャンセル〕ボタンを押下することにより、内容を破棄して、画面を終了します。

メモ！

例えば、15 分インターバルでデータを収集している時、ここで「30 分」を選択しても、データが集約されて出力されることはありません。

5.4.5. データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(3/4)

ここでは、条件グループに対する条件式の登録、削除を行います。

[illegible]

(1)条件式一覽(C)

登録された条件式が一覧表示されます。リストを選択するとそれぞれの限界値チェック条件項目、設定値が表示され、「追加(A)...」、「編集(E)...」、「削除(R)」のボタンが実行可能です。

(2)[追加(A)...]ボタン

「データ検査－限界値チェック－条件式指定」を表示します。
条件グループに対し、条件式の追加を行います。
新規で条件式を設定する場合もここから行います。

(3)[編集(E)...]ボタン

「データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定」を表示します。
条件グループに対し、既存の条件式の編集を行います。

(4)「削除(R)」ボタン

既存の条件式を削除します。

その後「完了」ボタンを押下することで、登録内容が削除されます。

(5)[< 戻る(B)]ボタン

画面を終了し、「データ検査-限界値チェック-条件グループウィザード(2/4)」に戻ります。

(6)「次へ (N)>」ボタン

「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(4/4)」を表示します。
条件式が存在するとアクティブに表示されます。

5.4.6. データ検査 – 限界値チェック – 条件式指定

ここでは、条件グループに対する条件式の追加、変更を行います。

(1) 条件式名(C)

条件式名を設定します。

条件式名は、条件グループ内で一意である必要があります。

(2) 限界値チェック方法(W)

限界値チェックのチェック方法を選択します。

限界値チェックには

- ① インターバルチェック
- ② 平均値チェック
- ③ 最大値チェック
- ④ 最小値チェック
- ⑤ パーセンタイル値チェック
- ⑥ 短期予測(直線)チェック
- ⑦ AND 条件チェック

があり、条件式毎に選択することができます。

それぞれのチェック手法を以下に示します。

注意！

一部のデータ項目については限界値チェック方法が制限されており、設定可能なチェック方法のみが表示されます。

① インターバルチェック

期間、および資源毎のデータが、指定したインターバル分連続（連続事象回数）で下限値に満たない、または上限値を超えた場合に限界値チェック結果ログを出力します。

「(8)上記回数を連続して超えたデータはすべて報告する」オプションを有効（「5.3. 動作環境設定 (4)検査結果ファイルの形式(S)」で旧形式スタイルを選択した時のみ使用可能）にすると、連続したインターバルの各データが結果ログに報告されます。

② 平均値チェック

期間内のデータから資源別の平均値を 1 日毎に算出し、その平均値が指定した下限値に満たない、または上限値を超えた場合に限界値チェック結果ログを出力します。

③ 最大値チェック

期間内のデータから資源別の最大値を 1 日毎に算出し、その最大値が指定した下限値に満たない、または上限値を超えた場合に限界値チェック結果ログを出力します。

④ 最小値チェック

期間内のデータから資源別の最小値を 1 日毎に算出し、その最小値が指定した下限値に満たない、または上限値を超えた場合に限界値チェック結果ログを出力します。

⑤ パーセンタイル値チェック

対象項目のパーセンタイル値に対して、限界値チェックをかけることができ、そのパーセンタイル値が指定した下限値に満たない、または上限値を超えた場合に限界値チェック結果ログを出力します。50P、80P、90P のどのパーセンタイル値で検査を行うか選択可能です。

⑥ 短期予測（直線）チェック

短期予測(直線)チェックは、一日分のデータの開始値と終了値から翌日分の値を予測します。翌日の最終時刻の予測結果に対して限界値チェックを行い、予測された限界値の下限値に満たない、または上限値を超えた場合に限界値チェック結果ログを出力します。

ファイルスペースの使用率のように、日毎に値が大きく変化しないデータに対して使用してください。

⑦ AND 条件チェック

2 つの子となる条件式を指定し、それらがともに成立したときに、警告を出力します。警告ログには、AND 条件のログのほかに、判断基準となった 2 つの子条件のチェック結果も出力され、子条件のどちらも該当しない場合、または片方のみ該当した場合は、何も出力されません。

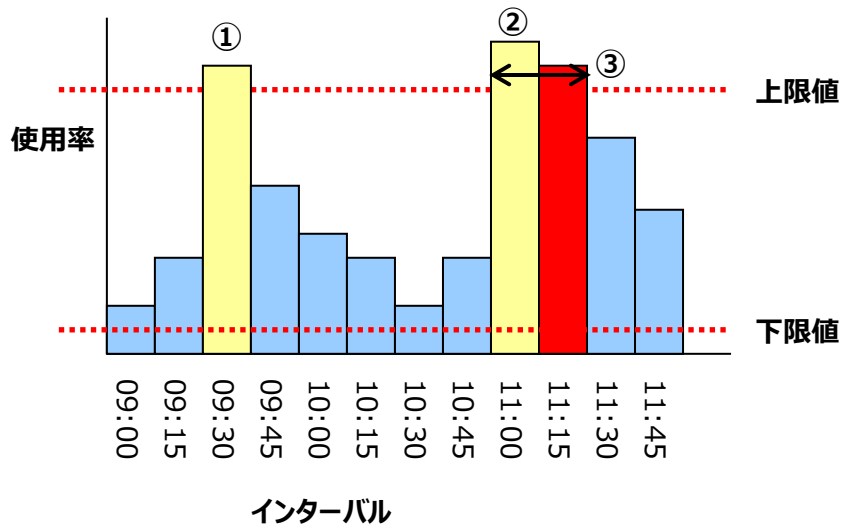
AND 条件の子条件には、平均値、パーセンタイル値以外のものは使用しないでください。

メモ！

限界値チェックは「データ値が下限値未満、または上限値を超える」場合に結果を報告します。

インターバルチェックの場合には、連続したインターバルで「データ値が下限値未満、または上限値を超える」場合にのみ結果を報告します。

ex. プロセッサ使用率のインターバルチェック例(15 分インターバルで、連続事象回数が 2 回の場合)



① 上限値を超えているが、連続事象回数に満たないため、報告はしない。

② 上限値を超えているが、連続事象回数に満たないため、報告はしない。

③ 上限値を超えており、連続事象回数に達したため、結果を報告する。

ただし、報告する内容は②(連続事象の最初のデータ情報)の内容となる。

(3)対象項目(V)

限界値チェックを行う項目を選択します。

条件式毎に 1 つ選択してください。

検査に使用できる検査対象項目として、標準定義されている項目と、ユーザ定義検査対象項目が表示されます（ユーザ定義検査対象項目の追加方法については、「第 12 章 添付資料 A. 限界値チェック：ユーザ定義検査項目の追加方法」を参照してください）。

メモ！

以下のグループに属する対象項目については、限界値チェック方法として、平均値チェック、パーセンタイル値チェックのみ選択可能です。

SAP ERP 対話型トランザクション(T-CODE+プログラム別)

SAP ERP 対話型トランザクション(T-CODE 別)

SAP ERP 対話型トランザクション(ユーザ別)

SAP ERP バッチ型トランザクション(プログラム別)

SAP ERP バッチ型トランザクション(バッチ JOB 名別)

SAP ERP バッチ型トランザクション(ユーザ別)

SAP ERP その他のトランザクション(T-CODE+プログラム別)

SAP ERP その他のトランザクション(T-CODE 別)

SAP ERP その他のトランザクション(バッチ JOB 名別)

SAP ERP その他のトランザクション(ユーザ別)

以下の対象項目については、限界値チェック方法として、インターバルチェック、最大値チェック、最小値チェックのみ選択可能です。

VMware - VMwareESX の I/O アボート発生数

VMware - VMwareESX の受信パケットロス

VMware - VMwareESX の送信パケットロス

以下の対象項目については、限界値チェック方法として、インターバルチェック、平均値チェック、最大値チェック、最小値チェック、短期予測(直線)チェック、AND 条件チェックのみ選択可能です。

VMware - ゲスト OS のプロセッサ Ready 率

VMware - ゲスト OS の受信パケットロス

VMware - ゲスト OS の送信パケットロス

以下の対象項目については、限界値チェック方法として、インターバルチェック、最大値チェック、最小値チェック、短期予測(直線)チェック、AND 条件チェックのみ選択可能です。

Oracle - ライブラリキャッシュヒット率

Oracle - ディクショナリキャッシュヒット率

Oracle - ソフトパース率

Oracle - ラッチ獲得率

Oracle - 待機イベント待ち時間

Hyper-V - ネットワークフレームのドロップ数

Hyper-V - パケットオーバーフロー数

z/VM - IFL プロセッサ使用率

z/VM - プロセッサ使用率

以下の対象項目については、限界値チェック方法として、インターバルチェック、最大値チェック、最小値チェック、パーセンタイルチェック、短期予測(直線)チェック、AND 条件チェックのみ選択可能です。

Oracle AWR - バッファ非待機率

Oracle AWR - ライブラリキャッシュヒット率

Oracle AWR - 非解析実行割合

Oracle AWR - ソフトパース率

Oracle AWR - メモリソート率

Oracle AWR - ラッチ獲得率

(4)限界値の設定(L)

限界値チェックに使用する下限値、および上限値を設定します。どちらかを必ず設定してください。また、限界値には0以上の数値のみ設定可能です。

上限値と下限値を共に指定した場合、これらは独立した限界値として個別に検査が行われます。

また、一部の検査項目で限界値の個別設定を行うことが可能です。

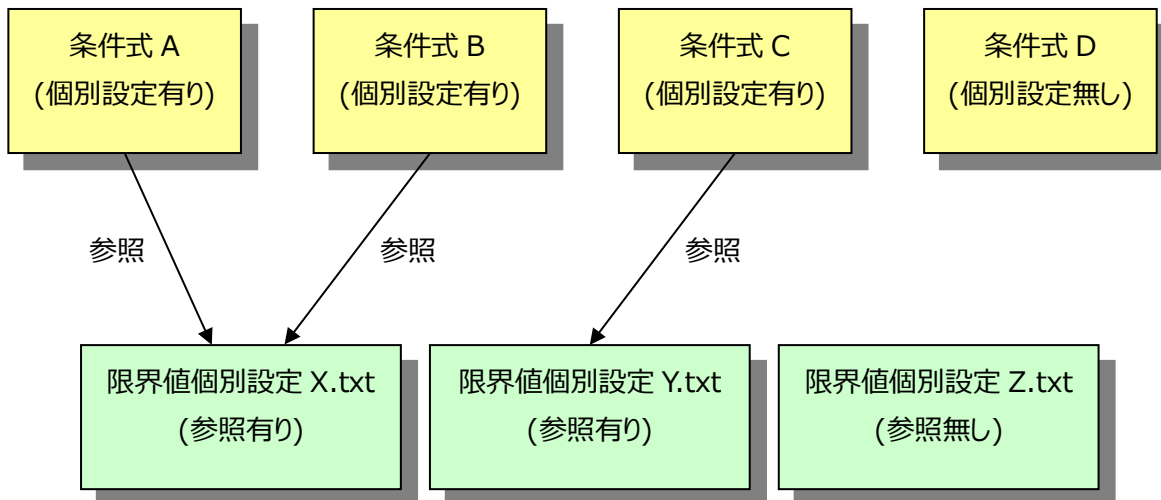
「対象項目(V)」欄から限界値の個別設定が可能な項目を選択した場合、「限界値の設定(L)」欄の[設定(D)...]ボタンが有効となり、限界値の個別指定を行うことができます。

具体的にどの検査項目で限界値の個別設定ができるかは、本紙「第13章 添付資料 B. 限界値チェック：検査対象項目」を参照してください。

例えばデバイス使用率の場合、デバイス毎に異なる限界値を設定することが可能です。

「限界値の設定(L)」欄の「◎個別指定」を選択し、[設定(D)...]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定」画面が表示され、限界値の個別設定を行うことができます。

限界値個別設定は、1設定1ファイルの構成で保持され、そのファイル1つ1つに一意の任意の名前を付け保存します。この名前を条件式に対して指定します。1つの限界値個別設定を複数の条件式で使用することも可能です。



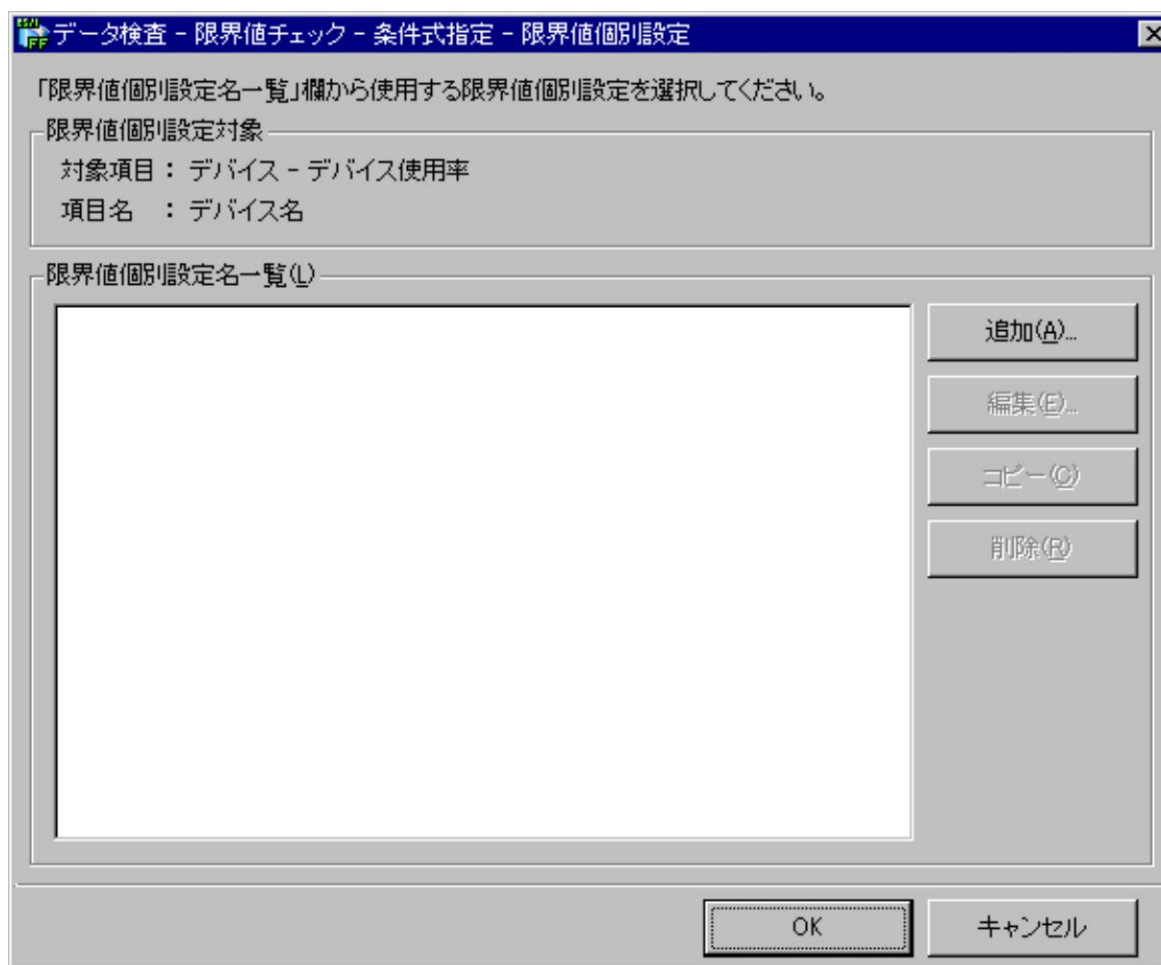
限界値個別設定ファイルは、以下のフォルダに保存されます。

CS シリーズ導入フォルダ¥FFM¥Thr¥設定項目名¥限界値個別設定名.txt

ex.

C:¥IIM¥CS¥FFM¥Thr¥デバイス¥限界値個別設定名.txt

限界値個別設定が無い条件式は、従来通り、条件式が持つ上限値・下限値で検査を行います。



(a) 限界値個別設定の追加

[追加(A)...]ボタンを押下すると「データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定 - 限界値個別設定 - 値設定」画面が表示されます。

[illegible]

一限界値個別設定名

一意の限界値個別設定名を入力します。この名前が限界値個別設定ファイルの名前になるため、ファイル名として使用可能な文字を使用してください。

一値設定

対象サイト／対象システム／対象項目名／上限値／下限値を 1 つのセットとし、上記リストの 1 行で表します。

対象サイト／対象システム／対象項目名にマッチする項目に対し上限値／下限値を適用します。

マッチさせる順番は、上の行から順になります。

サイト／システム／対象にはワイルドカード(*)を使用することができます。

上限値／下限値を「指定なし」とした場合、検査対象から除外することができます。

ex. デバイス名「/dev/sd*」をすべて除外し、残りのデバイス使用率の上限値を 90 とする場合

サイト	システム	デバイス名	上限値	下限値
SiteA	SystemA	/dev/sd*	指定なし	指定なし
SiteA	SystemA	*	90	指定なし

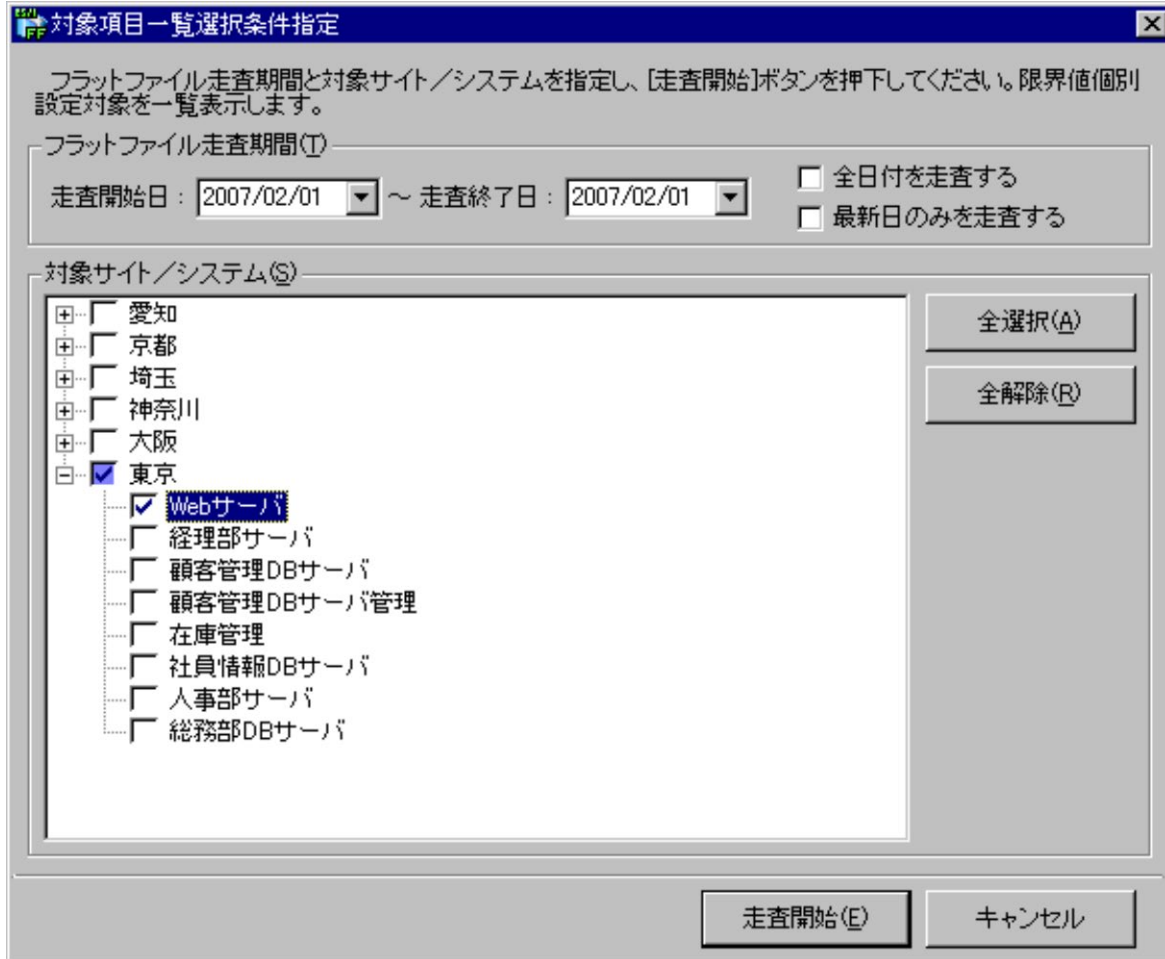
上の行から順にマッチさせるため、「▲」ボタン、「▼」ボタンを使用し順序入れ替え等を行います。

複数行を選択し、一括して入れ替えることが可能です。

－[走査して選択(I)...]ボタン

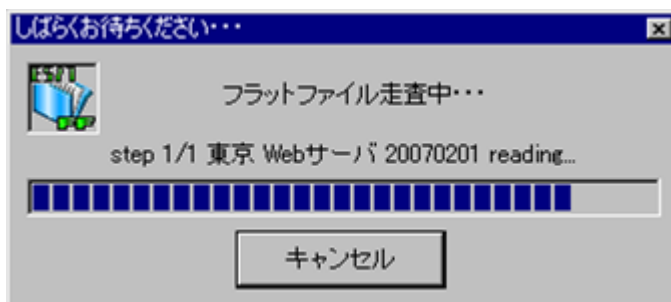
フラットファイルから実データを読み込み、対象項目の候補を一覧表示し、その中から限界値を設定する項目を選択することができます。

[走査して選択(I)...]ボタンを押下すると、「対象項目一覧選択条件指定」画面が表示されます。



サーチするフラットファイルの期間、サイト／システムを選択し[走査開始(E)]ボタンを押下します。

「全日付を走査する」をチェックすると、選択したサイト／システムの全フラットファイルをサーチします。「最新日のみを走査する」をチェックすると、選択中の先頭サイト／システムに存在する最新日を対象としてサーチします。



デバイス名一覧

デバイス名を選択してください。

デバイス名一覧(D)

サイト	システム	デバイス名
<input type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_01
<input type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_02
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_03
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_04
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_05
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_06
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_07
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_08
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_09
<input checked="" type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_10
<input type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_11
<input type="checkbox"/> 東京	Webサーバ	Dev_12

全選択(A) 全解除(R)

限界値の設定(L)

限界値を指定します。空欄のままの場合、上限値または下限値は「指定なし」となります。上、下限値共に「指定なし」の項目はチェック対象外となります。

上限値 90 下限値

OK キャンセル

フラットファイルのサーチ結果が表示されます。

対象とする項目をチェックし、設定する上限値／下限値を入力します。

上限値／下限値の入力欄を空白のままとした場合、「指定なし」となります。

[OK]ボタンを押下すると、選択が完了し「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定－値設定」画面に戻り、項目が追加されます。

データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定 - 限界値個別設定 - 値設定

限界値の個別指定を行います。特定項目にのみ上限値・下限値を設定したり、任意の項目を除外したりすることが可能です。
チェックは上段の条件から順に行われます。上段の条件でチェックされた項目はそれ以降の条件ではチェック対象外となります。

限界値個別設定(L)

限界値個別設定名: 無題

サイト	システム	デバイス名	上限値	下限値
東京	Webサーバ	Dev_03	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_04	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_05	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_06	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_07	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_08	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_09	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_10	90	指定なし
*	*	*	指定なし	指定なし

走査して選択(F)... 直接指定(A)... 編集(E)... 削除(R)

保存 キャンセル

上記の設定の場合、デバイス名「Dev_03～Dev_10」の上限値を「90」とし、残りのデバイスは対象外となります。

－[直接指定(A)...]ボタン

対象項目名を手入力にて追加します。

[直接指定(A)...]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定－値設定－個別指定」画面が表示されます。

データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定 - 限界値個別設定 - 値設定 - 個別指定

デバイス名毎に個別限界値を設定します。

対象サイト/システム(S)

☒ 対象サイト/システムを一覧から選択する

東京

- ☒ Webサーバ
- ☐ 経理部サーバ
- ☐ 顧客管理DBサーバ
- ☐ 顧客管理DBサーバ管理
- ☐ 在庫管理
- ☐ 社員情報DBサーバ
- ☐ 人事部サーバ

全選択(A)

全解除(R)

☐ 対象サイト/システムを直接入力する (全サイト、または全システムを表す * が使用可能です)

サイト: システム:

デバイス名(D)

デバイス名を指定します。ワイルドカードとして * が使用可能です。

Dev_11

限界値の設定(L)

限界値を指定します。空欄のままの場合、上限値または下限値は「指定なし」となります。上、下限値共に「指定なし」の項目はチェック対象外となります。

上限値 下限値

OK キャンセル

任意のサイト/システム名を選択、または入力します。入力の場合、ワイルドカード(*)が使用可能です。

対象となる項目の名前を入力し(画面例では「デバイス名(T)」欄)、上限値/下限値を入力します。

上限値/下限値の入力欄を空白のままとした場合、「指定なし」となります。

すべての設定が完了したら[OK]ボタンを押下し登録します。

データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定 - 限界値個別設定 - 値設定

限界値の個別指定を行います。特定項目にのみ上限値・下限値を設定したり、任意の項目を除外したりすることが可能です。
チェックは上段の条件から順に行われます。上段の条件でチェックされた項目はそれ以降の条件ではチェック対象外となります。

限界値個別設定(L)

限界値個別設定名: 無題

サイト	システム	デバイス名	上限値	下限値
東京	Webサーバ	Dev_03	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_04	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_05	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_06	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_07	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_08	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_09	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_10	90	指定なし
東京	Webサーバ	Dev_11	90	指定なし
*	*	*	指定なし	指定なし

走査して選択(Q)... 直接指定(A)... 編集(E)... 削除(R)

保存 キャンセル

定義した個別の限界値指定は、[▲]ボタン、[▼]ボタンを使用して順序を調整することができます。
リストのカラムヘッダーをクリックし、ソートを行うことも可能です。

－[編集(E)...]ボタン

リストで選択されている行の編集を行います。

リストから1行のみを選択し、[編集(E)...]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定－値設定－個別指定」画面が表示されます。

データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定 - 限界値個別設定 - 値設定 - 個別指定

デバイス名毎に個別限界値を設定します。

対象サイト/システム(S)

☐ 対象サイト/システムを一覧から選択する

- ☐ 愛知
- ☐ 京都
- ☐ 埼玉
- ☐ 神奈川
- ☐ 大阪
- ☒ 東京

全選択(A)

全解除(D)

☒ 対象サイト/システムを直接入力する (全サイト、または全システムを表す * が使用可能です)

サイト: 東京 システム: Webサーバ

デバイス名(D)

デバイス名を指定します。ワイルドカードとして * が使用可能です。

Dev_11

限界値の設定(L)

限界値を指定します。空欄のままの場合、上限値または下限値は「指定なし」となります。上、下限値共に「指定なし」の項目はチェック対象外となります。

上限値 90 下限値

OK キャンセル

ここで、編集項目に対し修正／変更を行います。

[OK]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定－値設定」画面に戻り、変更が反映されます。

リストにて複数行が選択されている場合は、「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定－値設定－限界値変更」画面が表示され、上限値／下限値のみを一括変更することができます。

データ検査 - 限界値チェック - 条件式指定 - 限界値個別設定 - 値設定 - 限界値変更

新たな限界値を指定してください。

限界値の設定(L)

限界値を指定します。空欄のままの場合、上限値または下限値は「指定なし」となります。上、下限値共に「指定なし」の項目はチェック対象外となります。

上限値 90 下限値

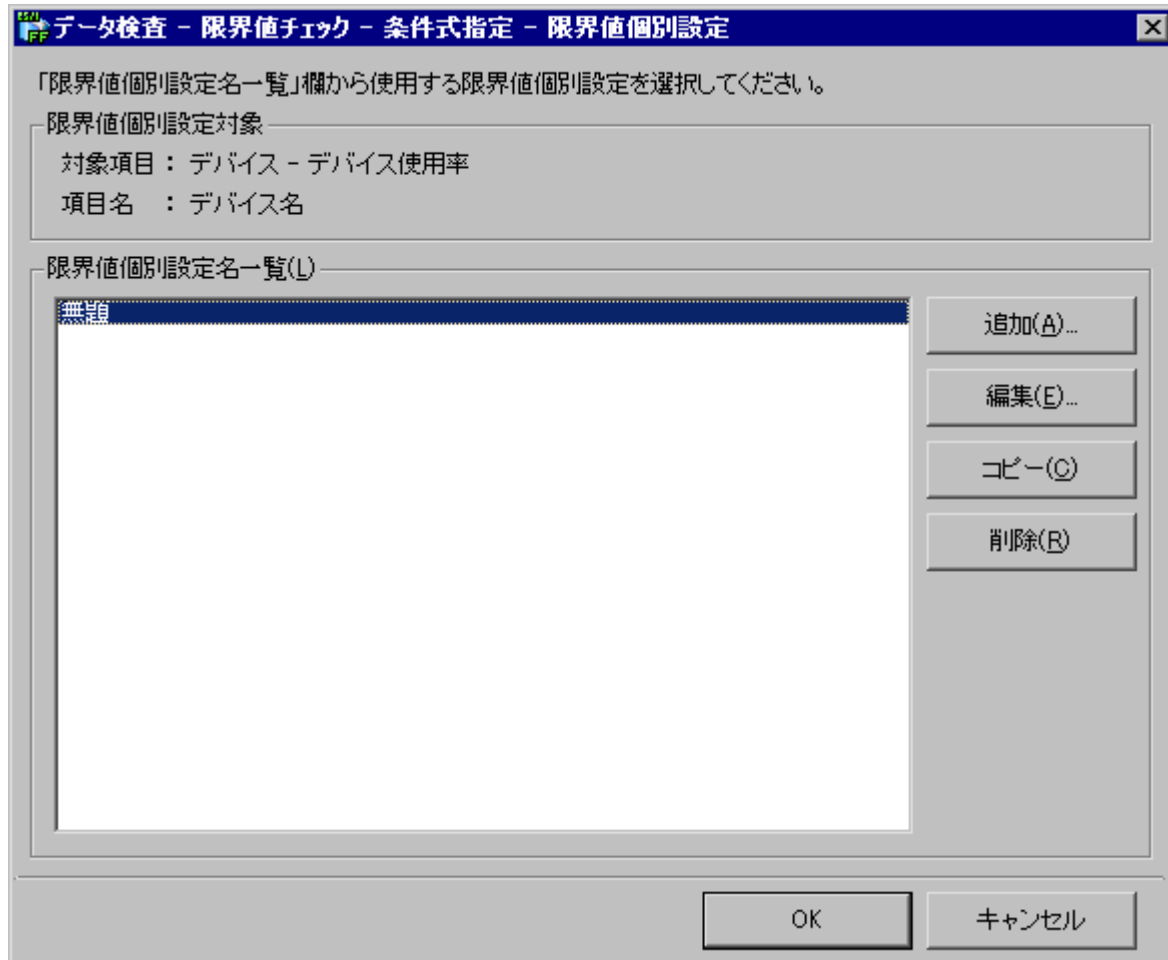
OK キャンセル

－[削除(R)]ボタン

リストで選択されている行の削除を行います。
複数行を選択して、一括して削除することが出来ます。

－[保存]ボタン

設定した限界値個別設定を保存し、「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定」画面に戻ります。



「無題」という名の限界値個別設定が登録されました。同様の手順で複数個の限界値個別設定を登録していきます。限界値個別設定の登録が完了したら、次は条件式に適用する限界値個別設定を選択します。「限界値個別設定名一覧(L)」から使用する限界値個別設定を選択し、[OK]ボタンを押下します。「データ検査－限界値チェック－条件式指定」画面の「限界値の設定(L)」欄にあるコンボボックスに、選択した限界値個別設定名が表示されます。このコンボボックスで、使用する限界値個別設定を変更することも可能です。

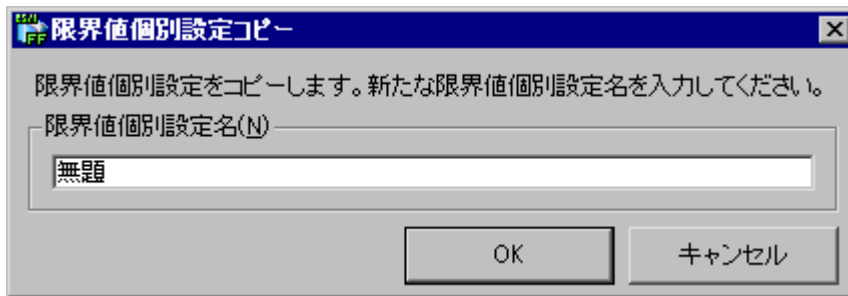
(b)限界値個別設定の編集

[編集(E)...]ボタンを押下すると「データ検査－限界値チェック－条件式指定－限界値個別設定－値設定」画面が表示されます。ここで修正／変更を行います。オペレーションは、前記「(a) 限界値個別設定の追加」と同様です。

(c)限界値個別設定のコピー

登録済みの限界値個別設定を元に複製を行うことが可能です。類似した限界値個別設定を新たに作成する場合に便利です。

[コピー(C)...]ボタンを押下すると「限界値個別設定コピー」画面が表示されます。



ここでコピー先となる限界値個別設定名を入力します。

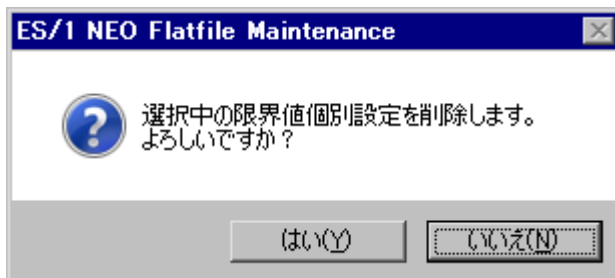
[OK]ボタンを押下すると、限界値個別設定名だけが異なる同じ内容の限界値個別設定が登録されます。

(d)限界値個別設定の削除

登録済みの限界値個別設定を削除します。

リストから削除する限界値個別設定を選択し、[削除(R)]ボタンを押下します。

複数選択による一括削除も可能です。



(5)重要度(O)

作成した条件式の重要度を設定します。

重要度は「高い」と「低い」があり、限界値チェックの結果を重要度でソートして出力します。

どちらかを必ず設定してください。

(6)状態変化報告オプション(R)

前日のチェック結果と比較して、警告の状態（限界値を超えたかどうか）が変化したときに報告するオプションです。

このオプションが正しく動作するには、直近に比較対象となる前日分のチェックを行っている必要があります。前日分のチェックを行っていない場合、前日は限界値を超えたデータがなかったものとみなして比較を行います。

(7)連続事象回数(S)

インターバルチェック時のみ指定します。限界値を超えたデータが何件連続したら報告するかを指定します。1以上の回数を指定可能です。インターバルチェックで検出した連続データの内容を表示するには、次のオプションを有効にしてください。

(8)上記回数を連続して超えたデータはすべて報告する

インターバルチェック時のみ指定します。このオプションを有効にすると、連続したインターバルの各データが結果ログに報告されます。「5.3. 動作環境設定 (4)検査結果ファイルの形式(S)」で旧形式スタイルを選択した時のみ使用可能です。

(9)限界値を超えたデータの割合を報告する

インターバルチェック時のみ指定します。このオプションを有効にすると、限界値を超えたデータが占める割合が結果ログに報告されます。

(10)パーセンタイル値(P)

パーセンタイル値チェック時のみ指定します。50P、80P、90P、のどのパーセンタイル値で検査を行うか選択可能です。

(11)[検査テスト(T)...]ボタン

現在設定されている条件でテスト的に限界値チェックを実行します。

結果は画面上にのみ表示され、ファイルには出力されません。

テスト実行の結果を基に、しきい値を決定するために使用します。

(12)[登録]ボタン

条件式を登録します。「データ検査－限界値チェック－条件式指定」にて[登録]ボタンを押下しない限り、登録内容は保存されません。

(13)[< 戻る(B)]ボタン

「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(3/4)」が表示されます。

5.4.7. データ検査 – 限界値チェック – 条件グループウィザード(4/4)

限界値チェック結果の通知方法を選択することができます。

通常、限界値チェックログは、すべての条件グループの結果が1ファイルで出力されますが、限界値チェックログを、条件グループごとにファイル出力したり、電子メールやSNMP警告メッセージで通知することが可能です。

限界値チェックログ(L)

☐ 条件グループごとの限界値チェックログをファイル出力する

参照(W)...

電子メール(M)

☐ 条件グループごとの限界値チェックログを電子メールで送信する

送信元電子メールアドレス(E)

送信先電子メールアドレス(T)

送信メールサーバ(SMTP)設定(S)

☒ サーバ名

☐ IPアドレス

ポート番号 25

タイムアウト 15 秒

件名

☐ チェック結果に問題がない場合は送信しない

発信テスト(P)

追加(A)... 削除(R)

SNMP警告メッセージ(E)

☐ 条件グループごとの限界値チェックログをSNMP警告メッセージで送信する

送信設定(W)

☒ ホスト名

☐ IPアドレス

コミュニティ文字列(C)

public

ポート番号 162

< 戻る(B) 完了

(1)限界値チェックログ(L)

通常、全条件グループの実行結果が1つのファイルで出力されますが、この他に条件グループ毎にもファイルを出力したい場合を選択します。

DcChkYYYYMMDD.log 全結果が格納されているファイル

DcChkYYYYMMDD.条件グループ名.log ... 重要度・高と重要度・低の結果が条件グループ毎に格納されているファイル

(2)電子メール(M)

各条件グループ毎のデータ検査結果を電子メールにて送信したい場合を選択します。

各項目には、動作環境設定の内容が初期表示されます。

注意！

メールの送信エラーを避けるため、送信元／送信先のメールアドレスを正しく設定してください。

(3)SNMP 警告メッセージ(E)

データ検査の結果、限界値を逸脱するデータがあった場合、SNMP 警告メッセージを送信したい時に選択します。

各項目には、動作環境設定の内容が初期表示されます。

以下のメッセージが送信されます。

iim¥Common¥docs¥IIM.MIB に定義されている ffmCheckExcess のトラップメッセージ。変数 ffmcheckConfigName には条件グループ名が設定されます。

(*)上記 iim フォルダは CS インストールフォルダの一階層上のフォルダ(例:CS インストールフォルダが D:¥iim¥cs なら D:¥iim)になります。

(4)[完了]ボタン

設定した条件グループが保存され、登録完了メッセージが表示されます。



[OK]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック」画面に戻ります。

(5)[< 戻る(B)]ボタン

「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード(3/4)」画面に戻ります。

5.5. 条件グループの編集

「データ検査－限界値チェック」画面の「処理選択(S)」から「既存の条件グループを編集する」を選択します。

限界値チェック条件項目	設定値
チェック対象項目	プロセッサ(U) - プロセッサ使用率(U)
チェック方法	インターバルチェック
連続事象回数	2
非連続限界値チェック	無効
限界値超過割合チェック	無効
上限値	90
下限値	-
重要度	重要度 高
状態変化報告オプション	無効

(1)条件グループ名一覧(L)

登録されている条件グループが、一覧で表示されます。
編集する条件グループ名を、ここで選択します。

(2)条件グループ登録内容一覧(R)

「条件グループ名一覧(L)」で選択している条件グループのうち選択されている条件式の内容を表示します。

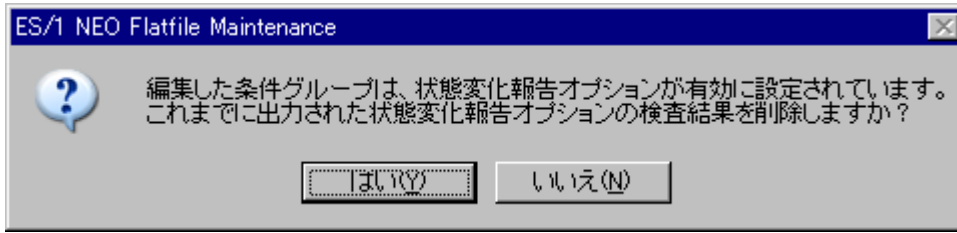
[次へ(N)>]ボタンを押下すると、条件グループウィザードが開始され、「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード (1/4)」が表示されます。

「データ検査－限界値チェック－条件グループウィザード」の各画面は、選択した条件グループに設定されている内容を初期表示します。各画面の使用方法は、条件グループの新規作成時と同様です。

「5.4. 条件グループ、条件式の作成」を参照してください。

メモ！

状態変化報告オプションが有効となっている条件式を使用し、すでに限界値チェックを実行している場合、条件グループの編集登録時に以下のメッセージが表示されます。



[はい(Y)] : 検査条件を変更したため、前回までの検査結果をリセットします。

[いいえ(N)] : 前回までの検査結果をそのまま保持します。

(3)[状態変化確認(E)...]ボタン

状態変化報告オプションが有効となっている条件で検査を実行している場合、状態変化検査結果の一覧を表示する事が可能です。

「状態変化確認(E)...」ボタンを押下すると「データ検査－限界値チェック－状態変化確認」画面が表示されます。



ここでは、状態変化の検査結果を条件式毎に削除する事が出来ます。

①「全選択(A)」ボタン

状態変化検査結果をすべて選択します。

②[全解除(R)]ボタン

状態変化検査結果の選択をすべて解除します。

③[削除(D)]ボタン

選択中の状態変化検査結果を未検査状態にし、前回までの結果をリセットします。

④[OK]ボタン

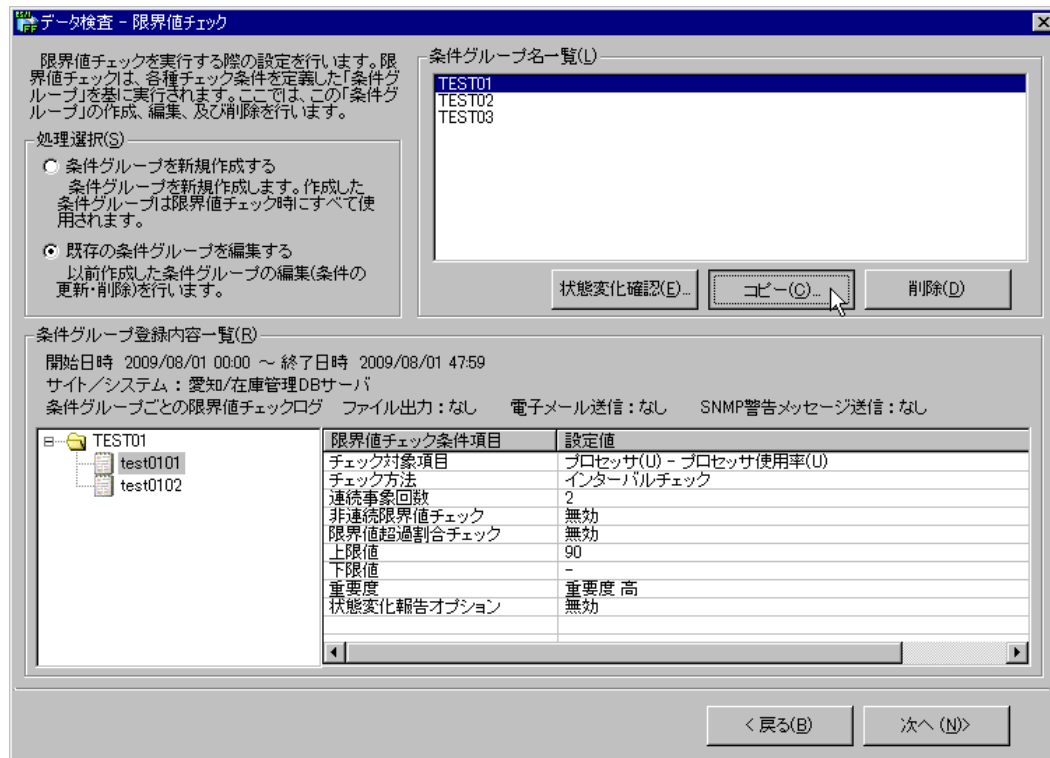
設定を保存して終了します。

⑤[キャンセル]ボタン

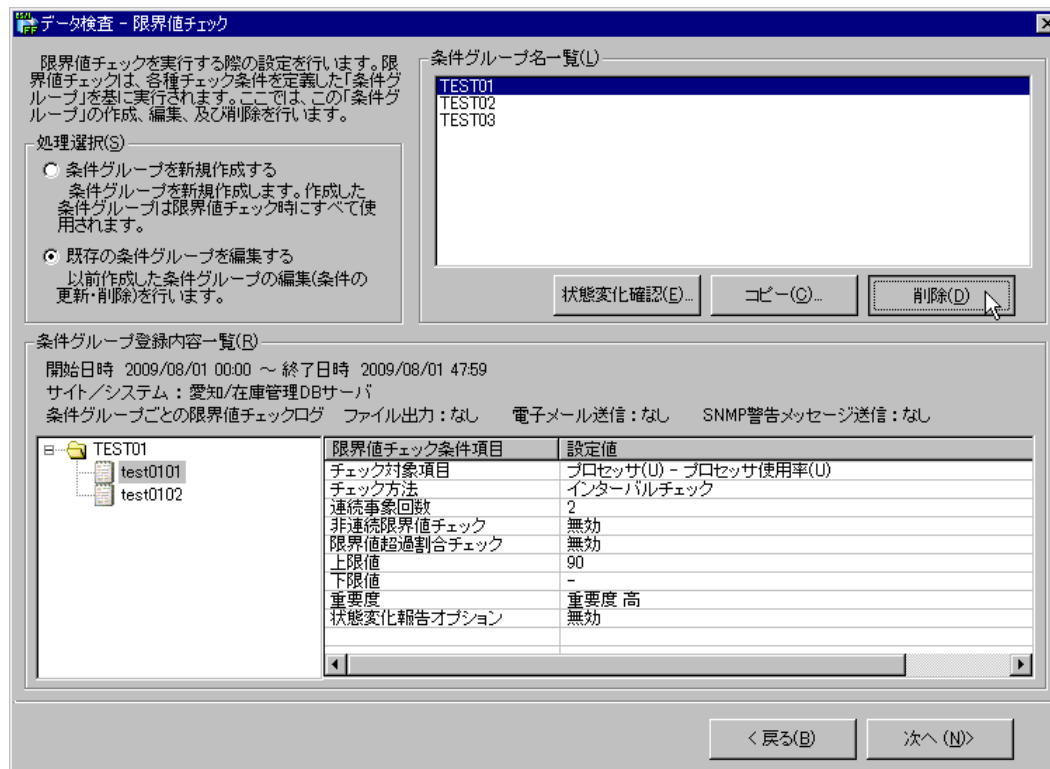
設定を保存せずに終了します。

5.6. 条件グループのコピー

「データ検査－限界値チェック」画面の「処理選択(S)」から「既存の条件グループを編集する」を選択します。



「条件グループ名一覧(L)」からコピーする条件グループ名を選択して、[コピー(C)...]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック 条件グループコピー」画面が表示されます。



「新しい条件グループ名:」欄に、コピー後の条件グループ名を指定し、[OK]ボタンを押下すると、条件グループが複製されます。

5.7. 条件グループの削除

「データ検査－限界値チェック」画面の「処理選択(S)」から「既存の条件グループを編集する」を選択します。

データ検査 - 限界値チェック

限界値チェックを実行する際の設定を行います。限界値チェックは、各種チェック条件を定義した「条件グループ」を基に実行されます。ここでは、この「条件グループ」の作成、編集、及び削除を行います。

処理選択(S)

☐ 条件グループを新規作成する
条件グループを新規作成します。作成した条件グループは限界値チェック時にすべて使用されます。

☒ 既存の条件グループを編集する
以前作成した条件グループの編集(条件の更新・削除)を行います。

条件グループ名一覧(L)

TEST01
TEST02
TEST03

状態変化確認(E)... コピー(C)... 削除(D)

条件グループ登録内容一覧(R)

開始日時 2009/08/01 00:00 ~ 終了日時 2009/08/01 47:59
サイト/システム：愛知/在庫管理DBサーバ
条件グループごとの限界値チェックログ ファイル出力：なし 電子メール送信：なし SNMP警告メッセージ送信：なし

限界値チェック条件項目	設定値
チェック対象項目	プロセッサ(U) - プロセッサ使用率(U)
チェック方法	インターバルチェック
連続事象回数	2
非連続限界値チェック	無効
限界値超過割合チェック	無効
上限値	90
下限値	-
重要度	重要度 高
状態変化報告オプション	無効

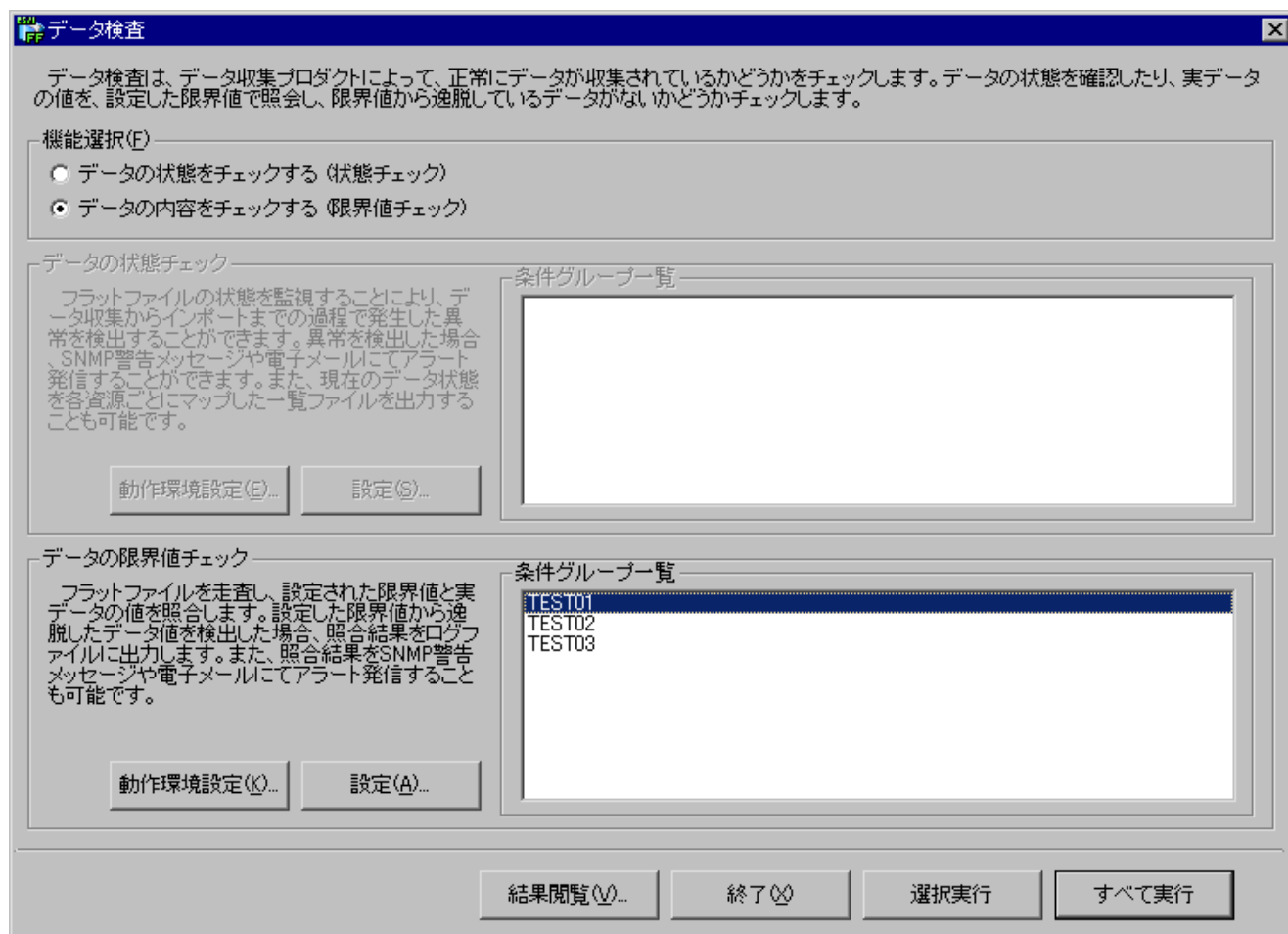
< 戻る(B) 次へ(N) >

「条件グループ名一覧(L)」から削除する条件グループ名を選択して、[削除(D)]ボタンを押下します。

5.8. 限界値チェック実行

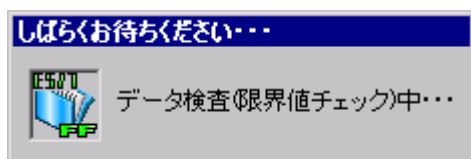
5.8.1. データ検査

条件グループの確認および、限界値チェックの実行が可能です。



(1)[すべて実行]ボタンを押下すると、すべての条件グループが実行されます。

[選択実行]ボタンを押下すると、「条件グループ一覧」で反転選択されている条件グループのみが実行されます。



データ検査(限界値チェック)が終了すると終了メッセージが表示されます。



メモ！

以下のような終了メッセージが表示される場合があります。

[正常終了時]

限界値チェック処理が正常終了しました。

また、作成したグラフの中にバージョン要件を満たしていない検査条件がありました。

[異常終了時]

限界値チェック処理が終了しましたが、エラーが発生した条件グループがありました。

また、作成したグラフの中にバージョン要件を満たしていない検査条件がありました。

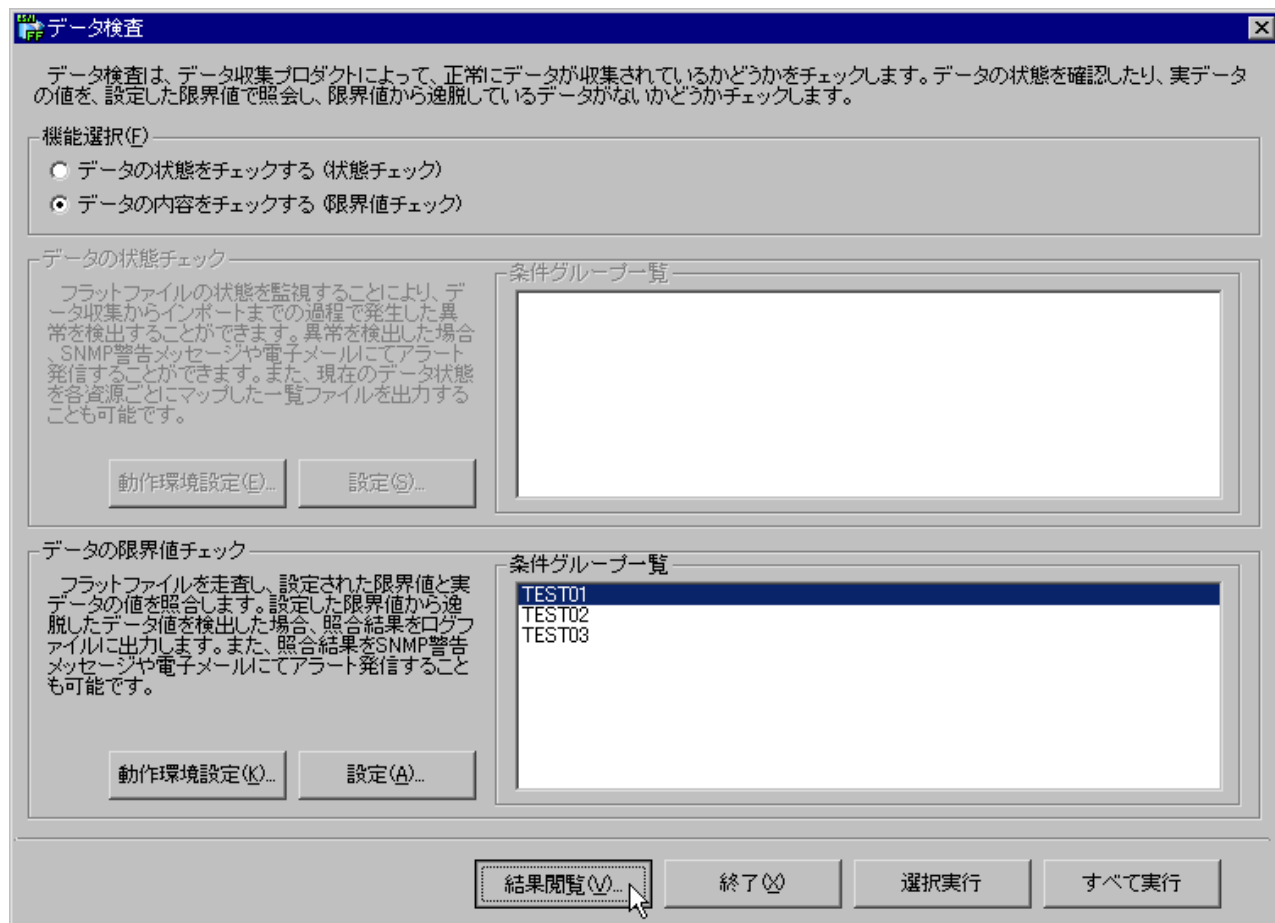
このメッセージが表示された場合、データ収集プロダクトのバージョンが古いため、正確な検査が行えなかった可能性があります。

5.9. 限界値チェック結果

5.9.1. 結果閲覧

データ検査の結果はテキストファイルで出力されます。

「データ検査」画面にて、「データの内容をチェックする(限界値チェック)」を選択します。



[結果閲覧(V)...]ボタンを押下すると、「データ検査－限界値チェック－結果閲覧」画面が表示され、全条件グループのチェック結果が出力されます。出力内容については後述の「5.9.2. 出力結果」を参照してください。

[OK]ボタンを押下すると、「データ検査」画面に戻ります。

5.9.2. 出力結果

データ検査の限界値チェックを行うと、「動作環境設定」の「チェック結果の出力先フォルダ」で指定しているフォルダに、すべての条件グループの内容がサイト／システム毎に、重要度でソートされて出力されます。

限界値チェックログの出力内容は、限界値検査の動作環境設定にある「検査結果ファイルの形式(S)」のチェック状況に応じて、V04L10 以前の形式(CSV 形式)と新しい形式(表形式)のどちらかが出力されます。

日付付きの書式を選択している場合、結果ファイル名の“YYYYMMDD”部には実行日付が設定され、1 日に複数回の限界値チェックを行った場合は実行日付が設定されたログファイルに追加されます。

CSV 形式による限界値チェックログ

限界値を検査し、条件に合致したデータがサイト／システム毎にまとめられ、重要度の高い順にソートされて出力されます。

検査結果はカンマ区切りで、限界値を超えたデータが状態変化報告オプション状態変化のあったデータだけが出力されます。

出力内容は、サイト／システム、重要度毎に

- ・データ日付
- ・データ時刻(平均値チェックの場合は“-- : --”と表示されます)
- ・チェック方法 0 : インターバルチェック
 1 : 平均値チェック
 2 : 最大値チェック
 3 : 最小値チェック
 4 : パーセンタイル値チェック
 5 : 短期予測(直線)チェック
 6 : AND 条件チェック)
- ・SHIFT
- ・重要度
- ・条件グループ名
- ・チェック対象項目
- ・限界値を超えた値

となり、重要度でソートされます。

【出カイメージ】

データ検査 限界値チェックの検査結果出カイメージ(CSV 形式)です。

IIM01/Tokyo01

```
2016/01/01 17:50, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST01, test0101, プロセッサ - プロセッサ使用率, 92.2
2016/01/01 18:45, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST01, test0101, プロセッサ - プロセッサ使用率, 91.8
2016/01/01 00:15, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 90.6
2016/01/01 02:20, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 91.9
2016/01/01 04:00, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 91.8
2016/01/01 07:35, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 90.7
2016/01/01 08:05, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 91.3
2016/01/01 09:20, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 86.2
2016/01/01 --:--, 1, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 2, TEST01, test0102, メモリ - フリーメモリ, 22561.8628819444
2016/01/01 --:--, 1, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 2, TEST03, test0302, メモリ - フリーメモリ, 22561.8628819444
```

IIM02/Tokyo02

```
2016/01/01 00:00, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST02, test0201, プロセッサ - プロセッサ使用率, 97
2016/01/01 00:00, 0, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 1, TEST03, test0301, プロセッサ - プロセッサ使用率, 97
2016/01/01 --:--, 1, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 2, TEST02, test0202, プロセッサ - プロセッサ使用率, 97.0486111111
2016/01/01 --:--, 1, SHIFT (00:00-23:59), 重要度 2, TEST03, test0302, メモリ - フリーメモリ, 22273.65625
```

表形式による限界値チェックログ

限界値を検査し、条件に合致したデータが出力されます。

検査結果はテキスト表形式で、限界値を超えたデータか、状態変化報告オプションありのときの状態変化のあったデータだけが出力されます。

表形式による限界値チェックログは、以下の構成になっています。

限界値検査結果サマリー

- ・警告状態の変化
- ・システム毎の警告一覧
- ・リソース毎の一覧
- ・条件式毎の検査結果サマリー

システム 1 の検査結果

- ・システム 1 で条件に合致した条件式の一覧
 - ・条件式毎の設定値と検査結果の詳細 1
 - ・条件式毎の設定値と検査結果の詳細 2
- :

システム 2 の検査結果

- ・システム 2 で条件に合致した条件式の一覧
 - ・条件式毎の設定値と検査結果の詳細 1
 - ・条件式毎の設定値と検査結果の詳細 2
- :

システム 3 の検査結果

- ・システム 3 で条件に合致した条件式の一覧
 - ・条件式毎の設定値と検査結果の詳細 1
 - ・条件式毎の設定値と検査結果の詳細 2
- :

【限界値検査結果サマリー】

限界値検査結果サマリーは、限界値検査の結果を集計した結果を可読性の高い表形式でまとめたものを表示します。

・警告状態の変化

限界値検査で警告が発生したまたは解除されたシステムや、警告状態が継続しているサイト／システムと条件式を表形式で出力します。

サイト／システムの列には警告や状態変化のあったシステム名が表示されます。

表の見出しにある 6 桁の数字は、問題のあった条件式の参照用番号となっています。条件式の名称や設定条件、検査結果は同じ参照番号を持つ条件式毎の検査結果サマリーや、システム毎の検査結果で見ることが可能です。表には、警告があったか変化のあった条件式のステータスが表示されます。

開始	最新の検査でいくつかのデータが限界値を超えており、新しい警告が発生したことを表します。
解除	最新の検査ですべてのデータが限界値の範囲内に収まっており、警告が解除されたことを表します。
MM/DD-	最新の検査でいくつかのデータが限界値を超えた状態が継続していることを表します。 (MM/DD)は最初に警告が現れた日を表します。

注意！

「警告状態の変化」では、状態変化報告オプションの指定の有無に関わらず、限界値超えがある状態に変化のあったデータが表示されます。

・システム毎の警告一覧

限界値検査で警告または状態変化のあったサイト／システム毎に検査の集約結果が表示されます。

サイト／システム	警告または状態変化のあったサイト／システム名が表示されます
判定	検査した結果が○×形式で報告されます <u>状態変化報告オプションなしのとき</u> × 限界値を超えるデータが存在した ○ 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <u>状態変化報告オプションありのとき</u> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)
総警告数	警告のあったデータの総数を表示します デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数の警告が発生する場合があります
総項目数	検査を行ったデータの総数を表示します デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数のデータを検査する必要があります
条件式数	検査を行った条件式×日数を表示します
条件式	警告または状態変化のあった条件式の参照用番号がカンマ区切りで表示されます

・リソース毎の一覧

限界値検査で警告または状態変化のあった検査項目の資源グループ毎に検査の集約結果が表示されます。
この表により、どのリソースでどれだけ警告が発生しているかを把握することができます。

リソース	警告または状態変化のあった検査項目の資源グループ名が表示されます
サイト／システム	警告または状態変化にあったサイト／システム名が表示されます
判定	<p>検査した結果が○×形式で報告されます</p> <p><u>状態変化報告オプションなしのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none"> × 限界値を超えるデータが存在した ○ 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <p><u>状態変化報告オプションありのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none"> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)
総警告数	<p>警告のあったデータの総数を表示します</p> <p>デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数の警告が発生する場合があります</p>
総項目数	<p>検査を行ったデータの総数を表示します</p> <p>デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数のデータを検査する必要があります</p>
条件式数	検査を行った条件式×日数を表示します
条件式	警告または状態変化のあった条件式の参照用番号がカンマ区切りで表示されます

・条件式毎の検査結果サマリー

限界値検査で警告または状態変化のあった条件式毎に検査の集約結果が表示されます。

この表により、どの条件式でどれだけ警告が発生しているかを把握することができます。

条件式 ID	条件式の ID(参照用番号)が表示されます	
条件式名	条件式の名称が条件グループ名(条件式名)で表示されます	
種別	条件式の限界値チェック方法を以下の略称で表示します	
	略称	説明
	*nnn	インターバルチェック(nnn は連続インターバル数)
	Avg	平均値チェック
	Max	最大値チェック
	Min	最小値チェック
	Pnn	パーセンタイル値チェック(nn はパーセンタイル (50~90))
	Trd	短期予測(直線)チェック
	And	AND 条件チェック
Sv	条件式の重要度 1 重要度が高い 2 重要度が低い	
判定	検査した結果が○×形式で報告されます <u>状態変化報告オプションなしのとき</u> × 限界値を超えるデータが存在した - 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <u>状態変化報告オプションありのとき</u> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)	
総警告数	警告のあったデータの総数を表示します デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数の警告が発生する場合があります	
総項目数	検査を行ったデータの総数を表示します デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数のデータを検査する必要があります	
検査対象日	検査を行ったデータの範囲を YYYY/MM/DD 形式で表示します 複数日を対象に検査を行った場合、開始と終了日を表示します	
サイト／システム	警告または状態変化のあったサイト／システム名がカンマ区切りで表示されます	

【システム毎の検査結果】

システム毎の検査結果は、警告または状態変化のあった条件式とその検査結果詳細をシステム毎に分けて表示します。

・* 条件式一覧

システムに対する限界値検査で、警告または状態変化のあった条件式が一覧形式で表示されます。

* にはシステム名が入ります。

条件式 ID	条件式の ID(参照用番号)が表示されます	
条件式名	条件式の名称が条件グループ名(条件式名)で表示されます	
種別	条件式の限界値チェック方法を以下の略称で表示します	
	略称	説明
	*nnn	インターバルチェック(nnn は連続インターバル数)
	Avg	平均値チェック
	Max	最大値チェック
	Min	最小値チェック
	Pnn	パーセンタイル値チェック(nn はパーセンタイル (50~90))
	Trd	短期予測(直線)チェック
	And	AND 条件チェック
Sv	条件式の重要度 1 重要度が高い 2 重要度が低い	
判定	検査した結果が○×形式で報告されます <u>状態変化報告オプションなしのとき</u> × 限界値を超えるデータが存在した - 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <u>状態変化報告オプションありのとき</u> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)	
警告数	警告のあったデータの総数を表示します デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数の警告が発生する場合があります	
項目数	検査を行ったデータの総数を表示します デバイスデータやアカウント系データなど、1つの条件式で複数のデータを検査する必要があります	
検査対象日	検査を行ったデータの範囲を YYYY/MM/DD 形式で表示します 複数日を対象に検査を行った場合、開始と終了日を表示します	

・＊ 検査結果詳細

システムに対する限界値検査で、警告または状態変化のあった条件式の検査結果が表示されます。

＊にはシステム名、条件式 ID、条件式名、種別、検査対象項目名が入ります。

限界値チェック方法により、出力される表の内容が異なります。

(インターバルチェックの場合)

xxx 名	デバイスやファイルシステムなど、複数データに対して検査を実行した場合にデータのインスタンス名が表示されます。システムデータのようにシステム毎に 1 つのデータしか存在しない場合は表示されません。
期間	指定回数以上連続して限界値を超えていたデータの期間を表示します
初期値	指定回数以上連続して限界値を超えていたデータの先頭にあった数値を表示します
連続数	指定回数以上連続して限界値を超えていたデータの連続数を表示します
判定	検査した結果が○×形式で報告されます <u>状態変化報告オプションなしのとき</u> × 限界値を超えるデータが存在した － 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <u>状態変化報告オプションありのとき</u> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに指定回数連続して限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、指定回数連続して限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)
上限値	対象データの上限値に設定した値が表示します 上限値の設定がない場合、“.”が表示されます
下限値	対象データの下限値に設定した値が表示します 下限値の設定がない場合、“.”が表示されます
比率 (%)	検査を行ったすべてのインターバル数に対する限界値を超えていたデータの数を比率で報告します。 条件式の設定で「限界値を超えたデータの割合を報告する」の指定が有効な時のみ表示されます。

(平均値チェック、最大値チェック、最小値チェック、パーセンタイル値チェックの場合)

xxx 名	デバイスやファイルシステムなど、複数データに対して検査を実行した場合にデータのインスタンス名が表示されます。システムデータのようにシステム毎に 1 つのデータしか存在しない場合は表示されません。
日時	警告または状態変化のあったデータの日付と時刻を表示します 平均値チェック、パーセンタイル値チェックの場合は時刻が特定できませんので、日付だけが表示されます
xxx	見出し部分に限界値チェック方法の略称が表示されます データ部分には、限界値超えをしていた値(検査種別によって異なります)が表示されます
判定	検査した結果が○×形式で報告されます <u>状態変化報告オプションなしのとき</u> × 限界値を超えるデータが存在した － 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <u>状態変化報告オプションありのとき</u> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)
上限値	対象データの上限値に設定した値が表示します 上限値の設定がない場合、“.”が表示されます
下限値	対象データの下限値に設定した値が表示します 下限値の設定がない場合、“.”が表示されます

(短期予測(直線)チェックの場合)

xxx 名	デバイスやファイルシステムなど、複数データに対して検査を実行した場合にデータのインスタンス名が表示されます。システムデータのようにシステム毎に1つのデータしか存在しない場合は表示されません。
予測時刻	警告または状態変化のあった予測値の日付と時刻を表示します 通常は、検査データの翌日の最終インターバルに相当する時刻が使用されます
予測値	警告または状態変化のあった予測値を表示します
判定	検査した結果が○×形式で報告されます <u>状態変化報告オプションなしのとき</u> × 限界値を指定回数連続して超えるデータが存在した － 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <u>状態変化報告オプションありのとき</u> × 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始) ○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)
上限値	対象データの上限値に設定した値が表示します 上限値の設定がない場合、“.”が表示されます
下限値	対象データの下限値に設定した値が表示します 下限値の設定がない場合、“.”が表示されます
初出時刻	予測の元となったデータの初出時刻を表示します
初出値	予測の元となったデータの初出の実測値を表示します
最終時刻	予測の元となったデータの最終時刻を表示します
最終値	予測の元となったデータの最終の実測値を表示します

(AND 条件チェックの場合)

日時	AND 条件判定の結果、警告または状態変化のあった日の日付を表示します																														
判定	<p>AND 条件判定の結果が○×形式で報告されます</p> <p><u>AND 条件の状態変化報告オプションなしのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none">× 子条件がすべて警告または状態変化ありだった－ 検査すべきデータが無かったが、直前の判定結果が×だった <p><○×判定のマトリックス></p> <table><tr><th>1 つ目の子条件</th><th>2 つ目の子条件</th><th>3 つ目の子条件</th></tr><tr><td>○警告または状態変化なし</td><td>○警告または状態変化なし</td><td>○(子のいずれかが○の場合表示なし)</td></tr><tr><td>○警告または状態変化なし</td><td>×警告または状態変化あり</td><td>○(子のいずれかが○の場合表示なし)</td></tr><tr><td>×警告または状態変化あり</td><td>○警告または状態変化なし</td><td>○(子のいずれかが○の場合表示なし)</td></tr><tr><td>×警告または状態変化あり</td><td>×警告または状態変化あり</td><td>×(子が共に×)</td></tr></table> <p><u>状態変化報告オプションありのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none">× 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始)○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除) <p><○×判定のマトリックス></p> <table><tr><th>直前の親条件の判定結果</th><th>最新の親条件の判定結果</th><th>親条件の判定結果</th></tr><tr><td>○(子のいずれかが○)</td><td>○(子のいずれかが○)</td><td>変化がないため表示なし</td></tr><tr><td>○(子のいずれかが○)</td><td>×(子が共に×)</td><td>×を表示(警告開始)</td></tr><tr><td>×(子が共に×)</td><td>○(子のいずれかが○)</td><td>○を表示(警告解除)</td></tr><tr><td>×(子が共に×)</td><td>×(子が共に×)</td><td>変化がないため表示なし</td></tr></table>	1 つ目の子条件	2 つ目の子条件	3 つ目の子条件	○警告または状態変化なし	○警告または状態変化なし	○(子のいずれかが○の場合表示なし)	○警告または状態変化なし	×警告または状態変化あり	○(子のいずれかが○の場合表示なし)	×警告または状態変化あり	○警告または状態変化なし	○(子のいずれかが○の場合表示なし)	×警告または状態変化あり	×警告または状態変化あり	×(子が共に×)	直前の親条件の判定結果	最新の親条件の判定結果	親条件の判定結果	○(子のいずれかが○)	○(子のいずれかが○)	変化がないため表示なし	○(子のいずれかが○)	×(子が共に×)	×を表示(警告開始)	×(子が共に×)	○(子のいずれかが○)	○を表示(警告解除)	×(子が共に×)	×(子が共に×)	変化がないため表示なし
1 つ目の子条件	2 つ目の子条件	3 つ目の子条件																													
○警告または状態変化なし	○警告または状態変化なし	○(子のいずれかが○の場合表示なし)																													
○警告または状態変化なし	×警告または状態変化あり	○(子のいずれかが○の場合表示なし)																													
×警告または状態変化あり	○警告または状態変化なし	○(子のいずれかが○の場合表示なし)																													
×警告または状態変化あり	×警告または状態変化あり	×(子が共に×)																													
直前の親条件の判定結果	最新の親条件の判定結果	親条件の判定結果																													
○(子のいずれかが○)	○(子のいずれかが○)	変化がないため表示なし																													
○(子のいずれかが○)	×(子が共に×)	×を表示(警告開始)																													
×(子が共に×)	○(子のいずれかが○)	○を表示(警告解除)																													
×(子が共に×)	×(子が共に×)	変化がないため表示なし																													
nnnnnn-1	<p>1 つ目の子条件を検査した結果が○×形式で報告されます</p> <p><u>1 つ目の子条件で状態変化報告オプションなしのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none">× 限界値を超えるデータが存在した <p><u>1 つ目の子条件で状態変化報告オプションありのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none">× 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始)○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)																														
nnnnnn-2	<p>2 つ目の子条件を検査した結果が○×形式で報告されます</p> <p><u>2 つ目の子条件で状態変化報告オプションなしのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none">× 限界値を超えるデータが存在した <p><u>2 つ目の子条件で状態変化報告オプションありのとき</u></p> <ul style="list-style-type: none">× 前日まで警告の無かったデータで、新たに限界値を超えるデータが発生した(警告開始)○ 前日まで警告のあったデータで、限界値を超えるデータがなくなり警告が解除された(警告解除)																														

1 つ目と 2 つ目の子条件のいずれかまたは片方が×だった場合、AND 条件の判定結果の次に×だった子条件の検査結果詳細が報告されます。

【出カイメージ】

=====
限界値検査結果サマリー
=====

《警告状態の変化》

サイト/システム 001001 001002 002001

TOKY001/Server01 開始 開始 開始

TOKY001/Server02 開始

《システム毎の警告一覧》

サイト/システム 判定 総警告数 総項目数 条件式数 条件式

TOKY001/Server01 × 3 3 3 001001, 001002, 002001

TOKY001/Server02 × 1 3 3 002001

《リソース毎の一覧》

リソース サイト/システム 判定 総警告数 総項目数 条件式数 条件式

プロセッサ TOKY001/Server01 × 1 1 1 001001

メモリ TOKY001/Server01 × 2 2 2 001002, 002001

メモリ TOKY001/Server02 × 1 2 2 002001

《条件式毎の検査結果サマリー》

条件式 ID 条件式名 種別 Sv 判定 総警告数 総項目数 検査対象日 サイト/システム

001001 INTchk (ProcUseP) *002 1 × 1 2 2007/03/08 TOKY001/Server01

002001 AVGchk (MemFree1) Avg 1 × 2 2 2007/03/08 TOKY001/Server01, TOKY001/Server02

001002 INTchk (MemFree2) *002 2 × 1 2 2007/03/08 TOKY001/Server01

=====
TOKY001/Server01 の検査結果
=====

《TOKY001/Server01 条件式一覧》

条件式 ID 条件式名 検査対象項目 種別 Sv 判定 警告数 項目数 検査対象日

001001 INTchk (ProcUseP) プロセッサ - プロセッサ使用率 *002 1 × 1 1 2007/03/08

002001 AVGchk (MemFree1) メモリ - フリーメモリ Avg 1 × 1 1 2007/03/08

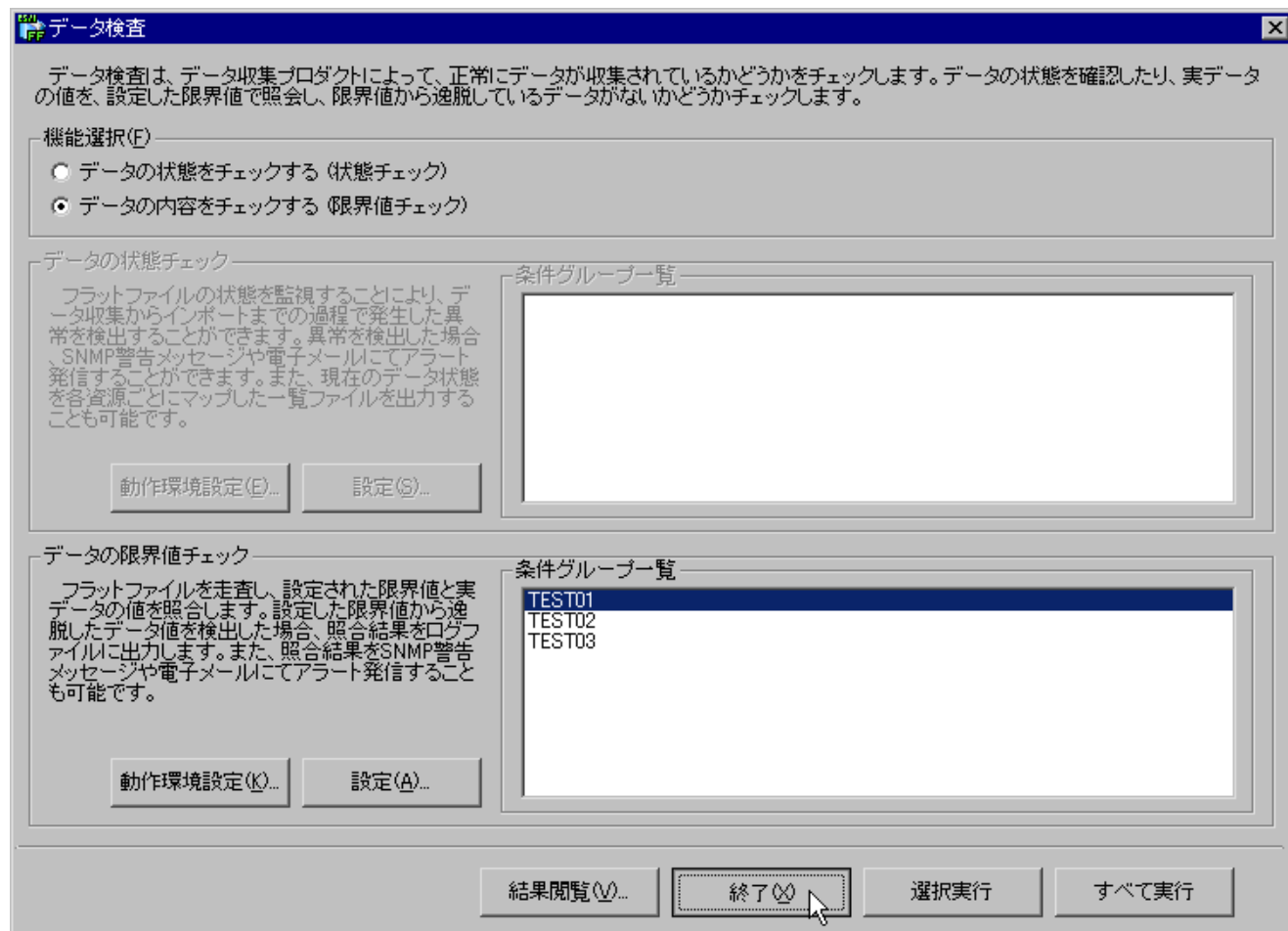
001002 INTchk (MemFree2) メモリ - フリーメモリ *002 2 × 1 1 2007/03/08

《TOKY001/Server01 001001 INTchk (ProcUseP) *002 プロセッサ - プロセッサ使用率 検査結果詳細》

日時 判定 上限値 下限値 データ

5.10. 終了

「データ検査－データの内容をチェックする(限界値チェック)」を終了するには「データ検査」の画面で、[終了(X)]ボタンを押下してください。



5.11. 限界値チェック設定項目一覧

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※ 1
プロセッサ	プロセッサ使用率	CS-i5 全体のプロセッサ使用率※ 4	
	I/O ウェイト率		
	ユーザプロセッサ使用率	ジョブユーザ毎のプロセッサ使用率※ 4	
	コマンドプロセッサ使用率	ジョブ名毎のプロセッサ使用率※ 4	
	ユーザ・コマンドプロセッサ使用率	ジョブユーザ・ジョブ名毎のプロセッサ使用率※ 4	
メモリ	スキャンされたページ数		
	フリーメモリ		
	ページイン		
	ページアウト		
	プールデータベース不在	プール毎のプールデータベース不在※ 4	○
	プール非データベース不在	プール毎のプール非データベース不在※ 4	○
	スワップイン(Linux)		
	スワップアウト(Linux)		
	フリーメモリ+バッファキャッシュ(Linux)		
	フリースワップスペース(Linux)		
デバイス	デバイス使用率	ディスクアーム毎の使用率※ 4	○
	レスポンス時間	ディスクアーム毎のレスポンス時間※ 4	○
	デバイス待ち回数		○
ファイルスペース	スペース使用率	ディスクアーム毎の使用容量※ 4	○
	スペース使用率(Unix)		○
	スペース使用率(Windows)		○
Oracle	実リード回数		
	実ライト回数		
	バッファキャッシュヒット率		
	バッファ非待機率		
	共有プール空きメモリ		
	ライブラリキャッシュヒット率		
	ディクショナリキャッシュヒット率		
	Java プール空きメモリ		
	共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数		
	共有プール予約領域の領域要求失敗回数		
	非解析実行割合		
	解析 CPU 時間割合		
	ソフトパース率		
	非解析処理時間割合		
	REDO ログバッファ待機回数		
	REDO ログスイッチ非待機率		
	ラージプール空きメモリ		
	ディスクソート回数		

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※ 1
Oracle	メモリソート率		
	フェッチ時の連鎖/移行行検出回数		
	ディスパッチャ平均待機時間		
	共有サーバ平均待機時間		
	ディスパッチャビジー率		
	共有サーバビジー率		
	ラッチ獲得率		
	グローバルキャッシュ変換時間		
	グローバルキャッシュ取得待機時間		
	ユーザーコール数		
	待機イベント待ち時間		○
	表領域の使用率		○
SAP ERP 対話型トランザクション (T-CODE+プログラム別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP 対話型トランザクション (T-CODE 別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP 対話型トランザクション (ユーザ別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP 対話型トランザクション ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP バッチ型トランザクション (プログラム別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP バッチ型トランザクション (バッチ JOB 名別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP バッチ型トランザクション (ユーザ別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP バッチ型トランザクション ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP その他のトランザクション (T-CODE+プログラム別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP その他のトランザクション (T-CODE 別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP その他のトランザクション (バッチ JOB 名別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※ 1
SAP ERP その他のトランザクション (ユーザ別) ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
SAP ERP その他のトランザクション ※ 3	レスポンス時間(秒)		
	稼働時間(秒)		
	待ち時間(秒)		
ネットワーク回線	回線遅延時間(秒)		
	レスポンス時間(秒)		
	Window サイズゼロ送信回数		
	Window サイズゼロ受信回数		
ネットワーク回線(ポート別)	回線遅延時間(秒)		
	レスポンス時間(秒)		
MIB(ノード別)	受信エラー件数		
	送信エラー件数		
	受信破棄パケット数		
	送信破棄パケット数		
	受信ブロードキャスト数		
	送信ブロードキャスト数		
	送信破棄パケット数		
MIB(ポート別)	受信帯域使用率		
	送信帯域使用率		
	受信破棄パケット数		
	送信破棄パケット数		
HTTP ログ	アクセス件数		
	Page/sec		
	クライアントエラー件数		
	サーバエラー件数		
	レスポンス時間(秒)		
WebSphere	SessionManager の LiveCount		
	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間		
	EntityBean の 1 回あたりの平均実行時間		
	MessageDrivenBean の 1 回あたりの 平均実行時間		
	StatefulSessionBean の 1 回あたりの 平均実行時間		
	StatelessSessionBean の 1 回あたりの 平均実行時間		
	JDBCDataSource の 1 回あたりの 平均実行時間		
	JDBCDataSource の 1 回あたりの 平均待ち時間		
	JDBCDataSource の接続タイムアウト数		
VMware※ 5	VMwareESX のプロセッサ使用率		○
	VMwareESX のプロセッサ使用量		○
	VMwareESX のメモリ使用率		○

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※ 1
VMware※ 5	VMwareESX の Balloon 発生量		○
	VMwareESX の Swapin 発生量		○
	VMwareESX の Swapout 発生量		○
	VMwareESX の I/O アボート発生数※ 2	ESX の各デバイス全体での I/O アボート発生数	○
	VMwareESX の I/O レイテンシ	ESX の各デバイス全体での I/O レイテンシ	○
	VMwareESX の I/O コマンド量	ESX の各デバイス全体での I/O コマンド量	○
	VMwareESX の I/O 使用量	ESX の各デバイス全体での I/O 使用量	○
	VMwareESX の受信パケットロス※ 2	ESX の各ネットワークアダプタ全体での受信パケットロス	○
	VMwareESX の送信パケットロス※ 2		○
	VMwareESX のネットワーク使用量		○
	ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率		○
	ゲスト OS のプロセッサ使用量		○
	ゲスト OS の Balloon 発生量		○
	ゲスト OS の Swapin 発生量		○
	ゲスト OS の Swapout 発生量		○
	ゲスト OS の I/O 使用量		○
	ゲスト OS のネットワーク使用量		○
	ゲスト OS の受信パケットロス※ 2		○
	ゲスト OS の送信パケットロス※ 2		○
	Datastore の領域使用率		○
	ゲストストレージのファイルシステム使用率		○
z/VM	IFL プロセッサ使用率		
	プロセッサ使用率		
	主記憶使用率		
	拡張記憶使用率		
	ページイン数		
	ページアウト数		
	ページムーブ数		
	ページマイグレーション数		
	フリーサブプール領域使用率		
	拡張チャネル使用率		○
	仮想スイッチの破棄送信パケット数		○
	仮想スイッチの破壊受信パケット数		○
WebLogic	Sun J V M ヒープサイズ		○
	Sun J V M ヒープ使用量		○
	Jrockit ヒープサイズ		○
	Jrockit ヒープ使用量		○
	Jrockit GC の 1 回あたりの平均実行時間		○
	Jrockit GC 実行回数		○
	JDBCProvider のプールサイズ		○
	JDBCProvider の同時接続待ち数		○
	JDBCProvider の再接続失敗数		○

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※ 1
WebLogic	JDBC Data Source のプールサイズ (V9 以降)		○
	JDBC Data Source の接続待ち回数 (V9 以降)		○
	JDBC Data Source の同時接続待ち数 (V9 以降)		○
	JDBC Data Source の再接続失敗数 (V9 以降)		○
	JDBC Data Source の接続タイムアウト数 (V9 以降)		○
	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間		○
	ThreadPool のプールサイズ (V9 以降)		○
	ThreadPool の待ちリクエスト数 (V9 以降)		○
	実行キューのスレッド数		○
	実行キューの保留要求数		○
	Work Manager の待ちリクエスト数 (V9 以降)		○
	Entity EJB のトランザクションタイムアウト数		○
	Entity EJB のキャッシュミス率		○
	Entity のアクティベーション回数		○
	EntityEJB のプールミス率		
	EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数		○
	EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数		○
	EntityEJB のロック待ちスレッド数		○
	EntityEJB のロック待機数		○
	EntityEJB のロックタイムアウト数		○
	StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数		○
	StatefulEJB のキャッシュミス率		○
	StatefulEJB のアクティベーション回数		○
	StatefulEJB のロック待ちスレッド数		
	StatefulEJB のロック待機数		
	StatefulEJB のロックタイムアウト数		
	StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数		
	StatelessEJB のプールミス率		
	StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数		
	StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数		○

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※ 1
WebLogic	MessageDrivenEJB のプールミス率		○
	MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数		○
	MessageDrivenEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数		○
MySQL	クエリキャッシュヒット率		
	クエリキャッシュ使用率		
	スレッドキャッシュヒット率		
	キーキャッシュヒット率		
	テーブルキャッシュ使用率		
	InnoDB バッファプールヒット率		
	MyISAM テーブルフラグメンテーション率		○
	テンポラリテーブルメモリ処理率		
	スロークエリ数		
	接続スレッド数		
Interstage	JVM ヒープ使用量		○
	JVM ヒープ設定に対する使用率		○
	JVMPerm 使用量		○
	JVMPerm 設定に対する使用率		○
	GC の 1 回あたりの平均実行時間		○
	GC 実行回数		○
	JDBCDataSource のプールサイズ		○
	JDBCDataSource の例外発生クローズ件数		○
	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間		○
	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均物理接続確立時間		○
	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間		○
	JDBCDataSource の接続待ち回数		○
	JDBCDataSource の接続タイムアウト数		○
	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間		○
	EntityEJB の 1 回あたりの平均実行時間		○
	EntityEJB のプールサイズ		○
	StatefulSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間		○
	StatefulSessionEJB のアクティベーション回数		○
	StatelessSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間		○
	MessageDrivenEJB の 1 回あたりの平均実行時間		○

リソース	対象項目	補足説明	個別設定※1
JBoss	JVMヒープ使用量		
	JVMヒープ設定に対する使用率		
	JDBCDataSource の 使用中 JDBC 接続数		○
	JDBCDataSource のプール設定に 対する使用率		○
	ThreadPool の使用中スレッド数		○
	ThreadPool のプール設定に対する 使用率		○
	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間		○
	StatefulSessionBeanの1回あたりの 平均実行時間		○
	StatelessSessionBeanの1回あたりの 平均実行時間		○
Hyper-V	ホストのプロセッサ使用率		
	ホストのメモリー使用率		
	論理プロセッサのプロセッサ使用率		○
	ペアレントパーティションのプロセッサ使用率		
	チャイルドパーティションのプロセッサ使用率		○
	ページング回数		
	物理ディスクの使用率		○
	物理ディスクの Read レイテンシ		○
	物理ディスクの Write レイテンシ		○
	ネットワークフレームのドロップ数		○
	パケットオーバーフロー数		○

※1 限界値個別設定が可能な項目

※2 インターバルチェック、最大値チェック、最小値チェックのみ可能な項目

※3 平均値チェック、パーセンタイルチェックのみ可能な項目

※4 CS-i5 で検査可能な項目です。選択時の各項目の意味を記載しています。例えば、検査対象項目で、「ユーザプロセッサ使用率」を選択した場合、CS-i5 では、「ジョブユーザ毎のプロセッサ使用率」の意味になります。

※5 「CS-VMware vmwmon for vCenter Server」によって生成されたフラットファイルを対象とします。

第6章 データ集約－月毎集約

インポートされたフラットファイルを1ヶ月単位で集約し、集約された新たなフラットファイルを作成します。

このフラットファイルは、CS-MAGIC でのグラフ作成、CSV 形式ファイルの出力や CS-ADVISOR での評価に使用することができます。

6.1. データ集約－月毎集約機能概要

データ集約－月毎集約は、各サイト／システムのフォルダにインポートされたフラットファイル(YYYYMMDD.txt(.gz)ファイル)を対象とします。

これを抽出して1ヶ月分のデータを1インターバルのデータに集約し、結果をYYYYMM00.txt(.gz)ファイルに出力します。

出力されたYYYYMM00.txt(.gz)ファイルは、CS-MAGIC で使用することが可能です。

1年間の傾向を見るグラフや、それ以上の期間を対象としたグラフを作成するのに適しています。

データ集約－月毎集約は、収集が完了している(インポートが完了している)1ヶ月分のデータを対象とするため、プログラム実行月のフラットファイルを対象とすることができません。

プログラム実行月のフラットファイルは、今後増える可能性があるため、集約しても、その月の集約値が正確に計算できないためです。

集約対象となるのは、プログラムを実行した月の前の月以前です(「先月」のデータより対象となります)。

データ集約－月毎集約はバッチ処理が可能なため、月に1度だけ実行されるよう、タスクスケジューラや管理コンソール、iim clock server(別紙マニュアル「CS-Utility 使用者の手引き 第1章 iim clock server」を参照してください)にてスケジューリングすることもできます。

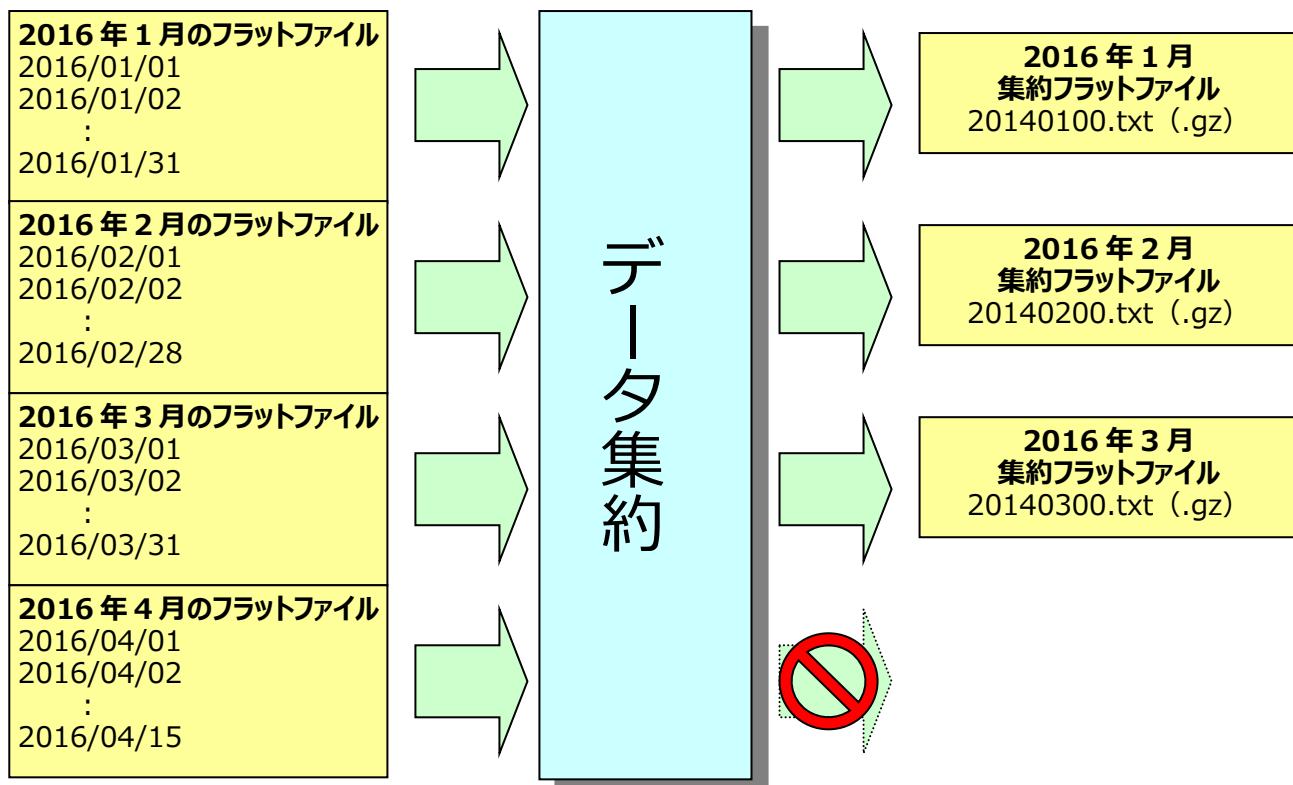
ex.

データ集約－月毎集約を実行した日が2016年4月16日であると仮定します。

フラットファイルは前日の2016年4月15日までインポートされています。

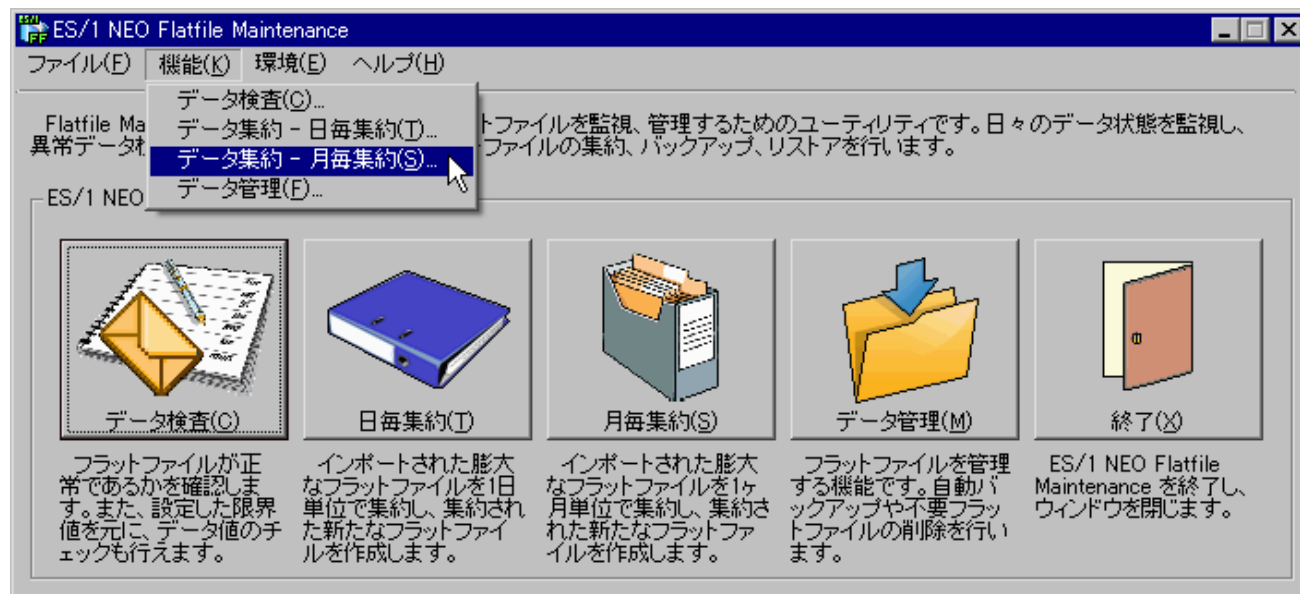
この場合、集約対象となるのは2016年1月から2016年3月までのフラットファイルです。

2016年4月は、4月16日以降のフラットファイルが今後増える可能性があるため集約対象としません。



6.2. 起動方法

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の[月毎集約(S)]ボタンを押下、または「機能(K)」メニューの「データ集約－月毎集約(S)...」を選択します。



起動すると、以下の「データ集約－月毎集約」画面が表示されます。



6.3. 集約条件指定

[条件追加(T)...]ボタンを押下して、フラットファイルを集約する条件を指定します。以下の画面が表示されます。

(1)対象サイト/システム選択(S)

集約対象とするサイト/システムを選択します。ここには、インポートされているフラットファイルのサイト/システムがツリーで一覧表示されます。

また、利用可能なシステムフィルタプロフィールの一覧がコンボボックスに表示されます。

・<対象サイト/システムを直接選択する>

システムフィルタプロフィール名が表示されているコンボボックスで<対象サイト/システムを直接選択する>を選択した場合は、対象とするサイト/システムを直接ツリーから選択します。

・システムフィルタプロフィール選択

システムフィルタプロフィール名が表示されているコンボボックスで<対象サイト/システムを直接選択する>以外を選択した場合は、対象サイト/システムの指定にシステムフィルタプロフィールを使用します。

[設定(E)...]ボタンを押下すると、「システムフィルタプロフィール一覧」画面が表示され、システムフィルタプロフィールの追加や編集を行う事が出来ます。

また、システムフィルタープロファイルを選択した場合は、そのシステムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムがツリーにプレビュー選択表示されます。

ここでの設定変更は出来ませんので、システムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムを変更する場合は、[設定(E)...]ボタンを押下して変更を行ってください。

システムフィルタープロファイルについての詳細は、別紙マニュアル「プロファイル機能 使用者の手引き」を参照してください。

[全選択(A)]ボタンを押下すると、すべてのサイト／システムが選択状態になります。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、サイト／システムの選択をすべて解除します。

(2)月の区切り日(B)

1 ヶ月分のフラットファイルを集約する際、区切り日を1日ではなく任意の日を月の始まりとすることができます。

例えば、区切り日を「5日」とした場合、2016年1月5日から2016年2月4日までを「2016年1月」として集約処理を行います。

なお、区切り日には「1日」から「28日」までを指定可能です。

(3)月毎集約対象資源項目(L)

月毎集約処理実行時に対象とする資源項目を指定します。

[全選択(C)]ボタンを押下すると、すべての資源項目が選択状態になります。

[全解除(V)]ボタンを押下すると、資源項目の選択をすべて解除します。

「SAP ERP 情報」を選択した場合は、右側に詳細項目が表示されます。

注意！

「SAP ERP 情報」の詳細項目を 1 つも選択していなくても、基本となる「SAP ERP 年次トランザクション情報」の集約データは必ず作成されます。

(4) 日毎／月毎集約対象時間定義一覧(T)

集約処理実行時に対象とする期間を指定します。

「全曜日・全時間帯を対象とする」をチェックすると、すべての期間が対象となります。

「曜日・時間帯を指定する」をチェックすると[定義追加(Z)...]ボタンが有効になります。

[定義追加(Z)...]ボタンを押下すると、「データ集約－対象時間帯定義」画面が表示されます。

既存の集約対象時間帯定義を一覧から選択し、[定義編集(M)...]ボタンを押下した場合は、定義内容が初期表示されます。

ここでの定義は、データ集約－日毎集約機能と共通で使用されますのでご注意ください。

ここでは、対象期間内の任意の時間帯や曜日を除外する、または 1 日の区切り時間を変更し、任意の時刻を始まりとするなどの設定を定義することができます。

① 対象時間帯識別名(N)

対象時間帯定義に任意のユニークな名前をつけます。登録する対象時間帯定義を識別するための名称です。「データ集約－月毎集約条件指定」画面において対象時間帯を選択する際、この名称が選択項目として一覧表示されます。

このため、「平日 オンライン時間帯」等、わかり易い名称とすることをお薦めします。

②対象時間帯

対象とする時間帯を 1 時間単位で指定することができます。マウスクリックにより、対象とする時刻を緑色とし、除外する時刻を白色にします。また、[Shift]キーを使用すると、特定範囲を一括反転することができます。

[全選択(S)]ボタンを押下すると、全時間帯を対象とします。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、全時間帯を除外します。

収集データのインターバルに合わせ、詳細指定をすることも可能です。[詳細指定(D)...]ボタンを押下すると、「データ集約 - 対象時間帯定義詳細」画面が表示されます。

選択可能なインターバルは以下の通りです。

2 分、3 分、5 分、10 分、15 分、20 分、30 分

「インターバル単位」を選択し、マウスクリックにより、対象とする時刻を緑色に、除外する時刻を白色にします。[Shift]キーを使用すると、特定範囲を一括反転することができます。「時」のフィールドをクリックすると、その時間台のすべての分を一括して指定することができます。「分」のフィールドをクリックすると、すべての時刻の分を一括して指定することができます。黄色で表示されている部分は、対象と除外が混在していることを示します。

[全選択(A)]ボタンを押下すると、すべての時刻を対象とします。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、すべての時刻を除外します。

[詳細指定解除(D)] ボタンを押下すると、設定していた詳細設定をすべて破棄し、1 時間インターバルの指定となります。詳細指定にて「対象」と「除外」が混在していた時間帯（黄色表示の時間）は「対象」に変更されます。

メモ！

例えば、15 分インターバルでデータを収集している時、ここで「30 分」を選択しても、データが集約されて出力されることはありません。

[設定]ボタンを押下すると、対象時間帯定義詳細を設定して[データ集約－日毎／月毎集約 対象時間帯定義]画面に戻ります。

[キャンセル]ボタンを押下すると、対象時間帯定義詳細を設定せずに[データ集約－日毎／月毎集約 対象時間帯定義]画面に戻ります。

③1 日の区切り(F)

1 日の始まりを 0 時ではなく、任意の時刻としたい場合、その区切り時刻を指定します。

区切り時間前のデータは、前日のプラス 24 時間したデータとして扱われます。

収集インターバルが 15 分の場合の指定例

[例 1]

開始日時2016 年 1 月 2 日 0:00

終了日時2016 年 1 月 2 日 23:45

1 日の区切り 00 時

2016 年 1 月 2 日 0:00～23:45 の 24 時間となります。



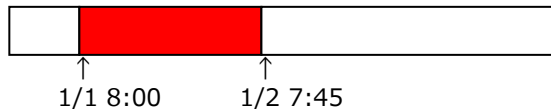
[例 2]

開始日時2016 年 1 月 1 日 8:00

終了日時2016 年 1 月 2 日 7:45

1 日の区切り 00 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 2 日 7:45 の 24 時間となります。



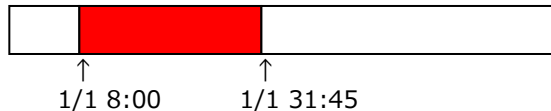
[例 3]

開始日時2016 年 1 月 1 日 8:00

終了日時2016 年 1 月 2 日 7:45

1 日の区切り 08 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 1 日 31:45 の 24 時間となります。



[例 4]

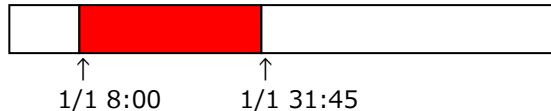
開始日時2016 年 1 月 1 日 8:00

終了日時2016 年 1 月 1 日 31:45

1 日の区切り 08 時

2016 年 1 月 1 日 8:00～2016 年 1 月 1 日 31:45 の 24 時間となります。

この例は pdbmagic で TIMEBASE を 8 時としている場合です。

**メモ !**

pdbmagic で TIMEBASE を指定しており、その指定に従って欠損インターバルを埋め込みたい場合は、ここで必ず TIMEBASE と同じ時間を指定してください。

④対象曜日指定(W)

対象とする曜日を指定します。

この指定を使用することにより、平日のみのデータを集約したり、土日のみのデータを集約したりすることが可能です。

また「ここでの曜日指定は無視し、特定日除外指定での設定を有効とする」を選択すると、対象日と除外日を更に詳細に指定することが可能です。

特定日除外指定機能についての詳細は、本紙「6.7. データ集約－月毎集約実行」の「(2)特定日除外指定」を参照してください。

注意！

複数の対象時間帯定義が指定されている集約条件で、且つ通常の曜日設定と特定日除外指定が混在している場合、その両方の条件で集約を行います。

⑤[OK]ボタン

対象時間帯の指定後[OK]ボタンを押下すると、「データ集約－月毎集約条件指定」画面に戻り、「日毎／月毎集約対象時間帯定義一覧(T)」に、登録した対象時間帯識別名が表示されます。

⑥[OK]ボタン

集約条件を指定後[OK]ボタンを押下すると、「データ集約－月毎集約」画面に戻ります。

6.4. 月毎集約条件編集

定義済みの月毎集約条件を編集する場合、「データ集約－月毎集約」画面の「月毎集約条件一覧(W)」より、対象の月毎集約条件を選択し、[条件編集(S)...]ボタンを押下します。すると、以下の画面が表示されます。

初期状態では、既存の設定が表示されています。(設定内容の編集方法については、本紙「6.3. 集約条件指定」を参照してください)。「サイト/システム選択(S)」には、選択された月毎集約対象サイト/システムがチェックされています。

(1)「サイト/システム選択(S)」を変更しない場合

「月毎集約対象資源項目(L)」や「日毎/月毎集約対象時間帯定義一覧(T)」の変更内容を上書き保存します。

(2)「サイト/システム選択(S)」を変更した場合

新しく選択されたサイト/システムの月毎集約条件が「月毎集約条件一覧(W)」に新規登録されます。

既存の月毎集約条件への変更はありません。

(3)「サイト/システム選択(S)」を追加した場合

定義済みの月毎集約対象サイト/システムについては「月毎集約対象資源項目(L)」や「日毎/月毎集約サマリー対象時間帯定義一覧(T)」の変更内容が上書き保存されます。

追加された月毎集約対象サイト/システムの月毎集約条件は「月毎集約条件一覧(W)」に新規登録されます。

[OK]ボタンを押下すると、設定が保存されます。[キャンセル]ボタンを押下すると設定は保存されません。

6.5. 月毎集約条件コピー

定義済みの月毎集約条件をコピーする場合、「データ集約－月毎集約」画面の「月毎集約条件一覧(W)」より、対象の月毎集約条件を選択し、[コピー(C)...]ボタンを押下します。すると、以下の画面が表示されます。

データ集約 - 月毎集約条件コピー

月毎集約条件のコピーを行います。新しい集約条件に必要な箇所を変更してください。

サイト／システム選択(S)

<対象サイト／システムを直接選択する>

- 京都
- 埼玉
- テストプログラム実行サーバ
- テスト用Webサーバ
- 大阪
- 愛知
- 東京
- 神奈川

設定(E)...

全選択(A)

全解除(B)

日毎／月毎集約対象時間帯定義一覧(D)

☒ 全曜日・全時間帯を対象とする

☐ 曜日・時間帯を指定する

定義追加(Z)...

定義編集(M)...

定義削除(D)

月の区切り日(B)

1日以外を区切りとする場合に指定します

区切り日 1 日

月毎集約対象資源項目(L)

- ☒ プロセッサ・メモリ情報
- ☒ アカウント情報
- ☒ デバイス情報
- ☒ ファイルシステム情報
- ☐ TCP/IP情報(Windows)
- ☐ Oracle情報
- ☐ Oracleデータファイル情報
- ☐ Oracleテーブルスペース情報
- ☐ Symfoware情報
- ☐ SQL Server情報
- ☐ DB2 UDB情報

全選択(C)

全解除(V)

全選択(Q)

全解除(W)

OK

キャンセル

ここで各項目を変更し、[OK]ボタンを押下すると、新たな月毎集約条件が保存されます。

6.6. 月毎集約条件削除

定義済みの月毎集約条件を削除する場合、「データ集約－月毎集約」画面の「月毎集約条件一覧(W)」より、対象の月毎集約条件を選択し、[削除(B)]ボタンを押下します。

6.7. データ集約－月毎集約実行

[illegible]

(1)集約対象期間(M)

①先月のみを対象とする

データ集約一月毎集約実行月の前の月を対象とします。

本項目を選択し、データ集約－月毎集約を月に 1 度だけ実行させるスケジュールにすると、毎月の自動運用が可能です。

②先月までの全フラットファイルを対象とする

データ集約一月毎集約実行月よりも過去のフラットファイルをすべて対象とします。

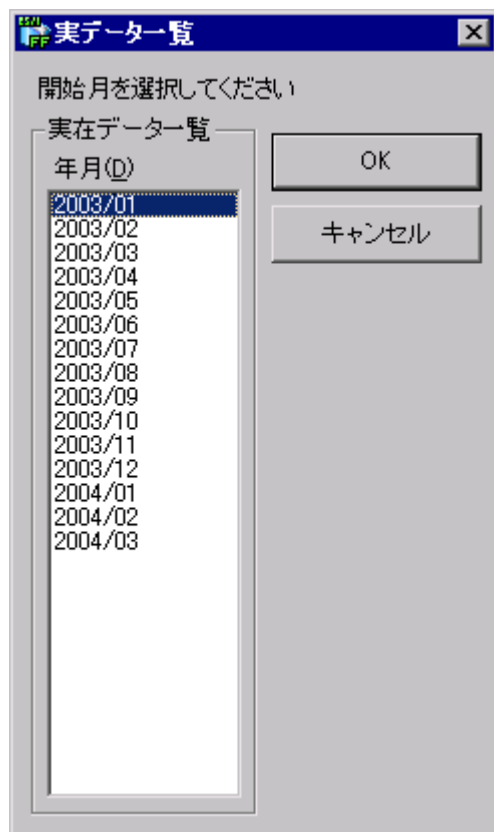
初めてデータ集約－月毎集約を実行する場合に使用します(この場合、既存の全フラットファイルを対象としますので、処理に時間が掛かる場合があります)。

③期間の直接指定

上記①、②をチェックしない場合は、開始月と終了月を直接指定することができます。

[実データ一覧(D)...]ボタンを押下すると、実際に存在する月の一覧が表示されます。ここから開始月、終了月それぞれを選択することもできます。

下画面は開始月の一覧例です。



(2) 特定日除外指定

データを集約する際、任意の特定日を対象外とすることが可能です。

対象システムの非稼働日や休祝日等を集約の対象外とし、集約データの信頼性を向上させます。

特定日除外指定はサイト／システム、及び年毎に設定します。

[設定(H)...]ボタンを押下すると「データ集約－特定日除外指定(1/2)」画面が表示されます。

データ集約 - 日毎/月毎集約 特定日除外指定(1/2)

特定日除外指定を行う年、及びサイト/システムを指定します。複数のサイト/システムを指定した場合は、そのすべてに同じ除外日を設定します。

特定日除外指定対象年(Y)

データ集約時に除外日を指定する年を入力してください。

2014 年

特定日除外指定対象サイト/システム(S)

- ☐ 埼玉
- ☐ 大阪
- ☐ 愛知
- ☒ 東京
 - ☐ Webサーバ
 - ☐ 人事部サーバ
 - ☐ 在庫管理
 - ☐ 社員情報DBサーバ
 - ☐ 経理部サーバ
 - ☐ 総務部DBサーバ
 - ☒ 顧客管理DBサーバ
 - ☐ 顧客管理DBサーバ管理

全選択(A) 全解除(R)

既定確認(Y)... < 戻る(B) 次へ(N) >

日毎/月毎集約を行う際、特定の日を除外することができます。

ここでの指定は日毎集約機能と月毎集約機能で共用となっているため、ご注意ください。

① 特定日除外指定対象年(Y)

設定対象年を指定します。

② 特定日除外指定対象サイト/システム(S)

設定対象とするサイト/システムを選択します。

複数のサイト/システムを選択した場合は、それぞれのサイト/システムに対し、同一の設定を一括して行います。

③ [全選択(A)]ボタン

すべてのサイト/システムを選択状態にします。

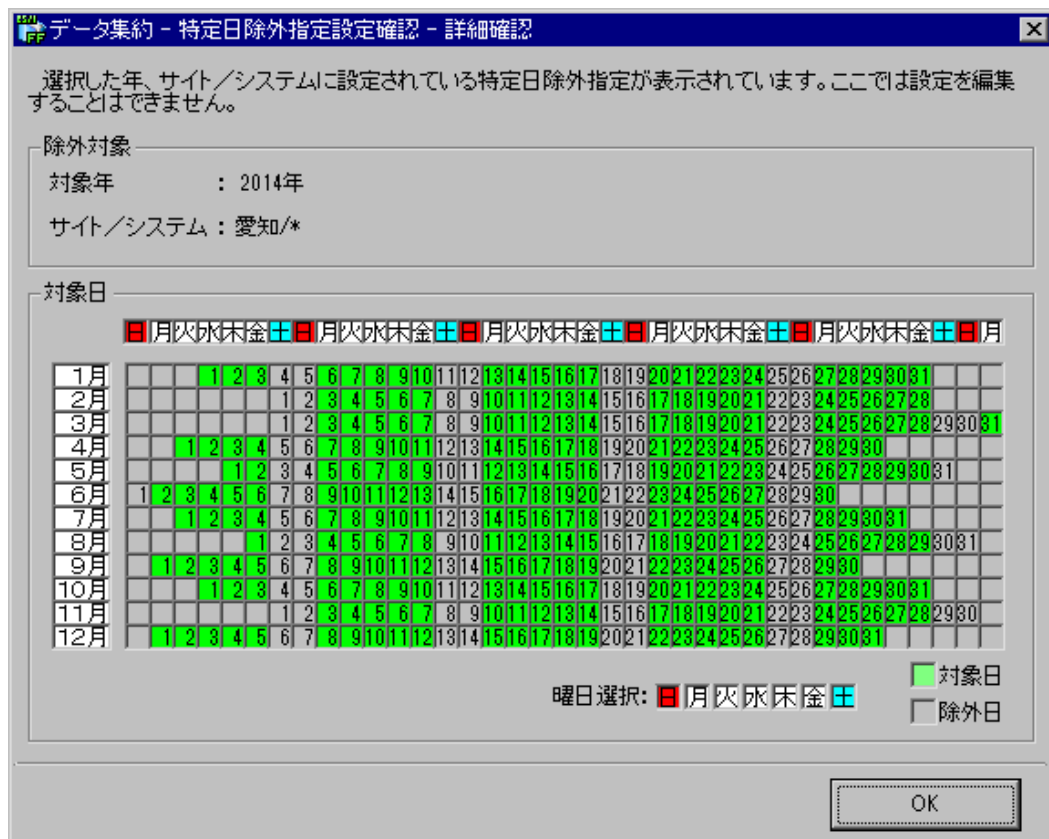
④ [全解除(R)]ボタン

すべてのサイト/システムを非選択状態にします。

⑤[既定確認(V)...]ボタン



現在設定されている年、サイト/システムが一覧表示されます。[削除(R)]ボタンを押下すると、反転選択されている設定を削除することができます。[詳細確認(V)...]ボタンを押下すると、反転選択されている年、サイト/システムの設定詳細を閲覧することができます(ここでは編集を行うことはできません)。



⑥[< 戻る(B)]ボタン

「データ集約」画面に戻ります。

⑦[次へ(N) >]ボタン

年、対象サイト／システムを選択し押下すると「データ集約－特定日除外指定(2/2)」画面が表示されます。

対象とする日が緑色、除外する日が灰色で表示されます。上記例では、土日を除く設定がされています。

対象／除外の切り替えは、マウス左クリックにて行います。日付欄をマウス左クリックすると対象(緑色)／除外(灰色)が切り替わります。

上部曜日欄をマウス左クリックすると、その列を一括して変更する事ができます。また、左部月欄をマウス左クリックすると、その行を一括して変更する事ができます。右下部曜日選択欄をマウス左クリックすると、クリックした曜日を一括して変更することができます。

指定が完了し、[設定保存]ボタンを押下すると、設定内容が保存され、「データ集約－特定日除外指定(1/2)」画面に戻ります。

注意！

特定日除外指定を有効とするには、「日毎/月毎集約対象時間帯定義」の「対象曜日指定」にて、「ここでの曜日設定は無視し、特定日除外指定での設定を有効とする」をチェックします。

詳細は本紙「6.3. 集約条件指定」を参照してください。

(3)月毎集約条件一覧(W)

「データ集約－月毎集約条件指定」画面にて設定した月毎集約条件が一覧表示されます。[条件追加(T)...]ボタンを押下すると月毎集約条件を追加します。月毎集約条件を選択して[削除(B)]ボタンを押下すると、月毎集約条件を削除します。[条件編集(S)...]ボタンを押下すると、月毎集約条件の編集画面が表示されます(編集方法については、本紙「6.3. 集約条件指定」を参照してください)。

(4)すでに集約済みの月は再集約しない(R)

このオプションをチェックすると、データ集約－月毎集約が実行済みのサイト／システム／対象月が指定されていた場合に、再度集約処理を行わず処理をスキップします。

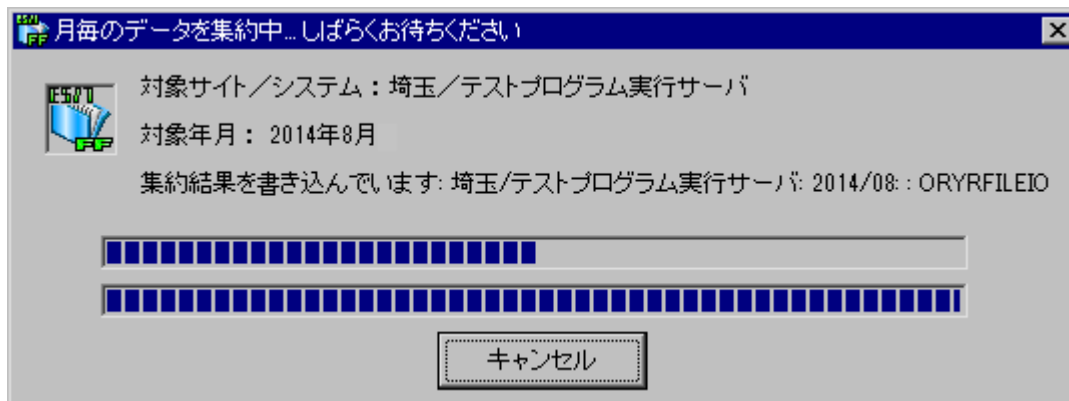
データ集約－月毎集約を途中で中断してしまった後の再実行時に有効です。

また、「集約対象期間(M)」で「先月までの全フラットファイルを対象とする」オプションを指定している場合などは、データ集約－月毎集約が実行されていないすべての月だけ処理する事が出来ます。

(5)[実行]ボタン

前記(1)～(3)までの設定内容に従い、月毎集約処理を実行します。

月毎集約条件が複数存在する場合、1 度の実行ですべての月毎集約条件を実行します。



月毎集約処理実行中は、現在処理中のサイト／システム名や対象月等が表示されます。途中、[キャンセル]ボタンを押下すると、月毎集約処理を中断することができます。月毎集約処理が正常終了すると、以下のメッセージが表示されます。



月毎集約処理にてエラーが発生した場合は、上記画面にエラーメッセージが表示されます。

(6)[保存して終了(X)]ボタン

前記(1)～(3)までの設定内容を保存し、データ集約を終了します。設定内容の保存を行うと、次回起動時に保存した内容が初期表示されます。

また、バッチ処理にてデータ集約を実行する場合は、ここで保存した設定内容に従って動作します。バッチ処理については後述の「第 11 章 バッチ実行」を参照してください。

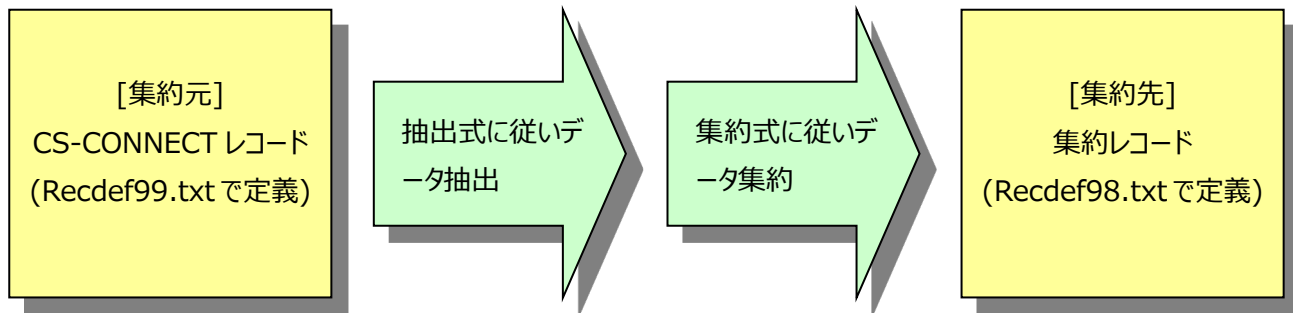
(7)[キャンセル]ボタン

前記(1)～(4)までの設定内容を保存せずに、データ集約を終了します。

6.8. ES/1 NEO CS-CONNECT データの集約

ES/1 NEO Flatfile Maintenanceのデータ集約 - 月毎集約機能は、Acquireや各種データ収集エージェントの他に、ES/1 NEO CS-CONNECT で取り込んだフラットファイルを取り込み、年次グラフ向けの集約を行うことができます。

集約元となるES/1 NEO CS-CONNECT のレコード定義を元に、フィールド単位で合計、平均、最大、最小、パーセンタイル値など、任意の集約方式で年次レコードを定義することが可能です。



6.8.1. 集約レコード/フィールドの定義

任意の集約方式で年次レコードを定義します。年次レコードの定義は、データ集約- 月毎集約設定ウィザードにて行います。データ集約 - 月毎集約設定ウィザードは「データ集約 - 月毎集約」画面から起動します。

「データ集約 - 月毎集約」画面の[CS-CONNECT(I)...]ボタンを押下すると「データ集約 - ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約設定」画面が表示されます。

[illegible]

左側のリストに ES/1 NEO CS-CONNECT で定義されている集約元レコードと、定義したレコードの対比表が表示されます。右側のツリーには、ここで定義した集約先の年次レコードとフィールドが表示されます。

年次レコードを定義するには、集約先のレコード番号と説明文を決定し、集約元となる ES/1 NEO CS-CONNECT レコードを選択する必要があります。

集約レコードの定義を開始します。[追加(A)...]ボタンを押下すると「データ集約－ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約設定－月毎集約レコード定義(1/6)」画面が表示されます。

データ集約 - ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約設定 - 月毎集約レコード定義(1/6)

ES/1 NEO CS-CONNECTによって外部取り込みされたデータの月毎集約方法を定義します。月毎集約方法の定義はレコード単位で行います。

ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約先レコード番号(S)

ES/1 NEO CS-CONNECTで取り込んだデータの集約実行後、作成される新レコードの番号を指定します。

データ集約後のレコード番号: 9400番 (9400~9999番が指定可能)

ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約先レコード名

データ集約後のレコード名: CCYR9400

ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約先レコードの説明(D)

このレコードの説明文を入力します。集約元となるES/1 NEO CS-CONNECTの外部取り込みレコードが識別可能な説明文を入力してください。

無題

ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約元レコードの指定方法(C)

新レコードの集約元となるES/1 NEO CS-CONNECTのレコードを指定する方法を選択します。1つのレコードから抽出する方法と、2つのレコードから抽出する方法があります。

☒ ES/1 NEO CS-CONNECT 集約元レコードを1つだけ選択する

☐ ES/1 NEO CS-CONNECT 集約元レコードを2つ選択する

☐ 集約元レコードの抽出式を直接手入力する (複雑な集約レコードを定義する場合に選択します)

< 戻る(B)

次へ (N) >

(1)集約先レコードの定義**①ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約先レコード番号(S)**

集約先となる年次レコードの番号を指定します。

レコード番号は、9400 番～9999 番まで、任意の番号を指定することが出来ます。

②ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約先レコード名

集約先となる年次レコードのレコード名です。

レコード名は、ES/1 NEO Flatfile Maintenance が内部的に使用する名称で「CCYR + レコード番号」が自動的に割り当てられます。

③ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約先レコードの説明(D)

レコードの説明には、集約先レコードの説明文を記入することが出来ます。

④ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約元レコードの指定方法(C)

ES/1 NEO Flatfile Maintenance の集約レコード定義ウィザードで定義を行う場合、通常、1 つか 2 つの集約元レコードを選択します。

(a)ES/1 NEO CS-CONNECT 集約元レコードを 1 つだけ選択する

集約元となる ES/1 NEO CS-CONNECT のレコードを 1 つ選択します。

(b)ES/1 NEO CS-CONNECT 集約元レコードを 2 つ選択する

集約元となる ES/1 NEO CS-CONNECT のレコードを 2 つ選択し、それぞれの結合条件を指定します。

(c)集約元レコードの抽出式を直接手入力する（複雑な集約レコードを定義する場合に選択します）

GUI での設定では定義できないような複雑な集約元レコードからの抽出条件（JOIN 句、GROUP BY 句、HAVING 句、ORDER BY 句など）を手入力します。

各種設定を行い、[次へ (N)>]ボタンを押下します。

(a)または(b)を選択している場合は、「データ集約－ES/1 NEO CS-CONNECT データ集約設定－集約レコード定義(2/6)」画面が表示されます。(c)を選択している場合は、「データ集約－ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約設定－月毎集約レコード定義(5/6)」画面が表示されます。

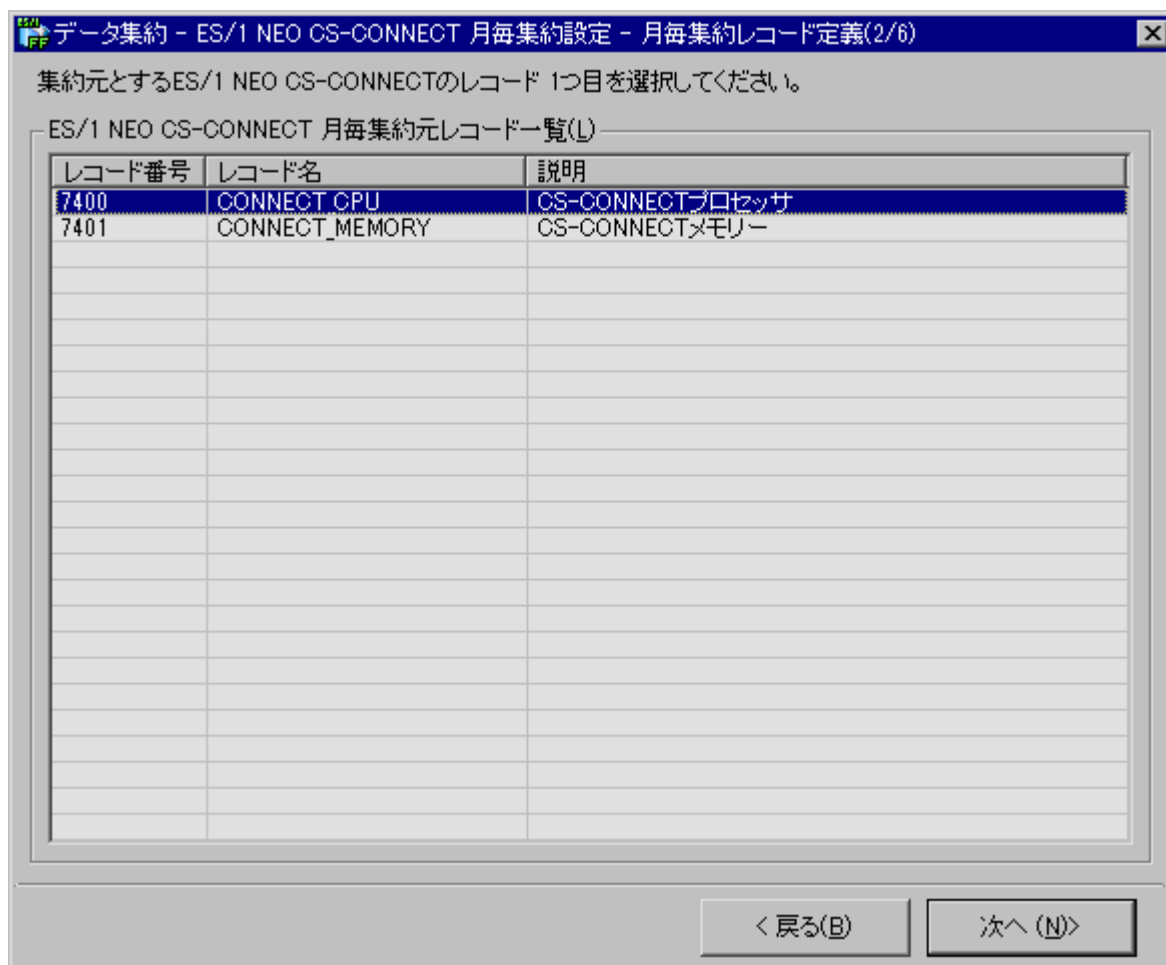
(2)集約元レコードの選択(1レコード選択型)

[illegible]

集約元となる ES/1 NEO CS-CONNECT のレコードが一覧で表示されます。ここから集約対象とするレコードを 1 つ選択します。

[次へ (N)>]ボタンを押下すると、集約先レコードのフィールドを定義するための、「(7)集約先レコードのフィールド定義」画面へ推移します。

(3)集約元レコードの選択(2レコード選択型-1)



集約元となる ES/1 NEO CS-CONNECT のレコードが一覧で表示されます。ここから集約対象とするレコードの 1 つ目を選択します。

[次へ (N)>]ボタンを押下すると、2 つ目のレコードを選択するための、「(4)集約元レコードの選択(2 レコード選択型-2)」の画面へ推移します。

(4)集約元レコードの選択(2レコード選択型-2)

[illegible]

集約元となる ES/1 NEO CS-CONNECT のレコードが一覧で表示されます。1 つ目のレコードとして選択したレコードは除外した一覧となっています。ここから集約対象とするレコードの 2 つ目を選択します。

[次へ (N)>] ボタンを押下すると、選択した 2 レコードの結合条件を指定するための、「(5)集約元レコードの結合条件指定」の画面へ推移します。

(5)集約元レコードの結合条件指定

データ集約 - ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約設定 - 月毎集約レコード結合条件(4/6)

選択した2つの月毎集約元レコードを結合する条件を指定します。

結合対象となる月毎集約元レコード

レコード1 : 7400 CONNECT_CPU CS-CONNECTプロセッサ
レコード2 : 7401 CONNECT_MEMORY CS-CONNECTメモリー

月毎集約元レコード結合方法(J)

☒ 内部結合(JOIN) ☐ 外部結合(OUT JOIN)

月毎集約元レコード結合条件に使用するフィールド(C)

レコード1のフィールド名	説明	レコード2のフィールド名	説明

①レコード結合条件に使用するフィールド(C)

2つのレコードを選択した場合、それぞれのレコードを結び付けるための結合条件を指定することが可能です。

指定は、[追加(A)...]ボタンを押下し表示される「結合条件選択」画面にて行います。ここで、それぞれのレコードから結合に使用するフィールドを1つずつ選択します。複数のフィールドを結合条件とする場合は、追加を繰り返し行います。結合条件が特に指定されていない場合、ES/1 NEO Flatfile Maintenance はそれぞれのレコードのインターバルが一致するレコード同士を結合し、集約を行います。

結合条件が指定されている場合、インターバルが一致するレコードで、かつ、結合条件を満たすレコード同士を結合し、集約を行います。複数の結合条件を指定した場合、それらすべてを同時に満たすレコードが結合されます。

例えば、USRREC1 と USRREC2 の 2 つレコードに IPADDR フィールドが定義されている場合、それらを結合条件として指定することで、レコード同士を結合することが可能です。

②レコード結合方法(J)

2つのレコードを結合する場合、結合条件に合致しないレコードがあった時にどのように取り扱うかを、レコード結合方法で指定します。

内部結合(JOIN)

内部結合は、双方の条件を満たすレコードのみが結合され、集約の対象となります。

外部結合(OUT JOIN)

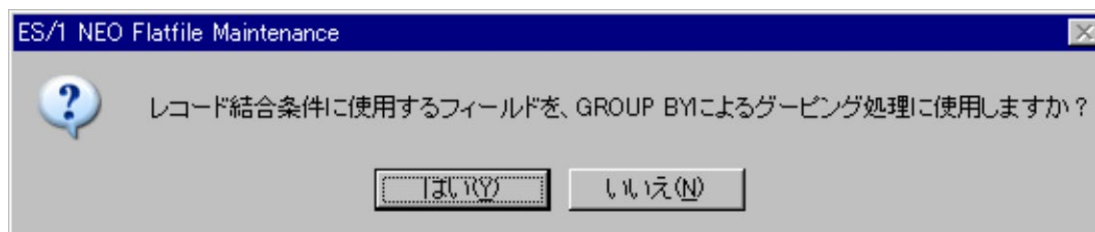
外部結合は、片方に選択したレコードに合致するレコードがなくても、常にもう片方のレコードが集約の対象となります。この場合、存在しないレコードに相当するデータとして、NULLを意味する特別なレコードが結合されます。

注意！

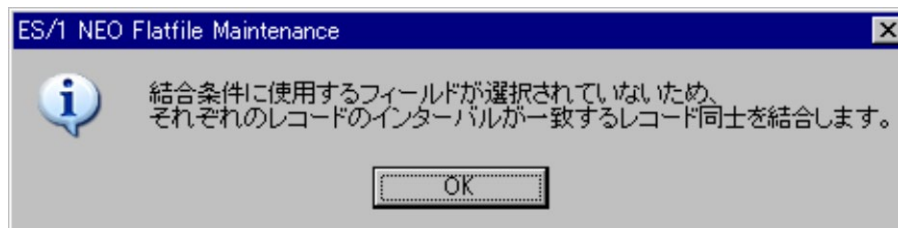
結合条件を特に指定しなくても、既定の条件としてインターバルが一致するという条件に設定されていることに注意してください。

[次へ (N)>]ボタンを押下すると、集約先レコードのフィールドを定義するための、「(6)集約先レコードのフィールド定義」画面へ推移します。

結合条件を指定している場合、選択した結合条件フィールド群をグルーピング項目として使用するか否かを選択するメッセージが表示されます。



結合条件に使用するフィールドを選択していない場合、以下のメッセージが表示され、それぞれの集約元レコードで一致するインターバル同士が結合条件となります。



(6)集約元レコードの抽出式を手入力

データ集約 - ES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約設定 - 月毎集約レコード定義(5/6)

ES/1 NEO CS-CONNECTのレコードから抽出を行う式を入力してください。「対象レコード/フィールド入力支援」欄で項目を選択し[▲挿入]ボタンを押下すると、レコード名とフィールド名が挿入されます。

データを抽出するためのクエリー文後半(JOIN句、GROUP BY句等)
月毎集約元レコードからの抽出式(C)

月毎集約元レコード/フィールド入力支援(L) ▲挿入(I)

- 7400 CONNECT_CPU CS-CONNECTプロセッサ
- 7401 CONNECT_MEMORY CS-CONNECTメモリー

< 戻る(B) 次へ (N) >

「集約元レコードからの抽出式(C)」欄に JOIN/GROUP BY/HAVING/ORDER BY 句相当の抽出式を入力します。
[▲挿入(I)]ボタンを押下すると「集約元レコード/フィールド入力支援(L)」欄で選択されている項目のシンボル名が「集約元レコードからの抽出式(C)」欄に挿入されます。

メモ！

抽出式の記述方法については、マニュアル「クエリー文法解説書」を参照してください。

(7)集約先レコードのフィールド定義

[illegible]

集約先のレコードには、集約元レコードから計算した集約結果を格納する、任意のフィールドを定義します。
フィールドには、フィールド番号、フィールド名、フィールド説明、フィールドタイプ、データタイプなどの集約後の年次グラフ作成で使用する一般的な定義の他に、データ集約のための集約方法、グルーピングの有無を指定することが可能です。

①フィールド定義(F)

初期状態では、フィールド番号 1～5 の定型フィールドが表示されます。このフィールド群は、一般的な年次レコードにも存在するフィールド群です(必須フィールドではないため、不要な場合は削除しても問題ありません)。

[追加(A)...]、[編集(E)...]ボタンを押下し、フィールドを定義します。

月毎集約先のES/1 NEO CS-CONNECT 月毎集約レコードに從属させるフィールドを定義します。フィールド番号は1～5は定型フィールドです。

フィールド情報(F)

フィールド番号 : 6

フィールド名 : FLD9400_6

フィールド説明 : 無題

グルーピング(G)

選択した月毎集約元フィールドでグルーピングをするか否か選択します

☐ グルーピングする

☒ グルーピングしない

データタイプ(D)

☒ 浮動小数点型

☐ 整数型

☐ 文字型

フィールドタイプ(T)

☒ 平均値

☐ 最小値

☐ 最大値

☐ 合計値

☐ 50パーセンタイル値

☐ 80パーセンタイル値

☐ 90パーセンタイル値

☐ 名前または識別情報

☐ その他

月毎集約元のフィールド(S)

☒ フィールドの月毎集約対象としたES/1 NEO CS-CONNECTのレコードから対象フィールドを選択

☐ フィールド計算式を直接入力 (AS指定は記述しないでください)

レコード名	フィールド名	データタイプ	フィールドタイプ	説明
CONNECT_CPU	INTVL	整数型	その他	Interval
CONNECT_CPU	USRUSE	浮動小数点型	平均値	ユーザモード使用率
CONNECT_CPU	SYSUSE	浮動小数点型	平均値	カーネルモード使用率
CONNECT_CPU	IOWAIT	浮動小数点型	平均値	I/O Wait率
CONNECT_CPU	QUEUELEN	浮動小数点型	平均値	ランキュー長
CONNECT_CPU	QUEUEOCC	浮動小数点型	平均値	ランキュー占有率
CONNECT_MEMORY	INTVL	整数型	その他	Interval
CONNECT_MEMORY	PAGESCAN	浮動小数点型	平均値	スキャンされたページ数(/sec)
CONNECT_MEMORY	PAGEFREE	浮動小数点型	平均値	解放されたページ数(/sec)

生成されるフィールド計算式(P)

AVG(CONNECT_CPUINTVL)

OK キャンセル

(a)フィールド番号

ES/1 NEO Flatfile Maintenance や ES/1 NEO CS-MAGIC が内部的に使用する、フィールドの格納位置です。

1 からの連番で自動的に割り当てられます。

(b)フィールド名

フィールドを一意に識別するための名称で、英字で始まる半角英数字で 63 文字までの識別子を入力します。

1 つのレコードには、同じ名前のフィールドを重複して登録することはできません。

(c)フィールド説明

フィールドの説明文です。ES/1 NEO Flatfile Maintenance や ES/1 NEO CS-MAGIC でフィールドを参照する場合に、このフィールド説明を使用します。フィールドの説明のほかに、[合計][平均][最大]などの集約方法や、(ms)(/sec)などのデータの単位も含めて記入することをお勧めします。

(d) グループング(G)

グループングの指定が行われているときにデータ集約を行うと、グループングに指定したフィールドの値毎にデータをまとめて集約を行います。

複数のフィールドがグループングの対象として指定されている場合、それぞれのフィールドの存在するすべての組み合わせについてグループングが行われます。

グループングが指定されていない場合、すべてのデータをひとまとめにして集約を行います。

平均、最大、最小、合計、パーセンタイル値など、集合演算を行うフィールドをグループングの対象には出来ません。

ex. 以下のデータで USERREC1.IPADDR をグループング対象とした場合

[集約元データ]

USRREC1.IPADDR	USRREC1.CPUUSE
192.168.0.1	20
192.168.0.2	30
192.168.0.1	12
192.168.0.2	22
192.168.0.3	44
192.168.0.4	50

↓

[集約後]

USRREC1.IPADDR	AVG(USRREC1.CPUUSE)
192.168.0.1	$(20+12)/2=16$
192.168.0.2	$(30+22)/2=26$
192.168.0.3	$(44)/1=44$
192.168.0.4	$(50)/1=50$

(e) データタイプ(D)

浮動小数点型、整数型、文字型のうちいずれかを指定します。文字列を取り扱う場合は文字型を、実数などの数値データを取り扱う場合、通常は浮動小数点型を選択してください。

(f)フィールドタイプ(I)

どのような種類のデータが格納されているかを定義します。

時刻情報を持つ詳細データを年次データとして集約する際は、どのような計算を行うかを指定することが出来ます。

平均値

集約元データの平均値を計算します。欠損値以外の元データの合計／欠損値以外の元データの件数が格納されます。集約式の AVG() に相当します。

最小値

集約元データのうち、欠損値以外で最も小さい値が格納されます。集約式の MIN() に相当します。

最大値

集約元データのうち、欠損値以外で最も大きい値が格納されます。集約式の MAX() に相当します。

合計値

集約元データの合計を計算します。欠損値以外の元データの合計が格納されます。集約式の SUM() に相当します。

50 パーセンタイル値

集約元データの 50 パーセンタイル値を計算します。集約式の PTL() で 50 を指定した場合に相当します。

80 パーセンタイル値

集約元データの 80 パーセンタイル値を計算します。集約式の PTL() で 80 を指定した場合に相当します。

90 パーセンタイル値

集約元データの 90 パーセンタイル値を計算します。集約式の PTL() で 90 を指定した場合に相当します。

名前または識別情報

グルーピングに使用するレコードを、一意に識別するためのフィールドです。グルーピングを行う場合はこちらを指定してください。

その他

上記以外の集約を行う場合に指定します。

(g)集約元のフィールド(S)

「データ集約－ES/1 NEO CS-CONNECT データ集約設定－集約レコード定義(2/6)」画面、または「データ集約－ES/1 NEO CS-CONNECT データ集約設定－集約レコード定義(3/6)」画面で選択した ES/1 NEO CS-CONNECT の集約元レコードに属するフィールドの一覧が表示されています。

一覧から集約元のフィールドを選択すると、「生成されるフィールド計算式(P)」欄に、データ集約時に実行する計算式が自動で表示されます。「フィールド計算式を直接入力」を選択すると、式の直接入力を行うことができます。

メモ！

計算式の記述方法については、マニュアル「クエリー文法解説書」を参照してください。

②クエリー確認(P)

これまでに定義した、集約元レコードからの抽出式、集約先レコード／フィールドの集約式を実行する場合の SQL 文を参照することが可能です。

[クエリー確認(P)...]ボタンを押下すると「クエリープレビュー」画面が表示されます。



ここで[構文チェック(T)]ボタンを押下すると、定義した SQL 文が正しいかどうか、チェックすることも可能です。

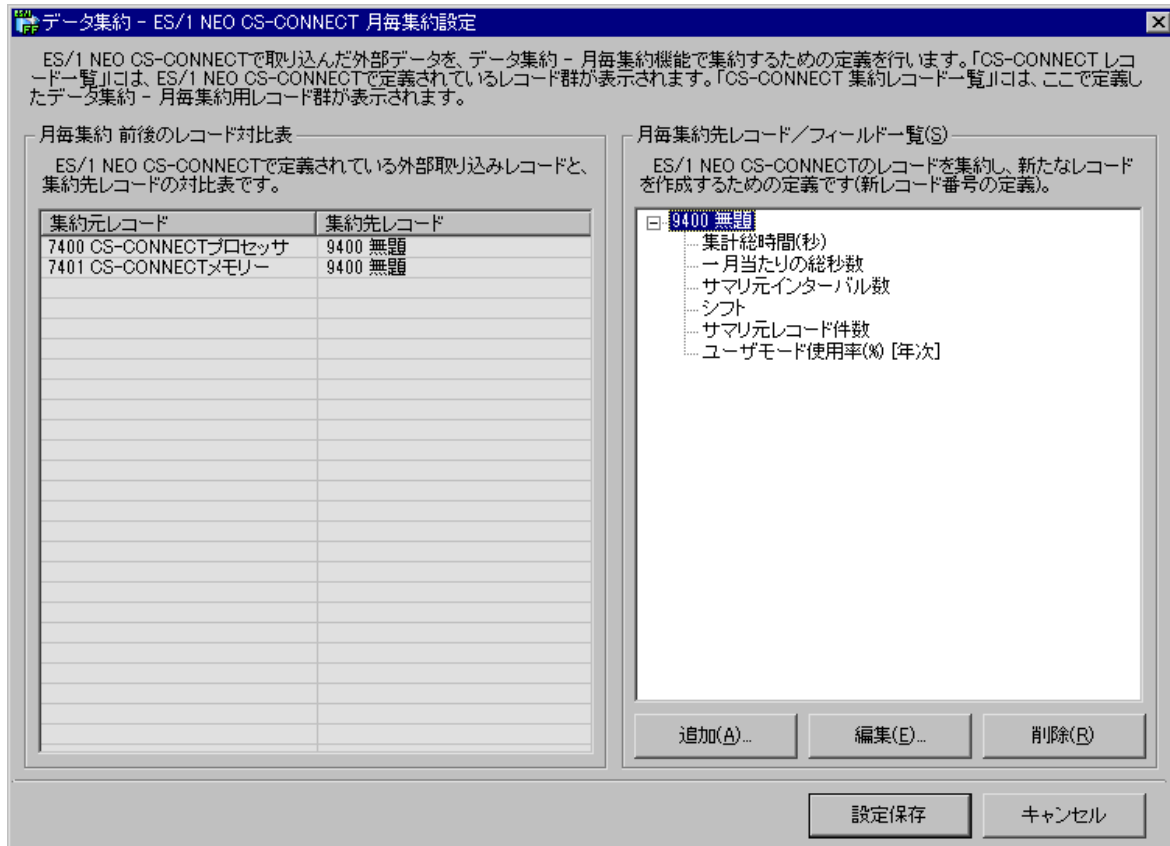
③集約レコードの定義完了

[完了]ボタンを押下すると、集約先レコードの定義が完了し、「データ集約－ES/1 NEO CS-CONNECT データ集約指定」画面に戻ります。



(7)集約レコード定義の保存

集約レコードの定義が完了すると、「CS-CONNECT 集約レコード一覧(S)」のツリーに、定義した新レコードが追加されます。



①[設定保存]ボタン

[設定保存]ボタンを押下すると、定義したレコードの内容が保存されます。

②[キャンセル]ボタン

[キャンセル]ボタンを押下すると、定義を保存せずに終了します。

第7章 データ集約－日毎集約

インポートされたフラットファイルを 1 日単位で集約し、新たなフラットファイルを生成します。

この日毎に集約されたフラットファイルは、CS-MAGIC でのグラフ作成や CSV 形式ファイルの出力、CS-ADVISOR での評価に使用することができます。

1 日分のデータ量(フラットファイル)が非常に大きい場合、この機能を使用すると月次グラフの作成時間を短縮する事ができます。

また、読み込みデータ量が少なくなる為、使用する内部メモリも少なくて済みます。

7.1. データ集約－日毎集約機能概要

データ集約－日毎集約機能は、各サイト／システムのフォルダにインポートされたフラットファイル(YYYYMMDD.txt(.gz)ファイル)を対象とします。これを抽出して 1 日分のデータを 1 インターバルのデータに集約し、結果をカテゴリ毎に分けられた _m.*¥YYYYMMDD.txt(.gz)ファイルに出力します。

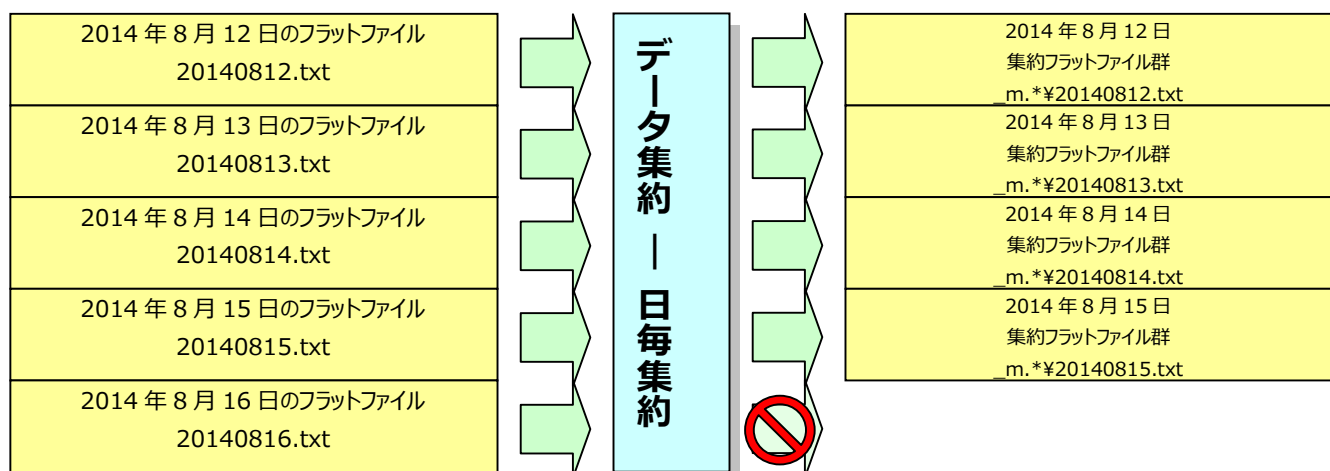
集約フラットファイルは、システム情報(Windows)、HTTP ログ情報、Oracle 情報、SAP ERP 情報、VMware 情報など、データの種類によってカテゴリ毎に生成されます。カテゴリ毎に分けられた _m.*¥YYYYMMDD.txt(.gz)ファイルは、CS-MAGIC で使用することが可能です。1 ヶ月間の傾向を見るグラフや、それ以上の期間を対象としたグラフを作成するのに適しています。

データ集約－日毎集約機能はバッチ処理が可能なため、日に 1 度だけ実行されるよう、タスクスケジューラや iim clock server(別紙マニュアル「CS-Utility 使用者の手引き 第 1 章 iim clock server」を参照してください)にてスケジューリングすることもできます。

ex.

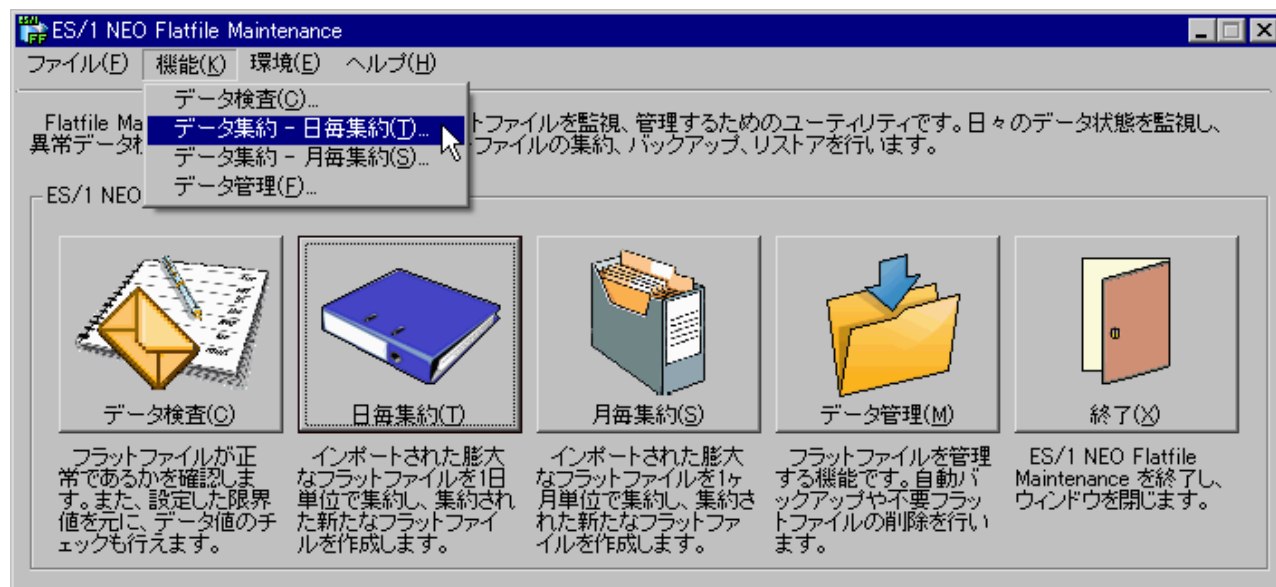
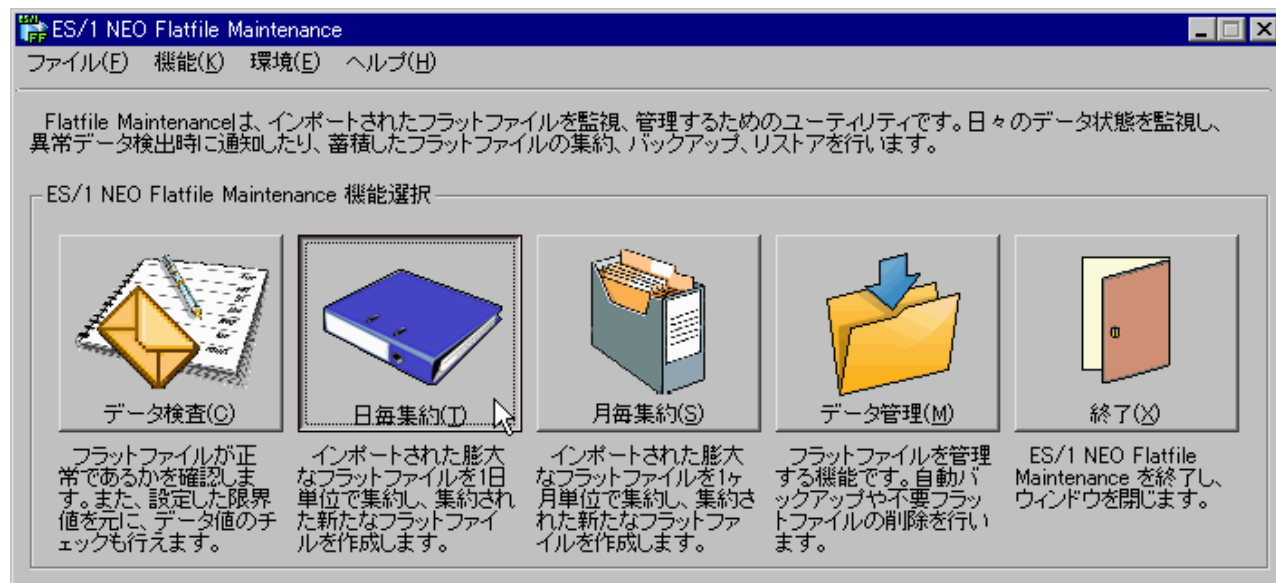
日毎集約を実行した日が 2014 年 8 月 16 日であると仮定します。フラットファイルは前日の 2014 年 8 月 15 日までインポートされています。この場合、集約対象となるのは 2014 年 8 月 15 日のフラットファイルです。2014 年 8 月 16 は、8 月 16 日のフラットファイルが今後増える可能性があるため集約対象としません。

(フラットファイルに 24 時以降の時刻でデータが格納されている場合、2014 年 8 月 15 日だけではなく 2014 年 8 月 14 日も読み込み対象となります。この場合、2014 年 8 月 14 日の 00:00～23:59 までのデータは読み捨てられ、24:00 以降のデータが 2014 年 8 月 15 日分として読み込まれます)



7.2. 起動方法

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の[日毎集約(T)]ボタンを押下、または「機能(K)」メニューから「データ集約 - 日毎集約(T)...」を選択します。



起動すると、以下の「データ集約－日毎集約」画面が表示されます。

日毎の集約を実行する際の条件を、名前(日毎集約条件名)を付けて定義します。

日毎集約条件は複数の登録が可能となっており、登録されている日毎集約条件が1行1条件で、この画面に一覧表示されます。

初期状態では、前日分の全時間帯、全サイト/システム、全カテゴリを集約する日毎集約条件、「全時間帯(0-24 時)」が登録されています。

初期登録されている日毎集約条件「全時間帯(0-24 時)」を使用すると、日毎に集約可能な項目(カテゴリ)すべてが集約されます。また、対象サイト/システムに「<すべて>/<すべて>」、集約カテゴリに「すべてのカテゴリ」が定義されている為、対象サイト/システムや集約カテゴリが追加された場合でも、自動的に日毎集約の対象となります。

7.3. 日毎集約条件指定

日毎集約条件を新たに定義する場合は、「データ集約－日毎集約」画面で、[条件追加(T)...]ボタンを押下します。
[条件追加(T)...]ボタンを押下すると、以下の「データ集約－日毎集約－集約条件指定(1/2)」画面が表示されます。

(1)日毎集約条件名(K)

定義する日毎集約条件を識別する一意の名前を入力します。

メモ！

日毎集約条件名に以下の文字は使用できません。

/ ; * ? " < > | : ¥ ,

(2) サイト／システム選択(S)

日毎集約対象となるサイト／システムを指定します。ここには、インポートされているフラットファイルのサイト／システムがツリーで一覧表示されます。

また、利用可能なシステムフィルタープロファイルの一覧がコンボボックスに表示されます。

① <対象サイト／システムを直接選択する>

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>を選択した場合は、対象とするサイト／システムを直接ツリーから選択します。

② システムフィルタープロファイル選択

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>以外を選択した場合は、対象サイト／システムの指定にシステムフィルタープロファイルを使用します。

[設定(E)...]ボタンを押下すると、「システムフィルタープロファイル一覧」画面が表示され、システムフィルタープロファイルの追加や編集を行う事が出来ます。

また、システムフィルタープロファイルを選択した場合は、そのシステムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムがツリーにプレビュー選択表示されます。

ここでの設定変更は出来ませんので、システムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムを変更する場合は、[設定(E)...]ボタンを押下してシステムフィルタープロファイルの変更を行ってください。

システムフィルタープロファイルについての詳細は、別紙マニュアル「プロファイル機能 使用者の手引き」を参照してください。

③ [全選択(A)]ボタン

すべてのサイト／システムツリーが選択状態になります。

④ [全解除(R)]ボタン

サイト／システムツリーの選択をすべて解除します。

(3) 日毎／月毎集約対象時間帯定義一覧(T)

日毎集約の実行時に、対象とする期間を指定します。

本設定は「データ集約－月毎集約」と共用の設定ですので、編集や削除にはご注意ください。

「全曜日・全時間帯を対象とする」をチェックすると、全曜日 00 時台から 23 時台まですべての期間が対象となります。

「曜日・時間帯を指定する」をチェックすると[定義追加(Z)...]ボタンが有効になります。[定義追加(Z)...]ボタンを押下すると、「データ集約－対象時間帯定義」画面が表示されます。

既存の日毎／月毎集約対象時間帯定義を一覧から選択し、[定義編集(M)...]ボタンを押下した場合は、定義内容が初期表示されます。

データ集約 - 日毎／月毎集約 対象時間帯定義

集約対象とする時間帯、曜日を指定し、一意の対象時間帯識別名を入力します。

対象時間帯識別名(N)
一意の対象時間帯識別名を入力します。指定した対象時間帯が、ここで入力した名前で識別され、適用するシステムを選択する際に表示されます。

対象時間帯
任意の時刻のみを対象としたり、除外したりすることができます。

00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

☒ 対象
☐ 除外

全選択(S)
全解除(R)
詳細指定(D)...

1日の区切り(月毎集約のみ有効)(E)
通常、1日の区切り(1日の始まり)は「00時」ですが、任意の時刻を区切りとすることができます。

区切り時刻 00 時

対象曜日指定(W)
集約対象とする曜日を指定します。対象とする曜日をチェックし、除外する曜日のチェックをはずします。

☒ 日曜日 ☒ 月曜日 ☒ 火曜日 ☒ 水曜日 ☒ 木曜日 ☒ 金曜日 ☒ 土曜日
☐ ここでの曜日設定は無視し、特定日除外指定での設定を有効とする

OK キャンセル

ここでは、対象期間内の任意の時間帯や曜日を除外する指定を行う事ができます。

※「曜日・時間帯を指定する」を選択した場合、ここで指定した対象時間帯定義に加え、全曜日 00 時台から 23 時台まですべての期間を対象とした集約が行われます。

「1 日の区切り」については、「データ集約－月毎集約」機能でのみ有効となりますので、ここでは設定する必要がありません。

①対象時間帯識別名(N)

対象時間帯定義に任意のユニークな名前をつけます。登録する対象時間帯定義を識別するための名称です。「データ集約－日毎集約－集約条件指定(1/2)」画面において対象時間帯を選択する際、この名称が選択項目として一覧表示されます。このため、「平日 オンライン時間帯」等、わかり易い名称とすることをお薦めします。

②対象時間帯

対象とする時間帯を 1 時間単位で指定することができます。マウスクリックにより、対象とする時刻を緑色とし、除外する時刻を白色にします。また、[Shift] キーを使用すると、特定範囲を一括反転することができます。

[全選択(S)]ボタンを押下すると、全時間帯を対象とします。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、全時間帯を除外します。

収集データのインターバルに合わせ、詳細指定をすることも可能です。[詳細指定(D)...]ボタンを押下すると、「データ集約－日毎／月毎集約 対象時間帯定義詳細」画面が表示されます。

データ集約 - 日毎／月毎集約 対象時間帯定義詳細

ファイル作成対象とする時間帯を任意のインターバル単位で指定します。任意の時刻のみを対象としたり、除外したりすることができます。

対象時間帯(H)

インターバル単位: 2 分

分	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
時	00	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58
01	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
02	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
03	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
04	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
05	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
06	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
07	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
08	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
09	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
10	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
11	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
12	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
13	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
14	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
15	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
16	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
17	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
18	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
19	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
20	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
21	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
22	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	
23	00	02	04	06	08	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50	52	54	56	58	

■ 対象 □ 除外 ■ 一部対象

全選択(A) 全解除(R)

詳細指定解除(D) キャンセル 設定

選択可能なインターバルは以下の通りです。

2 分、3 分、5 分、10 分、15 分、20 分、30 分

「インターバル単位」を選択し、マウスクリックにより、対象とする時刻を緑色に、除外する時刻を白色にします。[Shift] キーを使用すると、特定範囲を一括反転することができます。「時」のフィールドをクリックすると、その時間台のすべての分を一括して指定することができます。「分」のフィールドをクリックすると、すべての時刻の分を一括して指定することができます。黄色で表示されている部分は、対象と除外が混在していることを示します。

[全選択(A)]ボタンを押下すると、すべての時刻を対象とします。

[全解除(R)]ボタンを押下すると、すべての時刻を除外します。

[詳細指定解除(D)] ボタンを押下すると、設定していた詳細設定をすべて破棄し、1 時間インターバルの指定となります。詳細指定にて「対象」と「除外」が混在していた時間帯（黄色表示の時間）は「対象」に変更されます。

メモ！

例えば、「15 分」インターバルでデータを収集している時、ここで「30 分」を選択しても、データが集約されて出力されることはありません。

[設定]ボタンを押下すると、対象時間帯定義詳細を設定して「データ集約－日毎／月毎集約 対象時間帯定義」画面に戻ります。

[キャンセル]ボタンを押下すると、対象時間帯定義詳細を設定せずに「データ集約－日毎／月毎集約 対象時間帯定義」画面に戻ります。

③対象曜日指定(W)

対象とする曜日を指定します。この指定を使用することにより、平日のみのデータを集約したり、土日のみのデータを集約したりすることが可能です。

また「ここでの曜日指定は無視し、特定日除外指定での設定を有効とする」を選択すると、対象日と除外日を更に詳細に指定することが可能です。

特定日除外指定機能についての詳細は、本紙「7.7. データ集約－日毎集約の実行」の「(2) 特定日除外指定」を参照してください。

④[OK]ボタン

対象時間帯の指定後[OK]ボタンを押下すると、「データ集約－日毎集約－集約条件指定(1/2)」画面に戻り、「日毎／月毎集約対象時間帯定義一覧(T)」に、登録した対象時間帯識別名が表示されます。

⑤[キャンセル]ボタン

対象時間帯の指定を保存せずに、「データ集約－日毎集約－集約条件指定(1/2)」画面に戻ります。

(4)日毎集約対象カテゴリ(L)

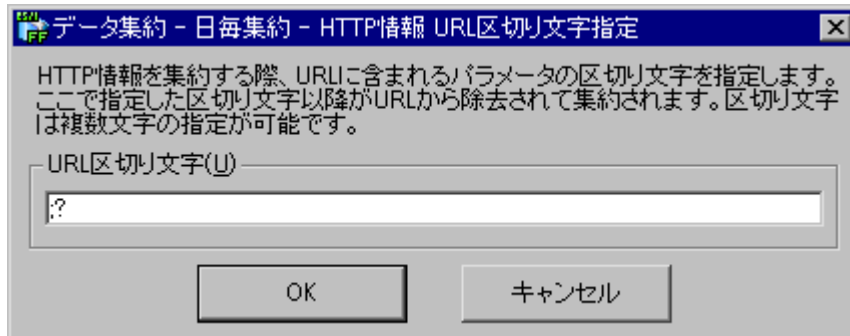
日毎集約対象とするカテゴリを指定します。ここで選択したカテゴリのデータ(レコード)が日毎に集約され、新たなフラットファイルとなります。

初期状態では全カテゴリが選択されています。

(5)URL 区切り文字

日毎集約対象カテゴリで「HTTP 情報」を選択している場合に指定します。

[設定(U)...]ボタンを押下すると、「データ集約－日毎集約－HTTP 情報 URL 区切り文字指定」画面が表示されます。



ここで指定した区切り文字以降を URL から除去し集約が行われます。

初期状態では「;」と「?」が指定されています。

「HTTP 情報」を集約しない場合、ここでの指定は必要ありません。

ex 「;」と「?」を URL 区切り文字として指定した場合

HTTP 情報の URL データ集約前に「;」または「?」が含まれているかどうか検査が行われます。いずれか片方が含まれていた場合、その文字以降をカットして集約処理を行います。URL 区切り文字に指定した複数の文字が同時に含まれていた場合、URL の先頭から数えて最初に現れた文字を区切り文字として、それ以降をカットして集約処理を行います。

/example.com/main/portal.php	→ /example.com/main/portal.php(何もしない)
/example.com?id=xxx&category=xxx	→ /example.com (「?」以後をカット)
/example.com/ex;jsessionId=xxxxyyyyy...	→ /example.com/ex (「;」以後をカット)
/example.com/ex;jsessionId=xxxxyyyyy?id=xx	→ /example.com/ex (「;」以後をカット)

(6)[< 戻る(B)]ボタン

日毎集約定義を中断し、「データ集約－日毎集約」画面に戻ります。

(7)[次へ (N)>]ボタン

「データ集約－日毎集約－集約条件指定(2/2)」画面が表示されます。

データ集約 - 日毎集約 - 集約条件指定(2/2)

日毎集約を実行するフラットファイルの期間と1日の区切り時刻を指定します。対象日の自動設定も可能です。

開始日
対象期間の開始日を指定します。日付を固定としない場合は、日毎集約を実行したコンピュータのシステム日付を基準とした相対日となります。

年(Y) 月(M) 日(D)

☒ 実行年の 年前 ☒ 実行月の ヶ月前 ☒ 実行日の 日前

☐ 固定年 ☐ 固定月 ☐ 固定日

実データ一覧(Q)...

終了日
対象期間の終了日を指定します。終了日には、開始日に指定した日を基準とした相対日も指定する事ができます。

☐ 開始日を基準として終了日を指定する(S)

年(E) 月(G) 日(P)

☒ 実行年の 年前 ☒ 実行月の ヶ月前 ☒ 実行日の 日前

☐ 開始日の ☐ 開始日の ☐ 開始日の

☐ 固定年 ☐ 固定月 ☐ 固定日

実データ一覧(V)...

1日の区切り(B)
00時以外を区切りとする場合に指定します 区切り時刻 時

1日前(Q) 1ヶ月前(W)

< 戻る(B) 完了

(8)開始日

直接年月日を指定する方法と、実行日を基準とした相対日の指定が可能です。

(9)終了日

直接年月日を指定する方法と、実行日を基準とした相対日の指定が可能です。

「開始日を基準として終了日を指定する(S)」をチェックすると、開始日を基準とした相対日を指定することができます。

※ 開始日、終了日を相対日とした場合、「データ集約 - 日毎集約」画面の「開始日」「終了日」欄に年月日は表示されず、NOW(,,)や FROM(,,)のような形式で表示されます。

対象日の指定例を以下に示します。

・先月 1 ヶ月間(1 日から月末まで)を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	実行月の 1 ヶ月前	固定日 1 日
終了日	開始日の 0 年後	開始日の 1 ヶ月後	開始日の -1 日後

・昨日までの 1 ヶ月間を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	実行月の 1 ヶ月前	実行日の 0 日前
終了日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前

・去年 1 年間を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 1 年前	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	開始日の 1 年後	開始日の 0 ヶ月後	開始日の -1 日後

・去年から過去 3 年間を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 3 年前	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	開始日の 3 年後	開始日の 0 ヶ月後	開始日の -1 日後

・今年の 1 月 1 日から昨日までを対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前

・昨日を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前
終了日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前

・特定の 1 日を対象とする(2001/1/1 の場合)

	年	月	日
開始日	固定年 2001 年	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	固定年 2001 年	固定月 1 月	固定日 1 日

・特定の期間を対象とする(2001/3/1～2001/9/30 の場合)

	年	月	日
開始日	固定年 2001 年	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	固定年 2001 年	固定月 9 月	固定日 30 日

(10)入力支援機能－1 日前

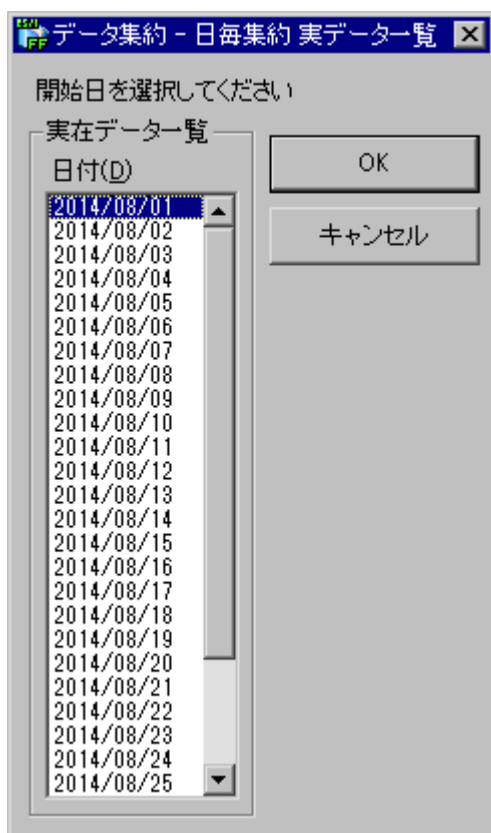
[1 日前(Q)]ボタンを押下すると、グラフ作成実行日の前日(昨日)を対象とする相対日が年月日欄に自動的に設定されます。通常の運用ではこの設定を使用します。

(11)入力支援機能－1 ヶ月前

[1 ヶ月前(W)]ボタンを押下すると、グラフ作成実行日の前月 1 日から末日(先月 1 ヶ月間)を対象とする相対日が年月日欄に自動的に設定されます。

(12)実データ一覧

対象期間を固定日とする場合、実際に存在するフラットファイルを検索し、一覧表示させることができます。開始日の指定では[実データ一覧(C)...]ボタンを、終了日の指定では[実データ一覧(V)...]ボタンを押下すると、実際に存在するフラットファイルの日付一覧が表示されます。



(13)1 日の区切り(B)

1 日分のフラットファイルを集約する際、区切り時刻を 0 時ではなく任意の時刻を始まりとすることができます。例えば、区切り時刻を「8 時」とした場合、2014 年 8 月 1 日 8 時 00 分から 2014 年 8 月 2 日 7 時 59 分までを「2014 年 8 月 1 日」として日毎集約処理を行います。

また、フラットファイルに 24 時以降のデータが格納されている場合、指定日の前日分フラットファイルも読み込み対象となります。0 時区切りの場合は前日分フラットファイルの 24 時以降を、8 時区切りとした場合は 32 時以降を当日分データの一部として読み込みます。

(14)[< 戻る(B)]ボタン

「データ集約 - 日毎集約 - 集約条件指定(1/2)」画面に戻ります。

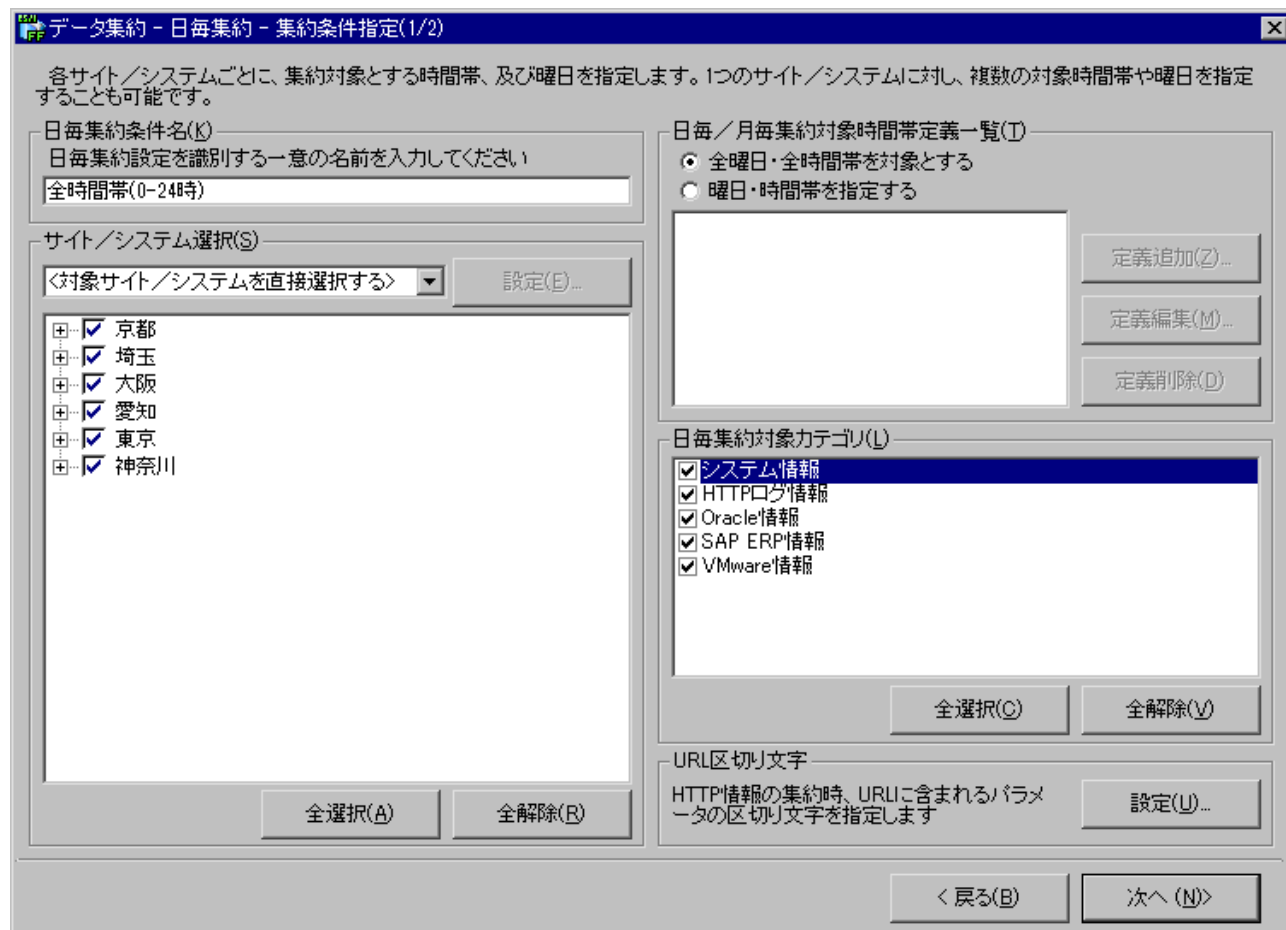
(15)[完了]ボタン

作成した日毎集約条件が、「データ集約 - 日毎集約」画面の「日毎集約条件一覧(W)」欄に追加されます。

この時点ではまだ日毎集約条件の保存を行っていません。「データ集約 - 日毎集約」画面で[保存して終了(X)]ボタンを押下し、設定の保存を行ってください。

7.4. 日毎集約条件編集

定義済みの日毎集約条件を編集する場合、「データ集約－日毎集約」画面の「日毎集約条件一覧(W)」欄より、対象の日毎集約条件を選択し、[条件編集(S)...]ボタンを押下します。すると、以下の「データ集約－日毎集約－集約条件指定(1/2)」画面が表示されます。



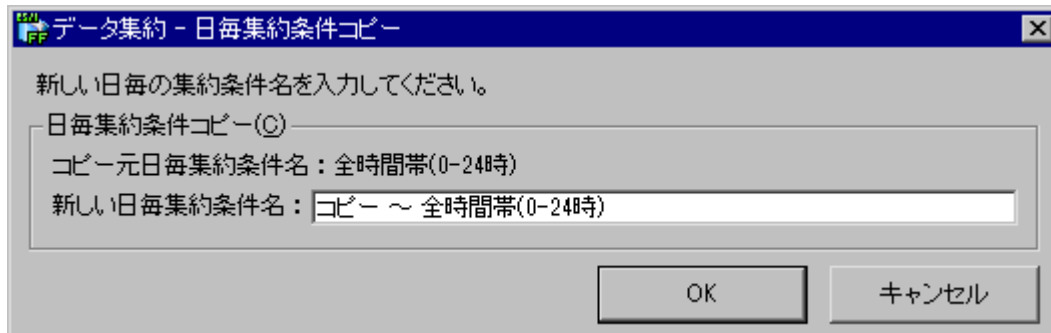
編集対象とした日毎集約条件の内容が初期状態で選択表示されています。

設定内容の編集方法については、日毎集約条件の新規追加時と同じですので、本紙「7.3. 日毎集約条件指定」を参照してください。

7.5. 日毎集約条件コピー

定義済みの日毎集約条件をコピーする場合、「データ集約－日毎集約」画面の「日毎集約条件一覧(W)」欄から対象の日毎集約条件を選択し、[コピー(C)...]ボタンを押下します。

すると、以下の「データ集約－日毎集約条件コピー」画面が表示されます。



ここで新しい日毎集約条件名を入力し、[OK]ボタンを押下すると、コピー元と同じ定義の日毎集約条件が生成されます。その後、必要に応じて設定内容の編集等を行ってください。

日毎集約条件の編集については、本紙「7.4. 日毎集約条件編集」を参照してください。

7.6. 日毎集約条件削除

定義済みの日毎集約条件を削除する場合、「データ集約－日毎集約」画面の「日毎集約条件一覧(W)」欄から対象の日毎集約条件を選択し、[削除(B)...]ボタンを押下します。日毎集約条件を複数選択し、一括して削除する事も可能です。

7.7. データ集約 – 日毎集約の実行

定義した日毎集約条件を使用し、日毎の集約処理を実行します。

実行する日毎集約条件を「日毎集約条件一覧(W)」から反転選択し、[実行]ボタンを押下します。

日毎集約条件を複数選択した場合は、それぞれの日毎集約条件を逐次実行します。

定義した日毎集約条件は、[実行]ボタンを押下したタイミングで定義ファイルに保存されます。

バッチ実行の手順については、本紙「第 11 章 バッチ実行」を参照してください。

(1)既に集約済みの日は再集約しない(R)

このオプションをチェックすると、データ集約 – 日毎集約が実行済みのサイト/システム/対象日が指定されていた場合に、再度集約処理を行わず処理をスキップします。

データ集約を途中で中断してしまった後の再実行時等に有効です。

(2) 特定日除外指定

データを集約する際、任意の特定日を対象外とすることが可能です。

対象システムの非稼働日や休祝日等を集約の対象外とし、集約データの信頼性を向上させます。

特定日除外指定はサイト／システム、及び年毎に設定します。

本設定は「データ集約－月毎集約」と共用の設定ですので、編集や削除にはご注意ください。

[設定(H)...]ボタンを押下すると「データ集約－日毎／月毎集約 特定日除外指定(1/2)」画面が表示されます。

データ集約 - 日毎／月毎集約 特定日除外指定(1/2)

特定日除外指定を行う年、及びサイト／システムを指定します。複数のサイト／システムを指定した場合は、そのすべてに同じ除外日を設定します。

特定日除外指定対象年(Y)

データ集約時に除外日を指定する年を入力してください。

2014 年

特定日除外指定対象サイト／システム(S)

- ☐ 埼玉
- ☐ 大阪
- ☐ 愛知
- ☒ 東京
 - ☐ Webサーバ
 - ☐ 人事部サーバ
 - ☐ 在庫管理
 - ☐ 社員情報DBサーバ
 - ☐ 経理部サーバ
 - ☐ 総務部DBサーバ
 - ☒ 顧客管理DBサーバ
 - ☐ 顧客管理DBサーバ管理

全選択(A) 全解除(R)

既定設定確認(Y)... < 戻る(B) 次へ(N) >

① 特定日除外指定対象年(Y)

設定対象年を指定します。

② 特定日除外指定対象サイト／システム(S)

設定対象とするサイト／システムを選択します。

複数のサイト／システムを選択した場合は、それぞれのサイト／システムに対し、同一の設定を一括して行います。

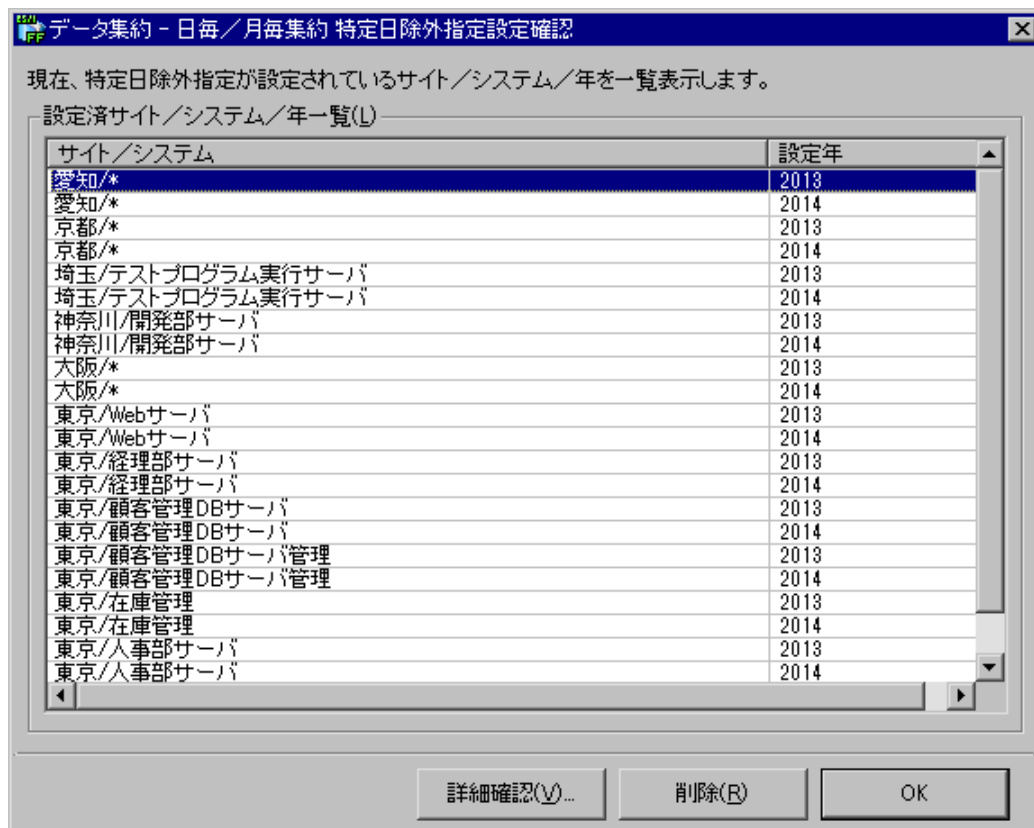
③ [全選択(A)]ボタン

すべてのサイト／システムを選択状態にします。

④ [全解除(R)]ボタン

すべてのサイト／システムを非選択状態にします。

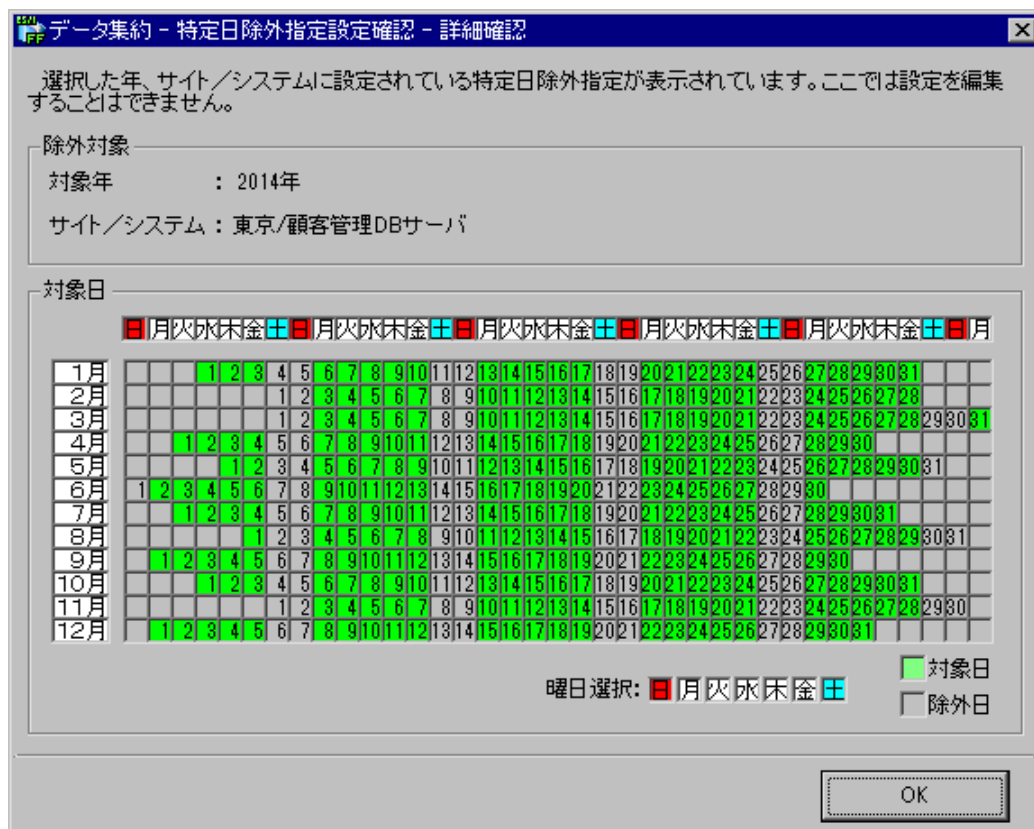
⑤[既定確認(V)...]ボタン



現在設定されている年、サイト/システムが一覧表示されます。

[削除(R)]ボタンを押下すると、反転選択されている設定を削除することができます。

[詳細確認(V)...]ボタンを押下すると、「データ集約 - 特定日除外指定設定確認 - 詳細確認」画面が表示され、反転選択されている年、サイト/システムの設定詳細を閲覧することができます(ここでは編集を行うことはできません)。



⑥[< 戻る(B)]ボタン

「データ集約－日毎集約」画面に戻ります。

⑦[次へ(N) >]ボタン

年、対象サイト／システムを選択し押下すると「データ集約－日毎／月毎集約 特定日除外指定(2/2)」画面が表示されます。

データ集約－日毎／月毎集約 特定日除外指定(2/2)

選択した年のカレンダーが表示されています。データ集約対象から除外する日を指定します。月／曜日欄をクリックすると、その行／列を一括して除外することができます。

除外対象
対象年 : 2014年
サイト／システム : 東京/顧客管理DBサーバ

対象日(D)

1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

全選択(A) 全解除(B)

曜日選択: 月 火 水 木 金 土 日

対象日
除外日

< 戻る(B) 設定保存

対象とする日が緑色、除外する日が灰色で表示されます。上記例では、土日を除外する設定がされています。

対象／除外の切り替えは、マウス左クリックにて行います。日付欄をマウス左クリックすると対象(緑色)／除外(灰色)が切り替わります。

上部曜日欄をマウス左クリックすると、その列を一括して変更する事ができます。また、左部月欄をマウス左クリックすると、その行を一括して変更する事ができます。右下部曜日選択欄をマウス左クリックすると、クリックした曜日を一括して変更することができます。

指定が完了し、[設定保存]ボタンを押下すると、設定内容が保存され、「データ集約－日毎／月毎集約 特定日除外指定(1/2)」画面に戻ります。

注意！

特定日除外指定を有効とするには、「データ集約－日毎／月毎集約 対象時間帯定義」の「対象曜日指定」にて、「ここでの曜日設定は無視し、特定日除外指定での設定を有効とする」をチェックします。

詳細は本紙「7.3. 日毎集約条件指定」の「(3)日毎／月毎集約対象時間帯定義一覧(T)」を参照してください。

第8章 データ管理

データ管理は、インストール済みフラットファイルを ZIP 形式で圧縮して自動バックアップしたり、自動クリーンアップを実施したりする機能です。日々蓄積されるフラットファイルの管理を行います。

8.1. データ管理機能概要

データ管理は、不要なインポート済みフラットファイルの自動バックアップ／自動クリーンアップを行う機能です。運用時にフラットファイルの管理を意識しなくても、日々蓄積されるフラットファイルがディスクを圧迫しないように、自動的にバックアップやクリーンアップを行います。

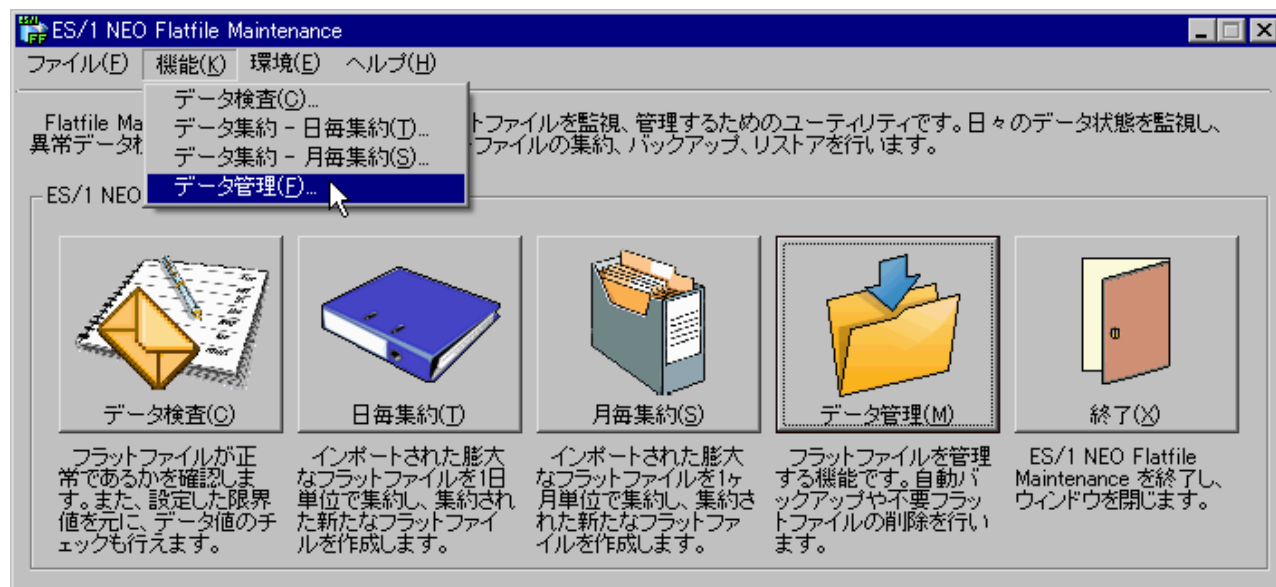
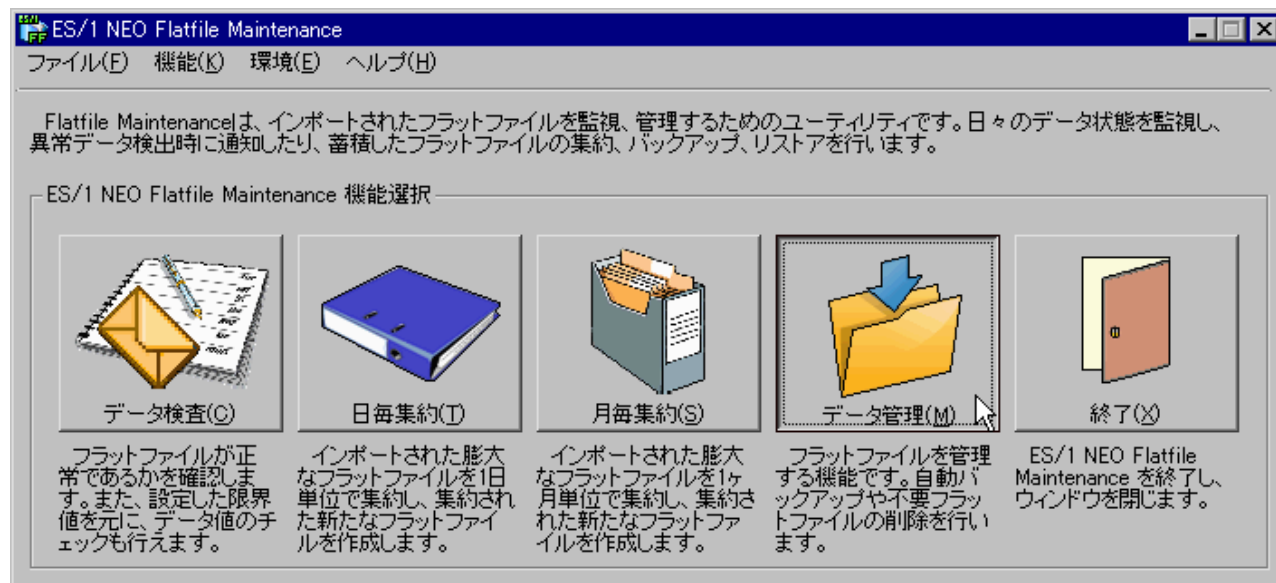
データ管理は実行日を基準とした相対日で開始日と終了日を範囲指定できるため、常に 1 年分のフラットファイルのみが存在するようにする運用などが可能です。

また、未集約フラットファイル(通常のフラットファイル)、日毎集約フラットファイル(データ集約－日毎集約機能で作成したフラットファイル)、月毎集約フラットファイル(データ集約－月毎集約機能で作成したフラットファイル)それぞれ別々に対象期間等を指定できるため、未集約フラットファイルは 1 ヶ月間保持、集約したフラットファイルは 1 年間保持といった指定も可能です。

データ管理はバッチ処理が可能なため、月に 1 度だけ実行されるよう、タスクスケジューラや iim clock server(別紙マニュアル「CS-Utility 使用者の手引き 第 1 章 iim clock server」を参照してください)、管理コンソール(別紙マニュアル「管理コンソール 使用者の手引き」を参照してください)にてスケジューリングすることも可能です。

8.2. 起動方法

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の[データ管理(M)]ボタンを押下、または「機能(K)」メニューから「データ管理(F)...」を選択します。



起動すると、以下の「データ管理」画面が表示されます。

データ管理では、フラットファイルのバックアップや削除を行います。データ管理は、バックアッププランに設定された情報を基に実行されます。ここでは、バックアッププランの作成、編集、削除等を行います。また、フラットファイルのバックアップや削除をここで実行することもできます。

処理選択(S)

- ☒ データ管理を実行する
「バックアッププラン一覧」で反転選択されているバックアッププランを実行します。
- ☐ 既存のバックアッププランを編集する
作成済みのバックアッププランを選択し、編集を行います。バックアッププラン名を変更すると、参照作成となります。
- ☐ バックアッププランを新規作成する
データ管理を行うためのバックアッププランを新規作成します。

バックアッププラン一覧(L)

項目	設定情報
対象期間 - 開始日	20140901
対象期間 - 終了日	20140930
システムフィルタ - プロファイル名	<全サイト/システム>
フラットファイルのバックアップを行う	はい
フラットファイルの削除を行う	いいえ
対象フラットファイル種別	すべてのフラットファイル種別

コピー(C)... 削除(D)

フラットファイルバックアップフォルダ(F)

フラットファイルのバックアップ先フォルダを指定します。ネットワーク上の他コンピュータに導入されている場合は、コンピュータ名からパスを指定します。

 参照(V)... 容量確認(E)...

☐ リモート接続の認証が必要(A)

ユーザ名(U) :

パスワード(P) :

パスワードの確認入力(B) :

キャンセル 保存 実行

データ管理の実行単位は「バックアッププラン」です。

バックアッププランとは、対象とするサイト/システムや対象とする期間など、バックアップやクリーンアップを行うための方法が定義されたグループです。このバックアッププランを作成し、データ管理を行います。

8.3. バックアッププランの作成

バックアッププランを新たに定義する場合は、「データ管理」画面の「処理選択(S)」欄から「バックアッププランを新規作成する」を選択し、[次へ(N)...]ボタンを押下します。

[次へ(N)...]ボタンを押下すると、以下の「データ管理－バックアッププランウィザード(1/2)」画面が表示されます。

(1)バックアッププラン名(P)

定義するバックアッププランを識別する一意の名前を入力します。

メモ！

バックアッププラン名に以下の文字は使用できません。

/ ; * ? " < > | : ¥ ,

(2)サイト/システム選択(S)

データ管理の対象となるサイト/システムを指定します。ここには、インポートされているフラットファイルのサイト/システムがツリーで一覧表示されます。

また、利用可能なシステムフィルタープロファイルの一覧がコンボボックスに表示されます。

①<対象サイト/システムを直接選択する>

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで<対象サイト/システムを直接選択する>を選択した場合は、対象とするサイト/システムを直接ツリーから選択します。

②システムフィルタープロファイル選択

システムフィルタープロファイル名が表示されているコンボボックスで<対象サイト／システムを直接選択する>以外を選択した場合は、対象サイト／システムの指定にシステムフィルタープロファイルを使用します。

[設定(E)...]ボタンを押下すると、「システムフィルタープロファイル一覧」画面が表示され、システムフィルタープロファイルの追加や編集を行う事が出来ます。

また、システムフィルタープロファイルを選択した場合は、そのシステムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムがツリーにプレビュー選択表示されます。

ここでの設定変更は出来ませんので、システムフィルタープロファイルに登録されているサイト／システムを変更する場合は、[設定(E)...]ボタンを押下してシステムフィルタープロファイルの変更を行ってください。

システムフィルタープロファイルについての詳細は、別紙マニュアル「プロファイル機能 使用者の手引き」を参照してください。

③[全選択(A)]ボタン

すべてのサイト／システムツリーが選択状態になります。

④[全解除(R)]ボタン

サイト／システムツリーの選択をすべて解除します。

(3)データ管理内容(C)

データ管理の実行時に、どのような処理を行うかを選択します。

①フラットファイルのバックアップ

データ管理実行時、フラットファイルを「コピー」します。

②フラットファイルのクリーンアップ

データ管理実行時、フラットファイルを「削除」します。

上記①と②を両方選択した場合、フラットファイルは「移動」になります。

(4)対象フラットファイル種別(G)

データ管理対象とするフラットファイルの種別を選択します。

①未集約フラットファイル

集約されていない、通常の詳細フラットファイルです。

②日毎集約機能で作成したフラットファイル

データ集約の日毎集約機能を使用して作成されたフラットファイルです。

詳細については「第 7 章 データ集約－日毎集約」を参照してください。

③月毎集約機能で作成したフラットファイル

データ集約の月毎集約機能を使用して作成されたフラットファイルです。

詳細については「第 6 章 データ集約－月毎集約」を参照してください。

(5)[< 戻る(B)]ボタン

設定を破棄し、「データ管理」画面に戻ります。

(6)[次へ (N)...]ボタン

「データ管理－バックアッププランウィザード(2/2)」画面が表示されます。

データ管理－バックアッププランウィザード(2/2)

データ管理を実行するフラットファイルの期間を指定します。対象日の自動設定も可能です。

開始日
対象期間の開始日を指定します。日付を固定としない場合は、データ管理を実行したコンピュータのシステム日付を基準とした相対日となります。

年(Y) 月(M) 日(D)

☒ 実行年の 年前 ☒ 実行月の ヶ月前 ☒ 実行日の 日前

☐ 固定年 ☐ 固定月 ☐ 固定日

実データ一覧(O)...

終了日
対象期間の終了日を指定します。終了日には、開始日に指定した日を基準とした相対日も指定することができます。

☐ 開始日を基準として終了日を指定する(S)

年(E) 月(G) 日(P)

☒ 実行年の 年前 ☒ 実行月の ヶ月前 ☒ 実行日の 日前

☐ 開始日の ☐ 開始日の ☐ 開始日の

☐ 固定年 ☐ 固定月 ☐ 固定日

実データ一覧(V)...

< 戻る(B) 登録

(7)開始日

データ管理対象とする期間の開始日を指定します。

直接年月日を指定する方法と、実行日を基準とした相対日の指定が可能です。

(8)終了日

データ管理対象とする期間の終了日を指定します。

直接年月日を指定する方法と、実行日を基準とした相対日の指定が可能です。

「開始日を基準として終了日を指定する(S)」をチェックすると、開始日を基準とした相対日を指定することができます。

※ 開始日、終了日を相対日とした場合、「データ管理」画面の「対象期間－開始日」「対象期間－終了日」欄には今日を基準とした日付が表示されます。

対象日の指定例を以下に示します。

・先月 1 ヶ月間(1 日から月末まで)を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	実行月の 1 ヶ月前	固定日 1 日
終了日	開始日の 0 年後	開始日の 1 ヶ月後	開始日の -1 日後

・昨日までの 1 ヶ月間を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	実行月の 1 ヶ月前	実行日の 0 日前
終了日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前

・去年 1 年間を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 1 年前	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	開始日の 1 年後	開始日の 0 ヶ月後	開始日の -1 日後

・去年から過去 3 年間を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 3 年前	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	開始日の 3 年後	開始日の 0 ヶ月後	開始日の -1 日後

・今年の 1 月 1 日から昨日までを対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前

・昨日を対象とする

	年	月	日
開始日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前
終了日	実行年の 0 年前	実行月の 0 ヶ月前	実行日の 1 日前

・特定の 1 日を対象とする(2001/1/1 の場合)

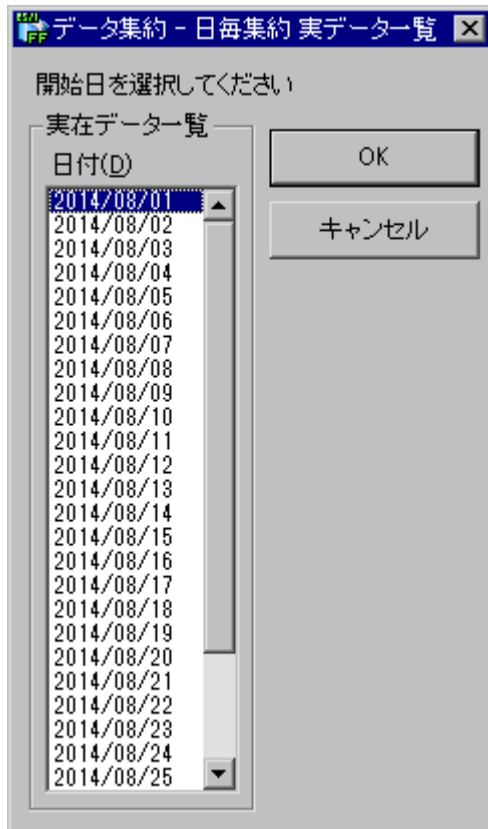
	年	月	日
開始日	固定年 2001 年	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	固定年 2001 年	固定月 1 月	固定日 1 日

・特定の期間を対象とする(2001/3/1～2001/9/30 の場合)

	年	月	日
開始日	固定年 2001 年	固定月 1 月	固定日 1 日
終了日	固定年 2001 年	固定月 9 月	固定日 30 日

(9)実データ一覧

対象期間を固定日とする場合、実際に存在するフラットファイルを検索し、一覧表示させることができます。開始日の指定では[実データ一覧(C)...]ボタンを、終了日の指定では[実データ一覧(V)...]ボタンを押下すると、実際に存在するフラットファイルの日付一覧が表示されます。



(10)[< 戻る(B)]ボタン

「データ管理－バックアッププランウィザード(1/2)」画面に戻ります。

(11)[登録]ボタン

作成したバックアッププランが登録され、「データ管理」画面の「バックアッププラン一覧(L)」欄に追加されます。バックアッププランは複数登録することができます。

8.4. バックアッププランの編集

定義済みのバックアッププランを編集する場合は、「データ管理」画面の「処理選択(S)」欄から「既存のバックアッププランを編集する」を選択します。「バックアッププラン一覧(L)」欄から編集対象のバックアッププランを選択し、[次へ(N)]ボタンを押下します。[次へ(N)]ボタンを押下すると、「データ管理－バックアッププランウィザード(1/2)」画面が設定内容を反映した状態で表示されます。

設定内容の編集方法については、前述の「8.3 バックアッププランの作成」と同様になりますので、そちらを参照してください。

データ管理では、フラットファイルのバックアップや削除を行います。データ管理は、バックアッププランに設定された情報を基に実行されます。ここでは、バックアッププランの作成、編集、削除等を行います。また、フラットファイルのバックアップや削除をここで実行することもできます。

処理選択(S)

- ☐ データ管理を実行する
「バックアッププラン一覧」で反転選択されているバックアッププランを実行します。
- ☒ 既存のバックアッププランを編集する
作成済みのバックアッププランを選択し、編集を行います。バックアッププラン名を変更すると、参照作成となります。
- ☐ バックアッププランを新規作成する
データ管理を行うためのバックアッププランを新規作成します。

バックアッププラン一覧(L)

項目	設定情報
対象期間 - 開始日	20140901
対象期間 - 終了日	20140930
システムフィルタ－プロファイル名	<全サイト/システム>
フラットファイルのバックアップを行う	はい
フラットファイルの削除を行う	いいえ
対象フラットファイル種別	すべてのフラットファイル種別

コピー(C)... 削除(D)

フラットファイルバックアップフォルダ(E)

フラットファイルのバックアップ先フォルダを指定します。ネットワーク上の他コンピュータに導入されている場合は、コンピュータ名からパスを指定します。

 参照(V)... 容量確認(E)...

☐ リモート接続の認証が必要(A)

ユーザ名(U) :

パスワード(P) :

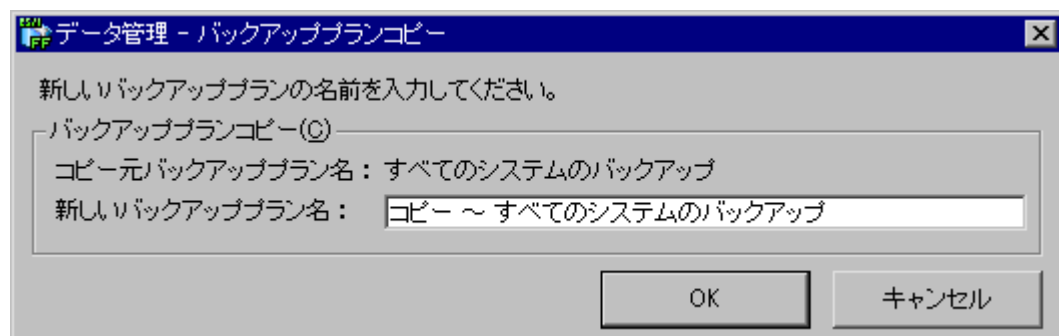
パスワードの確認入力(B) :

キャンセル 保存 次へ(N)>

8.5. バックアッププランのコピー

定義済みのバックアッププランをコピーする場合、「データ管理」画面の「バックアッププラン一覧(L)」欄から対象のバックアッププランを選択し、[コピー(C)...]ボタンを押下します。

すると、以下の「データ管理－バックアッププランコピー」画面が表示されます。



ここで新しいバックアッププラン名を入力し、[OK]ボタンを押下すると、コピー元と同じ定義のバックアッププランが生成されます。その後、必要に応じて設定内容の編集等を行ってください。

バックアッププランの編集については、本紙「8.4. バックアッププランの編集」を参照してください。

8.6. バックアッププランの削除

定義済みのバックアッププランを削除する場合、「データ管理」画面の「バックアッププラン一覧(L)」欄から対象のバックアッププランを選択し、[削除(D)]ボタンを押下します。

8.7. データ管理の実行

定義したバックアッププランを使用し、データ管理を実行します。

「処理選択(S)」欄から「データ管理を実行する」を選択します。実行するバックアッププランを「バックアッププラン一覧(L)」から反転選択し、[実行]ボタンを押下します。

[保存]ボタンを押下してなくても、[実行]ボタンを押下した時点で設定内容が自動保存されます。

バッチ実行の手順については、本紙「第 11 章 バッチ実行」を参照してください。

データ管理

データ管理では、フラットファイルのバックアップや削除を行います。データ管理は、バックアッププランに設定された情報を基に実行されます。ここでは、バックアッププランの作成、編集、削除等を行います。また、フラットファイルのバックアップや削除をここで実行することもできます。

処理選択(S)

- ☒ データ管理を実行する
「バックアッププラン一覧」で反転選択されているバックアッププランを実行します。
- ☐ 既存のバックアッププランを編集する
作成済みのバックアッププランを選択し、編集を行います。バックアッププラン名を変更すると、参照作成となります。
- ☐ バックアッププランを新規作成する
データ管理を行うためのバックアッププランを新規作成します。

バックアッププラン一覧(L)

項目	設定情報
対象期間 - 開始日	20140901
対象期間 - 終了日	20140930
システムフィルタ - プロファイル名	<全サイト/システム>
フラットファイルのバックアップを行う	はい
フラットファイルの削除を行う	いいえ
対象フラットファイル種別	すべてのフラットファイル種別

コピー(C)... 削除(D)

フラットファイルバックアップフォルダ(F)

フラットファイルのバックアップ先フォルダを指定します。ネットワーク上の他コンピュータに導入されている場合は、コンピュータ名からパスを指定します。

参照(V)... 容量確認(E)...

☐ リモート接続の認証が必要(A)

ユーザ名(U):
パスワード(P):
パスワードの確認入力(B):

キャンセル 保存 実行

(1)フラットファイルバックアップフォルダ(F)

フラットファイルのバックアップを行う場合、バックアップ先フォルダの指定を行います。すべてのバックアッププランは、ここで指定したフォルダに対しバックアップを行います。

バックアップファイル名の書式は、<バックアッププラン名>_開始日-終了日.zip です。

(2)リモート接続の認証が必要(A)

フラットファイルバックアップフォルダが別のマシン上にあり、ユーザ認証が必要な場合はここを選択します。

①ユーザ名(U)

フラットファイルバックアップフォルダに接続するためのユーザ名を指定します。

②パスワード(P)

フラットファイルバックアップフォルダに接続するためのパスワードを指定します。
パスワードは暗号化されて保存されます。

③パスワードの確認入力(R)

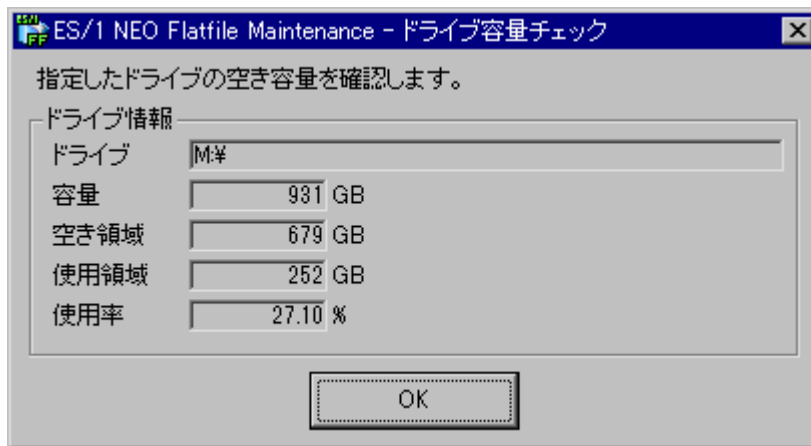
フラットファイルバックアップフォルダに接続するためのパスワードを指定します。
パスワードは暗号化されて保存されます。

(3)[参照(V)...]ボタン

フォルダの参照画面が表示されます。

(4)[容量確認(E)...]ボタン

フラットファイルバックアップフォルダが入力されている場合に動作します。[容量確認(E)...]ボタンを押下すると、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance – ドライブ容量チェック」画面が表示されます。



上記画面では以下の項目を確認することができます。

①ドライブ

指定したフラットファイルバックアップフォルダのドライブ名が表示されます。
UNC パスを入力している場合は指定したフォルダが表示されます。

②容量

指定したフラットファイルバックアップフォルダのディスク総容量が表示されます。

③空き領域

指定したフラットファイルバックアップフォルダのディスク空き容量が表示されます。

④使用領域

指定したフラットファイルバックアップフォルダのディスクで使用中の容量が表示されます。

⑤使用率

指定したフラットファイルバックアップフォルダのディスク使用率が表示されます。

8.8. データ管理の終了

データ管理では、フラットファイルのバックアップや削除を行います。データ管理は、バックアッププランに設定された情報を基に実行されます。ここでは、バックアッププランの作成、編集、削除等を行います。また、フラットファイルのバックアップや削除をここで実行することもできます。

処理選択(S)

- ☒ データ管理を実行する
「バックアッププラン一覧」で反転選択されているバックアッププランを実行します。
- ☐ 既存のバックアッププランを編集する
作成済みのバックアッププランを選択し、編集を行います。バックアッププラン名を変更すると、参照作成となります。
- ☐ バックアッププランを新規作成する
データ管理を行うためのバックアッププランを新規作成します。

バックアッププラン一覧(L)

すべてのシステムのバックアップ	項目	設定情報
すべてのシステムのクリーンアップ	対象期間 - 開始日	20140901
	対象期間 - 終了日	20140930
	システムフィルタープロファイル名	<全サイト/システム>
	フラットファイルのバックアップを行う	はい
	フラットファイルの削除を行う	いいえ
	対象フラットファイル種別	すべてのフラットファイル種別

コピー(C)... 削除(D)

フラットファイルバックアップフォルダ(F)

フラットファイルのバックアップ先フォルダを指定します。ネットワーク上の他コンピュータに導入されている場合は、コンピュータ名からパスを指定します。

M:\IIM_DATA\CS\BACKUP 参照(V)... 容量確認(E)...

☐ リモート接続の認証が必要(A)

ユーザ名(U) :
パスワード(P) :
パスワードの確認入力(B) :

キャンセル 保存 実行

(1)[保存]ボタン

設定内容を保存しデータ管理を終了します。

(2)[キャンセル]ボタン

設定内容を破棄しデータ管理を終了します。

この時点でバックアッププランの保存は実施済みです。

8.9. 初期配置されるバックアッププラン

Flatfile Maintenance を新規インストールした場合、2 つのバックアッププランが予め用意されます。
バージョンアップインストールの場合は導入されませんのでご注意ください。

(1) すべてのシステムのバックアップ

先月分の全サイト／システムの全フラットファイルをバックアップします。

以下のような定義のバックアッププランです。

バックアッププラン名	: すべてのシステムのバックアップ
対象サイト／システム	: すべてのサイト／システム(システムフィルタープロファイル)
データ管理内容	: バックアップ
対象フラットファイル	: すべてのフラットファイル
開始日	: 先月の 1 日
終了日	: 先月の末日

(2) すべてのシステムのクリーンアップ

14 ヶ月前の 1 ヶ月間を対象に全サイト／システムの全フラットファイルをクリーンアップします。

直近 13 ヶ月分のフラットファイルが常に存在するようにするバックアッププランです。

バックアッププラン名	: すべてのシステムのクリーンアップ
対象サイト／システム	: すべてのサイト／システム(システムフィルタープロファイル)
データ管理内容	: クリーンアップ
対象フラットファイル	: すべてのフラットファイル
開始日	: 14 ヶ月前の月の 1 日
終了日	: 14 ヶ月前の月の末日

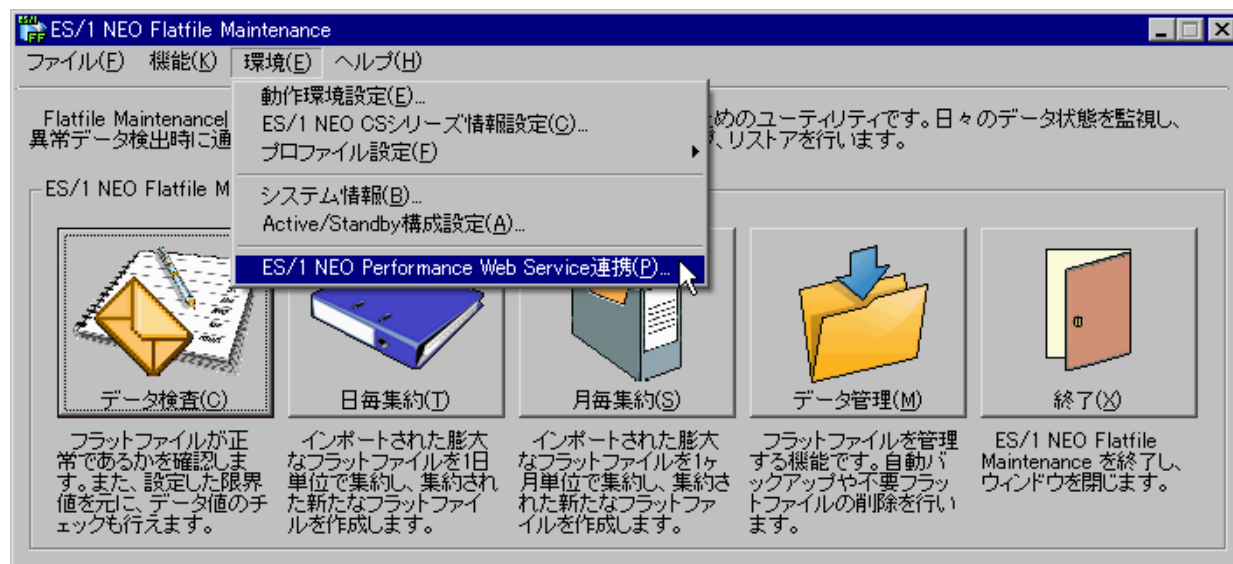
上記 2 つのバックアッププランを 1 ヶ月に 1 回実行するようスケジュールすると、先月分のフラットファイルをバックアップし、14 ヶ月前 1 ヶ月間のフラットファイルを削除する運用ができます。

第9章 ES/1 NEO Performance Web Service 連携

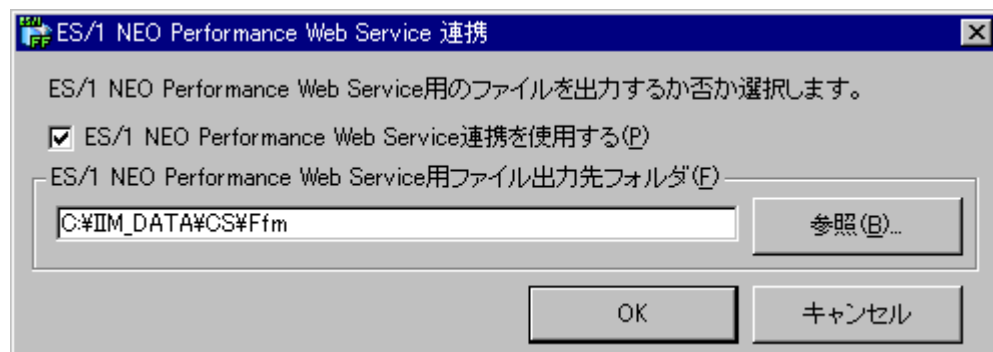
データ検査(状態チェック/限界値チェック)の結果を、ES/1 NEO Performance Web Service に取り込むことが可能です。ES/1 NEO Performance Web Service を利用し、検査結果を Web 上で一元管理したい場合等に便利です。

9.1. 設定

「ES/1 NEO Flatfile Maintenance」画面の「環境(E)」メニューから「ES/1 NEO Performance Web Service 連携(P)...」を選択します。



選択すると、「ES/1 NEO Performance Web Service 連携」画面が表示されます。



「ES/1 NEO Performance Web Service 連携を使用する(P)」をチェックすると、ES/1 NEO Performance Web Service 用のファイルを出力します。ここで、このファイル群の出力先フォルダも指定します。

ES/1 NEO Performance Web Service についての詳細は、別紙マニュアル「ES/1 NEO Performance Web Service 使用者の手引き」を参照してください。

第10章 システム情報

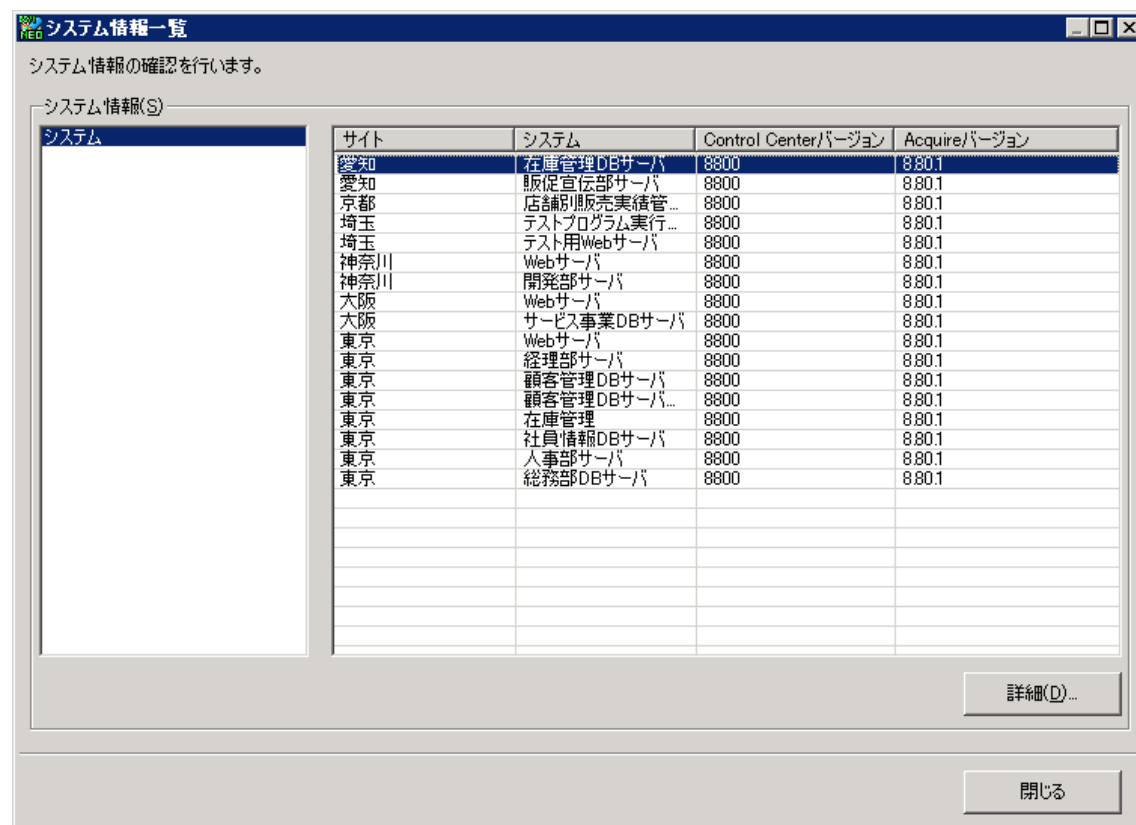
管理対象サーバのシステム情報を一覧で見ることができます。

10.1. 起動方法

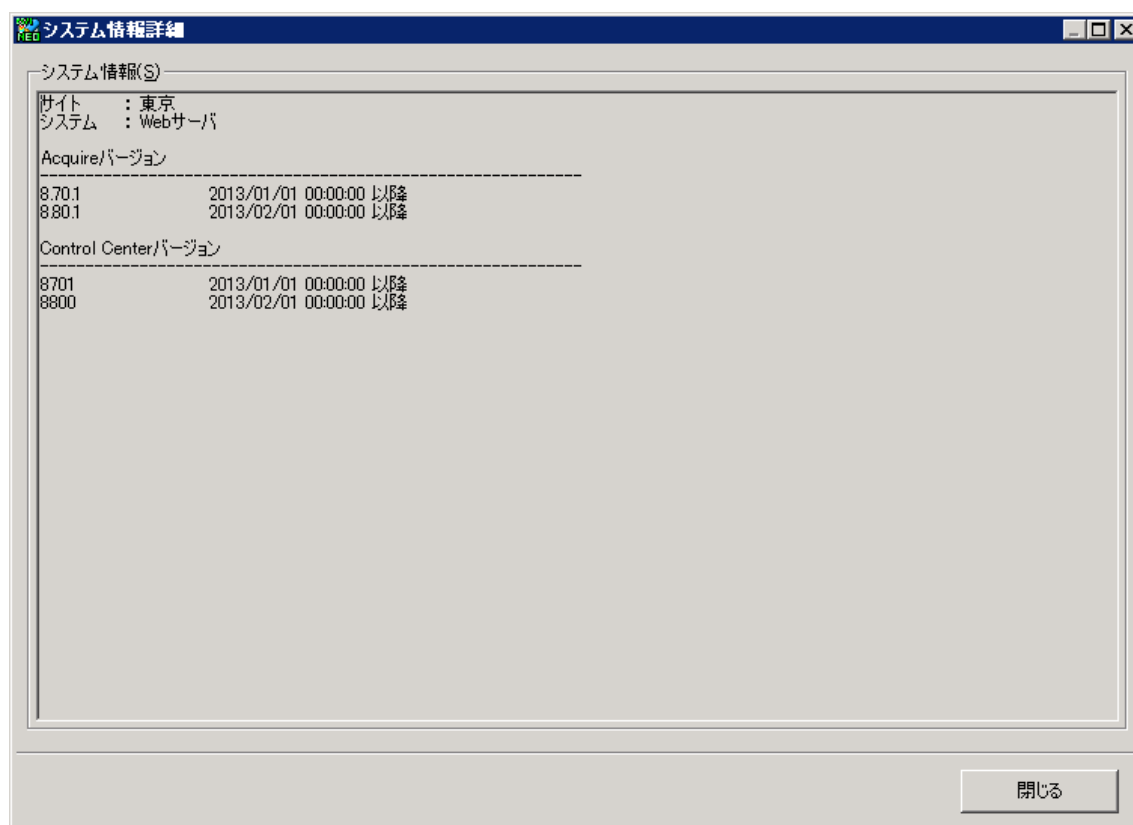
「環境(E)」メニューの「システム情報(B)...」から起動します。

10.2. システム情報

現在の管理対象サーバの情報がリスト形式で一覧表示されます。



[詳細(D)...]ボタンを押下すると、選択した管理対象サーバの詳細情報が表示されます。

**メモ！**

Microsoft .NET Framework 4 以降が導入されていない場合、システム情報機能は利用できません。
Microsoft .NET Framework 4.5.2 が推奨です。

第11章 バッチ実行

ES/1 NEO Flatfile Maintenance は、GUI 上からの実行以外に、バッチ処理による実行機能も実装しています。バッチ処理による実行を行うには、予め GUI にて設定を行い、これを保存しておく必要があります。

11.1. 実行手順

ES/1 NEO CS シリーズインストールフォルダと同じ階層に、FFM フォルダがあります。ここに格納されている Ffmainte.exe、msum.exe または FFBackup.exe を使用します。Ffmainte.exe、msum.exe または FFBackup.exe にパラメータを付与することにより、バッチ処理を行います。

実行の指定は、コマンドプロンプトや、[スタート]メニューの「ファイル名を指定して実行(R)...」から行います。

11.1.1. Flatfile Maintenance データ検査 – 状態チェック

Flatfile Maintenance データ検査 – 状態チェックは、Ffmainte.exe に /BAT /DV オプションを指定して実行します。

・オプション設定

状態チェックを行う期間の開始日、終了日を直接指定する事ができます。この場合、条件グループに指定されている対象時間帯はそのまま使用されますが、対象日は無視されます。

開始日 /F パラメータ

終了日 /T パラメータ

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DV /F20160801 /T20160801
```

ただし、対象期間の設定で

- ・実行時から 24 時間前までを対象とする
 - ・実行時から指定時間前までを対象とする
- を設定している条件グループは処理がスキップされます。

開始日、終了日を検査実行日を基準とした相対日で指定することも可能です。

/FROMDATE 開始日を NOW(,,)形式の相対日で指定します。

/TODATE 終了日を NOW(,,)形式または FROM(,,)形式の相対日で指定します。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DV /FROMDATE NOW(,-1) /TODATE FROM(,,)
```

NOW(,,)…… 今日(グラフ作成実行日)を基準とした相対日指定です。

開始日と終了日の指定に使用できます。NOW(,,)には、3 つのパラメータを指定することができ、それぞれ、年・月・日の相対値を指定します。また、値の後に F を付けてパラメータを指定すると固定年月日となります。

ex1. NOW(-1,-2,-3) → NOW(1 年前,2 ヶ月前,3 日前)。1 年 2 ヶ月と 3 日前の特定日を表します。

ex2. NOW(,,,-1) → NOW(0 年前,0 ヶ月前,1 日前)。昨日を表します。

ex3. NOW(,,) → NOW(0 年前,0 ヶ月前,0 日前)。今日を表します。

ex4. NOW(,-1,1F) → NOW(0 年前,1 ヶ月前,1 日)。先月の 1 日を表します。

ex5. NOW(2016F,8F,1F) → NOW(2016 年,8 月,1 日)。2016 年 8 月 1 日を表します。

FROM(,,)…… 開始日を基準とした相対日指定です。

終了日の指定にのみ使用できます。3つのパラメータの意味は、NOW(,,)と同様です。

- | | |
|------------------|---------------------------------------|
| ex1. FROM(,,) | → FROM(開始年,開始月,開始日)。開始日と同じ日を表します。 |
| ex2. FROM(,,1) | → FROM(開始年,開始月,開始日の1日後)。開始日の翌日を表します。 |
| ex3. FROM(,1,1F) | → FROM(開始年,開始月の翌月,1日)。開始日の翌月の1日を表します。 |

状態チェックを複数日分実行する場合、/RANGE パラメータを使用すると一括して指定することが可能です。

/RANGE(開始日,終了日[,1日の区切り時刻指定])

1日の区切り時刻指定(0:区切り無し 1:区切りあり)は省略可能です。CS-MAGICのオプションとの互換性を維持するため指定可能となっていますが、Flatfile Maintenance は 0、1、指定なしのいずれでも動作に影響はありません。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DV /RANGE(20180201,20180205)
```

注意！

Flatfile Maintenance 状態チェックは/F /T、/FROMDATE /TODATE、/RANGE パラメータの指定に関わらず、指定された範囲を一括で検査します。日毎に区切って実行する場合、GUIの前日指定で毎日検査を実行するか、/F /T パラメータを持つバッチを複数並べ、実行してください。

条件グループ名を直接指定して実行する場合は、/DV オプションの後ろに条件グループ名を記述します。条件グループ名はカンマ区切りで複数指定可能です。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DV "<条件グループ A>,<条件グループ B>"
```

11.1.2. Flatfile Maintenance データ検査 – 限界値チェック

Flatfile Maintenance データ検査 – 限界値チェックは、Ffmainte.exe に /BAT /DC オプションを指定して実行します。

・オプション設定

/NODATE オプションを付与すると、限界値チェック対象期間の設定にかかわらず存在するすべてのフラットファイルを検査します。

(限界値チェック対象期間の設定については、「5.4. 条件グループ、条件式の作成」を参照してください)。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DC /NODATE
```

限界値チェックを行う期間の開始日、終了日を直接指定する事ができます。この場合、条件グループに指定されている対象時間帯はそのまま使用されますが、対象日は無視されます。

/F 開始日を YYYYMMDD 形式の固定日で指定します。

/T 開始日を YYYYMMDD 形式の固定日で指定します。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DC /F20160801 /T20160801
```

開始日、終了日を検査実行日を基準とした相対日で指定することも可能です。

/FROMDATE 開始日を NOW(,,)形式の相対日で指定します。

/TODATE 終了日を NOW(,,)形式または FROM(,,)形式の相対日で指定します。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DC /FROMDATE NOW(,-1) /TODATE FROM(,,)
```

NOW(,,)…… 今日(グラフ作成実行日)を基準とした相対日指定です。

開始日と終了日の指定に使用できます。NOW(,,)には、3つのパラメータを指定することができ、それぞれ、年・月・日の相対値を指定します。また、値の後に F を付けてパラメータを指定すると固定年月日となります。

ex1. NOW(-1,-2,-3) → NOW(1 年前,2 ヶ月前,3 日前)。1 年 2 ヶ月と 3 日前の特定日を表します。

ex2. NOW(,, -1) → NOW(0 年前,0 ヶ月前,1 日前)。昨日を表します。

ex3. NOW(,,) → NOW(0 年前,0 ヶ月前,0 日前)。今日を表します。

ex4. NOW(,-1,1F) → NOW(0 年前,1 ヶ月前,1 日)。先月の 1 日を表します。

ex5. NOW(2016F,8F,1F) → NOW(2016 年,8 月,1 日)。2016 年 8 月 1 日を表します。

FROM(,,)…… 開始日を基準とした相対日指定です。

終了日の指定にのみ使用できます。3つのパラメータの意味は、NOW(,,)と同様です。

ex1. FROM(,,) → FROM(開始年,開始月,開始日)。開始日と同じ日を表します。

ex2. FROM(,,1) → FROM(開始年,開始月,開始日の 1 日後)。開始日の翌日を表します。

ex3. FROM(,1,1F) → FROM(開始年,開始月の翌月,1 日)。開始日の翌月の 1 日を表します。

限界値チェックを複数日分実行する場合、/RANGE パラメータを使用すると一括して指定することが可能です。

/RANGE(開始日,終了日[,1 日の区切り時刻指定])

1 日の区切り時刻指定(0:区切り無し 1:区切りあり)は省略可能です。CS-MAGIC のオプションとの互換性を維持するため指定可能となっていますが、Flatfile Maintenance はフラットファイルに格納されたデータの時刻にかかわらず開始日から終了日までを 24 時間ずつ適切に区切って 1 日分ずつ処理を行なうため、0、1、指定なしのいずれでも動作に影響はありません。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DC /RANGE(20180201,20180205)
```

```
/BAT /DC /F20180201 /T20180201  
/BAT /DC /F20180202 /T20180202  
/BAT /DC /F20180203 /T20180203  
/BAT /DC /F20180204 /T20180204  
/BAT /DC /F20180205 /T20180205
```

上記 5 つのバッチ指定は、以下の 1 つで記述することができます。

```
/BAT /DC /RANGE(20180201,20180205)
```

注意！

Flatfile Maintenance 限界値チェックは実行日や未来の日付は検査の対象外としています。バッチ引数で当日や未来日付を指定しても、当日以降のデータは読み込まれていないものとして扱われます。
/F、/T パラメータ、/FROMDATE、/TODATE パラメータ、/RANGE パラメータは同時に使用できません。

条件グループ名を直接指定して実行する場合は、/DC オプションの後ろに条件グループ名を記述します。条件グループ名はカンマ区切りで複数指定可能です。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DC "<条件グループ A>,<条件グループ B>"
```

11.1.3. Flatfile Maintenance データ集約 – 月毎集約

Flatfile Maintenance データ集約 – 月毎集約は、Ffmainte.exe に /BAT /DS オプションを指定して実行します。

- すでに集約済の月を再度集約するか否かは、「データ集約 – 月毎集約」画面の「既に集約済みの月は再集約しない」の指定に従います。
- オプション設定 集約チェックを行う期間の開始月、終了月を直接指定する事ができます。

開始月 /F パラメータ

終了月 /T パラメータ

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DS /F201601 /T201612 → 2016 年 1 月～12 月を集約
```

複数月を指定した場合、データの存在する月毎に集約が実行されます。

集約対象サイト／システムを直接指定する事が出来ます。

定義済みの集約条件を検索し、指定されたサイト／システムの部分のみを集約します。

サイト名のみが指定されている場合は、指定されたサイトの全システムを対象として集約を行います。

/SITE サイト名

/SYS システム名

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DS /F201601 /T201612 /SITE サイト A /SYS システム A
```

特定の集約対象時間帯定義を指定する事も可能です。

定義済みの集約条件の中で、特定の集約対象時間帯定義分だけを集約します。

「/SHIFT」パラメータの後ろに、処理対象とする対象時間帯識別名をカンマ区切りで列挙します。

※「/SHIFT」パラメータの指定にかかわらず、全曜日・全時間帯を対象とした集約は常に行われます。

/SHIFT 対象時間帯識別名

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DS /SHIFT "対象時間帯識別名 A,対象時間帯識別名 B,  
対象時間帯識別名 C"
```

既に集約済みの月を再集約するか否かを明示的に指定する事が可能です。

このパラメータが無い場合は、「データ集約」画面の「既に集約済みの月は再集約しない」の指定に従います。

/RESUM=YES…………… 再集約を行います

/RESUM=NO…………… 再集約を行いません

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DS /RESUM=YES
```

11.1.4. Flatfile Maintenance データ集約 – 日毎集約

Flatfile Maintenance データ集約 – 日毎集約は、msum.exe に /BAT オプションを指定して実行します。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe" /BAT
```

- ・すでに集約済の日を再度集約するか否かは、「データ集約 – 日毎集約」画面の「既に集約済みの日は再集約しない」の指定に従います。
- ・オプション設定
集約チェックを行う期間の開始日、終了日を直接指定する事ができます。

開始日 /F パラメータ

終了日 /T パラメータ

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe" /BAT /F20160101 /T20161231
```

複数日を指定した場合、データの存在する日毎に集約が実行されます。

集約対象サイト／システムを直接指定する事が出来ます。

定義済みの集約条件を検索し、指定されたサイト／システムの部分のみを集約します。

サイト名のみが指定されている場合は、指定されたサイトの全システムを対象として集約を行います。

開始日と終了日は、/FROMDATE、/TODATE で相対的に指定することも可能です。

```
C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe /BAT NOW(,,,-1) /TODATE NOW(,,,-1)
```

/FROMDATE 開始日を NOW(,,)形式の相対日で指定します。

/TODATE 終了日を NOW(,,)形式または FROM(,,)形式の相対日で指定します。

NOW(,,) …… 今日(Ffm 実行日)を基準とした相対日指定です。

開始日と終了日の指定に使用できます。NOW(,,)には、3つのパラメータを指定することができ、それぞれ、年・月・日の相対値を指定します。また、値の後に F を付けてパラメータを指定すると固定年月日となります。

ex1. NOW(-1,-2,-3) NOW(1年前,2ヶ月前,3日前)。1年2ヶ月と3日前の特定日を表します。

ex2. NOW(,,,-1) NOW(0年前,0ヶ月前,1日前)。昨日を表します。

ex3. NOW(,,) NOW(0年前,0ヶ月前,0日前)。今日を表します。

ex4. NOW(,-1,1F) NOW(0年前,1ヶ月前,1日)。先月の1日を表します。

ex5. NOW(2016F,8F,1F) NOW(2016年,8月,1日)。2016年8月1日を表します。

FROM(,,) …… 開始日を基準とした相対日指定です。

終了日の指定にのみ使用できます。3つのパラメータの意味は、NOW(,,)と同様です。

ex1. FROM(,,) FROM(開始年,開始月,開始日)。開始日と同じ日を表します。

ex2. FROM(,,,1) FROM(開始年,開始月,開始日の1日後)。開始日の翌日を表します。

ex3. FROM(,1,1F) FROM(開始年,開始月の翌月,1日)。開始日の翌月の1日を表します。

- ・今日を対象とする
/FROMDATE NOW(,,) /TODATE NOW(,,)
- ・昨日を対象とする
/FROMDATE NOW(,,-1) /TODATE NOW(,,-1)
- ・今月を対象とする
/FROMDATE NOW(,,1F) /TODATE FROM(,1,-1)
- ・先月を対象とする
/FROMDATE NOW(,-1,1F) /TODATE FROM(,1,-1)
- ・特定の日を対象とする(2016/8/1 の場合)
/FROMDATE NOW(2016F,8F,1F) /TODATE NOW(2016F,8F,1F)

また、CS-MAGIC と同様に、/RANGE パラメータを使用して複数日分を一括して指定することが可能です。

```
C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe /BAT /RANGE(20160801,20160805)
```

/RANGE(開始日,終了日[,1 日の区切り時刻指定])

1 日の区切り時刻指定(0:区切り無し 1:区切りあり)は省略可能です。CS-MAGIC のオプションとの互換性を維持するため指定可能となっていますが、Flatfile Maintenance はフラットファイルに格納されたデータの時刻にかかわらず開始日から終了日までを 24 時間ずつ適切に区切って 1 日分ずつ処理を行なうため、0、1、指定なしのいずれでも動作に影響はありません。

/SITE サイト名
/SYS システム名
(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe" /BAT /F20160101 /T20161231 /SITE サイト A /SYS システム A
```

既に集約済みの日を再集約するか否かを明示的に指定する事が可能です。
このパラメータが無い場合は、「データ集約－日毎集約」画面の「既に集約済みの日は再集約しない」の指定に従います。

/RESUM=YES…………… 再集約を行います
/RESUM=NO…………… 再集約を行いません
(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe" /BAT /RESUM=YES
```

特定の集約対象時間帯定義を指定する事も可能です。
定義済みの集約条件の中で、特定の集約対象時間帯定義分だけを集約します。
「/SHIFT」パラメータの後ろに、処理対象とする対象時間帯識別名をカンマ区切りで列挙します。
「/SHIFT」パラメータを指定する場合、合わせて /RESUM、/F、/T により再集約の方法と対象期間を明示してください。

/SHIFT 対象時間帯識別名
(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe" /BAT /SHIFT "対象時間帯識別名 A,対象時間帯識別名 B,対象時間帯識別名 C" /RESUM=YES /F20160101 /T20161231
```

集約条件を指定し集約することが可能です。

「/GROUP」パラメータの後ろに、処理対象とする集約条件名をカンマ区切りで列挙します。

「/GROUP」パラメータを指定する場合、合わせて /RESUM、/F、/T により再集約の方法と対象期間を明示してください。

このパラメータがない場合「データ集約－日毎集約」画面で定義した全ての集約条件が集約対象となります。

/GROUP 集約条件名

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥msum.exe" /BAT /GROUP "集約条件名 A, 集約条件名 B" /RESUM=YES  
/F20160101 /T20161231
```

11.1.5. Flatfile Maintenance データ管理

Flatfile Maintenance データ管理は、FFBackup.exe にバックアッププラン名を指定して実行します。

(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥FFBackup.exe" "<バックアッププラン名>"
```

バックアップ対象期間をパラメータで直接指定することができます。この場合、バックアッププランに定義されている対象期間は無視されます。

/F…………… 開始日を直接指定します。/F20160901 のように指定します。

/T…………… 終了日を直接指定します。/T20160930 のように指定します。

/M…………… 期間指定ではなく直接月を指定するパラメータです。/M201609 のように指定します。

/F パラメータまたは/T パラメータと/M パラメータは同時に使用できません。

/F パラメータのみを指定した場合、終了日はバックアッププランで定義されている終了日が使われます。

/T パラメータのみを指定した場合、開始日はバックアッププランで定義されている開始日が使われます。

データ管理の実行ログは Flatfile Maintenance 導入フォルダの FFBackup.log に出力されます。

11.1.6. 複数機能の同時実行

Flatfile Maintenance データ集約 – 日毎集約とデータ管理を除く他の Flatfile Maintenance 機能は、複数の機能を同時に実行することができます。機能毎のパラメータを、半角スペースをあけて複数指定します。

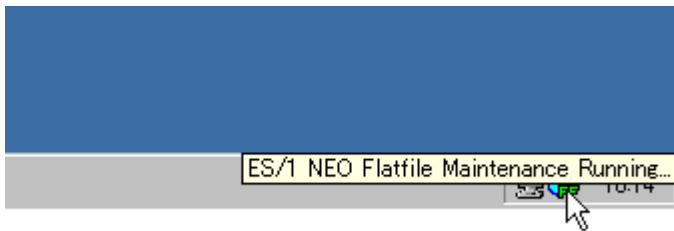
(例)

```
"C:¥IIM¥CS¥Ffm¥Ffmainte.exe" /BAT /DC /DV /DS
```

データ検査 – 限界値チェックの/NODATE オプションを指定する際も、複数の機能の同時実行が可能です。

11.2. 実行確認

バッチ処理が実行されている間は、メニューバーのタスクトレイにデータ検査のアイコンが表示されます。ツールチップウィンドウには、「ES/1 NEO Flatfile Maintenance Running...」と表示されます。



11.3. 実行中断

バッチ実行を途中で中断する場合は、このアイコンをマウスで右クリックします。マウスで右クリックすると、ポップアップメニューが表示されます。



「ES/1 NEO Flatfile Maintenance 実行中止」をクリックすると、終了確認メッセージが表示されます。



[はい(Y)]ボタン…… バッチ処理を中断し、プログラムを終了します。

[いいえ(N)]……… ボタンバッチ処理を続行します。

第12章 添付資料 A. 限界値チェック：ユーザ定義検査項目の追加方法

「データ検査－限界値チェック」では、標準の検査項目としてプロセッサ使用率やフリーメモリなどの限界値を設定できますが、標準項目以外にユーザが設定ファイルを作成することによって、任意に検査項目を定義することが可能です。

ここでは、ユーザが任意の検査項目を定義するための「DcItmUsr.ini」の記述方法を説明します。

12.1. 定義方法

ユーザ定義検査項目を使用する場合、ES/1 NEO Flatfile Maintenance のインストールディレクトリ内に「DcItmUsr.ini」という名前のファイルを作成し、必要な定義を行います。ES/1 NEO Flatfile Maintenance のインストールディレクトリは、通常「C:¥IIM¥CS¥FFM」に配置されています。

ユーザ定義検査項目は、「データ検査－限界値チェック」で利用可能です。

注意！

DcItmUsr.ini 内の定義に誤りがあると、実行時エラーとなります。

12.1.1. DcItmUsr.ini ファイル

DcItmUsr.ini ファイルは Windows で一般的な INI ファイル形式のテキストファイルです。テキストエディタなどで編集が可能です。

ユーザ定義検査項目は、[ITEMXX]セクションに定義します。

ユーザ定義検査項目で標準以外の検査項目グループを定義する場合、[ResourceGroup]セクションを追加する必要があります。

それぞれのセクションの記述方法は、以降を参照してください。

12.1.2. 限界値チェック機能の項目定義で利用可能なクエリーキーワード

限界値チェック機能の項目定義では、CS-MAGIC のクエリーの構文と各種キーワードを使用できます。

また、それらに加えて以下のキーワードが利用可能です。

クエリーキーワード	説明
# {DATETIME}	インターバル詳細データの時刻に相当します。 「FMTD(3,DATE) & ' ' & FMTT(2,TIME)」と等価です。
# {PTLPOS}	限界値チェックの検査条件で定義したパーセンタイル値のパーセンタイル位置に置き換えられます。パーセンタイル値用クエリーの定義で使用可能です。
# {CPUNUM}	CS の「動作環境設定(共通)」にある、システム毎に設定された CPU 搭載数に置き換えられます。Unix アカウント系データのように、プロセッサ使用率の統計データを CPU 台数で割る必要がある場合に使用します。 CPU 搭載台数が 4 の場合 ATACCC.CPUUSE / # {CPUNUM} → ATACCC.CPUUSE / 4

12.1.1.3. [ITEMXX]セクション

セクション名は、"ITEM" + 連番（1 から始まる連番）を使用します。番号が連続していないと、それ以降の定義が読み込まれません。必ず[ITEM1]セクションから記述を開始してください。

注意！

限界値チェックの検査条件定義（条件グループ）に、ユーザ定義の検査項目を対象とする条件式を追加した後で、[ITEMXX]セクションの番号をリナンバーしないよう、注意してください。限界値チェックは、条件グループの条件式定義と検査項目定義を結びつけるために、この番号を使用しています。

各キーの説明を参照の上、必要なキーを追加してください。必須と書かれているキーは、必ず定義が必要です。任意と書かれているキーは、必要に応じて追加します。

Group キー

【必須／任意】

必須

【説明】

検査対象項目の所属するグループ名。

DcItmDef.ini か DcItmUsr.ini に定義されている検査対象項目グループ名を記述する。

【例】

Group=プロセッサ

ItemName キー

【必須／任意】

必須

【説明】

検査対象項目名。

【例】

ItemName=カーネルモードのプロセッサ使用率

OrderNo キー

【必須／任意】

必須

【説明】

検査項目名のツリーに表示する順番。

セクション名の XX と同じ値にしておくことをお勧めします。条件グループ内にユーザ定義の検査項目を対象とする条件式を一度追加してしまうと、XX をキーとして条件式を登録しているため、[ITEMXX]セクションのリナンバーができなくなります。

後から項目を追加する場合、OrderNo を適切な順番に振りなおすことで、条件式登録画面の項目名ツリーの並びを調整することができます。

一つの定義ファイル内で、必ずユニークな番号が振られるよう、注意してください。

【例】

OrderNo=1

Measure キー

【必須／任意】

任意

【説明】

単位。

必要に応じて、検査項目の参考情報として記述してください。

QueryHeadIntvl {OS 種別}キー

QueryHeadIntvl	区別無し
QueryHeadIntvlUnix	Unix 用
QueryHeadIntvlWin	Windows 用
QueryHeadIntvlI5	i5 OS 用

【必須／任意】

必須(区別無しの定義を 1 つ、または、OS 種別毎の定義が必要)

【説明】

インターバル値計算用クエリーの前半部分(Select 句)を記述します(後半部分 QueryTailIntvl でサブクエリーを定義した場合、サブクエリーの参照も可能です)。

QueryHeadIntvl は必ず QueryTailIntvl と対で指定します。QueryHeadIntvl を書いた場合、必ず対応する QueryTailIntvl を記述してください。

インターバル値計算用クエリーは、時刻情報が必要です。クエリー中に時刻を埋め込む場合は、限界値チェック専用の置換キーワード「#{DATETIME}」を使用します。このキーワードはクエリー実行時に、「FMTD(3,DATE) & ' ' & FMTT(2,TIME)」に置換されます。

インターバル値計算用クエリーは、グループ指定ありと無しで記法が異なります。

・グループ指定無し

インターバル値計算用クエリーの前半部分(グループ指定なし)

```
Select PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time', PIVOTCOL ",《インターバル値計算式》 as "
```

1 列目は、常に"PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time'" を指定します。

2 列目は、常に"PIVOTCOL "" を指定します。

3 列目に、インターバル値の計算式に" as ""を加えたものを記述します。

【例】

```
QueryHeadIntvl=Select PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time', PIVOTCOL ", ATCPU.CPUUSE +  
ATCPU.SYSUSE as "
```

```
QueryTailIntvl=group by #{DATETIME} order by #{DATETIME}
```

・グループ指定あり

インターバル値計算用クエリーの前半部分(グループ指定あり)

```
Select PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time',PIVOTCOL 《グループ式》 as ",《インターバル値計算式》 as "
```

1 列目は、常に"PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time'"を指定します。

2 列目は、"PIVOTCOL " + Group By 句に使用するグループ式 + " as ""を指定します。

3 列目に、インターバル値の計算式に" as ""を加えたものを記述します。

【例】

```
QueryHeadIntvlWin=Select PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time', PIVOTCOL ATACCD.CMDNAME  
as ", Sum(ATACCD.CPUUSE) as "
```

```
QueryTailIntvlWin=where OS=OS_WNT group by #{DATETIME}, ATACCD.CMDNAME order by  
#{DATETIME}, ATACCD.CMDNAME
```

QueryTailIntvl{OS 種別}キー

QueryTailIntvl	区別無し
QueryTailIntvlUnix	Unix 用
QueryTailIntvlWin	Windows 用
QueryTailIntvlI5	i5 OS 用

【必須／任意】

必須(区別無しの定義を 1 つ、または、OS 種別毎の定義が必要)

【説明】

インターバル値計算用クエリーの後半部分(Join、Filter、Where、Group By、Having、Order By 句など)を記述します(場合によってはサブクエリーも記述可能です)。

QueryTailIntvl は必ず QueryHeadIntvl と対で指定します。QueryHeadIntvl を書いた場合、必ず対応する QueryTailIntvl を記述してください。

インターバル値計算用クエリーは、時刻情報が必要です。クエリー中に時刻を埋め込む場合は、限界値チェック専用の置換キーワード「#{DATETIME}」を使用します。このキーワードはクエリー実行時に"FM TD(3,DATE) & ' ' & FM TT(2,TIME)"に置換されます。

インターバル計算用クエリーの後半部分では、必ず Group By 句と Order By 句を入れてください。その際 Order By 句の先頭に#{DATETIME}を加えるようにしてください。それに加えて、グループ指定ありの時は必ず Group By 句と Order By 句にグループ式を加えてください。

注意！

#{DATETIME}が Order By 句の先頭に置かれていない場合、インターバル情報が正しくソートされず誤った結果を出力してしまう場合があります。必ず Order By 句の先頭に#{DATETIME}を指定してください。

Where 句が必要無い場合も、OS 種別毎の定義を書く場合は Where 句で OS 判定式を記述することを推奨しています。

【例】

```
QueryHeadIntvlUnix=Select PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time', PIVOTCOL ATACCC.CMDNAME as "  
", ATACCC.CPUUSE as "
```

```
QueryTailIntvlUnix=where OS=OS_UNX group by #{DATETIME}, ATACCC.CMDNAME order by  
#{DATETIME}, ATACCC.CMDNAME
```

```
QueryHeadIntvlWin=Select PIVOTROW #{DATETIME} as 'Time', PIVOTCOL ATACCD.CMDNAME as "  
", Sum(ATACCD.CPUUSE) as "
```

```
QueryTailIntvlWin=where OS=OS_WNT group by #{DATETIME}, ATACCD.CMDNAME order by  
#{DATETIME}, ATACCD.CMDNAME
```

QueryHeadAvg{OS 種別}キー

QueryHeadAvg	区別無し
QueryHeadAvgUnix	Unix 用
QueryHeadAvgWin	Windows 用
QueryHeadAvgI5	i5 OS 用

【必須／任意】

必須(区別無しの定義を 1 つ、または、OS 種別毎の定義が必要)

【説明】

平均値計算用クエリーの前半部分(Select 句)を記述します(後半部分 QueryTailAvg でサブクエリーを定義した場合、サブクエリーの参照も可能です)。

QueryHeadAvg は必ず QueryTailAvg と対で指定します。QueryHeadAvg を書いた場合、必ず対応する QueryTailAvg を記述してください。

平均値計算用クエリーは、グループ指定ありと無しで記法が異なります。

・グループ指定無し

平均値計算用クエリーの前半部分(グループ指定無し)

```
Select ", ", 《平均値計算式》 as "
```

1 列目は、常に""を指定します。

2 列目は、常に""を指定します。

3 列目に、平均値の計算式に" as ""を加えたものを記述します。

【例】

```
QueryHeadAvg=Select ",",AVG(ATCPU.CPUUSE + ATCPU.SYSUSE) as "  
QueryTailAvg=
```

・グループ指定あり

平均値計算用クエリーの前半部分（グループ指定あり）

```
Select ",《グループ式》 as ", 《平均値計算式》 as "
```

1 列目は、常に""を指定します。

2 列目は、Group By 句に使用するグループ式 + " as ""を指定します。

3 列目に、平均値の計算式に" as ""を加えたものを記述します。

【例】

```
QueryHeadAvgWin=Select ",ATACCD.CMDNAME as ", IBAVG(ATACCD.CPUUSE) as "  
QueryTailAvgWin=where OS=OS_WNT group by ATACCD.CMDNAME order by ATACCD.CMDNAME
```

QueryTailAvg{OS 種別}キー

QueryTailAvg	区別無し
QueryTailAvgUnix	Unix 用
QueryTailAvgWin	Windows 用
QueryTailAvgI5	i5 OS 用

【必須／任意】

必須(区別無しの定義を 1 つ、または、OS 種別毎の定義が必要)

【説明】

平均値計算用クエリーの後半部分（Join、Filter、Where、Group By、Having、Order By 句など）を記述します(場合によってはサブクエリーも記述可能です)。

QueryTailAvg は必ず QueryHeadAvg と対で指定します。QueryHeadAvg を書いた場合、必ず対応する QueryTailAvg を記述してください。

グループ指定ありの時は必ず Group By 句を入れてください。

Where 句が必要無い場合も、OS 種別毎の定義を書く場合は Where 句で OS 判定式を記述することを推奨しています。

【例】

```
QueryHeadAvgUnix=Select ", ", AVG(ATCPU.USRUSE + ATCPU.SYSUSE) as "  
QueryTailAvgUnix=where OS=OS_UNX
```

```
QueryHeadAvgWin=Select ", ", AVG(ATCPU.USRUSE + ATCPU.SYSUSE) as "  
QueryTailAvgWin=where OS=OS_WNT
```

QueryHeadPtl{OS 種別}キー

QueryHeadPtl	区別無し
QueryHeadPtlUnix	Unix 用
QueryHeadPtlWin	Windows 用
QueryHeadPtlI5	i5 OS 用

【必須／任意】

必須(区別無しの定義を 1 つ、または、OS 種別毎の定義が必要)

【説明】

パーセンタイル値計算用クエリーの前半部分(Select 句)を記述します(後半部分 QueryTailPtl でサブクエリーを定義した場合、サブクエリーの参照も可能です)。

QueryHeadPtl は必ず QueryTailPtl と対で指定します。QueryHeadPtl を書いた場合、必ず対応する QueryTailPtl を記述してください。

クエリー中で PTL 関数に引き渡すパーセンタイル位置は、「#{PTLPOS}」のように記述します。このキーワードは限界値チェック専用で、実行時に指定したパーセンタイル位置 (0.5, 0.8, 0.9) に変換されます。

パーセンタイル値計算用クエリーは、グループ指定ありと無しで記法が異なります。

・グループ指定無し

パーセンタイル値計算用クエリーの前半部分(グループ指定なし)

Select ", ", 《パーセンタイル値計算式》 as "

- 1 列目は、常に""を指定します。
- 2 列目は、常に""を指定します。
- 3 列目に、パーセンタイル値の計算式に" as ""を加えたものを記述します。

【例】

QueryHeadPtl=Select ",",PTL(ATCPU.CPUUSE + ATCPU.SYSUSE, #{PTLPOS}) as "

QueryTailPtl=

・グループ指定あり

パーセンタイル値計算用クエリーの前半部分(グループ指定あり)

Select ",《グループ式》 as ", 《パーセンタイル値計算式》 as "

- 1 列目は、常に""を指定します。
- 2 列目は、Group By 句に使用するグループ式 + " as ""を指定します。
- 3 列目に、パーセンタイル値の計算式に" as ""を加えたものを記述します。

【例】

QueryHeadPtlWin=Select ",ATACCD.COMDNAME as ", PTL(ATACCD.CPUUSE, #{PTLPOS}) as "

QueryTailPtlWin=where OS=OS_WNT group by ATACCD.COMDNAME order by ATACCD.COMDNAME

PTL 関数を使用せずインターバル毎の集計結果からパーセンタイル値を計算する場合は、「PtlFromTrend=1」キーを指定してインターバル計算式からパーセンタイル値を計算するようにしてください。その場合、QueryHeadPtl、QueryTailPtl はキーだけ作成し、中身は空にしてください。

QueryTailPtl{OS 種別}キー

QueryTailPtl	区別無し
QueryTailPtlUnix	Unix 用
QueryTailPtlWin	Windows 用
QueryTailPtlI5	i5 OS 用

【必須／任意】

必須(区別無しの定義を 1 つ、または、OS 種別毎の定義が必要)

【説明】

パーセンタイル値計算用クエリーの後半部分(Join、Filter、Where、Group By、Having、Order By 句など)を記述します(場合によってはサブクエリーも記述可能です)。

QueryTailPtl は必ず QueryHeadPtl と対で指定します。QueryHeadPtl を書いた場合、必ず対応する QueryTailPtl を記述してください。

グループ指定ありの時は必ず Group By 句を入れてください。

Where 句が必要無い場合も、OS 種別毎の定義を書く場合は Where 句で OS 判定式を記述することを推奨しています。

【例】

```
QueryHeadPtlUnix=Select ", ATACCC.CMDNAME as ", PTL(ATACCC.CPUUSE, #{PTLPOS}) as  
"QueryTailPtlUnix=where OS=OS_UNX group by ATACCC.CMDNAME order by ATACCC.CMDNAME
```

```
QueryHeadPtlWin= Select ", ATACCD.CMDNAME as ", PTL(ATACCD.CPUUSE, #{PTLPOS}) as  
"QueryTailPtlWin=where OS=OS_WNT group by ATACCD.CMDNAME order by ATACCD.CMDNAME
```

PTL 関数を使用せずインターバル毎の集計結果からパーセンタイル値を計算する場合は、「PtlFromTrend=1」キーを指定してインターバル計算式からパーセンタイル値を計算するようにしてください。その場合、QueryHeadPtl、QueryTailPtl はキーだけ作成し、中身は空にしてください。

Deficit キー

【必須／任意】

任意

【説明】

インターバル検査で計算結果が欠損値になった場合、これを 0 として取り扱う場合に 1 を指定します。アカウントデータやイベント形式データなど、事象が発生した場合にのみレコードが出力されるようなデータで、データが収集されていなかった時間帯のデータを 0 として扱いたい場合に使用します。

「Deficit=1」でかつ「PtlFromTrend=1」が指定されている場合、パーセンタイル値の計算に計算結果が欠損値となったインターバルが含まれます。こうしたインターバルのデータは内部的に 0 として取り扱われます。

PtlFromTrend キー

【必須／任意】

任意

【説明】

インターバル毎の集計値を元にパーセンタイル値計算を計算する場合、QueryHeadPtl によるパーセンタイル値計算が使用できません。

その場合、このキー(PtlFromTrend=1)を追加し、インターバル毎のクエリー結果から値を補間してパーセンタイル値を求めるようにしてください。

ReversePtl キー

【必須／任意】

任意

【説明】

パーセンタイル値の位置(90P, 80P, 50P)を、逆からの位置(10P, 20P, 50P)に置き換えて検査を実行します。

フリーメモリのように、少ないほど危険なデータ項目の場合、これを 1 にします。

Indep キー

【必須／任意】

任意

【説明】

限界値個別設定を有効にする場合、1 にします。

グルーピングが可能な検査項目(xx 毎の～)にのみ指定可能です。

限界値個別設定を使用する場合、IndepName、IndepExp も併せて指定を行ってください。

【例】

Indep=1

IndepName=デバイス名

```
IndepExp=Select Site, System, FIF(OS=OS_UNX,ATDEV.DISKID,FELSE(ATDEV.LDISK <> ','Phy[' &
ATDEV.DISKID & '])) as 'デバイス名' From ${TargetSystems} Group By Site, System,
FIF(OS=OS_UNX,ATDEV.DISKID,FELSE(ATDEV.LDISK <> ','Phy[' & ATDEV.DISKID & '])) Order By
Site, System, FIF(OS=OS_UNX,ATDEV.DISKID,FELSE(ATDEV.LDISK <> ','Phy[' & ATDEV.DISKID &
']'))
```

IndepName キー

【必須／任意】

任意

【説明】

個別限界値指定する時の指定対象の名称を記入します。

ここで指定した名前が、個別限界値の設定を保存するファイルのファイル名となります。

IndepExp{OS 種別}キー

IndepExp	区別無し
IndepExpUnix	Unix 用
IndepExpWin	Windows 用
IndepExpI5	i5 OS 用

【必須／任意】

任意

【説明】

個別限界値指定の項目名取得用クエリーの全体(Select 句から終わりまで)を記入します。

From の部分は、From \${TargetSystems}としてください。

Where 句が必要無い場合も、OS 種別毎の定義を書く場合は Where 句で OS 判定式を記述することを推奨しています。

Group By 句は Group By Site, System, 《グループ式》を指定します。

Order By 句は Group By と同じく Site, System, 《グループ式》を記述することを推奨しています。

Select Site, System, 《グループ式》 from \${TargetSystems} group by Site, System, 《グループ式》 order by Site, System, 《グループ式》

META.KEY キー

【必須／任意】

任意

【説明】

限界値チェック項目が特定のデータバージョンに依存するかどうかを示します。

YES ... 特定のデータバージョンに依存する

NO ... 特定のデータバージョンに依存しない（省略時）

バージョン判定要件を指定する場合、META.KEY、META.DISP、META.EXP を合わせて指定してください。その際、META.KEY=YES と指定してください。

それ以外の場合、明示的な指定は不要です。

META.DISP キー

【必須／任意】

任意

【説明】

限界値チェック項目が特定のデータバージョンに依存する場合の、バージョン表記を記入します。

ここに記入したバージョン表記は、条件式編集画面の限界値チェック項目一覧やログに表示されます。

バージョン判定要件を指定する場合、META.KEY、META.DISP、META.EXP を合わせて指定してください。その際、META.KEY=YES と指定してください。

それ以外の場合、明示的な指定は不要です。

META.EXP キー

【必須／任意】

任意

【説明】

限界値チェック項目が特定のデータバージョンに依存する場合の、バージョン判定式を記入します。

バージョン判定式については、CS-MAGIC 使用者の手引きにある「第 11 章 添付資料 C. バージョン判定式」を参照してください。

バージョン判定要件を指定する場合、META.KEY、META.DISP、META.EXP を合わせて指定してください。その際、META.KEY=YES と指定してください。

それ以外の場合、明示的な指定は不要です。

【例】

・Acquire バージョン 8.70.0(バージョン表記 8700)が必要な場合

META.KEY=YES

META.DISP=8700

META.EXP=geq(['acquire_version'], '8.70.0')

12.1.4. [ResourceGroup]セクション

検査対象項目のグループを独自に追加する場合、定義します。

既存（IIM 標準定義）の検査対象項目グループを流用する場合、特に必要はありません。

[ResourceGroup]

1=《追加する検査対象項目グループ名》,1

2=《追加する検査対象項目グループ名》,2

注意！

キーとなる数字は、1 から連続した数字を順に使用します。番号が連続していないと、それ以降の定義が読み込まれません。

「《追加する検査対象項目グループ名》」に、追加したいリソースグループ名を記入します。

「《追加する検査対象項目グループ名》,n」の n 部分の数字は、キーと同じ番号を指定してください。

【例】

[ResourceGroup]

1=DB2 バッファ,1

2=DB2 テーブルスペース,2

[ITEM1]

Group=DB2 バッファ

ItemName=キャッシュヒット率

第13章 添付資料 B. 限界値チェック：検査対象項目

Flatfile Maintenance のデータ検査機能で利用できる限界値チェックの項目は、以下のカテゴリに分類されています。

カテゴリ	説明
プロセッサ	システムデータのうちプロセッサに関連した情報を検査するための項目が含まれています。
メモリ	システムデータのうちメモリーに関連した情報を検査するための項目が含まれています。
デバイス	システムデータのうちデバイス(ディスク装置)に関連した情報を検査するための項目が含まれています。
ファイルスペース	システムデータのうちファイルシステムに関連した情報を検査するための項目が含まれています。
Oracle	CS-Oracle による Oracle の I/O 情報を検査するための項目が含まれています。
SAP ERP 対話型トランザクション (T-CODE+プログラム別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP 対話型トランザクション情報を T-CODE+プログラム別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP 対話型トランザクション (T-CODE 別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP 対話型トランザクション情報を T-CODE 別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP 対話型トランザクション (ユーザ別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP 対話型トランザクション情報をユーザ別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP バッチ型トランザクション (プログラム別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP バッチ型トランザクション情報をプログラム別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP バッチ型トランザクション (バッチ JOB 名別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP バッチ型トランザクション情報をバッチ JOB 名別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP バッチ型トランザクション (ユーザ別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP バッチ型トランザクション情報をユーザ別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP その他のトランザクション (T-CODE+プログラム別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP トランザクション情報のうち対話型やバッチ型に含まれないトランザクションを T-CODE+プログラム別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP その他のトランザクション (T-CODE 別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP トランザクション情報のうち対話型やバッチ型に含まれないトランザクションを T-CODE 別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP その他のトランザクション (バッチ JOB 名別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP トランザクション情報のうち対話型やバッチ型に含まれないトランザクションをバッチ JOB 名別に検査するための項目が含まれています。
SAP ERP その他のトランザクション (ユーザ別)	CS-SAP ERP で収集した SAP ERP トランザクション情報のうち対話型やバッチ型に含まれないトランザクションをユーザ別に検査するための項目が含まれています。
ネットワーク回線	CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報を検査するための項目が含まれています。
ネットワーク回線(ポート別)	CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報をポート別に検査するための項目が含まれています。
MIB(ノード別)	CS-Network MIB Collector で収集したルータや Switch、HUB の情報をノード (機器) 単位に検査するための項目が含まれています。

カテゴリ	説明
MIB(ポート別)	CS-Network MIB Collector で収集したルータや Switch、HUB の情報をポート（ネットワークインタフェース）単位に検査するための項目が含まれています。
WebSphere	CS-Java for WebSphere で収集した WAS の情報を検査するための項目が含まれています。
HTTP ログ	CS-WEB Option HTTP Log Processor で収集した HTTP ログ情報を検査するための項目が含まれています。
VMware	CS-VMware で収集した VMware の情報を検査するための項目が含まれています。
z/VM	MF-z/VM で収集した z/VM の情報を検査するための項目が含まれています。
WebLogic	CS-Java for WebLogic で収集した WebLogic の情報を検査するための項目が含まれています。
Interstage	CS-Java for Interstage で収集した Interstage の情報を検査するための項目が含まれています。
JBoss	CS-Java for JBoss で収集した JBoss の情報を検査するための項目が含まれています。
Tomcat	CS-Java for Tomcat で収集した Tomcat の情報を検査するための項目が含まれています。
MySQL	CS-MySQL で収集した MySQL の情報を検査するための項目が含まれています。
Hyper-V	CS-Hyper-V で収集した Hyper-V の情報を検査するための項目が含まれています。
SQL Server	CS-SQL Server で収集した SQL Server の情報を検査するための項目が含まれています。
Oracle AWR	CS-Oracle AWR で収集した Oracle AWR の情報を検査するための項目が含まれています。

13.1. プロセッサ

13.1.1. プロセッサ使用率

システムのプロセッサ使用率の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : プロセッサ(Unix) (ATCPU)

Windows : プロセッサ(Windows) (ATCPU)

IBM i (i5) : iSeries プロセッサ (QAPMSYSCPU) 、 iSeries システム構成 (QAPMCONF)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix、Windows: [詳細]インターバルサマリー – 複数シート – [詳細]プロセッサ使用率の推移 – 等高線 – [詳細]プロセッサ使用率の推移 (平日) – 等高線 – [詳細]プロセッサ使用率の推移 (休日) – 等高線 – [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート – [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面 – IBM i (i5): [詳細]プロセッサ使用率～i5 – 面 –
平均値チェック	システムのプロセッサ使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[月次]プロセッサ使用率 – 折れ線 – Unix: [月次]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	Unix、Windows: [詳細]インターバルサマリー – 複数シート – [詳細]プロセッサ使用率の推移 – 等高線 – [詳細]プロセッサ使用率の推移 (平日) – 等高線 – [詳細]プロセッサ使用率の推移 (休日) – 等高線 – [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート – [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面 – IBM i (i5): [詳細]プロセッサ使用率～i5 – 面 –

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	Unix、Windows: [詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率の推移 – 等高線– [詳細]プロセッサ使用率の推移（平日）– 等高線– [詳細]プロセッサ使用率の推移（休日）– 等高線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面– [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面– IBM i (i5): [詳細]プロセッサ使用率～i5 – 面–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	Unix、Windows: [詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率の推移 – 等高線– [詳細]プロセッサ使用率の推移（平日）– 等高線– [詳細]プロセッサ使用率の推移（休日）– 等高線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面– [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面– IBM i (i5): [詳細]プロセッサ使用率～i5 – 面–
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のシステムのプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	Unix、Windows : [月次]プロセッサ使用率～パーセンタイル – 折れ線– [月次]プロセッサ使用率～パーセンタイル～AIX LPAR – 折れ線– IBM i (i5): 特になし
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.1.1.2. ユーザ・コマンドプロセッサ使用率

システムのユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : アカウント(user/command) (ATACCD)、プロセッサ (Unix) (ATCPU)

Windows : アカウント(Windows) (ATACCD)、プロセッサ (Windows) (ATCPU)

IBM i (i5) : iSeries MI ジョブ (QAPMJOBMI)、iSeries プロセッサ (QAPMSYSCPU)、iSeries システム構成 (QAPMCONF)

【出力単位】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : アカウントのユーザ・コマンド単位。

Windows : アカウントのユーザ・コマンド単位。

IBM i (i5) : ジョブユーザ・ジョブ名単位。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix: [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix – 面 – [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR – 面 – Windows: [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows – 面 – IBM i (i5): 特になし
平均値チェック	ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	Unix: [平均]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix – 棒 – [平均]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR – 棒 – Windows: [平均]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows – 棒 – IBM i (i5): 特になし

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	Unix: [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): 特になし
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	Unix: [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): 特になし
パーセンタイル値チェック	ユーザ・コマンド毎のプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.1.3. ユーザプロセッサ使用率

システムのユーザ毎のプロセッサ使用率の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : アカウント(user) (ATACCU) 、プロセッサ (Unix) (ATCPU)

Windows : アカウント(Windows) (ATACCD) 、プロセッサ (Windows) (ATCPU)

IBM i (i5) : iSeries MI ジョブ (QAPMJOBMI) 、iSeries プロセッサ (QAPMSYSCPU) 、iSeries システム構成 (QAPMCONF)

【出力単位】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : アカウントのユーザ単位。

Windows : アカウントのユーザ単位。

IBM i (i5) : ジョブユーザ単位。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ユーザ毎のプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix: [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): [詳細]ジョブユーザ毎のプロセッサ使用率～i5 –面–
平均値チェック	ユーザ毎のプロセッサ使用率(%)の単純平均(AVG)を計算、検査します。	Unix: [平均]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Unix –棒– [平均]ユーザ毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –棒– Windows: [平均]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Windows –棒– IBM i (i5): 特になし

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	Unix: [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): [詳細]ジョブユーザ毎のプロセッサ使用率～i5 –面–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	Unix: [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]ユーザ毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): [詳細]ジョブユーザ毎のプロセッサ使用率～i5 –面–
パーセンタイル値チェック	ユーザ毎のプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.1.4. コマンドプロセッサ使用率

システムのコマンド毎のプロセッサ使用率の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : アカウント(command) (ATACCC) 、プロセッサ (Unix) (ATCPU)

Windows : アカウント(Windows) (ATACCD) 、プロセッサ (Windows) (ATCPU)

IBM i (i5) : iSeries MI ジョブ (QAPMJOBMI) 、iSeries プロセッサ (QAPMSYSCPU) 、iSeries システム構成 (QAPMCONF)

【出力単位】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : アカウントのコマンド単位。

Windows : アカウントのコマンド単位。

IBM i (i5) : ジョブ名単位。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	コマンド毎のプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix: [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): 特になし
平均値チェック	コマンド毎のプロセッサ使用率(%)の単純平均(AVG)を計算、検査します。	Unix: [平均]コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix –棒– [平均]コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –棒– Windows: [平均]コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows –棒–

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	Unix: [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): 特になし
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	Unix: [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～Unix –面– [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～AIX LPAR –面– Windows: [詳細]コマンド毎のプロセッサ使用率～Windows –面– IBM i (i5): 特になし
パーセンタイル値チェック	コマンド毎のプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.1.5. I/O ウェイト率

システムの I/O ウェイト率(%)の統計値です。

Unix 系システムでのみ使用が可能です。

【使用レコード】

プロセッサ (Unix)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムの I/O ウェイト率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率 – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細 – 面 – [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面 –
平均値チェック	システムの I/O ウェイト率の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率 – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細 – 面 – [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率 – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細 – 面 – [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート– [詳細]プロセッサ使用率～AIX LPAR – 面 – [詳細]プロセッサ使用率詳細～AIX LPAR – 面 –
パーセンタイル値チェック	システムの I/O ウェイト率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2. メモリ

13.2.1. スキャンされたページ数

システムのスキャンされたページ数(/sec)の統計値です。

Unix 系システムでのみ使用が可能です。

【使用レコード】

メモリ(Unix)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのスキャンされたページ数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]ページスキャンとページアウト – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
平均値チェック	システムのスキャンされたページ数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	[月次]プロセッサ使用率とフリーメモリ（平均／最大） – 2シート– [月次]フリーメモリ～Unix – 折れ線– [月次]プロセッサ使用率とフリーメモリ（平均／最大）～AIX LPAR– 2シート–
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]ページスキャンとページアウト – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]ページスキャンとページアウト – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
パーセンタイル値チェック	システムのスキャンされたページ数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.2. フリーメモリ

システムのフリーメモリの統計値です。

Unix、Windows 系システムでのみ使用可能です。

Unix の場合 sar または vmstat からデータを取得するため、システムによって単位が異なります（ページ、KB 等）。両方でデータが収集されている場合、sar の情報が優先して使用されます。

Windows の場合単位は MB となります。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : メモリ(Unix)(ATPAGE)

Windows : メモリ(Windows)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのフリーメモリー量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリー – 折れ線– [詳細]フリーメモリー詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリーとページング – 折れ線– [詳細]フリーメモリー量の推移 – 等高線– [詳細]フリーメモリー量の推移（平日） – 等高線– [詳細]フリーメモリー量の推移（休日） – 等高線– [詳細]フリーメモリーとキャッシュサイズ～Linux – 面– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
平均値チェック	システムのフリーメモリー量の単純平均（AVG）を計算、検査します。	[月次]プロセッサ使用率とフリーメモリー（平均／最大） – 2シート– [月次]フリーメモリー～Unix – 折れ線– [月次]フリーメモリー～Windows – 折れ線– [月次]プロセッサ使用率とフリーメモリー（平均／最大）～AIX LPAR – 2シート–
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリー – 折れ線– [詳細]フリーメモリー詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリーとページング – 折れ線– [詳細]フリーメモリー量の推移 – 等高線– [詳細]フリーメモリー量の推移（平日） – 等高線– [詳細]フリーメモリー量の推移（休日） – 等高線– [詳細]フリーメモリーとキャッシュサイズ～Linux – 面– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリ
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート – [詳細]フリーメモリ – 折れ線 – [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線 – [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線 – [詳細]フリーメモリ量の推移 – 等高線 – [詳細]フリーメモリ量の推移（平日） – 等高線 – [詳細]フリーメモリ量の推移（休日） – 等高線 – [詳細]フリーメモリとキャッシュサイズ～Linux – 面 – [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート –
パーセンタイル値チェック	システムのフリーメモリ量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.3. ページイン

システムのページイン数の統計値です。

Unix、Windows 系システムでのみ使用可能です。

Unixの場合 sar または vmstat からデータを取得するため、システムによって単位が異なります（ページ数/sec、回数/sec 等）。両方でデータが収集されている場合、sar の情報が優先して使用されます。

Windows の場合単位はページ数/sec となります。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : メモリ(Unix) (ATPAGE)

Windows : メモリ(Windows) (ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのページイン数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
平均値チェック	システムのページイン数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[月次]プロセッサ使用率とフリーメモリ (平均/最大) – 2 シート– [月次]フリーメモリ～Unix – 折れ線– [月次]フリーメモリ～Windows – 折れ線– [月次]プロセッサ使用率とフリーメモリ (平均/最大) ～AIX LPAR– 2 シート–
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
パーセンタイル値チェック	システムのページイン数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.4. ページアウト

システムのページアウト数の統計値です。

Unix、Windows 系システムでのみ使用可能です。

Unixの場合 sar または vmstat からデータを取得するため、システムによって単位が異なります（ページ数/sec、回数/sec 等）。両方でデータが収集されている場合、sar の情報が優先して使用されます。

Windows の場合単位はページ数/sec となります。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : メモリ(Unix)(ATPAGE)

Windows : メモリ(Windows)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのページアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線– [詳細]ページアウト – 折れ線– [詳細]ページスキャンとページアウト – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
平均値チェック	システムのページアウト数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	[月次]プロセッサ使用率とフリーメモリ（平均／最大） – 2シート– [月次]フリーメモリ～Unix – 折れ線– [月次]フリーメモリ～Windows – 折れ線– [月次]プロセッサ使用率とフリーメモリ（平均／最大）～AIX LPAR – 2シート–
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線– [詳細]ページアウト – 折れ線– [詳細]ページスキャンとページアウト – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]インターバルサマリー – 複数シート– [詳細]フリーメモリ詳細 – 折れ線– [詳細]フリーメモリとページング – 折れ線– [詳細]ページアウト – 折れ線– [詳細]ページスキャンとページアウト – 折れ線– [詳細]インターバルサマリー～AIX LPAR – 複数シート–

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
パーセンタイル値チェック	システムのページアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.5. プールデータベース不在

IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプールデータベース不在(合計回数)の統計値です。

IBM i (i5)システムでのみ使用可能です。

【使用レコード】

iSeries メモリ(QAPMPOOLB)

【出力単位】

記憶域プール単位。

【限界値個別設定機能の使用可否】

記憶域プール単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプールデータベース不在(合計回数)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプールデータベース不在(合計回数)の単純平均(AVG)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプールデータベース不在(合計回数)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※標準クエリーにある「[詳細]記憶域プールのサイズとページ不在～i5 – 複合～」にある「プールデータベース不在(/秒)」の値はプールのデータベース不在回数の合計をプールの合計稼働時間で割った値です。当検査項目とは計算式が異なるため、比較させることはできません。

13.2.6. プール非データベース不在

IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプール非データベース不在(合計回数)の統計値です。
IBM i (i5)システムでのみ使用可能です。

【使用レコード】

iSeries メモリ(QAPMPOOLB)

【出力単位】

記憶域プール単位。

【限界値個別設定機能の使用可否】

記憶域プール単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプール非データベース不在(合計回数)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプール非データベース不在(合計回数)の単純平均(AVG)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	IBM i (i5)システムの記憶域プール毎のプール非データベース不在(合計回数)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※標準クエリーにある「[詳細]記憶域プールのサイズとページ不在～i5 – 複合～」にある「プール非データベース不在(/秒)」の値はプールの非データベース不在回数の合計をプールの合計稼働時間で割った値です。当検査項目とは計算式が異なるため、比較させることはできません。

13.2.7. スワップイン(Linux)

システムのスワップイン数(pages/sec)の統計値です。

Linux 系システムでのみ使用可能です。

【使用レコード】

メモリ(Unix)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのスワップイン数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]スワップインとスワップアウト～Linux – 折れ線 –
平均値チェック	システムのスワップイン数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]スワップインとスワップアウト～Linux – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]スワップインとスワップアウト～Linux – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	システムのスワップイン数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.8. スワップアウト(Linux)

システムのスワップアウト数(pages/sec)の統計値です。

Linux 系システムでのみ使用可能です。

【使用レコード】

メモリ(Unix)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのスワップアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]スワップインとスワップアウト～Linux –折れ線–
平均値チェック	システムのスワップアウト数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]スワップインとスワップアウト～Linux –折れ線–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]スワップインとスワップアウト～Linux –折れ線–
パーセンタイル値チェック	システムのスワップアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.9. フリーメモリ+バッファキャッシュ(Linux)

システムのフリーメモリ+バッファキャッシュ(MB)の統計値です。

Linux 系システムでのみ使用可能です。

【使用レコード】

メモリ(Unix)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのフリーメモリとバッファキャッシュの合算値をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	システムのフリーメモリとバッファキャッシュの合算値の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	システムのフリーメモリとバッファキャッシュの合算値を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.10. フリースワップスペース(Linux)

システムのフリースワップスペース(MB)の統計値です。

Linux 系システムでのみ使用可能です。

【使用レコード】

メモリ(Unix)(ATPAGE)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのフリースワップスペースをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]フリースワップスペース～Linux –折れ線–
平均値チェック	システムのフリースワップスペースの単純平均(AVG)を計算、検査します。	[詳細]スワップスペース～Linux –面–
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[月次]スワップスペース～Linux –面–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	システムのフリースワップスペースを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.11. ページプール(MB)(Windows)

ページプールサイズの統計値です。

Windows 系システムでのみ使用可能です。

単位は MB です。

【使用レコード】

Windows ページプール(ATWPOOL)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムのページプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]カーネルメモリーサイズ～Windows – 折れ線 –
平均値チェック	システムのページプールサイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]カーネルメモリーサイズ～Windows – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]カーネルメモリーサイズ～Windows – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	システムのフリースワップスペースを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.12. 非ページプール(MB)(Windows)

非ページプールサイズの統計値です。

Windows 系システムでのみ使用可能です。

単位は MB です。

【使用レコード】

Windows ページプール(ATWPOOL)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	システムの非ページプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]カーネルメモリーサイズ～Windows – 折れ線 –
平均値チェック	システムの非ページプールサイズの単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]カーネルメモリーサイズ～Windows – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]カーネルメモリーサイズ～Windows – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	システムの非ページプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.2.13. コマンドの合計 PrivateBytes(MB)(Windows)

コマンドのプライベートメモリサイズの統計値です。

Windows 系システムでのみ使用可能です。

複数のプロセスで同一コマンドが実行されていた場合はその合計値を使用します。

単位は MB です。

【使用レコード】

アカウント(Windows) (ATACCD)

【出力単位】

コマンド単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	コマンドのプライベートメモリサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]コマンドの Private Bytes～Windows –折れ線–
平均値チェック	コマンドのプライベートメモリサイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]コマンドの Private Bytes～Windows –折れ線–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]コマンドの Private Bytes～Windows –折れ線–
パーセンタイル値チェック	コマンドのプライベートメモリサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.3. デバイス

13.3.1. デバイス使用率

システムのデバイス毎の使用率(%)の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス(Unix)(ATDEV)
Windows : デバイス(Windows)(ATDEV)
IBM i (i5) : iSeries ディスク装置(QAPMDISK)

【出力単位】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス単位 (物理デバイス)
Windows : デバイス単位 (論理デバイス、または物理デバイス)
IBM i (i5) : ディスク・アーム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能ですが、選択項目は対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス単位 (物理デバイス)
Windows : デバイス単位 (論理デバイス、または物理デバイス)
IBM i (i5) : ディスク・アーム単位

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	デバイス毎の使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix, Windows: [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 - 複数シート - [詳細]デバイス毎の使用率 - 複数シート - [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 - 面 - [詳細]デバイスの使用率 - 折れ線 - IBM i (i5): [詳細]ディスク毎の稼働率 (使用率) ~i5 - 折れ線 - [詳細]ディスク (デバイス名) のレスポンス時間内訳と使用率 ~i5
平均値チェック	デバイス毎の使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	Unix, Windows: [月次]デバイス毎の使用率 - 折れ線 - [平均]デバイス毎の使用率 - 棒 - [平均]デバイス毎のレスポンス時間 - 棒 - IBM i (i5): 特に無し

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	Unix, Windows: [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 – 複数シート – [詳細]デバイス毎の使用率 – 複数シート – [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 – 面 – [詳細]デバイスの使用率 – 折れ線 – IBM i (i5): [詳細]ディスク毎の稼働率（使用率）～i5 – 折れ線 – [詳細]ディスク（デバイス名）のレスポンス時間内訳と使用率～i5
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	Unix, Windows: [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 – 複数シート – [詳細]デバイス毎の使用率 – 複数シート – [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 – 面 – [詳細]デバイスの使用率 – 折れ線 – IBM i (i5): [詳細]ディスク毎の稼働率（使用率）～i5 – 折れ線 – [詳細]ディスク（デバイス名）のレスポンス時間内訳と使用率～i5
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のデバイス毎の使用率(%)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.3.2. レスポンス時間

システムのデバイス毎のレスポンス時間(ms)の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス(Unix)(ATDEV)
Windows : デバイス(Windows)(ATDEV)
IBM i (i5) : iSeries ディスク装置(QAPMDISK)

【出力単位】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス単位 (物理デバイス)
Windows : デバイス単位 (論理デバイス、または物理デバイス)
IBM i (i5) : ディスク・アーム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能ですが、選択項目は対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス単位 (物理デバイス)
Windows : デバイス単位 (論理デバイス、または物理デバイス)
IBM i (i5) : ディスク・アーム単位

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	デバイス毎のレスポンス時間(ms)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix、Windows: [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 - 複数シート - [詳細]デバイス毎のレスポンス時間 - 複数シート - [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳 - 複数シート - [詳細]デバイス毎のレスポンス時間内訳と使用率 - 面 - [詳細]デバイスのレスポンス時間 - 折れ線 - [詳細]デバイスのレスポンス時間内訳 - 面 -
平均値チェック	デバイス毎のレスポンス時間(ms)の単純平均(AVG)を計算、検査します。	[月次]デバイス毎のレスポンス時間 - 折れ線 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のデバイス毎のレスポンス時間 (ms)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※標準クエリー「[平均]デバイス毎のレスポンス時間 - 棒-」は平均サービス時間と平均待ち時間を積み上げて表示しています。当検査項目は詳細データのサービス時間+待ち時間の平均値を計算していますので、これらを比較させることはできません。

13.3.3. デバイス待ち個数

システムのデバイス毎のデバイス待ち個数の統計値です。

検査対象となるシステムの OS 種別やバージョンによって計算方法が異なりますが、特にそうした種別を意識することなく登録が行えます。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス(Unix)(ATDEV)

Windows : デバイス(Windows)(ATDEV)

【出力単位】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス単位 (物理デバイス)

Windows : デバイス単位 (論理デバイス、または物理デバイス)

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能ですが、選択項目は対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : デバイス単位 (物理デバイス)

Windows : デバイス単位 (論理デバイス、または物理デバイス)

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	デバイス毎のデバイス待ち個数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	Unix、Windows: [詳細]論理デバイス毎の待ち個数 – 折れ線 – [詳細]物理デバイス毎の待ち個数 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のデバイス毎のデバイス待ち個数を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.4. ファイルスペース

13.4.1. スペース使用率(Unix)

Unix 系システムのファイルシステム毎のスペース使用率の統計値です。

本項目は過去バージョンとの互換性維持のために残された検査項目です。OS に依存しない形で条件式を登録する場合、全 OS 対応の「11.4.3. スペース使用率」を使用することをお勧めします。

【使用レコード】

Unix ファイルスペース (ATFSS)

【出力単位】

ファイルシステム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数（合計）をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
平均値チェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.4.2. スペース使用率(Windows)

Windows 系システムのファイルシステム毎のスペース使用率の統計値です。

本項目は過去バージョンとの互換性維持のために残された検査項目です。OS に依存しない形で条件式を登録する場合、全 OS 対応の「11.4.3. スペース使用率」を使用することをお勧めします。

【使用レコード】

Windows ファイルスペース (ATNTSP)

【出力単位】

ファイルシステム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数（合計）をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
平均値チェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.4.3. スペース使用率

ファイルシステム毎のスペース使用率の統計値です。

「11.4.1. スペース使用率(Unix)」 「11.4.2. スペース使用率(Windows)」と異なり、Unix、WIndows、IBM i (i5)を区別せず、一括で条件式の登録が行えます。通常はこちらを条件式の登録に使用してください。

【使用レコード】

対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : Unix ファイルスペース (ATFSS)
Windows : Windows ファイルスペース (ATNTSP)
IBM i (i5) : iSeries ディスク装置 (QAPMDISK)

【出力単位】

ファイルシステム単位。対象システムの OS 種別により異なります。

Unix : ファイルシステム毎に検査を行います。
Windows : 論理デバイス、物理デバイス別に検査を行います。
IBM i (i5) : ディスク・アーム毎に検査を行います。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数（合計）をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 - 折れ線 -
平均値チェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	対象ノード(システム)の全ポートの受信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5. Oracle

13.5.1. 実リード回数

Oracle の実リード回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)※V\$SYSSTAT から取得

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリ
インターバルチェック	Oracle の実リード回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle システムインフォメーション – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle の実リード回数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle システムインフォメーション – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle システムインフォメーション – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の実リード回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※標準クエリの「[詳細]Oracle データファイル毎の読み込みアクセス回数 – 折れ線 –」「[月次]Oracle データファイル毎の読み込みアクセス回数 – 折れ線 –」「[平均]Oracle データファイル毎のアクセス回数 – 棒 –」「[平均]Oracle セッション毎のプロセッサ使用率 – 棒 –」は Oracle データファイル毎の読み込み回数の統計値を表示しています。当項目とは異なるデータを参照していますので、値を比較させることはできません。

※標準クエリの「[詳細]Oracle ロールバックセグメントリードアクセス回数 – 棒 –」はロールバックセグメントの読み込み回数の統計値を表示しています。当項目とは異なるデータを参照していますので、値を比較させることはできません。

13.5.2. 実ライト回数

Oracle の実ライト回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)※V\$SYSSTAT から取得

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の実ライト回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle システムインフォメーション – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle の実ライト回数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle システムインフォメーション – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle システムインフォメーション – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の実ライト回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※標準クエリーの「[詳細]Oracle データファイル毎の書き込みアクセス回数 – 折れ線 –」「[月次]Oracle データファイル毎の書き込みアクセス回数 – 折れ線 –」「[平均]Oracle データファイル毎のアクセス回数 – 棒 –」「[平均]Oracle セッション毎のプロセッサ使用率 – 棒 –」は Oracle データファイル毎の読み込み回数の統計値を表示しています。当項目とは異なるデータを参照していますので、値を比較させることはできません。

13.5.3. バッファキャッシュヒット率

Oracle のバッファキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のバッファキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle バッファキャッシュヒット率 – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle のバッファキャッシュヒット率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle バッファキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle バッファキャッシュヒット率 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のバッファキャッシュヒット率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.4. バッファ非待機率

Oracle のバッファ非待機率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)
Oracle 待機イベント(ORSYSEVENT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のバッファ非待機率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のバッファ非待機率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のバッファ非待機率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.5. 共有プール空きメモリ

Oracle の共有プール空きメモリ(MB)の統計値です。

【使用レコード】

Oracle 共有メモリ(ORSGASTAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の共有プール空きメモリをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle 共有プール空きメモリ量 – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle の共有プール空きメモリの平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle 共有プール空きメモリ量 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle 共有プール空きメモリ量 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の共有プール空きメモリを母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.6. ライブラリキャッシュヒット率

Oracle のライブラリキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle ライブラリキャッシュ(ORLIBCH)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のライブラリキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle ライブラリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ライブラリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ライブラリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.7. ディクショナリキャッシュヒット率

Oracle のディクショナリキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle ディクショナリキャッシュ(ORROWCH)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のディクショナリキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle ディクショナリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ディクショナリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ディクショナリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.8. Java プール空きメモリ

Oracle の Java プール空きメモリ(MB)の統計値です。

【使用レコード】

Oracle 共有メモリ(ORSGASTAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracleの Java プール空きメモリをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]OracleJava プール空きメモリ量 – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle の Java プール空きメモリの平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]OracleJava プール空きメモリ量 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]OracleJava プール空きメモリ量 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の Java プール空きメモリを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.9. 共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数

Oracle の共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の共有プール予約領域のオブジェクト破棄回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.10. 共有プール予約領域の領域要求失敗回数

Oracle の共有プール予約領域の領域要求失敗回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の共有プール予約領域の領域要求失敗回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の共有プール予約領域の領域要求失敗回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の共有プール予約領域の領域要求失敗回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.11. 非解析実行割合

Oracle の非解析実行割合の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の非解析実行割合をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の非解析実行割合の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の非解析実行割合を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.12.解析 CPU 時間割合

Oracle の解析 CPU 時間割合の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の解析 CPU 時間割合をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の解析 CPU 時間割合の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の解析 CPU 時間割合を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.13. ソフトパース率

Oracle のソフトパース率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)
Oracle ライブラリキャッシュ(ORLIBCH)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のソフトパース率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.14. 非解析処理時間割合

Oracle の非解析処理時間割合の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の非解析処理時間割合をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の非解析処理時間割合の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の非解析処理時間割合を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.15. REDO ログバッファ待機回数

Oracle の REDO ログバッファ待機回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracleの REDO ログバッファ待機回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の REDO ログバッファ待機回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の REDO ログバッファ待機回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.16. REDO ログスイッチ非待機率

Oracle の REDO ログスイッチ非待機率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)
Oracle 待機イベント(ORSYSEVENT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の REDO ログスイッチ非待機率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の REDO ログスイッチ非待機率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の REDO ログスイッチ非待機率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.17. ラージプール空きメモリ

Oracle のラージプール空きメモリ(MB)の統計値です。

【使用レコード】

Oracle 共有メモリ(ORSGASTAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のラージプール空きメモリをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle ラージプール空きメモリ量 – 折れ線–
平均値チェック	Oracle のラージプール空きメモリの平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ラージプール空きメモリ量 – 折れ線–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ラージプール空きメモリ量 – 折れ線–
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のラージプール空きメモリを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.18. ディスクソート回数

Oracle のディスクソート回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のディスクソート回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のディスクソート回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のディスクソート回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.19. メモリソート率

Oracle のメモリソート率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のメモリソート率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle メモリソート率 – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle のメモリソート率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle メモリソート率 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle メモリソート率 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のメモリソート率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.20. フェッチ時の連鎖/移行行検出回数

Oracle の秒あたりのフェッチ時の連鎖/移行行検出回数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のフェッチ時の連鎖/移行行検出回数（/秒）をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のフェッチ時の連鎖/移行行検出回数（/秒）の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のフェッチ時の連鎖/移行行検出回数（/秒）を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.21. ディスパッチャ平均待機時間

Oracle のディスパッチャ平均待機時間の統計値です。

【使用レコード】

Oracle 共有サーバメッセージキュー(ORQUEUE)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のディスパッチャ平均待機時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のディスパッチャ平均待機時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のディスパッチャ平均待機時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.22. 共有サーバ平均待機時間

Oracle の共有サーバ平均待機時間の統計値です。

【使用レコード】

Oracle 共有サーバメッセージキュー(ORQUEUE)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の共有サーバ平均待機時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の共有サーバ平均待機時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の共有サーバ平均待機時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.23. ディスパッチャビジー率

Oracle のディスパッチャビジー率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のディスパッチャビジー率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のディスパッチャビジー率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のディスパッチャビジー率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.24. 共有サーバビジー率

Oracle の共有サーバビジー率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracleの共有サーバビジー率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の共有サーバビジー率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の共有サーバビジー率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.25. ラッチ獲得率

Oracle のラッチ獲得率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle ラッチ(ORLATCH)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のラッチ獲得率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.26. グローバルキャッシュ変換時間

Oracle のグローバルキャッシュ変換時間の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のグローバルキャッシュ変換時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のグローバルキャッシュ変換時間の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のグローバルキャッシュ変換時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.27. グローバルキャッシュ取得待機時間

Oracle のグローバルキャッシュ取得待機時間の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のグローバルキャッシュ取得待機時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle のグローバルキャッシュ取得待機時間の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のグローバルキャッシュ取得待機時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.28. ユーザーコール数

Oracle の秒あたりのユーザーコール数の統計値です。

【使用レコード】

Oracle システム(ORSYSDAT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle のユーザーコール数(/秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle ユーザーコール数 – 折れ線 –
平均値チェック	Oracle のユーザーコール数(/秒)の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ユーザーコール数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ユーザーコール数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle のユーザーコール数(/秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.29. 待機イベント待ち時間

Oracle の待機イベント待ち時間の統計値です。

【使用レコード】

Oracle セッション待機イベント(ORSESEVENT)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース・イベント単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の待機イベント待ち時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.5.30.表領域の使用率

Oracle の表領域の使用率の統計値です。

【使用レコード】

Oracle テーブルスペース(X_ORTBSP)

【出力単位】

Oracle のドメイン・データベース・表領域単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Oracle の表領域の使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Oracle の表領域の使用率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Oracle の表領域の使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6. SQL Server

13.6.1. ページ生存期間

SQL Server のページ生存期間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 バッファ(SQ8BUFF)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のページ生存期間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server バッファプールのページ生存期間 – 折れ線 –
平均値チェック	SQL Server のページ生存期間の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のページ生存期間を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.2. 物理ページ読込回数

SQL Server の物理ページ読込回数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 バッファ(SQ8BUFF)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server の物理ページ読込回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server バッファキャッシュヒット率と物理読み取り数と先行読み取り数 – 折れ線 – [詳細]SQL Server 実 I/O 回数 (/秒) – 折れ線 –
平均値チェック	SQL Server の物理ページ読込回数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の物理ページ読込回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.3. 物理ページ書込回数

SQL Server の物理ページ書込回数（/秒）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 バッファ(SQ8BUFF)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server の物理ページ書込回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server 実 I/O 回数（/秒） –折れ線–
平均値チェック	SQL Server の物理ページ書込回数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の物理ページ書込回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.4. 空きページ待ち要求数

SQL Server の空きページ待ち要求数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 バッファ(SQ8BUFF)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Serverの空きページ待ち要求数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server レイジーライター書込バッファ数と空きページ待ち要求数 - 折れ線 -
平均値チェック	SQL Server の空きページ待ち要求数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の空きページ待ち要求数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.5. バッファキャッシュヒット率

SQL Server のインスタンス毎のバッファキャッシュヒット率（％）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 バッファ(SQ8BUFF)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のバッファキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server バッファキャッシュヒット率と物理読み取り数と先行読み取り数 – 折れ線 – [詳細]SQL Server バッファ稼働状況 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のバッファキャッシュヒット率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.6. キャッシュヒット率

SQL Server のキャッシュ毎のキャッシュヒット率 (%) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 キャッシュ(SQ8CACHE)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・キャッシュ単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server データキャッシュヒット率(2000) – 折れ線 – [PWS ミニグラフ] [詳細]SQL Server データキャッシュヒット率(2005 以降) – 折れ線 – [PWS ミニグラフ] [詳細]SQL Server データキャッシュヒット率 – 折れ線 – [詳細]SQL Server データキャッシュヒット率(2005 以降) – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のキャッシュヒット率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.7. アクティブトランザクション数

SQL Server のアクティブトランザクション数の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 データベース(SQ8DB)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のアクティブトランザクション数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のアクティブトランザクション数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	[平均]SQL Server D B 毎のトランザクション数 - 棒 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のアクティブトランザクション数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.8. データファイル合計サイズ

SQL Server のデータファイル合計サイズ (KB) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 データベース(SQ8DB)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のデータファイル合計サイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のデータファイル合計サイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[平均]SQL Server D B 毎のトランザクション数 - 棒 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のデータファイル合計サイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.9. トランザクションログファイル合計サイズ

SQL Server のトランザクションログファイル合計サイズ (KB) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 データベース(SQ8DB)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のトランザクションログファイル合計サイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のトランザクションログファイル合計サイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[平均]SQL Server D B 毎のトランザクション数 - 棒 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のトランザクションログファイル合計サイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.10.ログファイル使用サイズ

SQL Server のログファイル使用サイズ (KB) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 データベース(SQ8DB)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のログファイル使用サイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のログファイル使用サイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のログファイル使用サイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.11.ログ使用率

SQL Server のログ使用率（％）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 データベース(SQ8DB)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・データベース単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のログ使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のログ使用率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.12.ログイン数

SQL Server のログイン数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 一般(SQ8GEN)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のログイン数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server ユーザ接続情報 – 折れ線–
平均値チェック	SQL Server のログイン数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のログイン数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.13. 同時接続ユーザ数

SQL Server の同時接続ユーザ数の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 一般(SQ8GEN)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server の同時接続ユーザ数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server ユーザ接続情報 – 折れ線 – [詳細]SQL Server フリーメモリとユーザ接続数 – 折れ線 – [詳細]SQL Server プロセッサ使用率とユーザ接続数 – 折れ線 –
平均値チェック	SQL Server の同時接続ユーザ数の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の同時接続ユーザ数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.14. 平均ラッチ待ち時間

SQL Server の平均ラッチ待ち時間（ミリ秒）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 ラッチ(SQ8LATCH)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server の平均ラッチ待ち時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server ラッチ競合状況 – 折れ線–
平均値チェック	SQL Server の平均ラッチ待ち時間の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の平均ラッチ待ち時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.15. ラッチ待ち要求数

SQL Server のラッチ待ち要求数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 ラッチ(SQL8LATCH)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のラッチ待ち要求数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server ラッチ競合状況 – 折れ線–
平均値チェック	SQL Server のラッチ待ち要求数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のラッチ待ち要求数を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.16. 使用可能メモリサイズ

SQL Server の使用可能メモリサイズ (KB) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 メモリ(SQL8MEM)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server の使用可能メモリサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server メモリ使用状況 – 複合 –
平均値チェック	SQL Server の使用可能メモリサイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[月次]SQL Server メモリ使用状況 – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の使用可能メモリサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※[詳細]SQL Server メモリ使用状況 – 複合 –、[月次]SQL Server メモリ使用状況 – 複合 – のクエリーはそれぞれ単位を(MB)として表示しています。Flatfile Maintenance 限界値チェックの SQL Server の使用可能メモリサイズは (KB)で算出しています。

13.6.17.総使用メモリサイズ

SQL Server の総使用メモリサイズ (KB) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 メモリ(SQ8MEM)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server の総使用メモリサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server メモリ使用状況 – 複合 –
平均値チェック	SQL Server の総使用メモリサイズの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[月次]SQL Server メモリ使用状況 – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の総使用メモリサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.18. バッチ要求数

SQL Server のバッチ要求数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 SQL (SQ8SQL)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のバッチ要求数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のバッチ要求数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のバッチ要求数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.19.リコンパイル率

SQL Server のリコンパイル率（％）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 SQL (SQ8SQL)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のリコンパイル率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のリコンパイル率の加重平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のリコンパイル率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.20. ロック要求の平均待ち時間

SQL Server のロック要求の平均待ち時間（ミリ秒）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 ロック (SQ8LOCKS)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・ロック粒度単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のロック要求の平均待ち時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のロック要求の平均待ち時間の単純平均（AVG）を計算、検査します。	[平均]SQL Server ロック要求待ち数と待ち時間 – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のロック要求の平均待ち時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※[詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [...] – 複合 – 系のクエリーは、ロック要求の平均待ち時間にロック待ち回数を乗算した合計ロック要求待ち時間を表示しています。これらのクエリーと値の互換性はありません。

13.6.21. デッドロック回数

SQL Server のデッドロック回数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 ロック (SQ8LOCKS)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・ロック粒度単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のデッドロック回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [Database] – 複合 – [詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [Extent] – 複合 – [詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [Key] – 複合 – [詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [Page] – 複合 – [詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [RID] – 複合 – [詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [Table] – 複合 – [詳細]SQL Server デッドロックとロック要求待ち [Object] – 複合 –
平均値チェック	SQL Server のデッドロック回数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のデッドロック回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.22. デッドロック回数

SQL Server のタイムアウトしたロック要求数 (/秒) の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 ロック (SQ8LOCKS)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス・ロック粒度単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用可能

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Server のタイムアウトしたロック要求数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server のタイムアウトしたロック要求数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server のタイムアウトしたロック要求数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.6.23.tempdb の空き容量

SQL Server の tempdb の空き容量（KB）の統計値です。

【使用レコード】

SQL Server 2000 トランザクション情報(SQ8TRN)

【出力単位】

SQL Server のインスタンス単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SQL Serverのtempdb の空き容量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	SQL Server の tempdb の空き容量の単純平均（AVG）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SQL Server の tempdb の空き容量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.7. SAP ERP 対話型トランザクション(T-CODE+プログラム別)

13.7.1. レスpons時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）、プログラム名単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.7.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）、プログラム名単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.7.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）、プログラム名単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.8. SAP ERP 対話型トランザクション(T-CODE 別)

13.8.1. レスpons時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.8.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.8.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.9. SAP ERP 対話型トランザクション(ユーザ別)

13.9.1. レスpons時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.9.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.9.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.10.SAP ERP バッチ型トランザクション(プログラム別)

13.10.1.レスポンス時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、プログラム単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.10.2.稼働時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、プログラム単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.10.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、プログラム単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.11.SAP ERP バッチ型トランザクション(バッチ JOB 名別)

13.11.1.レスポンス時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、バッチ JOB 名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.11.2.稼働時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、バッチ JOB 名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.11.3.待ち時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、バッチ JOB 名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.12.SAP ERP バッチ型トランザクション(ユーザ別)

13.12.1.レスポンス時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.12.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.12.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.13.SAP ERP その他のトランザクション(T-CODE+プログラム別)**13.13.1.レスポンス時間(秒)**

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）、プログラム名単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.13.2.稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）、プログラム名単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.13.3.待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）、プログラム名単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.14.SAP ERP その他のトランザクション(T-CODE 別)

13.14.1.レスポンス時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.14.2.稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE (※)単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.14.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、T-CODE（※）単位に出力されます。

※T-CODE が不明(空欄)となっているトランザクションでは代わりにトランザクションタイプを分類に使用します。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.15.SAP ERP その他のトランザクション(バッチ JOB 名別)**13.15.1.レスポンス時間(秒)**

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、バッチ JOB 名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.15.2.稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、バッチ JOB 名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.15.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、バッチ JOB 名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.16.SAP ERP その他のトランザクション(ユーザ別)**13.16.1.レスポンス時間(秒)**

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.16.2.稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.16.3.待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス、ユーザ名単位に出力されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.17.ネットワーク回線

13.17.1.回線遅延時間(秒)

CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報の回線遅延時間(秒)の統計値です。

【使用レコード】

TCP セッション情報 (TCPSESS)

※発信元宛先識別が'S'となっているレコードのみを対象とします (TCPSESS.SRCDST = 'S')

【出力単位】

全体をひとまとめにして集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	回線遅延時間(秒)の平均値(WAV)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	回線遅延時間(秒)の平均値(WAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の回線遅延時間(秒)の平均(WAV)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.17.2.レスポンス時間(秒)

CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報のレスポンス時間(秒)の統計値です。

【使用レコード】

TCP セッション情報 (TCPSESS)

※発信元宛先識別が'S'となっているレコードのみを対象とします (TCPSESS.SRCDST = 'S')

【出力単位】

全体をひとまとめにして集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	レスポンス時間(秒)の平均値（平均 RTT+平均レスポンス時間）をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	レスポンス時間(秒)の平均値（平均 RTT+平均レスポンス時間）を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のレスポンス時間(秒)の平均値（平均 RTT+平均レスポンス時間）を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.17.3. Window サイズゼロ送信回数

CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報の Window サイズゼロ送信回数（合計）の統計値です。

【使用レコード】

TCP セッション情報（TCPSESS）

※発信元宛先識別が'S'となっているレコードのみを対象とします（TCPSESS.SRCDST = 'S'）

【出力単位】

全体をひとまとめにして集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Window サイズゼロ送信回数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Window サイズゼロ送信回数の平均(IBAVG)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Window サイズゼロ送信回数の合計を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.17.4.Window サイズゼロ受信回数

CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報の Window サイズゼロ受信回数（合計）の統計値です。

【使用レコード】

TCP セッション情報（TCPSESS）

※発信元宛先識別が'S'となっているレコードのみを対象とします（TCPSESS.SRCDST = 'S'）

【出力単位】

全体をひとまとめにして集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Window サイズゼロ受信回数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Window サイズゼロ受信回数の平均(IBAVG)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Window サイズゼロ受信回数の合計を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.18.ネットワーク回線(ポート別)

13.18.1.回線遅延時間(秒)

CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報の回線遅延時間(秒)の統計値です。

【使用レコード】

TCP セッション情報 (TCPSESS)

※発信元宛先識別が'S'となっているレコードのみを対象とします (TCPSESS.SRCDST = 'S')

【出力単位】

接続先のサービス名単位となります (PTOSV(TCPSESS.PORTNO))。

ポート番号にサービス名が割り当てられていない場合は、ポート番号が代わりに使用されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	回線遅延時間(秒)の平均値(WAV)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]レスポンス時間(サーバ) - 複合 -
平均値チェック	回線遅延時間(秒)の平均値(WAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]レスポンス時間(サーバ) - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]レスポンス時間(サーバ) - 複合 -
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の回線遅延時間(秒)の平均(WAV)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.18.2.レスポンス時間(秒)

CS-Network Packet Monitor で収集したネットワーク回線情報のレスポンス時間(秒)の統計値です。

【使用レコード】

TCP セッション情報 (TCPSESS)

※発信元宛先識別が'S'となっているレコードのみを対象とします (TCPSESS.SRCDST = 'S')

【出力単位】

接続先のサービス名単位となります (PTOSV(TCPSESS.PORTNO))。

ポート番号にサービス名が割り当てられていない場合は、ポート番号が代わりに使用されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	レスポンス時間(秒)の平均値 (平均 RTT+平均レスポンス時間) をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]レスポンス時間(サーバ) - 複合 -
平均値チェック	レスポンス時間(秒)の平均値 (平均 RTT+平均レスポンス時間) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]レスポンス時間(サーバ) - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]レスポンス時間(サーバ) - 複合 -
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のレスポンス時間(秒)の平均値 (平均 RTT+平均レスポンス時間) を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.19.MIB(ノード別)

13.19.1.受信エラー件数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の受信エラーパケット数の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ノード (サイト/システム) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全ポートの受信エラーパケット数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別エラーパケット数 – 折れ線 –
平均値チェック	全ポートの受信エラーパケット数の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別エラーパケット数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別エラーパケット数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	全ポートの受信エラーパケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.19.2.送信エラー件数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の送信エラーパケット数の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ノード (サイト/システム) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全ポートの送信エラーパケット数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別エラーパケット数 – 折れ線 –
平均値チェック	全ポートの送信エラーパケット数の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別エラーパケット数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別エラーパケット数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	全ポートの送信エラーパケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.19.3.受信破棄パケット数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の受信破棄パケット数の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ノード (サイト/システム) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全ポートの受信破棄パケット数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
平均値チェック	全ポートの受信破棄パケット数の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	全ポートの受信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.19.4.受信ブロードキャスト数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の受信パケット数（ブロードキャスト）の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報（MIB2IF）

【出力単位】

ノード（サイト／システム）単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全ポートの受信パケット数(ブロードキャスト)の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別受信パケット数(ブロードキャスト)－折れ線－
平均値チェック	全ポートの受信パケット数(ブロードキャスト)の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別受信パケット数(ブロードキャスト)－折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別受信パケット数(ブロードキャスト)－折れ線－
パーセンタイル値チェック	全ポートの受信パケット数(ブロードキャスト)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.19.5.送信ブロードキャスト数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の送信パケット数（ブロードキャスト）の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報（MIB2IF）

【出力単位】

ノード（サイト／システム）単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全ポートの送信パケット数(ブロードキャスト)の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	全ポートの送信パケット数(ブロードキャスト)の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	全ポートの送信パケット数(ブロードキャスト)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.19.6.送信破棄パケット数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の送信破棄パケット数の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ノード (サイト/システム) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全ポートの送信破棄パケット数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
平均値チェック	全ポートの送信破棄パケット数の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]システム別破棄パケット数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	全ポートの送信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.20.MIB(ポート別)

13.20.1.受信帯域使用率

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の受信帯域使用率(%)の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ポート (ノードのネットワークインタフェース) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	受信帯域使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]ポート別帯域使用率(受信) - 折れ線 -
平均値チェック	受信帯域使用率(%)の平均(AVG)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別帯域使用率(受信) - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別帯域使用率(受信) - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	受信帯域使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.20.2. 送信帯域使用率

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の送信帯域使用率(%)の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ポート (ノードのネットワークインタフェース) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	送信帯域使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]ポート別帯域使用率(送信) - 折れ線 -
平均値チェック	送信帯域使用率(%)の平均(AVG)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別帯域使用率(送信) - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別帯域使用率(送信) - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	送信帯域使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.20.3.受信破棄パケット数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の受信破棄パケット数の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ポート (ノードのネットワークインタフェース) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	受信破棄パケット数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]ポート別受信破棄パケット数 - 折れ線 -
平均値チェック	受信破棄パケット数の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別受信破棄パケット数 - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別受信破棄パケット数 - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	受信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.20.4.送信破棄パケット数

CS-Network MIB Collector で収集した MIB 情報の送信破棄パケット数の統計値です。

【使用レコード】

MIB2:インターフェイス情報 (MIB2IF)

【出力単位】

ポート (ノードのネットワークインタフェース) 単位となります。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	送信破棄パケット数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]ポート別送信破棄パケット数 - 折れ線 -
平均値チェック	送信破棄パケット数の平均(SAV)を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別送信破棄パケット数 - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]ポート別送信破棄パケット数 - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	送信破棄パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.WebSphere

13.21.1.SessionManager の LiveCount

CS-Java for WebSphere で収集した SessionManager 情報の現在活動中のセッション数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: SessionManager 情報 (WASSESSION)

【出力単位】

セッションマネージャ名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SessionManager の現在活動中のセッション数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere 現在活動中のセッション数 – 折れ線 –
平均値チェック	SessionManager の現在活動中のセッション数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere 現在活動中のセッション数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere 現在活動中のセッション数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	SessionManager の現在活動中のセッション数を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.2. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebSphere で収集した Servlet 情報のサーブレットリクエストの応答時間(ミリ秒)／サーブレットリクエスト数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere:Servlet 情報 (WASServlet)

【出力単位】

サーブレット名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.3. EntityBean の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebSphere で収集した EntityBean 情報の Bean のリモート・メソッドにおける応答時間(ミリ秒)／Bean のリモート・メソッドにおける応答回数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: EntityBean 情報 (WASEntityEJB)

【出力単位】

EJB 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityBean の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	EntityBean の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere EntityEJB 毎のメソッド平均実行時間 －折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere EntityEJB 毎のメソッド平均実行時間 －折れ線－
パーセンタイル値チェック	EntityBean の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.4.MessageDrivenBean の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebSphere で収集した MessageDrivenBean 情報の Bean のリモート・メソッドにおける応答時間(ミリ秒)／Bean のリモート・メソッドにおける応答回数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: MessageDrivenBean 情報（WASMsgDrivenEJB）

【出力単位】

EJB 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MessageDrivenBean の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere MessageDrivenEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	MessageDrivenBean の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere MessageDrivenEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere MessageDrivenEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	MessageDrivenBean の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.5.StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebSphere で収集した StatefulSessionBean 情報の Bean のリモート・メソッドにおける応答時間(ミリ秒)／Bean のリモート・メソッドにおける応答回数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: StatefulSessionBean 情報 (WASStatefulEJB)

【出力単位】

EJB 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere StatefulSessionEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere StatefulSessionEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere StatefulSessionEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.6.StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebSphere で収集した StatelessSessionBean 情報の Bean のリモート・メソッドにおける応答時間(ミリ秒)／Bean のリモート・メソッドにおける応答回数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: StatelessSessionBean 情報 (WASStatelessEJB)

【出力単位】

EJB 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere StatelessSessionEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere StatelessSessionEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere StatelessSessionEJB 毎のメソッド平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.7.JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebSphere で収集した JDBCDataSource 情報の接続が使用される時間(ミリ秒)／接続が使用される回数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: JDBCDataSource 情報 (WASJDBCSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリ
インターバルチェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎のコネクション平均使用時間 – 折れ線 –
平均値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎のコネクション平均使用時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎のコネクション平均使用時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.8.JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間

CS-Java for WebSphere で収集した JDBCDataSource 情報の接続が認可されるまでの時間(ミリ秒)／接続が認可されるまで待たされた回数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: JDBCDataSource 情報 (WASJDBCSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎の接続平均認可待ち時間 – 折れ線 –
平均値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎の接続平均認可待ち時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎の接続平均認可待ち時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.9.JDBCDataSource の接続タイムアウト数

CS-Java for WebSphere で収集した JDBCDataSource 情報のプールにある接続タイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: JDBCDataSource 情報 (WASJDBCSOURCE)

【出力単位】

JDBCDataSource 名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎のプールにある接続タイムアウト数－折れ線－
平均値チェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎のプールにある接続タイムアウト数－折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JDBCDataSource 毎のプールにある接続タイムアウト数－折れ線－
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.21.10. JVM ヒープ使用量

CS-Java for WebSphere で収集した JVM 情報の JVM ヒープ使用量の統計値です。

【使用レコード】

WebSphere: JVM 情報 (WASJVM)

【出力単位】

サーバ名毎に集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名毎に個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM ヒープ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebSphere JVM ヒープ使用量 – 複合 –
平均値チェック	JVM ヒープ使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JVM ヒープ使用量 – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebSphere JVM ヒープ使用量 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	JVM ヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.22.HTTP ログ

13.22.1. アクセス件数

CS-Web Option で収集した HTTP アクセスログ情報のアクセス件数の統計値です。

【使用レコード】

HTTP ログ情報 (WLOGSUM)

【出力単位】

サイト／システム単位

※システム上に複数の Web アプリケーションが存在する場合、すべて合算されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	総アクセス件数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	URL 毎に集計されたアクセス件数を母数とし、それらの単純平均(SAV)を計算、検査します（非推奨）。 > select SAV(WLOGSUM.ACCNT)	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎に計算した総アクセス件数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※当項目は画像ファイルも含めたすべてのアクセスが計上されます。それに対し、標準提供の HTTP 系グラフは特定の画像ファイルを除外して計算を行っているため、両者の間で数値の比較は行えません。

13.22.2. Page/sec

CS-Web Option で収集した HTTP アクセスログ情報のアクセス件数(/sec)の統計値です。

【使用レコード】

HTTP ログ情報 (WLOGSUM)

【出力単位】

サイト／システム単位

※システム上に複数の Web アプリケーションが存在する場合、すべて合算されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	総アクセス件数(/sec)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	URL 毎に集計されたアクセス件数(/sec)を母数とし、それらの単純平均(SAV)を計算、検査します (非推奨)。 > select SAV(WLOGSUM.ACCNT / WLOGSUM.INTVL)	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎に計算した総アクセス件数(/sec)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※当項目は画像ファイルも含めたすべてのアクセスが計上されます。それに対し、標準提供の HTTP 系グラフは特定の画像ファイルを除外して計算を行っているため、両者の間で数値の比較は行えません。

13.22.3. クライアントエラー件数

CS-Web Option で収集した HTTP アクセスログ情報のクライアントエラー(4XX)発生件数の統計値です。

【使用レコード】

HTTP ログ情報 (WLOGSUM)

【出力単位】

サイト／システム単位

※システム上に複数の Web アプリケーションが存在する場合、すべて合算されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	クライアントエラー(4XX)発生件数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	URL 毎に集計されたクライアントエラー(4XX)発生件数を母数とし、それらの単純平均(SAV)を計算、検査します（非推奨）。 > select SAV(WLOGSUM.CNT4XX)	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル後に集計されたクライアントエラー(4XX)発生件数の合計を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※当項目は画像ファイルも含めたすべてのアクセスが計上されます。それに対し、標準提供の HTTP 系グラフは特定の画像ファイルを除外して計算を行っているため、両者の間で数値の比較は行えません。

13.22.4. サーバエラー件数

CS-Web Option で収集した HTTP アクセスログ情報のサーバエラー(5XX)発生件数の統計値です。

【使用レコード】

HTTP ログ情報 (WLOGSUM)

【出力単位】

サイト／システム単位

※システム上に複数の Web アプリケーションが存在する場合、すべて合算されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	サーバエラー(5XX)発生件数の合計をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	URL 毎に集計されたサーバエラー(5XX)発生件数を母数とし、それらの単純平均(SAV)を計算、検査します（非推奨）。 > select SAV(WLOGSUM.CNT4XX)	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル後に集計されたサーバエラー(5XX)発生件数の合計を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※当項目は画像ファイルも含めたすべてのアクセスが計上されます。それに対し、標準提供の HTTP 系グラフは特定の画像ファイルを除外して計算を行っているため、両者の間で数値の比較は行えません。

13.22.5.レスポンス時間(秒)

CS-Web Option で収集した HTTP アクセスログ情報のレスポンス時間(秒)の統計値です。

【使用レコード】

HTTP ログ情報 (WLOGSUM)

【出力単位】

サイト／システム単位

※システム上に複数の Web アプリケーションが存在する場合、すべて合算されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	全アクセスの平均レスポンス時間(秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	全アクセスの平均レスポンス時間(秒)を計算(WAV)、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル後に集計された全アクセスの平均レスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

※当項目は画像ファイルも含めたすべてのアクセスが計上されます。それに対し、標準提供の HTTP 系グラフは特定の画像ファイルを除外し、かつ URL 毎に計算を行っているため、両者の間で数値の比較は行えません。

13.23.VMware

13.23.1.VMwareESX のプロセッサ使用率

VMwareESX のプロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト Cpu (VMW_HOSTCPU)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリ
インターバルチェック	VMwareESX のプロセッサ使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のプロセッサ使用率(VC) – 折れ線 –
平均値チェック	VMwareESX のプロセッサ使用率の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のプロセッサ使用率(VC) – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のプロセッサ使用率(VC) – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のVMwareESXのプロセッサ使用率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.2. VMwareESX のプロセッサ使用量

VMwareESX のプロセッサ使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト Cpu (VMW_HOSTCPU)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX のプロセッサ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のプロセッサ使用量(VC) – 面 –
平均値チェック	VMwareESX のプロセッサ使用量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のプロセッサ使用量(VC) – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のプロセッサ使用量(VC) – 面 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のVMwareESXのプロセッサ使用量を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.3. VMwareESX のメモリ使用率

VMwareESX のメモリ使用率の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト Memory (VMW_HOSTMEM)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX のメモリ使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のメモリー使用率(VC)－折れ線－
平均値チェック	VMwareESX のメモリ使用率の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のメモリー使用率(VC)－折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎のメモリー使用率(VC)－折れ線－
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX のメモリ使用率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.4. VMwareESX の Balloon 発生量

VMwareESX の Balloon 発生量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト Memory (VMW_HOSTMEM)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の Balloon 発生量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ホスト毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
平均値チェック	VMwareESX の Balloon 発生量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX の Balloon 発生量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.5. VMwareESX の Swapin 発生量

VMwareESX の Swapin 発生量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト Memory (VMW_HOSTMEM)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリ
インターバルチェック	VMwareESX の Swapin 発生量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	VMwareESX の Swapin 発生量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX の Swapin 発生量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.6. VMwareESX の Swapout 発生量

VMwareESX の Swapout 発生量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト Memory (VMW_HOSTMEM)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の Swapout 発生量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ホスト毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
平均値チェック	VMwareESX の Swapout 発生量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ホスト毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX の Swapout 発生量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.7.VMwareESX の I/O アボート発生数

VMwareESX の I/O アボート発生数の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト IDisk (VMW_HOSTIDISK)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の I/O アボート発生数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	

13.23.8. VMwareESX の I/O レイテンシ

VMwareESX の I/O レイテンシの統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト IDisk (VMW_HOSTIDISK)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の I/O レイテンシをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	VMwareESX の I/O レイテンシの単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX の I/O レイテンシを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.9.VMwareESX の I/O コマンド量

VMwareESX の I/O コマンド量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト IDisk (VMW_HOSTIDISK)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の I/O コマンド量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	VMwareESX の I/O コマンド量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX の I/O コマンド量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.10. VMwareESX の I/O 使用量

VMwareESX の I/O 使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト IDisk (VMW_HOSTIDISK)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の I/O 使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	VMwareESX の I/O 使用量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX の I/O 使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.11. VMwareESX の受信パケットロス

VMwareESX の受信パケットロスの統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト INetwork (VMW_HOSTINET)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の受信パケットロスをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	

13.23.12. VMwareESX の送信パケットロス

VMwareESX のネットワーク使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト INetwork (VMW_HOSTINET)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX の送信パケットロスをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	

13.23.13. VMwareESX のネットワーク使用量

VMwareESX のネットワーク使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware ホスト INetwork (VMW_HOSTINET)

【出力単位】

VMwareESX 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMwareESX 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMwareESX のネットワーク使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	VMwareESX のネットワーク使用量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMwareESX のネットワーク使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.14. ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率

VMware ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM Cpu (VMW_VMCPU)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の仮想プロセッサ使用率(VC) – 折れ線 –
平均値チェック	VMware ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の仮想プロセッサ使用率(VC) – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の仮想プロセッサ使用率(VC) – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS の仮想プロセッサ使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.15. ゲスト OS のプロセッサ使用量

VMware ゲスト OS のプロセッサ使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM Cpu (VMW_VMCPU)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS のプロセッサ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS 毎のプロセッサ使用量(VC) – 面 –
平均値チェック	VMware ゲスト OS のプロセッサ使用量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS 毎のプロセッサ使用量(VC) – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS 毎のプロセッサ使用量(VC) – 面 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS のプロセッサ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.16. ゲスト OS のプロセッサ Ready 率

VMware ゲスト OS のプロセッサ Ready 率の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM Cpu (VMW_VMCPU)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS のプロセッサ Ready 率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS 毎のプロセッサ Ready 率(VC) －折れ線－
平均値チェック	VMware ゲスト OS のプロセッサ Ready 率の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS 毎のプロセッサ Ready 率(VC) －折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS 毎のプロセッサ Ready 率(VC) －折れ線－
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.17. ゲスト OS の Balloon 発生量

VMware ゲスト OS の Balloon 発生量の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM Memory (VMW_VMMEM)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の Balloon 発生量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしているかどうかを検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
平均値チェック	VMware ゲスト OS の Balloon 発生量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS の Balloon 発生量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.18. ゲスト OS の Swapin 発生量

VMware ゲスト OS の Swapin 発生量の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM Memory (VMW_VMMEM)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の Swapin 発生量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしているかどうかを検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapin メモリー量(VC) – 面 –
平均値チェック	VMware ゲスト OS の Swapin 発生量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapin メモリー量(VC) – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapin メモリー量(VC) – 面 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS の Swapin 発生量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.19. ゲスト OS の Swapout 発生量

VMware ゲスト OS の Swapout 発生量の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM Memory (VMW_VMMEM)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の Swapout 発生量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
平均値チェック	VMware ゲスト OS の Swapout 発生量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎の Swapout メモリー量(VC) – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS の Swapout 発生量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.20. ゲスト OS の I/O 使用量

VMware ゲスト OS の I/O 使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM IDisk (VMW_VMIDISK)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の I/O 使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	VMware ゲスト OS の I/O 使用量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS の I/O 使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.21. ゲスト OS のネットワーク使用量

VMware ゲスト OS のネットワーク使用量の統計値です。

【使用レコード】

VMware VM INet (VMW_VMINET)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS のネットワーク使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎のネットワーク使用量(VC) – 折れ線 –
平均値チェック	VMware ゲスト OS のネットワーク使用量の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎のネットワーク使用量(VC) – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware 特定ホスト内のゲスト OS 毎のネットワーク使用量(VC) – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware ゲスト OS のネットワーク使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.22. ゲスト OS の受信パケットロス

VMware ゲスト OS の受信パケットロスの統計値です。

【使用レコード】

VMware VM INet (VMW_VMINET)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の受信パケットロスをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS・仮想アダプタ毎の受信パケットロス数(VC) – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS・仮想アダプタ毎の受信パケットロス数(VC) – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS・仮想アダプタ毎の受信パケットロス数(VC) – 折れ線 –

13.23.23. ゲスト OS の送信パケットロス

VMware ゲスト OS の送信パケットロスの統計値です。

【使用レコード】

VMware VM INet (VMW_VMINET)

【出力単位】

VMware ゲスト OS 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware ゲスト OS 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware ゲスト OS の送信パケットロスをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS・仮想アダプタ毎の送信パケットロス数(VC) – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS・仮想アダプタ毎の送信パケットロス数(VC) – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware ゲスト OS・仮想アダプタ毎の送信パケットロス数(VC) – 折れ線 –

13.23.24. Datastore の領域使用率

VMware Datastore の領域使用率の統計値です。

【使用レコード】

VMware Datastore (VMW_DS)

【出力単位】

VMware Datastore 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware Datastore 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	VMware Datastore の領域使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]VMware データストア毎の最大スペース使用率(VC) －折れ線－
平均値チェック	VMware Datastore の領域使用率の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware データストア毎の最大スペース使用率(VC) －折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]VMware データストア毎の最大スペース使用率(VC) －折れ線－
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の VMware Datastore の領域使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.23.25. ゲストストレージのファイルシステム使用率

VMware ゲスト OS のファイルシステム使用率の統計値です。

【使用レコード】

VMware GuestDisk (VMW_VMGUESTIDISK)

【出力単位】

VMware GuestDisk 単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

VMware GuestDisk 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	

13.24.z/VM

13.24.1.IFL プロセッサ使用率

筐体の IFL プロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 論理プロセッサ(ZVM_LPAR)

【出力単位】

筐体単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	IFL プロセッサ使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM IFL プロセッサ使用率（筐体内の LPAR 単位） －面－
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM IFL プロセッサ使用率（筐体内の LPAR 単位） －面－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM IFL プロセッサ使用率（筐体内の LPAR 単位） －面－
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.2.プロセッサ使用率

システムのプロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 論理プロセッサ(ZVM_LPAR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	プロセッサ使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM プロセッサ使用率 (z/VM システム使用率) – 面 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM プロセッサ使用率 (z/VM システム使用率) – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM プロセッサ使用率 (z/VM システム使用率) – 面 –
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.3. 主記憶使用率

システムの主記憶使用率の統計値です。

【使用レコード】

z/VM システム(0)(ZVM_SYSGEN0)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	主記憶使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM 主記憶使用率 (z/VM ユーザ単位) – 面 –
平均値チェック	主記憶使用率の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM 主記憶使用率 (z/VM ユーザ単位) – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM 主記憶使用率 (z/VM ユーザ単位) – 面 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の主記憶使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.4. 拡張記憶使用率

システムの拡張記憶使用率の統計値です。

【使用レコード】

z/VM システム(0)(ZVM_SYSGEN0)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	拡張記憶使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM 拡張記憶使用率 (z/VM ユーザ単位) – 面 –
平均値チェック	拡張記憶使用率の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM 拡張記憶使用率 (z/VM ユーザ単位) – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM 拡張記憶使用率 (z/VM ユーザ単位) – 面 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の拡張記憶使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.5. ページイン数

システムの秒あたりのページイン数の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 全ユーザ資源(ZVM_ALLUSRRES)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ページイン数(/秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM ページング – 折れ線 –
平均値チェック	ページイン数(/秒)の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページング – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページング – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のページイン数(/秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.6. ページアウト数

システムの秒あたりのページアウト数の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 全ユーザ資源(ZVM_ALLUSRRES)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ページアウト数(/秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM ページング – 折れ線 –
平均値チェック	ページアウト数(/秒)の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページング – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページング – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のページアウト数(/秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.7. ページムーブ数

システムの秒あたりのページムーブ数の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 全ユーザ資源(ZVM_ALLUSRRES)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ページムーブ数(/秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM ページムーブ - 折れ線 -
平均値チェック	ページムーブ数(/秒)の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページムーブ - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページムーブ - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のページムーブ数(/秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.8. ページマイグレーション数

システムの秒あたりのページマイグレーション数の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 全ユーザ資源(ZVM_ALLUSRRES)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ページマイグレーション数(/秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM ページマイグレーション－折れ線－
平均値チェック	ページマイグレーション数(/秒)の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページマイグレーション－折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM ページマイグレーション－折れ線－
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のページマイグレーション数(/秒)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.9.フリーサブプール領域使用率

システムのフリーサブプール領域使用率の統計値です。

【使用レコード】

z/VM システム(0)(ZVM_SYSGEN0)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	フリーサブプール領域使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	フリーサブプール領域使用率の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のフリーサブプール領域使用率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.10. 拡張チャンネル使用率

拡張チャンネル使用率の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 拡張チャンネル(ZVM_EXCHAN)

【出力単位】

拡張チャンネル単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

拡張チャンネル単位で個別限界値を指定可能です。(指定はチャンネルパス ID の 16 進数表現で行います。)

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	拡張チャンネル使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	拡張チャンネル使用率の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の拡張チャンネル使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.11. 仮想スイッチの破棄送信パケット数

仮想スイッチの破棄送信パケット数の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 仮想スイッチ(ZVM_VIRTSW54)

【出力単位】

仮想スイッチ単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

仮想スイッチ単位で個別限界値を指定可能です。(指定はデバイス番号の 16 進数表現で行います。)

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	破棄送信パケット数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	破棄送信パケット数の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の破棄送信パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.12. 仮想スイッチの破棄受信パケット数

仮想スイッチの破棄受信パケット数の統計値です。

【使用レコード】

z/VM 仮想スイッチ(ZVM_VIRTSW54)

【出力単位】

仮想スイッチ単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

仮想スイッチ単位で個別限界値を指定可能です。(指定はデバイス番号の 16 進数表現で行います。)

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	破棄受信パケット数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	破棄受信パケット数の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の破棄受信パケット数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.24.13. ユーザー毎の待ち割合

ユーザーのプロセッサ待ち割合の統計値です。

【使用レコード】

z/VM ユーザ資源(ZVM_USRRES)

【出力単位】

ユーザ単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

ユーザ単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ユーザーのプロセッサ待ち割合をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]z/VM プロセッサ待ち割合（z/VM ユーザ単位） – 折れ線–
平均値チェック	ユーザーのプロセッサ待ち割合の単純平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM プロセッサ待ち割合（z/VM ユーザ単位） – 折れ線–
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]z/VM プロセッサ待ち割合（z/VM ユーザ単位） – 折れ線–
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のユーザーのプロセッサ待ち割合を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測(直線)チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.WebLogic

13.25.1.SunJVM ヒープサイズ

CS-Java for WebLogic で収集した JVM 情報のヒープサイズの統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JVM 情報 (WLCJVM)

【出力単位】

サーバ名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SunJVM のヒープサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic JVM ヒープ使用量 - 複合 -
平均値チェック	SunJVM のヒープサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JVM ヒープ使用量 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JVM ヒープ使用量 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	SunJVM のヒープサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.2. SunJVM ヒープ使用量

CS-Java for WebLogic で収集した JVM 情報のヒープ使用量の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JVM 情報 (WLCJVM)

【出力単位】

サーバ名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	SunJVM のヒープ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic JVM ヒープ使用量 - 複合 -
平均値チェック	SunJVM のヒープ使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JVM ヒープ使用量 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JVM ヒープ使用量 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	SunJVM のヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.3. JRocket ヒープサイズ

CS-Java for WebLogic で収集した JRocket 情報のヒープサイズの統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JRocket 情報 (WLCJROC)

【出力単位】

サーバ名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JRocket のヒープサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic JRocket ヒープ使用量 – 複合 –
平均値チェック	JRocket のヒープサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JRocket ヒープ使用量 – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JRocket ヒープ使用量 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	JRocket のヒープサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.4. JRocket ヒープ使用量

CS-Java for WebLogic で収集した JRocket 情報のヒープ使用量の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JRocket 情報 (WLCJROC)

【出力単位】

サーバ名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JRocket のヒープ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic JRocket ヒープ使用量 - 複合 -
平均値チェック	JRocket のヒープ使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JRocket ヒープ使用量 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JRocket ヒープ使用量 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	JRocket のヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.5.JRockitGC の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebLogic で収集した JRockit 情報のガベージコレクション実行時間(ミリ秒)／ガベージコレクション実行回数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JRockit 情報 (WLCJROC)

【出力単位】

サーバ名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JRockitGC の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JRockitGC の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JRockitGC の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.6. JRockitGC 実行回数

CS-Java for WebLogic で収集した JRockit 情報のガベージコレクション実行回数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JRockit 情報 (WLCJROC)

【出力単位】

サーバ名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

サーバ名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JRockitGC 実行回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic JRockit ガベージコレクション実行回数－折れ線－
平均値チェック	JRockitGC 実行回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JRockit ガベージコレクション実行回数－折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic JRockit ガベージコレクション実行回数－折れ線－
パーセンタイル値チェック	JRockitGC 実行回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.7.JDBCProvider のプールサイズ

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCProvider のプールサイズの統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBC 接続プール情報 (WLCJDBC)

【出力単位】

JDBCProvider 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCProvider 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCProvider のプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCProvider のプールサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCProvider のプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.8.JDBCProvider の同時接続待ち数

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCProvider の同時接続待ち数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBC 接続プール情報 (WLCJDBC)

【出力単位】

JDBCProvider 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCProvider 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCProvider の同時接続待ち数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細] WebLogic JDBC 接続プール毎の接続待ち数 – 折れ線 –
平均値チェック	JDBCProvider の同時接続待ち数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細] WebLogic JDBC 接続プール毎の接続待ち数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細] WebLogicJDBC接続プール毎の接続待ち数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	JDBCProvider の同時接続待ち数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）	チェックインターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.9.JDBCProvider の再接続失敗数

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCProvider の再接続失敗数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBC 接続プール情報 (WLCJDBC)

【出力単位】

JDBCProvider 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCProvider 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCProvider の再接続失敗数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細] WebLogic JDBC 接続プール毎の再接続失敗数 – 折れ線 –
平均値チェック	JDBCProvider の再接続失敗数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細] WebLogic JDBC 接続プール毎の再接続失敗数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細] WebLogic JDBC 接続プール毎の再接続失敗数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	JDBCProvider の再接続失敗数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.10. JDBCDataSource のプールサイズ(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCDataSource のプールサイズの統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBCDataSource 情報 (WLCJDBCDataSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource のプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource のプールサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource のプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.11. JDBCDataSource の接続待ち回数(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCDataSource の接続待ち回数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBCDataSource 情報 (WLCJDBCDataSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の接続待ち回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の接続待ち回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の接続待ち回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.12. JDBCDataSource の同時接続待ち数(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCDataSource の同時接続待ち数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBCDataSource 情報 (WLCJDBCDataSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の同時接続待ち数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の同時接続待ち数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の同時接続待ち数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.13. JDBCDataSource の再接続失敗数(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCDataSource の再接続失敗数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBCDataSource 情報 (WLCJDBCDataSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の再接続失敗数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の再接続失敗数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の再接続失敗数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.14. JDBCDataSource の接続タイムアウト数(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した JDBCDataSource の接続タイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: JDBCDataSource 情報 (WLCJDBCDataSource)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.15. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for WebLogic で収集したサーブレット情報の Servlet の起動時間(ミリ秒)／Servlet が起動された回数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: サーブレット情報 (WLCSVT)

【出力単位】

Servlet 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

Servlet 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.16. ThreadPool のプールサイズ(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した ThreadPool のプールサイズの統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: ThreadPool 情報 (WLCTHREADPOOL)

【出力単位】

ThreadPool 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ThreadPool 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ThreadPool のプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	ThreadPool のプールサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	ThreadPool のプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.17. ThreadPool の待ちリクエスト数(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した ThreadPool の待ちリクエスト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: ThreadPool 情報 (WLCTHREADPOOL)

【出力単位】

ThreadPool 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ThreadPool 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ThreadPoolの待ちリクエスト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	ThreadPool の待ちリクエスト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	ThreadPool の待ちリクエスト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.18. 実行キューのスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した実行キューのスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: 実行キュー情報 (WLCSEXQ)

【出力単位】

実行キュー名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

実行キュー名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	実行キューのスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic 実行キュー毎のスレッド数 – 面 –
平均値チェック	実行キューのスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic 実行キュー毎のスレッド数 – 面 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic 実行キュー毎のスレッド数 – 面 –
パーセンタイル値チェック	実行キューのスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.19. 実行キューの保留要求数

CS-Java for WebLogic で収集した実行キューの保留要求数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: 実行キュー情報 (WLCSEXQ)

【出力単位】

実行キュー名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

実行キュー名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	実行キューの保留要求数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic 実行キュー毎の保留要求数 – 折れ線 –
平均値チェック	実行キューの保留要求数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic 実行キュー毎の保留要求数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic 実行キュー毎の保留要求数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	実行キューの保留要求数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.20. WorkManager の待ちリクエスト数(V9 以降)

CS-Java for WebLogic で収集した WorkManager の待ちリクエスト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: WorkManager 情報 (WLCWORKMANAGER)

【出力単位】

WorkManager 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

WorkManager 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	WorkManager の待ちリクエスト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	WorkManager の待ちリクエスト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	WorkManager の待ちリクエスト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.21. EntityEJB のトランザクションタイムアウト数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のトランザクションタイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のトランザクションタイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB のトランザクションタイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のトランザクションタイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線)	チェックインターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.22. EntityEJB のキャッシュミス率

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のキャッシュ失敗回数／キャッシュアクセス回数×100 の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のキャッシュミス率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	EntityEJB のキャッシュミス率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のキャッシュミス率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.23. EntityEJB のアクティベーション回数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のアクティベーション回数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のアクティベーション回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のキャッシュアクティベーション回数 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB のアクティベーション回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のキャッシュアクティベーション回数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のキャッシュアクティベーション回数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のアクティベーション回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.24. EntityEJB のプールミス率

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のプール失敗回数／プールアクセス回数×100 の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のプールミス率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	EntityEJB のプールミス率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のプールミス率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.25. EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.26. EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 - 折れ線 -
平均値チェック	EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 - 折れ線 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 - 折れ線 -
パーセンタイル値チェック	EntityEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.27. EntityEJB のロック待ちスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のロック待ちスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のロック待ちスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	EntityEJB のロック待ちスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のロック待ちスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.28. EntityEJB のロック待機数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のロック待機数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のロック待機数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のロック待機数 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB のロック待機数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のロック待機数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のロック待機数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のロック待機数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.29. EntityEJB のロックタイムアウト数

CS-Java for WebLogic で収集した EntityEJB のロックタイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: EntityEJB 情報 (WLCENTEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のロックタイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のロックタイムアウト総数 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB のロックタイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のロックタイムアウト総数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic EntityEJB 毎のロックタイムアウト総数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のロックタイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.30. StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数

CS-Java for WebLogic で収集した StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatefulEJB 情報 (WLCSFLEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
平均値チェック	StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatefulEJB のトランザクションタイムアウト数を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.31. StatefulEJB のキャッシュミス率

CS-Java for WebLogic で収集した StatefulEJB のキャッシュ失敗回数／キャッシュアクセス回数×100 の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatefulEJB 情報 (WLCSFLEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulEJB のキャッシュミス率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	StatefulEJB のキャッシュミス率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	StatefulEJB のキャッシュミス率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.32. StatefulEJB のアクティベーション回数

CS-Java for WebLogic で収集した StatefulEJB のアクティベーション回数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatefulEJB 情報 (WLCSFLEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulEJB のアクティベーション回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のキャッシュアクティベーション回数 – 折れ線 –
平均値チェック	StatefulEJB のアクティベーション回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のキャッシュアクティベーション回数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のキャッシュアクティベーション回数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatefulEJB のアクティベーション回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.33. StatefulEJB のロック待ちスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した StatefulEJB のロック待ちスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatefulEJB 情報 (WLCSFLEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulEJB のロック待ちスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	StatefulEJB のロック待ちスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	StatefulEJB のロック待ちスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.34. StatefulEJB のロック待機数

CS-Java for WebLogic で収集した StatefulEJB のロック待機数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatefulEJB 情報 (WLCSFLEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulEJB のロック待機数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のロック待機数 – 折れ線 –
平均値チェック	StatefulEJB のロック待機数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のロック待機数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のロック待機数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatefulEJB のロック待機数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.35. StatefulEJB のロックタイムアウト数

CS-Java for WebLogic で収集した StatefulEJB のロックタイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatefulEJB 情報 (WLCSFLEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulEJB のロックタイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のロックタイムアウト総数 －折れ線－
平均値チェック	StatefulEJB のロックタイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のロックタイムアウト総数 －折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatefulEJB 毎のロックタイムアウト総数 －折れ線－
パーセンタイル値チェック	StatefulEJB のロックタイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.36. StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数

CS-Java for WebLogic で収集した StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatelessEJB 情報 (WLCSLSEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
平均値チェック	StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎のトランザクションのタイムアウト総数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatelessEJB のトランザクションタイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.37. StatelessEJB のプールミス率

CS-Java for WebLogic で収集した StatelessEJB のプール失敗回数／プールアクセス回数×100 の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatelessEJB 情報 (WLCSLSEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessEJB のプールミス率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	StatelessEJB のプールミス率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	StatelessEJB のプールミス率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.38. StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: StatelessEJB 情報 (WLCSLSEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
平均値チェック	StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバル検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatelessEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.39. StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数

【使用レコード】

WebLogic: StatelessEJB 情報 (WLCSLSEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 – 折れ線 –
平均値チェック	StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic StatelessEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatelessEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.40. MessageDrivenEJB のプールミス率

CS-Java for WebLogic で収集した MessageDrivenEJB のプール失敗回数／プールアクセス回数×100 の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: MessageDrivenEJB 情報 (WLCMSDEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MessageDrivenEJB のプールミス率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MessageDrivenEJB のプールミス率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	MessageDrivenEJB のプールミス率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.41. MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: MessageDrivenEJB 情報 (WLCMSDEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic MessageDrivenEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
平均値チェック	MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic MessageDrivenEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic MessageDrivenEJB 毎の Bean インスタンスを待っているスレッド数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	MessageDrivenEJB の Bean インスタンスを待っているスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.25.42. MessageDrivenEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数

CS-Java for WebLogic で収集した MessageDrivenEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数の統計値です。

【使用レコード】

WebLogic: MessageDrivenEJB 情報 (WLCMSDEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MessageDrivenEJBのBeanインスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]WebLogic MessageDrivenEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 – 折れ線 –
平均値チェック	MessageDrivenEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic MessageDrivenEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]WebLogic MessageDrivenEJB 毎の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	MessageDrivenEJB の Bean インスタンス待ちがタイムアウトしたスレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.Interstage

13.26.1.JVM ヒープ使用量

CS-Java for Interstage で収集した JVM 情報のヒープ使用量の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JVM 情報 (ISJVM)

【出力単位】

ワークユニット名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ワークユニット名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM のヒープ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうか検査します。	[詳細]Interstage JVM ヒープ使用量 - 複合 -
平均値チェック	JVM ヒープ使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JVM ヒープ使用量 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JVM ヒープ使用量 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	JVM のヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.2.JVM ヒープ設定に対する使用率

CS-Java for Interstage で収集した JVM 情報のヒープ設定に対するヒープ使用率の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JVM 情報 (ISJVM)

【出力単位】

ワークユニット名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ワークユニット名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM ヒープ設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JVM ヒープ設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JVM ヒープ設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.3.JVMPerm 使用量

CS-Java for Interstage で収集した JVM 情報の Perm 使用量の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JVM 情報 (ISJVM)

【出力単位】

ワークユニット名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ワークユニット名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM の Perm 使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうか検査します。	
平均値チェック	JVM の Perm 使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JVM のヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.4.JVMPerm 設定に対する使用率

CS-Java for Interstage で収集した JVM 情報の Perm 設定に対する Perm 使用率の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JVM 情報 (ISJVM)

【出力単位】

ワークユニット名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ワークユニット名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVMPerm 設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうか検査します。	
平均値チェック	JVMPerm 設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JVMPerm 設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.5. GC の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集した JVM 情報のガベージコレクション実行時間(ミリ秒)/ガベージコレクション実行回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JVM 情報 (ISJVM)

【出力単位】

ワークユニット名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ワークユニット名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	GC の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを計算します。	
平均値チェック	GC の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	GC の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.6.GC 実行回数

CS-Java for Interstage で収集した JVM 情報のガベージコレクション実行回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JVM 情報 (ISJVM)

【出力単位】

ワークユニット名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ワークユニット名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	GC 実行回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを計算します。	[詳細]Interstage ガベージコレクション実行回数 – 折れ線 –
平均値チェック	GC 実行回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage ガベージコレクション実行回数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage ガベージコレクション実行回数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	GC の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.7.JDBCDataSource のプールサイズ

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource のプールサイズの統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource のプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource のプールサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource のプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.8.JDBCDataSource の例外発生クローズ件数

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource の例外発生クローズ件数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の例外発生クローズ件数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の例外発生クローズ件数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource のプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.9.JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource のコネクション使用時間(ミリ秒)/コネクション使用回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均コネクション使用時間 – 折れ線 –
平均値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均コネクション使用時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均コネクション使用時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.10. JDBCDataSource の 1 回あたりの平均物理接続確立時間

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource の物理コネクション確立時間(ミリ秒)／物理コネクション確立回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均物理接続時間確立時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均物理コネクション確立時間－折れ線－
平均値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均物理接続確立時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均物理コネクション確立時間－折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均物理コネクション確立時間－折れ線－
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均物理接続時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.11. JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource のコネクション待ち時間(ミリ秒)／コネクション待ち回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均コネクション待ち時間 – 折れ線 –
平均値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均コネクション待ち時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage JDBCPool 毎の平均コネクション待ち時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の 1 回あたりの平均待ち時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.12. JDBCDataSource の接続待ち回数

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource の接続待ち回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の接続待ち回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の接続待ち回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の接続待ち回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.13. JDBCDataSource の接続タイムアウト数

CS-Java for Interstage で収集した JDBCDataSource の接続タイムアウト数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: JDBCPool 情報 (ISJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の接続タイムアウト数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.14. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集したサーブレット情報の Servlet の起動時間(ミリ秒)／Servlet が起動された回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: Servlet 情報 (ISSVLT)

【出力単位】

Servlet 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

Servlet 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリ
インターバルチェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.15. EntityEJB の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集した EntityEJB メソッド情報のメソッド実行時間(ミリ秒)／メソッド実行回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: EntityEJB メソッド情報 (ISEntityEJBMethodTime)

【出力単位】

EJB メソッド名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB メソッド名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage EntityEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage EntityEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage EntityEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.16. EntityEJB のプールサイズ

CS-Java for Interstage で収集した EntityEJB のプールサイズの統計値です。

【使用レコード】

Interstage: EntityEJB 情報 (ISEntityEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	EntityEJB のプールサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage EntityEJB 毎のプール中のインスタンス数 – 折れ線 –
平均値チェック	EntityEJB のプールサイズを計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage EntityEJB 毎のプール中のインスタンス数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage EntityEJB 毎のプール中のインスタンス数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	EntityEJB のプールサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.26.17. StatefulSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集した StatefulSessionEJB メソッド情報のメソッド実行時間(ミリ秒)/メソッド実行回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: StatefulSessionEJB メソッド情報 (ISStatefulSessionEJBMethodTime)

【出力単位】

EJB メソッド名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB メソッド名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage StatefulSessionEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	StatefulSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage StatefulSessionEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage StatefulSessionEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatefulSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.18. StatefulSessionEJB のアクティベーション回数

CS-Java for Interstage で収集した StatefulSessionEJB のアクティベーション回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: StatefulSessionEJB 情報 (ISStatefulSessionEJB)

【出力単位】

EJB 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulSessionEJB のアクティベーション回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage StatefulSessionEJB 毎の Active 化されたインスタンス数 －折れ線－
平均値チェック	StatefulSessionEJB のアクティベーション回数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage StatefulSessionEJB 毎の Active 化されたインスタンス数 －折れ線－
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage StatefulSessionEJB 毎の Active 化されたインスタンス数 －折れ線－
パーセンタイル値チェック	StatefulSessionEJB のアクティベーション回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません

13.26.19. StatelessSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集した StatelessSessionEJB メソッド情報のメソッド実行時間(ミリ秒)/メソッド実行回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: StatelessSessionEJB メソッド情報 (ISStatelessSessionEJBMethodTime)

【出力単位】

EJB メソッド名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB メソッド名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage StatelessSessionEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	StatelessSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage StatelessSessionEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage StatelessSessionEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatelessSessionEJB の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.26.20. MessageDrivenEJB の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Interstage で収集した MessageDrivenEJB メソッド情報のメソッド実行時間(ミリ秒)/メソッド実行回数の統計値です。

【使用レコード】

Interstage: MessageDrivenEJB メソッド情報 (ISMessageDrivenEJBMethodTime)

【出力単位】

EJB メソッド名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB メソッド名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MessageDrivenEJB の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Interstage MessageDrivenEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	MessageDrivenEJB の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage MessageDrivenEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Interstage MessageDrivenEJB メソッド毎の実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	MessageDrivenEJB の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

注意！

Interstage V10 データでは、この限界値チェックを行うことはできません。

13.27.JBoss

13.27.1.JVM ヒープ使用量

CS-Java for JBoss で収集した JVM 情報のヒープ使用量の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: JVM 情報 (JBSJVM)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM のヒープ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]JBoss JVM ヒープ使用状況 - 複合 -
平均値チェック	JVM のヒープ使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss JVM ヒープ使用状況 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss JVM ヒープ使用状況 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	JVM のヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.2.JVM ヒープ設定に対する使用率

CS-Java for JBoss で収集した JVM 情報のヒープ設定に対するヒープ使用率の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: JVM 情報 (JBSJVM)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM ヒープ設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JVM ヒープ設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JVM ヒープ設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.3.JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数

CS-Java for JBoss で収集した JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: JDBCDataSource 情報 (JBSJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]JBoss JDBC 接続使用状況 – 複合 –
平均値チェック	JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数を計算、検査します	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss JDBC 接続使用状況 – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss JDBC 接続使用状況 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.4.JDBCDataSource のプール設定に対する使用率

CS-Java for JBoss で収集した JDBCDataSource の使用中 JDBC 接続数／プール設定の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: JDBCDataSource 情報 (JBSJDBC)

【出力単位】

JDBCDataSource 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

JDBCDataSource 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JDBCDataSource のプール設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JDBCDataSource のプール設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JDBCDataSource のプール設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.5.ThreadPool の使用中スレッド数

CS-Java for JBoss で収集した ThreadPool の使用中スレッド数の統計値です。

【使用レコード】

JBoss:ThreadPool 情報 (JBSTHREADPOOL)

【出力単位】

ThreadPool 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ThreadPool 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ThreadPool の使用中スレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]JBoss ThreadPool 使用状況 – 複合 –
平均値チェック	ThreadPool の使用中スレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss ThreadPool 使用状況 – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss ThreadPool 使用状況 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	ThreadPool の使用中スレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.6.ThreadPool のプール設定に対する使用率

CS-Java for JBoss で収集した ThreadPool の使用中スレッド数／プール設定の統計値です。

【使用レコード】

JBoss:ThreadPool 情報 (JBSTHREADPOOL)

【出力単位】

ThreadPool 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ThreadPool 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ThreadPool のプール設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	ThreadPool のプール設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	ThreadPool のプール設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.7. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for JBoss で収集したサーブレット情報の Servlet の起動時間(ミリ秒)／Servlet が起動された回数の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: Servlet 情報 (JBSSERVLET)

【出力単位】

Servlet 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

Servlet 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]JBoss サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.8.StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for JBoss で収集した StatefulSessionBean メソッド情報のメソッド実行時間(ミリ秒)／メソッド実行回数の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: StatefulSessionBean メソッド情報 (JBSSTATEFULMTHD)

【出力単位】

EJB メソッド名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB メソッド名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]JBoss StatefulSessionBean メソッド毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss StatefulSessionBean メソッド毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss StatefulSessionBean メソッド毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatefulSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.27.9.StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for JBoss で収集した StatelessSessionBean メソッド情報のメソッド実行時間(ミリ秒)／メソッド実行回数の統計値です。

【使用レコード】

JBoss: StatelessSessionBean メソッド情報 (JBSSTATELESSMTHD)

【出力単位】

EJB メソッド名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

EJB メソッド名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]JBoss StatelessSessionBean メソッド毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss StatelessSessionBean メソッド毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]JBoss StatelessSessionBean メソッド毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	StatelessSessionBean の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.28.Tomcat

13.28.1.JVM ヒープ使用量

CS-Java for Tomcat で収集した JVM 情報のヒープ使用量の統計値です。

【使用レコード】

Tomcat: JVM 情報 (TOMJVM)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM のヒープ使用量をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Tomcat JVM ヒープ使用状況 - 複合 -
平均値チェック	JVM のヒープ使用量を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Tomcat JVM ヒープ使用状況 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Tomcat JVM ヒープ使用状況 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	JVM のヒープ使用量を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.28.2.JVM ヒープ設定に対する使用率

CS-Java for Tomcat で収集した JVM 情報のヒープ設定に対するヒープ使用率の統計値です。

【使用レコード】

Tomcat: JVM 情報 (TOMJVM)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	JVM ヒープ設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	JVM ヒープ設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	JVM ヒープ設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.28.3.ThreadPool の使用中スレッド数

CS-Java for Tomcat で収集した ThreadPool の使用中スレッド数の統計値です。

【使用レコード】

Tomcat:ThreadPool 情報 (TOMTREADPOOL)

【出力単位】

ThreadPool 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ThreadPool 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ThreadPool の使用中スレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Tomcat ThreadPool 使用状況 - 複合 -
平均値チェック	ThreadPool の使用中スレッド数を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Tomcat ThreadPool 使用状況 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Tomcat ThreadPool 使用状況 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	ThreadPool の使用中スレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.28.4.ThreadPool のプール設定に対する使用率

CS-Java for Tomcat で収集した ThreadPool の使用中スレッド数／プール設定の統計値です。

【使用レコード】

Tomcat:ThreadPool 情報 (TOMTREADPOOL)

【出力単位】

ThreadPool 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

ThreadPool 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ThreadPool のプール設定に対する使用率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	ThreadPool のプール設定に対する使用率を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	ThreadPool のプール設定に対する使用率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.28.5. Servlet の 1 回あたりの平均実行時間

CS-Java for Tomcat で収集したサーブレット情報の Servlet の起動時間(ミリ秒)／Servlet が起動された回数の統計値です。

【使用レコード】

Tomcat: Servlet 情報 (TOMSERVLET)

【出力単位】

Servlet 名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

Servlet 名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Tomcat サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
平均値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Tomcat サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Tomcat サーブレット毎の平均実行時間 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	Servlet の 1 回あたりの平均実行時間を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.MySQL

13.29.1.クエリキャッシュヒット率

MySQL のクエリキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL メモリ (MYSQLMEM)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のクエリキャッシュヒット率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のクエリキャッシュヒット率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL インスタンスのキャッシュヒット率 – 折れ線 – [詳細]MySQL クエリキャッシュヒット率 – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のクエリキャッシュヒット率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.2. クエリキャッシュ使用率

MySQL のクエリキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL メモリ (MYSQLMEM)
MySQL Variables (MYSQLVAR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のクエリキャッシュ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のクエリキャッシュ使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL クエリキャッシュ使用率 - 複合 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のクエリキャッシュ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.3.スレッドキャッシュヒット率

MySQL のスレッドキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL System (MYSQLSYS)

MySQL 接続 (MYSQLCONN)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のスレッドキャッシュヒット率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしているかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のスレッドキャッシュヒット率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL インスタンスのキャッシュヒット率 - 折れ線 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のスレッドキャッシュヒット率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.4.キーキャッシュヒット率

MySQL のキーキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL メモリ (MYSQLMEM)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のキーキャッシュヒット率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のキーキャッシュヒット率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL インスタンスのキャッシュヒット率 - 折れ線 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のキーキャッシュヒット率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.5. テーブルキャッシュ使用率

MySQL のテーブルキャッシュヒット率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL I/O (MYSQLIO)

MySQL Variables (MYSQLVAR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のテーブルキャッシュヒット率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のテーブルキャッシュヒット率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL インスタンスのキャッシュ使用率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のテーブルキャッシュヒット率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.6. InnoDB バッファプールヒット率

MySQL の InnoDB バッファプールヒット率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL Innodb (MYSQLINNODB)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL の InnoDB バッファプールヒット率(%) をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL の InnoDB バッファプールヒット率(%) の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL InnoDB バッファプールヒット率 - 複合 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL の InnoDB バッファプールヒット率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.7. MyISAM テーブルフラグメンテーション率

MySQL の MyISAM テーブルフラグメンテーション率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL テーブル情報 (MYISQLTABLE)

【出力単位】

テーブル名単位で集計されます。

【限界値個別設定機能の使用可否】

テーブル名単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL の MyISAM テーブルフラグメンテーション率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL の MyISAM テーブルフラグメンテーション率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[平均]MySQL MyISAM テーブル領域毎の最大使用量 － 棒 －
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL の MyISAM テーブルフラグメンテーション率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.8. テンポラリーテーブルメモリ処理率

MySQL のテンポラリーテーブルメモリ処理率の統計値です。

【使用レコード】

MySQL I/O (MYSQLIO)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のテンポラリーテーブルメモリ処理率(%) をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のテンポラリーテーブルメモリ処理率(%) の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL テンポラリーテーブルのメモリー処理率 – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のテンポラリーテーブルメモリ処理率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.9.スロークエリ数

MySQL のスロークエリ数の統計値です。

【使用レコード】

MySQL 接続 (MYSQLCONN)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL のスロークエリ数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL のスロークエリ数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]MySQL データ操作クエリの実行数 - 複合 -
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL のスロークエリ数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.29.10. 接続スレッド数

MySQL の接続スレッド数の統計値です。

【使用レコード】

MySQL System (MYSQLSYS)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	MySQL の接続スレッド数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	MySQL の接続スレッド数の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[最大]MySQL 接続スレッド数 – 複合 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の MySQL の接続スレッド数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.Hyper-V

13.30.1. ホストのプロセッサ使用率

Hyper-V のプロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Hypervisor Logical Processor (HVLP)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V のプロセッサ使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V ホスト毎のプロセッサ使用率 – 折れ線 – [詳細]Hyper-V パーティション毎のプロセッサ使用率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V のプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.2. ホストのメモリー使用率

Hyper-V のメモリー使用率の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Host (HVHOST)

Hyper-V ParentPartition Memory (HVMEMORY)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のメモリー使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V のメモリー使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V ホスト毎のメモリー使用率 – 折れ線 – [詳細]Hyper-V メモリー使用率とページング – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V のメモリー使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.3. 論理プロセッサのプロセッサ使用率

Hyper-V の論理プロセッサのプロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Hypervisor Logical Processor (HVLP)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

論理プロセッサ単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V の論理プロセッサのプロセッサ使用率 (%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V の論理プロセッサのプロセッサ使用率 (%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V 論理プロセッサ毎のプロセッサ使用率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V の論理プロセッサのプロセッサ使用率 (%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.4. ペアレントパーティションのプロセッサ使用率

Hyper-V のペアレントパーティションのプロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Hypervisor Root Virtual Processor (HVROOTVP)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のペアレントパーティションのプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V のペアレントパーティションのプロセッサ使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V パーティション毎のプロセッサ使用率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V のペアレントパーティションのプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.5. チャイルドパーティションのプロセッサ使用率

Hyper-V のチャイルドパーティションのプロセッサ使用率の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Hypervisor Virtual Processor (HVVP)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

チャイルドパーティション単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のチャイルドパーティションのプロセッサ使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V のチャイルドパーティションのプロセッサ使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V パーティション毎のプロセッサ使用率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のHyper-Vのチャイルドパーティションのプロセッサ使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.6. ページング回数

Hyper-V のページング回数の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V ParentPartition Memory (HVMEMORY)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のページング回数(/sec)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V のページング回数(/sec)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V メモリー使用率とページング – 複合 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V のページング回数 (/sec)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.7. 物理ディスクの使用率

Hyper-V の物理ディスクの使用率の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V ParentPartition PhysicalDisk (HVPDISK)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

ディスク単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V の物理ディスクの使用率(%)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V の物理ディスクの使用率(%)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V 物理ディスクの使用率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V の物理ディスクの使用率(%)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.8. 物理ディスクの Read レイテンシ

Hyper-V の物理ディスクの Read I/O レイテンシの統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V ParentPartition PhysicalDisk (HVPDISK)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

ディスク単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V の Read I/O レイテンシ(秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V の Read I/O レイテンシ(秒)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Hyper-V 物理ディスクの Read レイテンシ – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V の Read I/O レイテンシ(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.9. 物理ディスクの Write レイテンシ

Hyper-V の物理ディスクの Write レイテンシの統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V ParentPartition PhysicalDisk (HVPDISK)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

ディスク単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V の Write I/O レイテンシ(秒)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	Hyper-V の Write I/O レイテンシ(秒)の単純平均 (AVG) を計算、検査します。	[詳細]Hyper-V 物理ディスクの Write レイテンシ – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の Hyper-V の Write I/O レイテンシ(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.30.10. ネットワークフレームのドロップ数

Hyper-V のネットワークフレームのドロップ数の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Legacy Network Adapter (HVLEGACYNETADAPTER)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

レガシーネットワークアダプタ単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のネットワークフレームのドロップ数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	

13.30.11. パケットオーバーフロー数

Hyper-V のパケットオーバーフロー数の統計値です。

【使用レコード】

Hyper-V Virtual Switch (HVVSITCH)

【出力単位】

システム単位

【個別限界値指定機能の使用可否】

vSwitch 単位で個別限界値を指定可能です。

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Hyper-V のパケットオーバーフロー数(/sec)をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	

13.31. SAP ERP 対話型トランザクション

13.31.1. レスpons時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP の対話型トランザクション全体

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	[月次]DIA_トランザクション数及びレスポンス時間 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	[月次]DIA_トランザクション数及びレスポンス時間 – 複合 –

13.31.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス単位に出力されます。

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	[月次]DIA_トランザクション数及びレスポンス時間 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	[月次]DIA_トランザクション数及びレスポンス時間 – 複合 –

13.31.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス単位に出力されます。

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単 純平均（SAV）を計算、検査します。	[月次]DIA_トランザクション数及びレスポンス時間 – 複合 –
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待 ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパー センタイル値を計算、検査します。	[月次]DIA_トランザクション数及びレスポンス時間 – 複合 –

13.32. SAP ERP バッチ型トランザクション

13.32.1. レスポンス時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のバッチ型トランザクション全体

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.32.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス単位に出力されます。

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.32.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP のバッチ型に分類されるトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス単位に出力されます。

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.33. SAP ERP その他のトランザクション

13.33.1. レスpons時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションのレスポンス時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のその他のトランザクション全体

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションのレスポンス時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.33.2. 稼働時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの稼働時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス単位に出力されます。

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの稼働時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎のSAP ERPトランザクションの稼働時間(秒)を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.33.3. 待ち時間(秒)

SAP ERP の対話型やバッチ型ではないトランザクションの待ち時間（秒）の統計値です。

【使用レコード】

SAP ERP トランザクション情報（R3TRN）

※インターバル毎に按分していないデータ（R3TRN.REAL=1）を計算に使用します。

【出力単位】

SAP ERP のインスタンス単位に出力されます。

【個別限界値指定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
平均値チェック	SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)の単純平均（SAV）を計算、検査します。	
パーセンタイル値チェック	インターバル毎の SAP ERP トランザクションの待ち時間(秒)を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	

13.34.Oracle AWR

13.34.1.実リード回数

実リード回数です。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	実リード回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	実リード回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	実リード回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.2. バッファキャッシュヒット率

バッファキャッシュヒット率です。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	バッファキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle バッファキャッシュヒット率と論理 DB アクセス回数 - 複合 -
平均値チェック	バッファキャッシュヒット率の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle バッファキャッシュヒット率と論理 DB アクセス回数 - 複合 -
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle バッファキャッシュヒット率と論理 DB アクセス回数 - 複合 -
パーセンタイル値チェック	バッファキャッシュヒット率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測 (直線) チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.3. バッファ非待機率

バッファ非待機率です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	バッファ非待機率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	バッファ非待機率を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.4. 共有プール空きメモリ

共有プールの空きメモリサイズ(MB)です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	共有プールの空きメモリサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle 共有プール空きメモリ量 – 折れ線 –
平均値チェック	共有プールの空きメモリサイズの平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle 共有プール空きメモリ量 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle 共有プール空きメモリ量 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	共有プールの空きメモリサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.5. ライブラリキャッシュヒット率

ライブラリキャッシュヒット率です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ライブラリキャッシュヒット率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle ライブラリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ライブラリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ライブラリキャッシュヒット率 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	ライブラリキャッシュヒット率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.6.Java プール空きメモリ

Java プールの空きメモリサイズ(MB)です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	Java プールの空きメモリサイズをインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle Java プール空きメモリ量 – 折れ線 –
平均値チェック	Java プールの空きメモリサイズの平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle Java プール空きメモリ量 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle Java プール空きメモリ量 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	Java プールの空きメモリサイズを母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.7. 非解析実行割合

非解析実行割合です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	非解析実行割合をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	非解析実行割合を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.8. ソフトパース率

ソフトパース率です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ソフトパース率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	ソフトパース率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.9.REDO ログバッファ待機回数

REDO ログバッファ待機回数です。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	REDO ログバッファ待機回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	REDO ログバッファ待機回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	REDO ログバッファ待機回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.10. メモリソート率

メモリソート率です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	メモリソート率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle メモリソート率 – 折れ線 –
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle メモリソート率 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle メモリソート率 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	メモリソート率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.11. フェッチ時の連鎖/移行行検出回数

フェッチ時の連鎖/移行行検出回数です。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	フェッチ時の連鎖/移行行検出回数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
平均値チェック	フェッチ時の連鎖/移行行検出回数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	フェッチ時の連鎖/移行行検出回数を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.12. ラッチ獲得率

ラッチ獲得率です。

PDB 環境ではこの限界値チェックを行うことはできません。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ラッチ獲得率をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	
パーセンタイル値チェック	ラッチ獲得率を母数とし、50p、80p、90p のパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	

13.34.13. ユーザーコール数

ユーザーコール数です。

【使用レコード】

Oracle AWR 情報 (ORAWR)

【出力単位】

システム単位

【限界値個別設定機能の使用可否】

使用不可

限界値チェック方法	説明	関連する標準提供クエリー
インターバルチェック	ユーザーコール数をインターバル毎に計算し、連続して限界値超えをしていたかどうかを検査します。	[詳細]Oracle ユーザーコール数 – 折れ線 –
平均値チェック	ユーザーコール数の平均を計算、検査します。	
最大値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最大となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ユーザーコール数 – 折れ線 –
最小値チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、値が最小となるインターバルを検索、検査します。	[詳細]Oracle ユーザーコール数 – 折れ線 –
パーセンタイル値チェック	ユーザーコール数を母数とし、50p、80p、90pのパーセンタイル値を計算、検査します。	
短期予測（直線）チェック	インターバルチェックと同様の計算を行った後、そこから翌日最終インターバルの数値を線型的に予測、検査します。	